大正四年二月二十日印刷
大正四年二月廿三日發行

有朋堂文庫
賀茂・六帖・桂園
（非賣品）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

桂園一枝 終

をきゝつけて故郷なる友のもとよりさてあるべきかははやく歸りきてなどいひこしける時によめる

わびて世にふるやの軒の繩すだれくちはつるまでかゝるべしやは

題不知

大堰河となる瀬の上にあらはれて泥にはひかぬ龜の尾の山

高宮の松原ごしに見わたせばすきびたひなる冠のやま

月と日をふたみになして玉くしげ明け行く浦の名にこそありけれ

津國鮎川なる厭求法師在世の時烏の聲を聞きて悟道のことありけりとて今年その百回忌の追善にからすといふ題を出してある人歌すゝめけるによりてつかはしける

鮎川のゐぐひの鴉うにもあらず無にもあらずと鳴きやしつらむ

妻木うるかたに

めせやめせゆふけの妻木はやくめせかへるさ遠し大原の里

題しらず

三島江に生ふる眞菅を鳰どりはかさにもぬはでかづくなるかな

心には何をいかるか知らねども囀る聲のおもしろげなる

ゐのころははやもあるじを見しりけりよべは尾ふりの嬉し顔なる

猫の子はねずみとるまでなりにけり何にくらせし月日なるらむ

人疎む門には市もなさゞりきよをあきものといつなりにけむ

世の中をいかに杉戸のふし多みあなともあなと歎くころかな

わづらはしいざ世中にかくれ笠きつゝやへなん雨ふらずとも

かけすてし鏡の面に影ふれてたそやと我をおどろかれぬる

いとわかき時なりけん國をはなれて五條あたり
のふせやにかくれすみて物まなびしてありける

あらかねの心も戀にわきかへりあつき涙とこぼれけるかな

小貝もる濱つゞら籠(こ)にゐる砂の下にはら／＼音はなかれつゝ

わぎも子がむねに結べるまへ帶のとけずも物を思ひ顏なる

花つむと折かへしたる振袖にたまるは人のこゝろなりけり

打とけて人とぬる／＼ねぬなはのねたしや世をば知らず顏なり

なやにゐてこがひする子のつま撰(えら)み田もやりあぜもやるといふものを

をとめらが末きりはたり織るはたのしねとやせめてつれなかるらむ

おほかみの子はふところにいれぬとも思ひかけじといひし人妻

ふきたてて君がこちくの笛の音に枕の塵ぞたゞよひにける

越えがたき忍びがへしのうらくぎのうちうらみても立かへれとや

生田河鳥だに射ても見すべきを今は弓引くたちからもなし

いなといひてせにかはりしも早河のすみはてじとは思ひつる事

こむ世まであざむかれても蓮葉(はちすは)の露を玉とは何たのみけむ

琴ならぬ桐の火桶は聲もなし咲きだにおこせ夜半の松風

徒（いたづら）にふりゆく人を行く年はかへりてをしきものと見るらむ

わが齢むかしの數にかへらめや此いり豆に花はさくとも

思ふとはおもふ人にも知られじとおもふは誰を思ふなるらむ

はやくより心あへりと思ひしはうたてすなはち戀にざりける

よき人をよしのよく見し夕よりよし野の花の面かげにたつ

山の端にくるれば見ゆる三日月のあなしら／＼し人のいつはり

久かたの天の岩戸のかくれてもほそめに見まくほしき君かな

我戀はいのる神さへ聞馴れて久しきものとすてておくらむ

春がすみ絶間になびく青柳のめより色にはあらはれにけり

むつ言を霞やたちて聞きつらむ野にも山にもかくれなき戀

思ふ事ありのあなうとなげくまにくづれにけりな人めつゝみは

あふことのかたき中にはくすの木の枕も石となりぬべらなり

飛こゆるかりのつばさやかけつらむたな引きれしみねの横雲

秋かぜのしらべて拂ふ松の葉の落たる見れば琴柱(ことぢ)なりけり

箱根山關もる人も朝ぎりのわたくし雨にあざむかれつゝ

誰とたがうちかはすらむ夜もすがら砧(きぬた)の聲のかたおろしなる

闇ながらはれたる空のむら時雨ほしの降るかと疑はれつゝ

夜もすがら玉の聲ともさゆるかな月吹すさむ木がらしのかぜ

たゝきつる氷の下にくだけけむわれても見ゆる月の影かな

朝ごほりとくるを待ちてうごくかな老はみわたの魚ならねども

冬がれの梢の雪のはつ花はちりそめてこそ咲初にけれ

一月樓にありし時雪を

鴨河にさらし〳〵て青柳のいとさへしろくなりにける哉

題しらず

くれ竹の隣へかへる聲すなり日かげに雪やとけわたるらむ

歌むすびしけるとき草花早といふ事を

世中はくちさが野なるをみなへし秋にあへりと人に知らるな

蘭の枝を

ふぢばかまをりめみだれて見ゆるかな誰心なく手をばふれけむ

題しらず

さしこめてまだ夜を殘す柴の戸をおそしとひらく朝がほの花

姑(しうとめ)につまれしよめ菜あはれその時過ぎてこそ花咲きにけれ

花見ればとびたつ小野のいなごまろ人の子にこそかはらざりけれ

はたおりめ梢かりこむ木ばさみの音に終日(ひねもす)まじりてぞ鳴く

あながましかまのしりへのきり〴〵すよなべのつゞりさせと鳴くなり

故鄕にたま〳〵來つる我を見てこほれかゝれる庭のしらつゆ

山の端に出くる月の影見ればわれさへいまぞあらはれにける

大空はおほかた雲にやどられて所せげなる月のかげかな

行きなづむ駒のわたりの夕がほの花のあるじよやどりかせ山

山賤もうまきひる寢の時ならし瓜はむからす追ふ人もなし

閨の戸をそたゝく水雞人まねのたはわざにくし夏のよな〳〵

五月雨にぬれ〳〵きけばほとゝぎす我も鳴きつる心地こそすれ

ほとゝぎす汝も矢橋の市に出でてくつてとのみも鳴きわたるかな

すぐろくの市場はいかにさわげとかふりこぼしける夕立の雨

夕立のそらふみさきし鳴神のなごりともなき月のかげかな

涼みにと誰をさそはむ獨だにみるほどもなき夏の夜の月

照る月に夏をわすれし木の間よりおどろかしける蟬のひと聲

いたづらにことしもなかばめぐる輪のぬけむかたなき身の齡かな

江戸にありけるとしあまた鳴きつるせみの聲あるあしたふつに聞えずなりければよめる

この世をばつく〴〵うしと鳴すてて又いかさまに身をばかへけむ

花みむとけふうちむれてのる駒も大そらの青はるの日のかげ

菜の花に蝶もたはれてねぶるらむ猫間の里の春の夕ぐれ

紙屋川おぼろ月夜のうすずみにすきかへしたる浪の色哉

世の中はおぼろ月夜をかざしにて花のすがたになりにけるかな

山ざとに水こひどりの鳴く聲もさびしからぬは苗代のころ

すみれにはまけてみゆれどすまひ草とりすてがたき花の色かな

花ちりて春より夏にとぶ蝶の羽袖も白し木がくれの里

みこし路の雪にさらしの夏衣かへたるけさは袂さむしも

うの花のかきねにほりし竹の子は雪の中のをえたるなりけり

道の邊にとりてすてたる若苗のあまり豐けき世にこそ有りけれ

さよ更けてながるゝ星の影のうちに聲せで飛ぶは螢なりけり

落したる誰が種ならむ山ざとの垣ねがくれのなでしこのはな

蓮葉のうへ野をたれか忍ばずのいける世ながら樂しからずや

俳諧歌

社頭の春といふことをよめる

石上ふるのやしろに引くしめのまたあたらしき春は來にけり

いへの會始に家梅始開といふこゝろを

道もなきわが庵なれど鶯のふみひらきたる梅のはつ花

御忌の比京を思ひやりて

吉水の大鐘の聲ひゞくなり山のこゝろもうごくばかりに

題しらず

氷とけし池のおもてに小車のあや織りみだりはるさめぞふる

きゞすなく山路のくれにほろ〳〵と降出にける春の雨かな

賤がうつあら田の原をたつ見れは雁をもすきてかへすなりけり

とりとめしおのが心のあら駒も春の野原に放れけるはや

ばれよみ侍りける

大君の　大なめ祭　きこしめす夜と
霜雪は　憚る空に　月ぞ照りたる

至日に着袴いはひける人のもとにて

垂乳根の　末ゆたかにと　たゝせる袴
日も長く　ならん始の　今日きそめけむ

信濃國松本なる小林爲邦くすしの業まなびをへて故郷へかへらんとする馬のはなむけにおのれひさうして白菊と名づけし硯を贈りけるによみてくはへたる

露ながら　かるゝ世しらぬ　しら菊の花
これもその　老いずしな濃の　家づとにせよ

旋頭歌

五月の末なりけむ津國なる伊丹の里に有りていたき病にかゝりていと心ほそくおほえける時駿河守しげのぶ都よりくだり來てきゝもあへず何はおきてなどいへるをいとかたじけなみ侍りてよめる

あらはれて見ゆる夏野の一もとすゝき
大かたは穗に出づるときほにや出づらむ

木槿の花を見て

いけ垣の小杉が中の槿の花
色のみをむかしはいひし朝がほのはな

大嘗會おこなはれける其夜ことにのどかなりけ

籠りけむその璞を伊加賀崎いかゞ打出て
夜光る貴の眞玉と綿津見の海人のしわざに
成得けらしも
つどへたる八十の螢は七車てらす玉にもしかざらめやは
蘇子が後の赤壁のあそびのかたに
かんなづきしぐるゝ時の天雲のいかに晴れてか
山たかく月澄みのぼり水落ちて岩ねあらはれ
寒き江に一葉をうけて酌酒のたゆたふ影に
三年經しきのふぞうつる其秋のこちくの調
其節を訴ふる如き木枯の聲吹きすさむ
大虚に群れたるならぬ蘆鶴の近く飛びわたり
更くる夜を啼く聲長し浦浪の上
いかにかも鶴の毛衣かへしけむ昔の夢の今も見えつゝ

つどひて歌よみける日しも終日あめふりければ
いへる

春雨に　おくれし雨か　五月雨に　さきだつ雨か
春雨に　おくれし雨ぞ　しかれこそ　鶯なけれ
五月雨に　さきだつ雨に　あらねばぞ　初時鳥
忍び音もせぬ

猪名の里なる壽性尼より淡海の濱づとなりとて
螢あまたうすもの籠に入れて贈りける時よみて
つかはしける

潮みてば　玉藻とうかび　汐干れば　眞砂にたちて
時つかぜ　吹きのまに〳〵　沖津浪　立のさわぎに
なづさはり　拾へるならぬ　大君の　膳所の濱の
磯のうへに　こゞしみ立てる　石山の　石の中にし

曉と夜はなりぬれど鳥の音もきこえぬ山にたびねしてけり

他鄕涙

わが袖に知らぬつゆこそこぼれけれ草木が上はかはらぬものを

遣唐使餞別

浪速(なには)がたみをつくしまでやらませばおなじ別もなぐさめてまし

蔭山秀雄霜月ばかり君の御使にて江戸におもぶきける馬のはなむけしけるついでによめる

奥えぞの果まで靡く君が代に開けぬ道はあらじとぞ思ふ

雜體

長歌

江戸にありけるころ四月なかば原庭なる葵園に

のぼるべき千とせの坂もしら雲のよそぢの上に見えわたるかな

和泉なる里非の家に七人の子ありてあるは其家に富み或は外にさかえたるを賀してよみて遣しける

仰ぎてもおいやたのしむ七子のさやにそれぐ〵をさまれる世を

おなじ國人の七十賀に

七回の玉の緒ながく見ゆる哉ちとせよろづ世ありとほすらむ

夜過關屋

木幡山ふけたる月にせきもりのゆづるつまひく音きこゆなり

旅

いにしへの草の枕は知らねども旅はねざめぞ露けかりける

あしびきの山こえねこえこえくれど旅はうきやといふ人もなし

旅宿曉

比叡の麓なる渡邊某が八十賀に

百とせの高ねにのぼれひえの山はたちばかりは今ぞかさねむ

加藤氏の母の七十賀に寄松祝といふことを

千世ふべき君がかざしの松の上にくはゝる藤の花かつらかな

大和守久敬が七十賀に

かきあはせしらべあはせてうたふらむ君が手なれの大和ことのは

八田知紀が母の七十賀に寄葵祝といふ事をよみて遣しける

たらちねのみおやのもりのあふひ草かくらむ千代はいのる子のため

人の七十賀よめる中に

なよそぢの心のこまにまかせつゝちとせの坂ものりやこゆらむ

七世へし其則とほき斧の柯の末ながしめに君ぞ見るらむ

或人の四十二の除厄を賀して

といはひ給ひ下されたるに
二度の千世をば君にゆづりおきてめぐみをまつの陰にかくれむ
題しらず
袖の上におちたる見れば雲井とぶたづのくはへし稲葉なりけり
三條の君より實房公の御集を給りてこの中より
御影の上にしるしおかるべき御歌えらびてよと
ありければえらみてたてまつるにかいそへたる
藻くづだにまじらばこそはえらびても清き渚の玉はひろはめ
富小路左兵衞佐の君より山吹に御歌そへて給り
ける御返し
山吹の花にむすべることのはの露はこがねのたまにざりける
元服
むらさきのはつもとゆひにかくるかな北の藤浪榮えゆく世を

ことむけしこれやしるしの鉾杉も神さびたりな白鳥の宮

竹不改色

呉竹は千世のもと末みどりにて枝さへ葉さへかはらざりけり

從五位下宣下蒙りし時よめる

けふぞ知るふしてあふげばくらゐ山いよ〳〵高き君がめぐみを

大納言の君より拜紋を祝ひ給ひ下されてかずかず御たまものの上に

近き世に例まれなるめぐみうけて榮えそふらふ老のゆくすゑ

とよみ加へ給はりたるいとかたじけなみ奉りて

齡のみ世にまれなりと思ひしは此御めぐみを知らぬなりけり

くらゐ山たかねの月のかげなくばしげき麓をいかでわけまし

三位中將の君よりも

めぐみしる大内山のまつの上にふたゝび千世の色やみすらむ

につどひてかたらひ更してよめる

すむ月に水のこゝろもかよふらしたかくなりゆく波の音かな

白雲にわが山陰はうづもれぬかへるさ送れ秋の夜の月

白河の紅葉をしみにまかりし時

いなごとぶ淺茅が下を行く水の音おもしろしこゝに暮さむ

三月十四日立坊の供御中山頭中將の君奉行にまゐり給ひていたゞき給へるを其内四品ばかり大御器ながらおくり下し給へるをかしこくもいただきて

花さそふ大内山のおろしをばうけたるそでに露さへぞちる

薄暮松

よさのうみの湊にいりしかひもなく松のは見えぬ夕まぐれかな

社頭杉

月の前に月草たてるかた

よひ〳〵に月をうつしの色ならば心やそめむ秋のかたみに

東のかたに遊びける頃雁來といふ事を

はる〴〵とかけて來にける初雁の翅のふみを知る人もなし

こゝちたのみなくおほえける頃松蟲の鳴くを聞きて

聲をのみ友と聞きつるまつむしの身の行へにもたぐふ秋かな

葉月のはじめなりけんむすめ孝子を伯耆守寛寧がもとにつかはしたりける歡びをとて人々つどひて其夜もすがら舞かなでなどうちさわぎける中にひとりひそかにうたへる

うれしさをつゝみかねたる袂より悲しき露のなどこぼるらむ

はつき十六日の夜なりけむ頼襄が三本木の水樓

かにいかにとたづねとはせ給ふことしば〳〵な

りければよみ侍りける

ほとゝぎす時まちいでて名のりつる聲雲井まで聞えける哉

くらべ馬を

神山のやまびことよむ聲すなり宮人今や駒くらぶらし

馬くらべ追すがひてぞ過ぎにける月日の逝くも斯くこそありけれ

糺のすゞみにまかりけるに思ふことありて

人の世は浪のうきもに咲くはなのたゞよふほどぞ盛なりける

六月の末やみおどろへて夜たどねられぬに

燈にきえをあらそふ夏蟲の影ともわれはなりにけるかな

みな月の有明づくよつく〴〵とおもへばをしき此世なりけり

初秋薄

露おかばいかにせんとの花すゝき袂せばくもたちし秋かな

庭の花やゝ盛なりとていつの日かならずなどい
ひ契りたるに其日しもひねもす雨降りければよ
みておこしたる[illegible]

花のうへに雨のふりこぬ里あらばところかへても君をまたまし

かへし

わがとはゞいづくのさとかふらざむ涙の雨と知らぬ君かな

世繼直員が家に藤の宴したりける日えまからで
[illegible]よみてつかはしける

わがやどにものうげにふる春雨はねたくも花のしづくなるらし

四月七日なりけん年ごろわが塾にありける篠澤
隆壽粟津の松原にしておのがほい遂げたりし時
その事とり〴〵に傳へていまだ都にさだかなら
ざりければやむ事なきみわたりよりも其虚實い

二月のはじめ八坂にて京を見やりてよめる

織りかけし都のにしき青柳のたての絲のみ見えわたるかな

稲荷詣

いなり坂杉の青葉をかざすこそまだ花さかぬしるしなりけれ

涅槃會

世中の花のあそびにくたびれて一ねいりせる君が手まくら

西行上人の影供に春月言志と云ふ事を

後の世のねがひもさぞなみちぬらむ花にかくれし望月の影

春釋教

春されば雪のみやまに啼く鳥の聲も長閑になりやしぬらむ

或人の追善の題に幻世春來夢

かの國の花にやどりて思ふらむこの世はてふの春の夜の夢

うかりし事ありて籠りをりける春望南亭自休が

をりたる梅を[illegible]

あはれにも咲きこそ匂へ梅の花折られたりとも知らずやあるらむ

登壽院法印了敬がもとより若菜一籠いとをかし
げなるをおくりたるこはやむ事なき御わたりに
堺なる或人の昔よりたてまつりなれたるを此春
おなじかたにしつらひておこせたるとかいつの
比より奉り初しそも今は知られずと聞きてよみ
[illegible]て遣しける

摘そめしはじめなければ行末も遠里小野のわかななるらむ

せんず萬歳

石上(いそのかみ)ふるき鼓はこけむしぬされどもひゞく萬代の聲

三毬打(さぎちやう)

くれ竹のさはるふしなき世なりけり煙に聲はたてずともよし

雜歌下

正月一日おきの守豐はらの文秋來りて笙(しやう)吹きなどしあそびけるによめる

ためしなく治れる世をくれ竹のみをはむ鳥の聲にたつらん

いかにして吹つたへけん古(いにしへ)のあしがら山のみねのまつかぜ

むつき三日なりけむ雪いたう降りけるあした淸岡しきぶの大輔の君に從ひて比えの麓なる詩仙堂をとぶらふ柴の戸推明けるほどに初音たかく聞えたるはかの鶯宿梅のあたりにやなどのたまふによみ侍りける

梅の花さかばといひし我よりもさきにとひける鶯のこゝろ

身をつみて佛のこゝろ知られけりなづるはさこそ嬉しかるらむ

寒山拾得

あひにあひしひとつ心にくらぶれば似たるばかりの秋の夜の月

丹霞佛像をやく

御佛も炎(ほのほ)を出でよこの世からうしの車の我みちびかむ

親子蝦をすくひてくふ

雪にだにくるふ跡なしおり立ちてすくふも空の霧か霞か

野寺僧歸

あたご山樒(しきみ)がはらにくらしけむさが野を分くる墨染の袖

野寺隱喬木

中々に立かくしたる一むらの松ぞ野寺のしるべなりける

臺頭有酒

いざくまむそのかのもたひもて來なん臺(うてな)の上に月はのぼりぬ

また蘇武が雁の足に文ゆひつくる

そらごとを貝かりがねの玉章も君がまこととなりにけるかな

また淵明が琴ひく

世の中にあはぬ調(しらべ)はさもあらばあれ心にかよふ峯のまつかぜ

面壁の達磨

あまりにも背(そむ)き〳〵て世の中の月と花とに又むかひけり

布袋の後むきたる

なしといひ有りとうたひて世の中のむくかたにのみやる心かな

ゆく〳〵かへり見したる

宵のまに入りぬる影をかへり見て待つほど遠し有明の山

月を指さしたる

明けゆかむその曉を待わびて月のみやこをさす人やたれ

賓頭盧

東方朔みつの桃をぬすみたる圖

萬代は袂につゝみえたれどもかくれぬものは憂名なりけり

關雲長

桃園に契一たび結ぶ身の落ちぬその名は萬代までに

王質

斧の柄はくたしてかへる山路にも知る人えたり白菊の花

虎溪の三笑

もろこしの芳野の夢の浮橋か現ともなくかけはなれけむ

李白が醉さまたれし圖

みな底に沈める月の影見れば猶大空のものにざりける

三寶院の御門主より許由が瓢を梢にかけてかへりみたるかたをよませ給ふに

ぬらさじとくれしこれすら煩はし受らるべしやあめのしたよ

かきくらす雪に伏見の呉竹の下折りたるやみさをなるらむ

湯谷ふみ見たる

故郷の花のたよりはかけたれどかへりわづらふ春のかりがね

王昭君

四の緒の半の月もかきくらし涙しぐるゝみちのそらかな

李夫人

中々に終のけぶりのまゝならば二たび世にはこがれざらまし

李夫人去漢皇情

あくがるゝ心のうちのけぶりにもまづ俤は立かへりけむ

老萊子

子のために親のをさなくなれるすら悲しきものを悲しからずや

韓信が市人の股くゞる圖

かり初の市の妻屋の忍ぶ草うるたねなりと知る人ぞなき

紀氏

打わたす紀の遠山のなかりせば明石のうらもむなしからまし

芳野川の岸にたちて歎冬見給へる圖

ながれてはいとゞ影こそ匂ひけれ紀の河上のやま吹のはな

渡邊の綱その姨と物がたらふ圖

謀るには手もなきものと思ふらむとりかへされぬ報ある世を

西行上人猫の香爐もて座したる

中々に心もとめぬ空だきのかをりや富士の煙なるらむ

芭蕉翁

ふりにける池の心は知らねども今も聞ゆる水の音かな

うつぼの俊蔭の巻なる北山ごもりの圖

久かたの月のかつらの木實もやとりもてくらむそふ光かな

常盤御前子どもをつれてふゞきにあへる

かさならぬ年のうちよりわかくさの妻めくものは心なりけり

秋の野はらに女の髑髏を見て處女のにげさる圖

かへりみよこれも昔ははな薄まねきし袖の名殘なりけり

竹に雀のやどり靡きたる

品よくもとまりけるかななよ竹のよにうたふなる一ふしやこれ

蝶ふたつ空にとぶ圖

花のうへに君が放ちし蝶もなほ天にあらばと契りおきけん

安倍仲麿を明州の海邊にて餞したる

よるゆけど月の光し清ければあらはれわたる唐にしきかな

濱主が和風長壽樂まふ圖

八百日行く其濱主の老の浪わかきにかへす舞のそでかな

陵王まふ圖

四方のうみさわぎし浪は立かへりをさまる時の聲となりにき

相生の松におく霜神さびて千世のすがたとあらはれにけり
白藏主杖をつらにつきてたてる
歸らんや今はいかにせむ此岡に枕もすべく夜は更けにけり
末廣といへる猿樂の圖
たのしさをわれもうたはん春日山笠とさしたる天の下陰
同じく靱猿
やといひしあら木の眞弓引はなれ今はうつぼのうつゝなきさま
同じく千鳥
濱千鳥おのがちり〴〵啼すてて跡こそみえね沖津しら浪
遊女の物おもひたる
おしなべて誠なしといふ濡衣の袖ばかりだにほす人もがな
若きをとめの泥孩兒をいだきて雪の中をあゆむ
圖

大路にすてたる子

落ちたるもひろはぬ御世を命にて捨てにし親の心なるらむ

何がしのせしより狗子の圖に贊乞ひたる

ゑのころは何の心もなかりけりなにのこゝろかありとたづねむ

猩々の舞圖

よく謳ひよくまふみれば思ふ事よになきのみや人に似ざらむ

猿藤のかつらをよぢたる

引とめてとまる春とやおもふらむげに人よりはおろかなりけり

琵琶ほうし

おのが見ぬ花ほとゝぎす月雪を四の緒にこそ引うつしけれ

越後獅子

みこし路は雪深みぐさ花に來てたはるゝさまのあはれなる哉

尉と姥のかた

同じ比白朮の花を人のおくりたるに

世中をうけらの花の開かずてしほむとならば咲かずやはあらぬ

誠拙せしの初月忌に歌あまたよみて手向ける中に

何ぞ此かたみがほにも空しくてとまらぬものを殘しおきけむ

或人いま〳〵となりておのれに歌ひとつと乞ひおこしたるによりてつかはしけるこの歌を額にあてながらやがてむなしくなりけるとなむ

長月の末の露とはおもへどもそのおき所はなのうへなり

昌敷が病せまりて後加級の宣下かうぶりし事を其子さがみの守嘉之がもとより申おこしたりけるときよめる

見えずなる影ぞかなしき位山のぼるときくはうれしけれども

久かたの雲のうへなる涙こそさみだれそむるはじめなりけれ

拙庵せしに人しれず契りおける事ありて年ごろへたる後世になき便の聞えければ驚きてよめる

よしやわれきゝえたりとも山彦のむなしき聲を誰にこたへむ

小澤蘆庵身まかりし時よみてつかはしける

親しきはなきがあまたになりぬれどをしとは君を思ひける哉

女の思ひにこもりける比武者小路左中將の君よりり竹といふ酒にそへておくり給へりし

數ならぬいさゝむら竹うきふしの世をなぐさむるつまとだになれ

御返し

なぐさめて君よりくれの竹なればまづ涙には染めじとぞおも

をさなき子をうしなひけるとき

おひしきてとりかへすべき物ならばよもつひら坂道はなくとも

寄風無常

消ゆらむもとまるも露のしばらくを何秋風のさそひ分くらむ

寄雲無常

行めぐるうき世の雲のむら時雨終にはぬれぬ人なかりけり

題しらず

まづゆくをしたひ〳〵てつひにみなとまらぬ世こそ悲しかりけれ

崇徳天皇の六百回御忌に

松山に浪こえざらば濱ちどりかへりて跡はのこらざらまし

八條相國六百五十回の御わざおこなはせ給ふに

秋夢といふことを給りてよみて奉りける

遠ければ昔にいたる夢もなしさばかりながき秋の夜なれど

五月三日なりけん新皇嘉門院御はうぶりの夜明

けて雨いみじう降りければよめる

獨述懷

はかなくて木にも草にもいはれぬは心の庭の思ひなりけり

懷　舊

めのまへにむかし〳〵となりゆきて今なき世こそ悲しかりけれ

懷舊涙

憂をへてよりける年の緒をよわみ亂るゝ玉は涙なりけり

寄夢懷舊

老いぬればいとゞむかしの見ゆるかなわかきは夢の心なりけり

往事渺茫都似夢

思ひ出る事も殘らず夢なればさめしともなきわがねざめかな

無　常

あら磯の岩うつ波によるⅱ貝のからはしばしもとまりけるかな

無きを夢有るをうつゝとおもひけり猶世中をよの中にして

池田基永妻の桂舟とともにしばらく故鄕へかへるべき事いできぬとて暇申に來たるときによめる

君がゆくいよの松山年ふともいよ〳〵またむ伊豫の松山

内山眉生萩原貞起わが塾を出て信濃國へかへりけるがふたゝびのぼり來て學ばむ事をのみ云ふに

信濃路の木曾のかけはしかけたれどあやふき物は契なりけり

述懷

かくばかり愁ひなき世を歡びのあるべきものと思ひけるかな

いづくかはひ思の家にあらざらむよそめ樂しき世にこそありけれ

夜述懷

明けぬればかならずさむるものにしてぬるよひ〳〵ぞはかなかりける

時によめる

たはやすくやがてといへど白山のゆきてはかへる程もこそふれ

兒山紀成がいまだ公にもつかうまつらざりしそのかみしばらく都に遊びて伊勢の故郷へかへりける時蹴上の里まで送りてよめる

夏山の下はふつゞら別るゝがくるしきまではいつ馴れにけむ

垂雲軒夢宅が信濃なる伊奈の故郷へかへるを送りて

玉の緒は長くみじかき世なりけり又あはざらむまたや逢ふらむ

師走の末つかた越後國寺泊なる圓雅法師都をたちて近江國までくだりて故郷へ歸らんは年こえむもはかり難しといふに

同じくはみやこへかへれ歸山雲には道もあらじとぞ思ふ

海人のみやけさうち出のはま千鳥あらぬあとこそ雪に見えけれ

海邊雪

烟のみうづみのこして鹽がまのうらさびしくもつもる雪かな

常磐木雪

玉つばきふたゝびみたび花さきて雪にぞ陰はあらたまりける

はつせ山さくらが枝はまはるにて檜原ぞ雪はさかりなりける

晴雪落長松

松が枝の下折れたりと思ひしはくだけてゆきの落つるなりけり

晩頭鷹狩

是やこの野守のかゞみはしたかのかげさやかにも見ゆる月かな

神樂

月をまつたび寢の床のさゝの葉に嵐ふくなりさらしなの里

駿河守昌敷がこしの國へたび立けるせんしける

打なびく窓のともし火くれ竹の音せぬ風をいかに知るらむ
月見むと明けたるまどの灯のきゆる心はこゝろありけり

雨中燈

夜とともに物思ふ閨のともし火はしめるを雨にならはざりけり

題不知

燈のかげにて見ると思ふまに文のうへしろく夜は明けにけり

旅行

草枕たびの空こそ悲しけれ野にも山にも知る人はなし

山寒雲

しら雪のつもらむけさの山の端はまづ雲にこそうづもれにけれ

河雪

こえかねし浪かと見えて大堰川ゐせきもたわにつもる雪哉

濱雪

松のうへにはじめてすだつひな鶴の千世の聲こそ高く聞ゆれ

鶴

かぞへても知るらむものか蘆たづの久しと思ふや千歳なるらむ

あしたづのふめる眞砂の跡をみて千代といふもじは造り初けん

鶴ひなをつれたる

千世のうへに千世をゆづるの聲すなり子を思ふ心限りなき哉

雞

けふもはや申のさがりになりぬらんとぐらにのほる庭鳥の聲

ともすればふせ籠にこもる雞のせばくも世をば思ひけるかな

大空に飛立ちかねて打羽ぶきかけろと鳴くがあはれなりけり

はなち鳥

つどら籠を明けてやりつる放ちどりわがのがれしと思はざらなむ

窓燈

松風も夕にせまる聲すなり玉の緒よりやしらべそめけむ

伊勢なる本居宣長都にありけるほど嵯峨山松と

いふ事をよませけるによりて遣しける

さが山の松も君にしとはれずば誰にかたらむ千世のふること

播磨の別府なる手枕の松のかたに

萬代は夢なりけりと手枕の松も老いてや思ひ知るらむ

東六條の東殿なる渉成園の十三勝の和歌よみて

たてまつりしその中に五松塢といへるを

五本のいつさだめたる陰なれば千世さへ松のかはらざるらむ

河原のおとゞの姫君うまれさせ給ひて御行始に

神樂岡なる春日の御祖の大神にまうでさせ給ひ

けるついでわが東塢亭に御こし入らせ給ひける

がいたくむづからせ給へるによみてたてまつる

山ざとをさびしきものと思ひしは君が世知らぬ心なりけり

古松

すみよしの岸の姫松なみよせずなりにしのちも幾世經ぬらむ

松色映水

大堰河ふちの緑やうつるらむ深くも見ゆる松の色かな

人の賀に松添榮色といふこゝろを

榮えゆく君が宿にし植ゑざらば松もなべてのみどりならまし

對松爭齡

子日する千世のためしに君は松まつは君をや引かむとすらむ

三寶院の御別業省耕亭の十二景の和歌おほせに

よりて奉りける中に彈琴郎松といふありこはそ

のかみ重衡の中將をうしなひ參らせし最期のと

き琴ひき給ひしところなりといひつたふるを

くるゝより松に吹たつわが山のあらしの末をたれかきくらむ

山家水

うき世をばすみはなれても山の井のみづから濁る心をぞ知る

山家秋

山賤となりにける身のこゝろありてなぞ秋風にもの思ふらむ

山家鳥

わが庵はあまりに山の奥なれば鳥の聲さへめづらしきかな

山家人稀

我宿の墻ねがくれのつゞらをりくる人あらば待つ人にせむ

たまく〱は人も明けつる奥山の杉のとぼそは苔むしにけり

山家客來

わびぬればことづてだにもうれしきに山松の戸を君ぞ明けたる

物の音のたえず聞ゆるをきゝて

閑居

いかばかり深き心のおくなれば山かげよりもしづけかるらむ

閑居夢

空蟬の世に木がくれてすむ宿の心に夢はならはざりけり

わが山陰をはなれてしばらく觀鷺亭に移りすみける比よめる

山よりも深き心のありがほに市の中にもかくれけるかな

山家

山深くながめ〳〵て雲水のゆくへあだなる世とは知りにき

何ゆゑに山には住むと人とはゞこたへんまでの心ともがな

題しらず

中々にのがれもはてずすむ山のふかきこゝろを知る人ぞなき

山家嵐

俤はたが朝妻の舟屋かたむかしのうかぶ波のうへかな

男をんな舟にのりてあそぶ

わがせこが棹とる池の島めぐりぬらす雫もうれしかりけり

峯

大空のてる日の影もおよばねば解けたる世なきふじの雪かな

池

しながどり猪名山まつにこちふけば遙にさわぐこやの池水

田

賤の男がうつや荒田のあらためて作るにはあらずかへす道なり

市

朝な〳〵出る明日香の市人はきのふをけふにかふるなりけり

杣

さゞなみの大津の宮のあれしより榮ゆるものはみをの杣山

いそ崎のまつの幾世のなれぬらんさてしもあらき浪の音哉

題しらず

玉くしげふたみの浦は明けにけり打いづる波の數みゆるまで

海邊眺望

あし屋がたみる拾ふ子にこととはんまゆ引きたるや紀路(きぢ)の遠山

古渡雲

夕されば水底すみて澤田川雲の影のみたちわたる見ゆ

船

松浦(まつら)ぶねいたてになりぬ大島のせとの高汐いまか落つらむ

汐時の風の心をとる楫(かぢ)にはやくもあたる浪の音かな

舟行夜已深

堀江川あかつき汐やさし來らむ棹の音ふかくなりまさるかな

湖上舟

桂園一枝花

雜歌上

朝

思ふ事ねざめの空につきぬらむあしたむなしきわが心かな

題しらず

燈のかげはそむけてねたれどもさやかにのみぞ夢は見えける

かぎりなく悲しきものは燈の消えての後の寐覺なりけり

つく〴〵ともの思ふ老の曉にねざめおくれし鳥の聲かな

海

海ばらの沖の高くもみゆるかないく〳〵積りし水にかあるらむ

磯浪

うたがひの心のひまぞなかりけるわが身ひとつの數ならぬより
後の世によも人ごとはしげからじたゆとなわびそしばしまて君
ぬれむとは思ひしことよ人言のしげきが下に木がくれしより
津國のながらへてとも契りしは絶るはしにてありけるものを
袖のうへに人のなみだのこぼるゝはわがなくよりも悲しかりけり
あやめ草引くや五月の玉さかに來ては鳴きけるほとゝぎすかな
瀧の上のしめ野に咲けるみそ萩のそのみそかごといつか忘れむ
曉のをしの一聲鳴きわかれかへるたもとに霜ぞこほれる

あづまにありける年の秋たよりにつけて人のも

とへつかはしける

ゆふ暮の露も結べる玉章をなきてつたへよ天津かりがね

返し　　　　よみ人しらず

露よりも雨としぐれてふるさとの涙は悲しかりと啼きつる

世の常の草のまくらの旅にのみやつれたりとや人はみるらむ
陸奥の忍ぶのさとのかやむしろ寐もせぬ夢に人は見えつゝ

春忍戀

音たてぬ戀の涙にそふものはつれ〲と降る春の夜の雨

夏見戀

人しれぬわが垣間見もわか竹のしげみにさはる夏は來にけり

秋增戀

いかにせむ戀のさかりの秋にあひてまた咲かへる物おもひの花

冬厭戀

すきまあればふたりふすまも寒き夜をいかにねよとか隔(へだて)そめけむ

題しらず

雨ふれば底にしづめる浮ぬなはうきなまつまの戀もするかな
ふたつなき命をかくる僞もなきよならねばうたがはれつゝ

夕さればちどり鳴たちしかま川汐のみちくる戀もするかな

思

限りあればふじの煙もたゝぬよにいつまでもゆる思ひなるらむ

打ちもいでじつらきにつかばむねの火のいかばかりかはもえ増るべき

曉片思

おもはぬを思ひねにして見る夢はあやなと鳥のおどろかすらむ

隱戀

さもこそはいとふあまりのわざならめかくれ所のねたくもある哉

舊戀

吳竹のもとのふしのみ戀しくておのが世々とぞねはなかれける

閑戀

わが涙枕に落つるおとならでねざめの戀はとふ人もなし

旅戀

たけくまのはなわにだにもたてりせばまつかとのみはいはれなましを

杣人の筏につくりさしおろすひのくれゆけば戀しきものを

すびきする梓の弓のうらはづの音のみたかきこひのくるしさ

花がたみつくる狹山の靑つゞら手にてをこそはくまゝほしけれ

やがて身をはなれざりけり黑髮のすゑふむばかりありし面影

このころは夢もうつゝもひとつにてあけぬくれぬと面影に立つ

哀とも消えての後はいふらめどけぶりの爲はかひやなからむ

若草を駒にふませて垣間見しをとめも今は老いやしぬらむ

思はなむあたら一時新草のうらわかみこそ人もいふなれ

三千年に花さく桃のひとたびもなるとし聞かばうれしからまし

つばくらめかよふ澤邊のおもだかの思ひあがりし人ぞ戀しき

紅のすゑつむ里のほとゝぎすおもひいでてはなかぬ日もなし

くれなゐの色にみえなば同じこといざ打いでむわがこゝろから

人をのみつれなきものと恨みけりあまりに身をも忘れたるかな

恨戀絶

神崎や磯間の波のうち出しうらみぞ戀のかぎりなりける

絶戀

なか〳〵にたえば絶えねと思ひしはうらみし時の心なりけり

いかにせむさもくることのしげかりし中より絶えししづのをだ卷

冬くさの枯れにしものと思ふらむさてこそ下にもゆる思ひを

題しらず

東路のさやの中山さやかにもみぬ人いかで戀しかるらむ

年月をふるの神がきなにしかもつらき心を祈りそめけむ

獨しておもへばこそはくるしきを物をやとだにとふ人もがな

あはゞよし逢はずばさてとあめつちの神にまかせむ戀ならめやも

津國(つのくに)の深江のますけいちじろくねにみだれてもこふと知らずや

無名立戀

世中にたつ名思へばうたゝねの夢に逢ひしやまことなりけむ

顯戀

我戀は木がくれづたひ行く月の知らぬひまより顯れにけり

切戀

來てもみよ戀おとろへてひをむしの日をへて世にはあらむさまかは

疎戀

ひたすらに人めをよくと思ひしはまことにうとき心なりけり

變戀

ありしにもあらずいかにの疑ひにかつ我からやよわりそめけむ

忘戀

わすれ貝いかなるかたにひろひけんそのかたし貝いかで拾はむ

恨

しばしだに影もとゞめぬ稲妻のよひ〳〵何におどろかすらむ

別戀

いかでかくあふは夢なる心地してつらき別れのうつゝなるらむ
とまれとやけさの朝かぜさらでだに別れがたみの袖に吹くらむ

別後會難期

別れかねとるたなうらのかへるまもたのまれぬ世を待渡れとや

月前歸戀

人しれぬ袖のわかれをおくりけり心あり明の月のかげかな

後朝戀

いつかひむ涙をさへにとりかへてきたるかたみのきぬ〴〵の袖
今朝のまの夢にも夢のみゆやとてかさねし袖をかへしてぞぬる

歎名戀

立そめて世にうづもれぬうき名こそ苔のしたまで悲しかりけれ

逢戀

とけぬればかくもとけぬるした紐の年月何にむすぼほれけむ

數たへの枕のもとにたちはあれどとき心なし妹と寢たれば

忍逢戀

雪をれの聲さへたてぬなよ竹はよにふしたりと知る人もなし

適逢戀

あへばかくあはねば絶えて山彦の音信だにもせぬやたれなり

とし月をまちかね山のかげにこそうべたまさかの池はありけれ

夢中逢戀

はかなくも夢に契りし後の世は覺めたる今の現なりけり

忍ぶれど衣かさぬと見し夏のうらさへえこそあはせざりけれ

夢なるかわが手枕に我ふれて人のと思ひし閨のくろかみ

來不留

よめる
こむといふをまたじといひし此暮のわが僞もあらはれにけり

待戀
こぬ人をまつに今宵もいざよひて更ぬとしるき山の端のつき

深夜待戀
曉の鳥の八聲をつくしても猶こぬものに定めかねつゝ
月は入りて夜はまだ深き四阿屋のまやの妻戸をさしぞ煩ふ

連夜待戀
おもひきや立まちゐまち待かさね獨寐まちの月を見むとは

契待戀
月よりも後とはちぎりおかざりき先いでてこむ時はたがひぬ

遣車待戀
今夜だになほつれなくばむな車おしかへしてもやらむとぞ思ふ

傳聞戀

驛路の鈴のつたへて聞きしよりふりすてがたくなる思ひかな

見戀

しかの海人もからぬさきやはしをれつる見るこそ戀の始めなりけれ

玉だれのをすのすきまに見ずもあらずたゞ俤のこゝちこそすれ

契戀

おろかにも思ふらめども今更にまことのほかはなにを契らん

途中契戀

さればなどおもひもぞよる玉鉾の道にあひつと人にかたるな

さきの世の身を知る雨の笠やどりひと木の陰の契のみかは

憑媒戀

まかせたる苗代水はよどむともわれとはひかじ君がまに〳〵

宮の御會に僞のゆふべといふ心をよませ給ふに

石をのみ玉といだきて歎くかな玉はたまともあらはるゝ世に

戀歌

初戀

世の中のひと花ごろもいつのまに身にしむまでは思ひそめけむ

けふ放つとや出の鷹のくるしくもはじめてこゝろにかゝりけるかな

忍戀

かくばかりくるしきものをうつせみの人めを何に忍びそめけむ

しのぶとはすれどもすれどかり衣こゝろにもとるわが涙かな

聞戀

たまたまの便にきくのしら露もつもれば袖のふちとこそなれ

きゝしより心あてなるおもかげのいやはかなしな夢にさへ見ゆ

雲をのみ凌ぐと思ひし松が枝は地につくまでなりにけるか
生しげる窓のくれ竹ふしても見おきてもみれどあかぬ色かな
笑ふにも涙こぼるゝ世の中に泣きつゝゑめる人もありけり
子を思ふ道はいかなるみちなれば知るよりやがてふみ迷ふらむ
子はなくてあるがやすしと思ひけりありての後になきが悲しさ
杣川におろす筏のいかにしてかばかり道はくだりはてけむ
敷島の歌のあらす田荒れにけりあらすきかへせ歌の荒樔田
けものすら物はいふときくことのはの道のまことは誰か知るらむ
もろこしの虎ふす野邊に吹く風のめにみぬ所おそろしの世や
狩人の射る矢にむかふいかり猪のかへり見られぬ戀の道哉
かくこそあれ身をから猫の妻どひにさわぐこゝろの戀の姿は
空に散る鳥の一羽の輕き身をおき所なくおもひけるかな
樫の實のひとつふたつの願ひさへなることかたき我世なにせむ

よろぼへる門にたちても緣子の父は母はとまちかねのさと

明石がた松の木陰に道はあれど磯づたひして若め拾はむ

鴨河に浮ぶあひるの朝な〳〵たらずなりゆく數ぞ悲しき

梟（ふくろふ）の聲をしるべに歸るかなゆふべをぐらき岡崎の里

山に來てさけんと思ひし世中のうきはさながら身は老いにけり

淺ければ住むかひもなし山なれど世にあるよりはさすが増れり

門といふしるしばかりの二もとの杉のはしらもかたぶきにけり

わが門の垣ねのみぞは淺けれど山水なれば濁らざりけり

くむたびに見るわがかげのさわぐかな心もさぞな山の井の水

露見えて草の庵に降る雨はよるきくよりも淋しかりけり

松の葉の雫落つらし柴の戸にをり〳〵あらき雨の音かな

夕まぐれ嵐に落つる松の葉を雨のあたるとおもひける哉

ゆふべ〳〵外山のあらし聞なれてこればかりには物も思はず

なにごとも此ころにはとおもひつる三十(みそぢ)の年の果ぞ悲しき
家ごとになやらふ聲ぞ聞ゆなるいづくに鬼はすだくなるらむ
ことなくて氣賀の關だにゆるせしを何を見附の里といふらん
ましらなく杉のむら立下に見て幾重のぼりぬすせの大坂
おもひやれ天の中河なかばきてたゆたふ旅の心ぼそさを
沖津より夕越えくれば山松の梢にかゝる富士のしら雪
今宵もやまろねの紐(ひも)をゆひの濱打とけがたき浪の音かな
ふじのねを木の間〳〵にかへり見て松のかげふむ浮しまが原
箱根山夕ゐる雲にやどからむふもとは遠し關はとざしぬ
むさし野のはての玉山たま〳〵に向ふたかねのめづらしきかな
津の國にありときゝつる芥川(あくたがは)まことは淸き流なりけり
夕づく日今はとしづむ浪の上にあらはれ初る淡路しま山
鷗(かもめ)とぶちぬわにたてる濱市の聲うら浪にかよひけるかな

今はとてしぐるゝ冬のはじめこそものの哀のをはりなりけれ
朝づく日さしもさだめぬ大ひえのきらゝの坂に時雨ふる見ゆ
山ざとの冬の庭こそ淋しけれ木の葉みだれてしぐれ降りつゝ
月さゆる落葉がうへにおく霜を影のうづむとおもひけるかな
冬の夜の長き限りをあかつきの霜にこたふる鐘の音かな
くれ竹のしげみがうへに音たてゝちるや霰の數ぞすくなき
山陰の塵なき庭に散初めて數さへ見ゆる今朝の初雪
大宮の上にかゝれる衣笠の山白妙に雪ふりにけり
けさ見れば汀のこほりうづもれて雪の中ゆく白河の水
かくれがの雪はゆきとぞ積りける花なるさとは花とみゆらむ
人とはぬ宿はけさこそ嬉しけれ塵も跡なき雪のうへかな
春をまつこゝろもなしと雪のうちに老木の梅は隠れてや咲く
山ざとは松に積りしはつ雪の消えぬまゝにて暮るゝとしかな

照る月は高くはなれてあらしのみをり〳〵松にさはる夜半かな
しぐるゝは音ばかりなる松の葉に心と月のかくれけるかな
かへるべく夜は更たれど鴨河のせの音は淸し月はさやけし
家路までおくらむ月の影ながらわかれてかへる心地こそすれ
身は老いぬ松も木だかくなりにけりかはらぬ物は秋の夜の月
月てればつら〳〵椿その葉さへみなしらたまと見ゆるよはかな
なか〳〵に鴨の河霧たちみちて京しら河へだてざりけり
菊のはなこぼるゝけさの露見れば千代もはかなき心地こそすれ
よひ〳〵の空に消え行く長月の有明の影や霜と落つらむ
朝づく日匂へる空の月見れば消えたる影もある世なりけり
こともなき野邊をいでても見つるかな鴫が鳴く音のあわたゞしさに
山ざとの軒の松かぜ木がらしに吹あらためてふゆは來にけり
よもすがら木の葉をさそふ音たてて夢も殘さぬこがらしの風

なにとなく袖ぞ露けきいつのまにことしも秋のゆふべなるらむ
こゝろなき人は心やなからましあきの夕のなからましかば
秋かぜにまねくを見ればはなすゝきたが袖よりもなつかしき哉
いはねども露わすられずしのゝめの籬に咲きし朝がほのはな
いづる日の影にたゞよふうき雲を命とたのむあさがほのはな
ゆふ日さすあさぢが原に亂れけりうすくれなゐの秋のかげろふ
敷妙のよどこのしたのきり〴〵すわがさゝめ言人にかたるな
とにかくに露けき秋のさがならば野をわけ〳〵てぬるゝまされり
さと人はいはほきり落す白河のおくに聞ゆるさをしかの聲
おほつかな麞ばかりなる浮雲にかくれ果たる三日月の影
人しれずわがすみそむる白河のながれを月はたづね來にけり
粟田山松のしげみをもりかねて木の間かぞふる月のかげかな
殘りなく松のすがたは顯はれていまだはなれぬ山の端の月

尾羽ふれてあきつとぶなる草川のみぎはに咲くか大和なでしこ
根をたえてさゞれの上に咲きにけり雨にながれし河原なでしこ
かたぶきてたてるを見れば人しれず物をや思ふ姫ゆりの花
池水の蓮のまき葉けさみれば花とともにも開けつるかな
朝ふめど露もしめらぬ水無月の野づらに咲ける月草のはな
なびくだに涼しきものを夏河の玉藻を見れば花咲きにけり
見わたせば神も鳴門のゆふ立に雲たちめぐる淡路島山
布引の瀧のしら浪峯こえて生田に落つるゆふだちの雨
近わたりゆふ立しけむこの夕雲吹く風のたゞならぬかな
山風に吹たてらるゝならの葉のかへればはるゝゆふだちの雨
わが宿にせき入れておとすやり水の流にまくらすべき比かな
朝づく日いまだ匂はぬ山の端のまつの葉わたる秋のはつかぜ
あらはれて世にたてる名も知らねばや猶忍びける秋の初風

若葉のみ茂りそひけりうぐひすの鳴きつる竹はいづれなるらむ
夜半の風麥の穗だちに音信て螢とぶべく野はなりにけり
わがまどのうちをば照らすかひなしと光けちてもゆく螢かな
夜をてらす光しなくば中々に螢も籠にはこもらざらまし
郭公しば〳〵鳴きしあけがたの山かきくもり小さめふり來ぬ
ほとゝぎす古き軒端を過がてにむかししのぶの音をのみぞ鳴く
採はてぬ澤田のさなへはる〴〵とすゑこそ見ゆれ水の白浪
さみだれの雲吹すさぶ朝かぜに桑の實落つる小野原のさと
刈あけし畑のおほ麥こきたれて降るさみだれにほしやわぶらん
五月雨に賀茂の川はし引きつらむたえてみやこの音信もなし
大橋の上わたり行くかち人のたゞよふ夏になりにけるかな
水鳥の鴨の河原の大すゞみこよひよりとや月もてるらむ
夏の夜の月のかげなる桐の葉を落ちたるのかと思ひけるかな

家にありて見るだにあるをなつかしき妹が峠の山吹のはな
山吹のはなぞひとむらながれける筏のさをや岸にふれけむ
わが門の前の棚はしとりはなて折る人、おほしやまぶきの花
春の日の長くもかけて見つるかなわが轉寐の夢のうきはし
春の野のうかれ心ははてもなしとまれといひし蝶はとまりぬ
てふよく花といふ花のさくかぎり汝がいたらざる所なきかな
さと中の垣ねまでをぞすさみける野邊のあそびに暮しあまりて
ちよこ草はよ子ぐさおふる野邊に來てむかし戀しく思ひける哉
鶯の啼きてとゞむる聲をさへ物ともきかで春はゆくらむ
今よりははとりをとめら新桑のうら葉とるべき夏は來にけり
しらかしのみづえ動かす朝かぜにきのふの春の夢はさめにき
けふ見れば花の匂ひもなかりけるわか葉にかゝる峯のしら雲
いつよりか夏の境に入間川さし來るしほのおとのすゞしさ

とはざらばなにの言づてさらでだに物なつかしき朧月夜を
ゆけど〳〵限りなきまで面白し小松がはらの朧月夜は
妹と出て若菜摘みにし岡崎のかきね戀しき春雨ぞふる
今朝みればいつか來にけむわがかどの苗代小田につばめとぶなり
わが岡にけふも來てつむ少女子がその名だにこそきかまほしけれ
人しれず花とふたりの春なるをまたせてもさく山ざくらかな
春の夜はまだくろ谷のかねの音をおきいでて花のもとに聞く哉
昨日けふ花のもとにてくらすこそわが世の春の日數なりけれ
をとめ子がこがひの宮にちる花はまゆを出たる蝶かとぞ見る
野の宮の橿の下道けふくれば古葉とともに散るさくらかな
只たのめ橫川のおくに咲く花も散りて後こそ浮び出づなれ
世中はかくぞ悲しき山ざくらちりしかげにはよる人もなし
ゑひふしてわれとも知らぬ手枕に夢のこてふとちる櫻かな

都人とひもやくると松の戸をあけたるのみぞ宿の春なる

音たてて氷ながるゝ山水に耳もしたがふはるは來にけり

けさも猶まがきの竹に霰ふりさら〳〵春の心地こそせね

限りなくまたせ〳〵てあら玉の今年ぞふれる去年(こぞ)の初雪

青柳の絲の絶間にみゆるかなまだ解やらぬおほひえの雪

山里のしのの籬のしのゝめにびま見えそめて梅が香ぞする

都人いでてこぬまに山里の梅のさかりはうつろひにけり

門さして人にはなしとこたへけりいかゞはすべきうぐひすの聲

鶯の木づたふ枝は見えねども聲ぞ聞ゆる夜はあけぬらし

晝よりは大かたくもるこのごろの朝ごとになくうぐひすの聲

しづかなる月にとむかふ明ぼのの心も知らぬもゝちどりかな

あけわたる外山(とやま)のみねの横雲に引かさねたる朝がすみかな

かすみつゝくるとおもひし春の日は朧月夜になりにけるかな

雪中歳暮

しら雪の降る大空をながめつゝかくてことしも暮れなむがうさ

明日からはふるとも春のものなればことしの雪の積るなりけり

歳暮近

限りあればわが世も近くなるものを年のみはてと思ひけるかな

都歳暮

もゝしきの大宮人もいとまなき年のをはりになりにける哉

山家歳暮

鶯の聲より外に山ざとはいそぐ物なきとしのくれかな

老後歳暮

なれ〳〵てとしの暮とも驚かぬ老のはてこそあはれなりけれ

事につき時にふれたる

しの簾おろしこめたる心をもうごかしそめつ春のはつ風

はふり子がとる榊葉に月よみのみかげも白し更けぬ此夜は

五節舞姫

天津袖かへしたまひし大君のをとめの姿いまも見えつゝ

雲のうへは雪をめぐらす冬ながらそのふる袖は花の香ぞする

豐明節會

とよ年の豐のあかりの舞の袖おもへば民をなづるなりけり

題しらず

かねの音は聞えずながら百式の新なめ祭夜は更けぬめり

宮人の日影のかづら長き夜も明けぬと見ゆる雲の上かな

歳暮

あら玉のとしの内にも鶯のはつねばかりの春は來にけり

いたづらに明しくらして人なみの年の暮とも思ひけるかな

年の緒もかざりなればやしら玉のあられみだれて物ぞ悲しき

眞白斑の鷹引すゑてものゝふの狩にと出づる冬は來にけり

野に山に悲しき鳥の聲すなり狩人いまや鷹放ちけむ

雨中鷹狩

すらせたる初かり衣の遠山もしぐれの雨に色付にけり

炭竈

ひえの根に初雪ふれり今よりや小野の炭がまたき增るらむ

閑居埋火

底ぬるき火桶ばかりを友としてくらす老ともなりにけるかな

爐邊閑談

うづみ火のにほふあたりは長閑(のどか)にて昔がたりも春めきにけり

題しらず

うづみ火の外に心はなけれどもむかへば見ゆるしら鳥の山

神樂

夜も寒し瀬の音もたかしみよし野の大河の邊に雪ぞふるらし

山家雪

白雪の積るにつけて山ざとはふかくなりゆく年をしるかな

松雪深

はらへばやかへりてゆきの積るらむさらばとよわる軒の松風

旅山雪深

おきそ山おほ雪ふれりあら熊のこもるうつほに宿やからまし

賀茂の臨時の祭久しく絶えたるをことし再興有りけるに其日しも雪の降りければ彼の西行のうらかへすをみの衣とよめりし事をはるかに思ひいでて

いにしへの竹のうら葉に降りし雪ふたゝびかへる世にこそありけれ

鷹狩

初雪

巻上るしのの篠のさら〳〵に思ひもかけぬけさのはつゆき
草も木もあやめわかれぬ黑玉のよるしもあたら初雪ぞふる

雪中厭人

朝夕にまてば來ぬ人中々に雪にやあとをつけむとすらむ
ふりはへて誰はとふともわが宿の雪にはいまだ跡なしといへ

雪似花

梅の花ちるにまがひてふる時は雪さへにほふ心地こそすれ

山雪

かきくらし降るおほ空にちかければ山には雪ぞまづ積りける

遠山雪

みやこより雲井に見ゆるかづらきの高根さやかにつもる雪かな

河雪

霰

おどろかすまきの板屋の玉あられ淋しくもあらぬわがねざめ哉

軒たかくふるやあられの打つけにかはらも玉の聲たてつなり

深夜霰

いかばかりおどろけとてかぬる人の夢をまちてもふる霰かな

行路霰

玉ぼこの道行く人のうちかづく袖にひとむらふるあられかな

雪

さをしかの啼きてかれにし朝より雪のみつもるしがらきの里

あともなき山路はたれかふみわけむ思ひたえよとつもる雪哉

蝶のとび花のちるにもまがひけり雪の心は春にやあるらむ

待雪

朝な／＼おきいでて見れどかづらきの峯にもいまだふらぬ雪かな

朝看水鳥

こやの池をむれて朝たつ水鳥にしばしはくもる猪名の松原

寒夜水鳥

あらし吹くさやまが池になく鴨の夢もこほりや結びはてけん

江鴨

あし鴨はけさつくま江のみをつくし今年も冬のしるしなりけり

鴛

冬の池に眠れるをしのひとつがひいかにとけたる心なるらむ

網代

たなかみの山の木がらしさえくれぬ網代の篝いまかたくらむ

風さゆるあじろの床に今宵もや待つらむひをのいかによるらむ

霙

しぐるゝはみぞれなるらし此夕松の葉しろくなりにけるかな

つく〴〵と今年もながめはてにけり哀とおもへ冬の夜の月

寒月

てる月の影の散來る心地してよるゆく袖にたまる雪かな

寒月照梅花

たゞにやは寒しといはむ冬ながら梅さく庭にてれる月夜を

寒夜千鳥

神山の夜半の木がらし音さえてみたらし川に衢なくなり

題しらず

あし引の山邊さわたるあぢむらのはやくも冬の日は暮ぬめり

水鳥

かるの池にすむ水鳥の浮きながらうきたる世をば知らずやあるらむ

水鳥は沖にさわげど廣澤の汀までこそ波はよせけれ

小夜ふけて蘆の葉わたる山おろしにおきたつ鴨の聲ぞ聞ゆる

菊の花あまり久しくなりぬれば霜さへにこそ置きわすれけれ

寒叢見殘菊

ふるさとの蓬がはらの冬枯にあらはれそめし白ぎくの花

殘菊唎雪

きのふまで老せぬ色に見しものを雪をいたゞく白菊の花

題不知

夜をさむみねざめ〳〵て明方の霜とともにも詰ぶ夢かな

神無月音せぬものに驚くはきのふの氷けふのはつゆき

氷

ことさらにけさより寒し神無月こほりぞ冬のはじめなりける

氷閉細流

岩間ゆく水のこゝろのせばければつらゝに思ひむすぼほれつゝ

冬月

うき雲のあはたの奥やしぐるらん音羽の山ぞ見えずなり行く

關路時雨

すゞか山雲も關路にかゝりけりしぐれぬさきにいかで越えまし

川時雨

貴船川岩こすなみの早き瀬に立かへりてもふるしぐれかな

里時雨

けふも又しぐれの雨にぬらしけり木曾の麻ぎぬさらしなの里

河上落葉

穴師河かれたる水の音きけば木葉のなみのさわぐなりけり
山河の岸をひたりて行く水にぬるでのもみぢ散らぬ日ぞなき

閑居落葉

おのづからふむ人もなき我が門の桐の落葉の露のさやけさ

殘菊

桂園一枝月

冬歌

時雨

神無月朝の雲のさだめなきたがちぎりより時雨そめけむ

大空は吹きのみ拂ふ山風にくもりかねても降るしぐれかな

君の一周忌に時雨といふことを

冬立ちてけふみか月のありてなき影もかきくらし降る時雨かな

世中を浮たる雲と見し日より袖はしぐれぬ時なかりけり

風前時雨

浮雲は影もとゞめぬ大空の風に殘りてふるしぐれかな

山時雨

雲井よりさして來にけるもみぢ葉の色は夕日のこゝちこそすれ
とりもあへずいたゞく枝のもみぢ葉をやがてかざすと人や見るらむ
もみぢ葉の色ばかりこそゆるされめ雲のうへまでゆく心かな

題しらず

鵙のなく夕日の岡の秋はぎは末葉までこそいろ付にけれ
時のまにくるゝを見れば朝がほの花に日影もおくれざりけり

暮秋

何ならぬ限も物はかなしきにあはれなりける秋のくれかな

暮秋霜

ことわりに過ぎても寒し長月の有明の月に霜や置くらむ

題しらず

吹く風の身にしむ色に出にけり草木も秋や悲しかるらむ

きのふけふ飛鳥の里もしぐるらむ眞弓の岡は色付にけり

尋紅葉

山めぐるしぐれの雲にあひにけり染めたる陰や有ると問はまし

紅葉淺

はつ時雨ふりしばかりの跡みえて梢のみこそ色付にけれ

みな散りし後にそめんともみぢ葉の淺きは深きこゝろなりけり

松間紅葉

山松の木のまに見ゆる年々の紅葉も色はかはらざりけり

松ばかりたてりと見えし大原のをしほの山も色付にけり

あるゆふべ内の御局わたりより紅葉のいとめで

たきを白かねのかめにさしこめて給ひたる

このとのの高きにのぼり酌むさけはやがて山路の菊の上の露

菊露

白ぎくの花の盛になりにけりおくらむ露の千代の數見む

菊花久

露しもの色ぞまことにうつるらむいよ〳〵しろし白ぎくの花

菊閑中友

霜をへて匂ふしらぎくこれのみぞかれぬ友なる蓬生の宿

菊制頽齢

舟よせて老いぬ藥をえたるかな龜の尾山のしら菊の花

老對菊

つもりてはわかゆときくの花の露いかに契をかけたがへけむ

菊映水

いづくより駒うちいれんさほ川のさゞれにうつる白菊の花

わが山にまた誰すみて唐衣うつなる音のことし聞ゆる

海邊擣衣

かへり來ぬ夜ふね待こひ三保の浦の沖津の蜑や衣打つらむ

旅宿擣衣

ねられねば妹こひしきをからごろもうつなる里に何やどりけむ

鴫

宇多の野に鴫が羽かく音高しわなはる人の聲もこそすれ

澤畔鴫

明けぬとて鴫はたてども大澤の蘆間の月は影もさわがず

伏す鴫の羽がきはらふひまもなく澤邊の夜露いかにしげけむ

故郷野分

古郷のしののあら垣野分して褌のとぢめ綻びにけり

宮の御會に重陽宴といふ事を

朝霧のうき田の稲はかりつらむ色づき初る大あらきの杜

關路曉霧

相坂の關の杉むら霧こめてしらみかねたる有明の月

河霧

河かぜに吹ながさるゝ朝霧のいかなるせにか消えんとすらん

遠村霧

山崎をわが立來れば朝ぎりの絕間に見ゆる櫻井の里

擣衣

やまがつが秋さり衣よひ〳〵にうつ聲たかくなりまさるかな

小夜更て音こそかはれから衣卷かへしても打すさむらむ

曉擣衣

有明の月より聲ぞひゞくなるねざめて誰か衣うつらむ

山家擣衣

風前雁

山かぜをつばさにうけてとぶ雁は思はぬかたによると鳴くらし

夕　雁

山の端のとよはた雲にうちなびき夕日の上をわたるかりがね

山家雁

やまざとの墻ねの眞萩色づきてかりがね鳴きつ秋たけぬらし

旅泊雁

かり〳〵と何ぞはよたゞ名のりその浮寐悲しきゆらの湊に

遠山霧

しげ山も端やまもわかぬ霧の上にほの〴〵見ゆる筑波山かな

橋上霧

行水のくもでにかくる八橋を霧はひとつにたちわたりけり

林間霧

月前船

ますかゞみみぬめのうらの沖津洲に舟人さわぐ月や出づらむ

月前笛

聲のうちに月もすみ行く笛竹は秋のよながきふしやきりけん

寄月釋教

眞をばまだあらはさで光のみはなてる鷲の山の端の月

三熊野のかたに

みくま野の浦漕ぐ舟のほのぐゝと見えわたるまで澄る月かな

月の前に雁靡きたるかた

打かはす雁の羽かぜに雲消えて照こそまされ秋の夜の月

雁

中々にかはらぬものはかりがねの空に定めし契なりけり

秋風のふかばと誰に契りけむさそはれわたる初雁の聲

浪のうへの月をきよみが關にきてわれこそ今夜守明しけれ

浦月

月はいまうしろの山に出ぬらむあらはれ初る須磨のうら浪

九月十三日あきの國へかへる人をおくりて

雲のなみたゞずもあらなん長月の月見て夜船こぐ人の爲

病にわづらひける年の十三夜に

あらざらむ後と思ひし長月のこよひの月も此世にてみし

月前萩

置く露にかねてうつろふ秋萩の下葉までこそ月は問ひけれ

月前菊

はつ霜はまだ置なれぬ宵々の月に移ふしらぎくの花

月前蟲

照る月の光はうときき蓬生の庭にみちたるむしの聲かな

雨降りけるとし

立いでてむかふかひこそなかりけれ雲の最中の秋の夜の月

故郷月

波の上をあれぬ所とやどるらむ大津の宮のあきの夜の月

月前思故郷

いづくにか今は住むらんと故郷の月もや我をおもひ出づらむ

水郷月

橘のこじまが崎に月すめばやそ宇治人ぞいねがてにする

田家月

さをしかの聲ばかりこそ聞えけれひたうちわすれ月や見るらん

岡　月

こゝにしてみれども月はかくれけり何ぞとかひの山なしの岡

關路月

澄む月の更ゆくまゝに聞えけり吹きもおろさぬ峯の松風

竹間月

くれ竹の一夜〳〵におくれ來て葉ごしになりぬふし待の月

月前竹露

呉竹のふしもあらはにてる月の影におくれてのぼる露かな

月照流水

行水のすゑはさやかにあらはれて河かみくらき月のかげかな

八月十四日の夜月いとさやかなりけるに

此うへの明日のひかりぞまたれけるみちぬは人の願ひなりけり

十五夜月

たぐひなくすめる月かなうべしこそ今夜と人も待わたりつれ

十五夜月明

今夜とていつもかくやはてる月の光や今年あらたまるらん

山月明

残りなくあらはれにけり山松の葉ごしに見えし秋の夜の月

山月聞鐘

高砂のをのへの月や更ぬらんすみわたりぬる鐘のおとかな

峯月照松

いたづらに思ひしみねのひとつ松今宵月こそ澄のぼりけれ

月前松

松陰に立かくれても見つるかなあまりに月の隈しなければ

松間月

洩すべき松の木の間の心とも知らでや月のかくれ初けむ

松月夜深

さをしかの妻よぶ山の松の葉もあらはれ初る有明の月

月夜聴松風

深夜月

物おもふとねられぬ閨の窓を明けてこよひもみつる在明の月

閑夜月

ながむれば夜たゞこゝろもすむ月に音せぬ松の風ぞ吹きける

曉出月

さしのぼる月の光と思ひしはやがても空のあくるなりけり

獨見月

われひとり月にむかふと思ひけりこよひの影を誰か見ざらむ
今こそあれ獨のみにもあらざりし昔の秋を月やとふらん

月前風

更る夜の月は雲井にしづまりて袖にのみふく秋の風かな

雲收月明

山の端に棚引しづむ白雲の上よりいづる秋の夜の月

山路秋雨

雨にとくなりぬるものをすゞか山霧のふるのと思ひけるかな

秋時雨

長月の有明の月の隈もなくてる夜とおもへばしぐれふるなり

月

大かたはうとき物なるおほ空もすむ月ゆゑはむつまじきかな

闇もなく常にかくてる月ならば夜をぬる人はあらじとぞ思ふ

雪間待月

すむ月も今か見ゆらむ大空にまつ雲間こそあらはれにけれ

愁人對月

思ひあれば哀とあふぐ大空に月もひとりぞながめがほなる

對月待客

來む人は何にか今夜さはるらむ月にもくまのあらばこそあらめ

旅人の涙ばかりはとゞまらぬ關のわらやのあきのゆふぐれ

故郷秋夕

いかならむわがまだすみし昔だに悲しかりつる秋の夕ぐれ

田家秋夕

山しろの鳥羽田の里のゆふぐれを見ぬ人しもや秋は悲しき

駒迎

逢坂の山の雫にぬれつらむふしてぞ見ゆる駒のくろ髮

雨中駒迎

雨ふりてくらき夜半だにあるものをけふ引く駒は甲斐の黑駒

稻妻

ふし見山まつの木の間の稻妻に鳥羽田の面の露を見る哉

秋雨

わが宿の露ほにいでてむらさめの降る日さむくもなれる秋かな

秋の夜を千年とたのむ松むしの聲霜にこそうら枯にけれ

鈴蟲

ひまもなき時雨のあめに鈴蟲のふりならされてよわる聲哉

秋田風

おりたちてきのふかつみし芹川の竹田の原に秋風ぞふく

故郷秋風

身にぞしむ鶉なくまで住すてしたがふるさとの野べの秋風

題しらず

關越えて行くみちのくはいかならむわがしら河も秋風ぞふく

秋夕

さもこそは物の悲しきあきならめ夕日にさへもぬるゝ袖かな

いかにせむ荻のうは風吹よせて夕まぐれにもなりにける哉

關屋秋夕

鳴くむしの聲ふりたつる秋の野を淋しかるべく思ひけるかな

われはかりうき夕かと思ひしを暮れてぞ蟲も鳴はじめける

聞蟲

更ぬればかたぶく月とわれならで聞く人もなき蟲の聲かな

枕上聞蟲

むしのねの近き夜半かな枕とて草はむすばぬ旅ねなれども

蛬むかし契りし誰なればきては枕のもとになくらむ

閑庭蟲

八重葎しげきが下の露けきをひろだにわぶる蟲のこゑかな

叢蟲

さやまだの穂屋のすゝきの一むらにあつめても聞く蟲の聲哉

みさをにも蛬のもえし草むらに堪へずや秋のなしは鳴くらむ

松蟲

露

秋風にそよぐものゆゑ小篠原一夜もおちず露の置くらむ

かぜのまもみだるゝ秋のしら露を結べるものと思ひけるかな

草も木もぬるゝ夕の露見れば人は物をも思はざりけり

露脆

さをしかにしがらみかくる秋萩も露をばえこそとゞめざりけれ

庭露

眞砂にもおくらむ露を打なびき一むらみする庭のを薄

荒庭露滋

あさぢふの野邊とひとつになりしより露も心をおかぬ宿かな

枕邊露

秋の夜のながき夢路のしをりには結ぶまくらも露けかりけり

蟲

旅人の袖とひとつになりにけり末の原野のしののをすゝき

薄似袖

おしなべて知るも知らぬも招くこそ尾花が袖の心なりけれ

刈萱

かくばかりなぞや心はみだるらん野邊のかるかやかりそめの世に

刈萱亂風

秋かぜのふかぬさきだにあるものをけさかるかやのしどろなる哉

庭栽野花

いろ〳〵の花のかぎりをうつし植ゑてあれぬ庭をも野となしつる

槿

露にだにうちとけやすきあさがほの花のひもふく秋の初風

槿花未開

葉がくれをまだ明けぬ夜と思ふらむ咲かんともせぬ朝顔の花

この秋はふるさと人の音信に吹くとのみ聞く荻のうは風

萩

さをしかの妻とふ野邊の秋はぎは下葉よりこそ色づきにけれ

ひとよにやたなばたつめの織りつらむけさしも萩の錦なる哉

高臺寺の萩見にまかりて

ふるでらのたかきうてなの唐錦たちのこしけむ秋はぎの花

薄

紅の淺葉の野邊のしのすゝきほにいでたれどいまだ亂れず

古鄕の野中の道にやすらへば風にひれふるしののをすゝき

秋かぜに薄の絲をよらせつゝたが縫出でし草のたもとぞ

薄隨風

ひとかたになびきそろひて花薄風ふく時ぞみだれざりける

行路薄

七夕船

はるかなる年のわたりも限りあれば漕よせけりな天の河舟

七夕後朝

一とせをまたむわかれに衰へて花のかづらもしほむけさかな

海邊七夕

たなばたの手向草とはからねどもみるめは海人の心ありけり

羇中七夕

ましらなく山下水にかげ見れば星合の空も袖ぬらしけり

憶牛女述懐

たなばたにこゝろをかして願はくはわが一とせも長しと思はむ

曉荻風

かぎりあれば覺めなんとする明がたの夢のすゞふく荻のうは風

外に出でてすみける年の秋よめる

片岡のあしたの原に秋たちてみだるゝものとなれる露かな

秋來水邊

玉ざさの葉分の風におどろけばことしも秋の露ぞこぼるゝ

みよし野のみくまが菅のしたにのみ吹きける秋の風たちぬなり

題不知

たび人のもてるくしげの箱根山明がた寒し秋やたつらむ

かへるべきかぎりも知らぬむさし野の旅ね驚く秋の初風

七夕

雲がくれ逢ふとはすれど棚機のたびかさなれば名は立ちぬめり

棚ばたの雲の衣は夢もあらじ吹きなかへしそ秋のはつ風

小車の牛のあゆみの一年はめぐるおそしといかに待ちけむ

七夕雨

晴ながらふりくる雨はたなばたの逢ふ夜うれしき涙なるらん

松高風有一聲秋

わが宿の松なかりせば大空の風をあきとも誰かさだめむ

夏神祇

さらでしも神の心は涼しきに浪のうへなる川やしろかな

六月祓

夏川の淵は瀬になる恨をもけふのはらへに誰か殘さん

いすゞ河すゞしき音になりぬなり日もゆふしでにかゝる白浪

秋歌

初秋風

今よりのあきのはつ風心あらばもの思ふ袖はよきてふかなむ

初秋露

こゝろしてくむべきものを山水のふたゝびすまずなりにける哉
山かげの淺茅がはらのさゞれ水わくとも見えずながれけるかな

泉爲夏栖

なつくれば世の中せばくなりはてて淸水の外にすみ所なし

曉風如秋

みな月のあかつきおきに吹きにけりまだ立あへぬ秋のはつ風

納涼

鳴くせみの聲の時雨はふらねども衣手寒き松風ぞふく
やまかげの岩井の淸水くみくて照る日戀しくなりにける哉

江上納涼

よる浪の玉江の月のすゞしさにからでも結ぶ菰まくらかな

河邊納涼

川上のたゞすの森の陰もよしすゞみてを來ん夜の更けぬまに

湊夕立

茜さすひはてりながら白菅の湊にかゝるゆふだちのあめ

夏浦夕

うら風は夕涼しくなりにけり海人の黒かみいまかほすらむ

扇

草も木も知らぬあひだの秋風はあふぎの陰にやどりてぞ吹く

閨中扇

今はとて打おくねやの扇かなぬるまや秋のこゝろなるらん

扇罷風生竹

ならしつるあふぎの風と思はましおくれて竹のそよがざりせば

避暑

うつせみの此世ばかりのあつさだにのがれかねても歎く比かな

泉

螢照水草

夏川のみくまがくれのみだれ藻による咲く花はほたるなりけり

風わたる水のおもだか影見えて山さはがくれとぶほたるかな

海邊見螢

蘆間とぶほたるの影のなかりせばよるみつ汐をいかで知らまし

蚊遣火

いをやすくねむためこそはおく蚊火の煙に夜たゞ打むせびつゝ

奥山のむろの妻木をたきたててかやりせぬ夜もなきすまひ哉

夕立

をとつひも昨日も降りしゆふ立はけふもふるべし雨つゝみせむ

ゆふ立は愛宕の峯にかゝりけり清瀧河ぞいまにごるらむ

夕立早過

あまりにもゆふだつ雲の早ければ雨のあとだに殘らざりけり

夜河すとたく篝火は後のよの影みなそこに移るなりけり

名所鵜川

さつきやみくらはし河にはなつ鵜も心と身をば沈めざりけり
悲しくもうぶねさすなり長柄川ながらへはてぬこの世と思ふに

螢

陽炎のもゆる夏野の澤水によるたつ影は螢なりけり
夏來ても人はすさめぬわが門の板非の水にほたる飛ぶなり

雨中螢

こも枕高瀬のよどにふる雨のかずより繁くとぶ螢かな

深夜螢

小夜更けてもゆる螢の影見れば今はと聲もたてつべき哉

澗底螢

ふるあめにともしは消えて箱根山もゆるは谷のほたるなりけり

夏草

蓬生の庭の夏くさおり立ちてはらひしまでぞ人もとひけむ

風前夏草

風ふけば秋にかたよる聲すなり夏野のすゝき穂にもいづべく

河岸のねしろ高がや風ふけば波さへよせて涼しきものを

夏草露

陰ふかき蓬が末をふく風にけさもこぼるゝ五月雨の露

蜻蛉(かげろふ)のとぶひの野邊の夏草もわくればしたに露こぼれけり

江戸にありける時野夏草といふ事を

むさし野は青人草も夏深し今さく御代の花のかげ見む

題しらず

はる風につのぐみそめし津の國の難波のあじは今ぞかるらむ

鵜川

みな月の空にかさなる白雲の上に奇しき峯はふじのね

夏衣

なれがたく夏の衣やおもふらむ人のこゝろはうらもこそあれ

水雞

卯の花の墻ね見えゆく曙にそこともしらず水雞なくなり

夏月

とけてねぬ子もち鳥の一聲にやがて明行く月のかげかな

夏深み木がくれおほき山ざとの月の光はふけてなりけり

樹陰夏月

なかく〵にならの若葉の廣ければかへるひまより月ぞ見えける

題不知

大空に月は照りながら夏の夜はゆくみちくらし物陰にして

夏むしのけちなんとする燈の影だにまたであくる夜半かな

たちばなのなつかしき香に匂ふ夜はわが袖ならぬこゝ地こそすれ
匂ひをばいかにせよとか橘のはなちる袖に風のふくらむ

五月雨

降そむるけふだに人のとひ來なむ久しかるべきさみだれの雨
すむ人の袖もひとつに朽ちにけり草の庵のさみだれのころ

五月雨欲晴

五月雨の雲間に見ゆる夏山はやがても空のみどりなりけり

五月雨晴

みよし野の瀧津河内はさみだれの晴れて後こそ音まさりけれ

夏雲

おほそらのみどりに靡く白雲のまがはぬ夏になりにけるかな

夏山

降る雪にうづもれながらさみだれの雲間をいづるこしの高山

關守の打ぬるひまにかよふらんしのび音に鳴くほとゝぎすかな

社頭郭公

あし引の山田の原のほとゝぎすまつはつこゑは神ぞ聞くらむ

郭公稀

初聲を一聲啼きていにしより山ほとゝぎすことづてもせぬ

郭公歸山

時鳥かへる山には聲もなし世にふるほどや鳴きわたりけむ

菖蒲

あやめ草かりにのみくる人なれば池の心や淺しとおもはむ

刈ふけば軒ばにあまるあやめ草根のみ長しと思ひける哉

澤菖蒲

住の江の淺さはぬまのあやめ草松とかはせるねざしなるらむ

盧橘薫袖

月前郭公

さやかなる月ゆゑだにもねられぬを山郭公啼く夜なりけり

郭公たゞ一聲の名殘ゆゑ明がたまでの月を見しかな

雨後郭公

夕ぐれの雨のはれまを足曳の山ほとゝぎす鳴きてすぐなる

郭公一聲

時鳥老のねぶりのうれしきは只一聲に覺むるなりけり

五月をやまちかね山のほとゝぎすこよひ一聲鳴きていづなり

郭公遍

あし引の山ほとゝぎす山にのみ鳴きし心や亂れそめけむ

野郭公

ほとゝぎすなくねほのかに聞ゆなり遠里小野の松の村立

關郭公

郭公

ほとゝぎすしのぶが原に鳴く聲をねらひかりする人やきくらむ
心から深山いでてもほとゝぎすよをうの花のかげになくらむ
粟田山松の葉埋むしら雲のはれぬ朝けになくほとゝぎす

尋郭公

ほとゝぎす山のおくまで尋ねきてなかぬ年かと思ひける哉

待郭公

ほとゝぎす姿は見えぬものゆゑに閨の板戸をあけてまつかな
八重むぐら雲路にまでやさはるらむとひがてにするほとゝぎす哉

與女待郭公

妹とわがふたり聞かんの一聲をねたくも惜むほとゝぎすかな

遠聞郭公

郭公鳴くなる空の遠ければなほしのび音のこゝ地こそすれ

わが宿の墻ねに咲ける卯の花は隣に知らぬ月夜なりけり

卯花似雪

山ざとの夏のしるしのうの花をあやなく雪にまがへつるかな

夕對卯花

白妙のうの花がきの夕づく夜さすとはなしに物ぞかなしき

卯花隱路

うの花の露ふむを野の山陰は浪にぬれ行くことこそすれ

山家卯花

郭公なくといふなる山ざとのかきねもたわにさける卯のはな

葵

神山のみあれの後のあふひ草いつを待つとて二葉なるらむ

葵露

あふひ草日影になびく心とも知らでや露の置かへるらむ

雨夜思藤花

よもすがら松のしづくのひまもなしうつりやすらむ藤浪の花

暮春

花は散りて春もかへるのちからなき聲のみ殘る夕まぐれかな

賀茂川のほとりにすみけるころ河暮春といふこころをよめる

としぐ〳〵に流るゝ春を河なみのかへる〳〵と思ひけるかな

夏歌

題しらず

梢みな青葉の陰になりぬれど花の盛をいはぬ日ぞなき

卯花

題しらず

空にのみあくがれはててかげろふのありともなしにくらす春かな

燕來

かたらはむ友にもあらぬつばめすら遠く來たるはうれしかりけり

苗代

をやまだのなはしろ水は底すみてひくしめ縄のかげもみえつゝ

雨後苗代

はるさめの日ごろふりつるをやまだの苗代水はけふも濁れり

欵冬

山しろの井手の玉水くみにけり影まで見つる山吹のはな

岩がねに浪をよきても咲きにけりよし野の瀧の山ぶきの花

河欵冬

筏おろす淸瀧河のたきつ瀬に散りてながるゝ山吹のはな

あらし山の花見にまかりけるときよめる

龜山はあらしのさくらいくそたびはきて散る世の春をみつらん

大堰河早瀨をくだす筏士ものどかに見ゆる花のかげかな

麓にやどりて

おほゐ河ちるはなまでは見せぬこそ朧月夜のなさけなりけれ

また雨のふりける日に

あらし山落つるも花のしづくにて雨さへをしきこゝちこそすれ

淸水寺の夜の花見にまかりてよめる

いにしへの花のかげさへみゆるかな車やどりの春の夜の月

照る月の影にてみれば山ざくら枝うごくなりいまか散るらむ

遲日

つたへきく遠山人の洞のうちもかくこそあるらしけふの日ながさ

おほそらのおなじ所にかすみつゝゆくとも見えぬ春の日の影

花ちればふたゝびとはぬよの人をこゝろありとも思ひけるかな

暮春落花

限りあればとまらぬ春のおほ空にゆくへは見えてちる櫻かな

萎花蝶飛去

このさとは花散りたりと飛ぶ蝶のいそぐかたにも風や吹くらむ

殘花少

ひとさかりありての後の世の中に殘るは花もすくなかりけり

人の賀に花有喜色といふことを

たれもみなうれしき色は見ゆれどもゑみほころべる花ざくら哉

志賀山越

逢坂のゆきかひまれになりぬらむ志賀山ざくら花さきにけり

江山春興多

おほゐ河入江の松にふる雪は嵐の山のさくらなりけり

花交松

のどかなる嵐の山を見わたせば花こそ松のさかりなりけれ

花有開落

とふ人もなき山かげの櫻花ひとり咲きてやひとり散るらむ

落花

みな人の心にあかぬさくら花ちるよりこそはうらみ初めつれ

夕落花

梢ふく風もゆふべはのどかにてかぞふるばかり散るさくらかな

落花浮水

終にかくさそふは水のこゝろとも知らでや花のうつりそめけむ

池上落花

池水の底にうつろふ影のうへにちりてかさなる山ざくらかな

花落客稀

ほの〴〵とたな曳あくる雲のうへにあらはれ初むる山櫻かな

遠村花

うちわたす遠山もとの垣ねまでおりゐる雲はさくらなりけり

故鄕花

ともに見しひとも今はなし故鄕の花のさかりに誰をさそはむ

故園花自發

いにしへは大宮人にまたれてもさきけむものか志賀の花園

關　花

あふ坂の關の杉むらしげけれど木の間よりちる山ざくらかな

社頭花

ちらずともぬさならましを神垣のみむろの花に山かぜぞふく

河上花

大堰河かへらぬ水に影見えてことしもさける山ざくらかな

田家櫻

しづの男がかへす墻ねの小山田にまけるかごとく散る櫻かな

山花未開

うちはへて霞みわたれるきのふけふさかぬもをしき山櫻かな

尋山花

たづねばやみ山櫻はとしぐ＼のわれを待ちても咲かむとすらむ

尋花處不定

おほかたの花のさかりを心あてにそこともいはず出でしけふかな

霞隔花

さやかにも見るべきものを春霞たなびくときに花のさくらむ

花似雲

風ふけばみだるゝまでを山ざくらなにぞは雲にまがひそめけむ

曙山花

題しらず

雲雀あがる野邊にきゞすも聲たてつ子ゆゑになかぬものなかりけり

世の中へよぶ人おほし呼子鳥なくなる山はのどけきものを

前の右のおほいまうち君ひむがし山の花御覽じけるついでわが岡崎にたち入らせ給ひし又の日のつどひに山家春といふことをよめる

山ざとは春ぞうれしき百式の大宮人も音づれにけり

櫻

ことしもやまた中空にあくがれむさけりとみゆる山櫻かな

大空のよそに思ひししら雲にこのごろまがふ山ざくらかな

みよし野の青根が嶺のしらくもはまがひもあへぬ櫻なりけり

林中櫻

常みればくぬぎ交りの柞原春はさくらのはやしなりけり

歸雁

はる〴〵と霞める空をうちむれてきのふもけふも歸るかりがね
花をこそまちわたりつれかりがねのかへる空にもなりにけるかな
草枕たびを常なるかりすらも歸る空には音をぞ啼きける

深夜歸雁

春の夜の朧月夜にねざめしてたへずや雁の思ひたつらむ

歸雁少

花によりたま〳〵殘るかりがねも今はとこそはおもひ立つらめ

旅にありける年の春雁のこゑをきゝてよめる

なきかはし歸るをきけばかりがねの數につらなる心地こそすれ

すゞな咲きたる野に畑うつ賤のうちさしてあがる雲雀をあふぎ見たる所のかた

おもしろくさへづる春の夕雲雀身をば心にまかせはてつゝ

ながめてもおもはぬ誰か春の夜の霞を月にゆるし初めけむ

春月朧

おほつかなおほろ〳〵と吾妹子が墻ねも見えぬ春の夜の月

春曉月

鶯のあかつきおきのはつ聲にいまはとしらむ春の夜の月

春夕月

あまりにも春の日影のながければ暮るゝもまたで月は出にけり

山家春月

世中のはるにはもれし山ざとの月の光も霞むころかな

柴の戸に鳴くらしたる鶯の花のねぐらも月やさすらむ

題しらず

旅にして誰にかたらむ遠つあふみいなさ細江の春の明ぼの

伊勢の海の千尋たくなはながき日も暮れてぞかへる蜑の釣舟

かへりきてとけども解けずなりにけり結び置きつる青柳の絲

水郷柳

みしま江のたまえの里の河柳色こそまされのぼりくだりに

遠村柳

山もとにたてる煙も青柳のなびくかたにと靡く春かな

春草短

道の邊に駒のふみしくかたらなづな下にや春を萠えわたるらむ

早蕨

かすが野の若紫の初わらびたがゆかりよりもえいでにけむ

早蕨未遍

みよし野のみすゞがしたは風さえてまだ萠出でず春のさわらび

春月

春の夜をおぼろ月よといふことは霞のたてる名にこそありけれ

山家梅花

あらしのみ吹きとわびつる山里は梅の匂ひになりにけるかな

雪と見て人や來ざらむ山ざとの垣ねの梅は今さかりなり

梅香留袖

こゝろのみゆきて折りつる梅の花あやしく袖の匂ひけるかな

柳

うちはへし柳の絲はすがのねのながき春日にあはせてぞよる

柳露

青柳の絲吹みだすはる風のたえまを露は結ぶなりけり

うちなびく柳の絲のながければむすびあまりて露や落つらむ

夕柳

けふもまた靡き〳〵てながき日の夕にかゝる青柳のいと

故郷柳

片岡のうめのさかりになりしよりあしたの原は匂ひなりけり

たが宿の梅のたち枝にふれつらむ今朝ふく風ぞ香に匂ひける

梅度年香

としのうちに咲きつる梅の初花もけさより匂ふ心地こそすれ

毎年愛梅

岡の邊に家居せしより梅のはな折りてかざさぬ春なかりけり

月前梅

闇よりもあやなきものは梅の花見る〳〵月にまがふなりけり

清月上梅花

いかなればにほへる梅の花の上にいでたる月のかすまざるらむ

暗夜梅

めにみえぬ梅の匂ひは春の夜の闇こそいとゞさやけかりけれ

梅が香の匂はざりせばぬば玉の闇の春をば誰か知らまし

河岸にもゆるわかなは青柳の影のみどりとひとつなりけり

田若菜

をとめらが袖こそ匂へ紅のにふの山田に根芹摘むとて

小山田の根芹つむこそ賤の女がうきにおりたつ初なりけれ

春雪

春がすみたな引そめし高砂の松のうは葉にあわ雪ぞふる

山ざとの梅のほつえにふる雪のたまらぬ春になりにけるかな

殘雪

かげろふのもゆる春日に殘りけりきえぬばかりの峯の白雪

足曳の山すがのねにむすぼほれ解がてにする去年の雪かな

餘寒

梅がえに春と鳴きつる鶯のゆくへも知らず雪はふりつゝ

梅

柴の戸の春のさびしさ鶯のこゑより外の山びこもなし

花間鶯

をしみても鳴くとはすれど鶯のこゑのひまより散るさくら哉

名所鶯

根芹つみ誰かきくらむ白鳥のとばたの原の鶯のこゑ

若菜

かすが野に若菜をつめば我ながらむかしの人のこゝ地こそすれ
踏分けて人の摘むらむけふをこそわかなも雪の下に待ちけれ
としぐ〳〵にわかなといひて摘みしかど積ればこれも老の數なり

佛光寺御門主の御會始に若菜知時といふ事をよ
ませたまふに

けしきをもしたに知りぬる春日野の若菜は春の妻にやあるらん

水邊若菜

野外鶯

野はやがてかきほなれども朝な〳〵立いでてきく鶯のこゑ

水邊鶯

河上の淺篠原の葉ごもりに啼くうぐひすや氷とくらむ

曉　鶯

夜をこめてなく鶯はわが宿の竹のねぐらや臥うかりけむ

毎朝聞鶯

朝な〳〵おなじ所にきこゆれどあらたまり行く鶯の聲

夕　鶯

うぐひすのなく山かげぞ暮れわたる霞む所やねぐらなるらむ

關路聞鶯

ふたゝびはこえじと思ふ陸奥のいはでの關に鶯の啼く

山家鶯

野外朝霞

鶯のこゑする野邊にたつものは我とあしたの霞なりけり

海上霞

明けてこそ見むと思ひし筥崎の浪間にかすむ松のむら立

鶯

うぐひすのなく初こゑのうれしさに獨おきつる朝ぼらけかな

わぎもこがねくたれ髪をあさなく\とくも來て鳴く鶯の聲

待鶯

ふしなれし去年のねぐらの呉竹はよも鶯の忘れざるらん

鶯馴

我園に來てなかぬ日は鶯のあれども聲をきかぬ日はなし

雨中鶯

鶯のなきくらす日の春雨はつれぐ\ならぬものにざりける

子日若菜

子日に賀しける人の家にてよめる

ひきそへし松のちとせあり七種(なゝくさ)のわかなの數はたらずともよし

ある年の春ねのひにもまからでこもりをり

この宿は千世もあかねば松がねのいはほながらに引移してむ

霞

雪ふかき北白河のこまつ原たがひく袖に春を知るらむ

朝がすみたな引こめつ卷向(まきむく)の檜原がおくも春や立つらむ

かづらきの山のすがたに打靡(うちなび)きたてりともなき春霞かな

霞遠聳

大比叡やをひえのおくのさゞなみの比良の高根ぞ霞みそめたる

霞添山氣色

いそのかみふるの遠山ふるとしのものとも見えず霞たなびく

初春見鶴

ねのひすとわが打群れてこしものを小松が原はたづぞしめたる

朝ごほりとけたる澤に啼くたづのこゑ大空に霞む春かな

妙法院の宮の御會始に東風暖入簾といふことを

よませたまふによめる

玉すだれゆらぐ春風吹きにけり外山の雪もけふぞ解くらむ

雪消山色靜

けふ見れば比良の遠山雪きえて霞のおくになりにける哉

子日

千世はみなかはらざらめど小松原心の奥くをひかむとぞ思ふ

君をいはふ千世のねのひのためしには引洩されし松なかりけり

社頭子日

神山は松のふた葉も引くものを葵のみとも思ひけるかな

桂園一枝雪

春歌

御讓位あらむとする年の春家の會始に松迎春新といふことをよめる

今年よりあらたまるべき聲すなり大内山のみねの松かぜ

春風春木一時來

氷とく池の朝かぜ吹くなべにはるとや浪の花もさくらむ

春水澄

雫にも濁らぬ春になりにけり結ぶにあまる山の井の水

瀧音知春

千早振神の宮瀧音すみてよし野の奥も春や知るらむ

べしと宣へるにしたがひておのれ竊に桂園一枝と號け侍るもすべてをこなるわざ也かくするを同志の友垣遠近きゝ及びてわれも〳〵と見まく希へるにこと〴〵書あたへむいと煩はしく假に梓にやどして千に餘れるこそ友の望みをたらしむといへどもなほ一時とりあへぬすさびに侍り後えりくはへ給はんには改めものし侍るべきもの也文政十一年かんな月の末賀茂の川邊なる觀鷺亭にして源元幹沙門玄如等に謀りて平清樹これをしるしぬ

源　斐　雄書之

吾師桂園大人月ごろ病に煩らひ給ひけるが夏もやゝ更て岡邊の夕日隈なき暑さの堪へがたきを厭ひ涼しかるべき陰をとて此松原なる川岸に隱れ住みて世の人をさへ避おはしけるほど七月の末よりこゝ地俄にたのもしげなく自身も今はと思ひとり給へるを見驚きておのれいへらく著はし給へらん書どものうへはしばらくおく年來よみやり給ひし若干の言の葉千歳の後おのづから散失せむだにをしみても悲しむべきに侍るを其もひとつに燒棄むなど獨言給へる眞實のことゝもえ覺え侍らず從ふ輩實に崑崙の千顆の玉とも仰ぎいたゞきまつるは吾佛たときのみに侍らんやはせめて然有べきばかりをだに撰置かせ給はゞなどやう〳〵に申解侍りし日より頓て讀聞え參らせて爪じるしつけもて來るほどに僅百が一にとゞまれりそれ書清めたるを見給ひて又みづから筆とりてこは〳〵と書捨給ふまに〳〵遂に片光も遺るまじう見おそりてやをら引とりかいをさめ侍りしさて是が外題いかゞ標し置侍らんと申すにあにこと〴〵しうたゞ藻屑とか朽葉とか似あはしう書すつ

あなればつたなき筆して補ふ所も侍るめりかんなは翁の用ひられしにまかせてひとへに和字正鑑鈔によるとかくするに浪速のうらのあしわけなるよにしあれば璞のとしをさへ七かへりあまりへてかのとのひつじの春よりぞいへ〳〵のしふにならへてよにつたふるやうにはなりはべりぬ小川萍流しるす

いにしへの家々の集とて世につたはれるを見侍るにおほかたはひとのあつめたるにてみづからかけるだにまれ〳〵なればまいてえらびおけりとみゆるは侍らざりけらしされば小澤のおきないそのかみふるの中道をわけそめられけるむかしよりもゝたらずやそぢに近きまで年ごろよまれけるをたゞ忘れじとてかきとゞめられたる歌はよろづにもあまり巻をかぞふるにいそぢにもみちはべれど世に殘さましなどつゆおほさゞりけるみさをはうたを見ん人は見て知らるべしこれを六帖えいさうと名づけられけるはかの紀氏の六でふの歌の體をつねに心にかけられけるによりてにもやはべらむそれが中の歌二千首ばかりとうでてたにはの國柏ばらを知るよしし給ふみもとにまゐらせられたるはかの君のみづからはしにかき給へるに見ゆこれにしもたゞごとによめるあるは贈答の歌のおほかるは翁人にをしへらるゝのかけはしなればなりけりいにし年よりたゞしあはせてやう〳〵かき淸むるにいたりてもうたは一もじをもたがへず詞書はかりそめにしるしおかれしも

都をばおもひたつより一日おちずゆかばいたらんみちの奥にも

風澤中孚

よの人の誠は天のみちなればへだてさゝふるかたやなからむ

水火旣濟

野も山もみな紅の秋の葉はいづくのくまか染めのこすべき

火水未濟

いもせ山中なへだてそよしの川わたらでやまむものならなくに

六帖詠草 終

水山蹇

いかにせん行くも歸るもなやましくさかしき道にまどひきにけり

山澤損

君のため人のためにはなにはえのみをつくしても何かうらみむ

地風升

なすわざの身にみち〳〵て年をへば路にさかゆる時にあふべし

澤水困

淵にみのおちくるしみてあすか川せにかはる世をたのむけふ哉

水風井

みよや人くめどをしまぬ里中の大路るづつの水のこゝろを

艮爲山

行末は山かさなりて道けはしとまれ旅人よるこえめやも

風山漸

秋山の木々のにしきのいろ〳〵をかざりそへたる夕づくひかな

地雷復

なごりなく消えぬと思へばかつ立てて籠れるふじの煙をぞ知る

山天大畜

よも山をあつめて空にみつばかりつめるたからは世の人のため

山雷頤

草木みなほどよくおける露の上に人をやしなふことわりも見ゆ

坎爲水

ながれてのよるせもがなやよのうさにあふくま河の底のうもれ木

雷天大壯

久方のあめをとよもし鳴神の時えてのぼる聲のはげしさ

火地晉

のぼるひのひかり見るごといや高く榮え行くべき時はきにけり

かすが野のはらからこそは世の中のうきたの杜（もり）のなげきをもとへ

彤弓

本末もあかき心をみそなひてたまはる弓のいろもかしこし

庭燎

うま人をまつのかゞり火影更けてよるしづかなる玉しきの庭

周易の卦名をもよまんとてよめる中に

山水蒙

山陰の淵にやおちむぅなるごが行がた知らず道まどひして

天地否

あひ思ふはては火水と隔りて心かよはぬなかとなりぬる

天火同人

みな人のねがひをみつの道ならば何かなにはのさはりあるべき

山火賁

山有樞

いける日に遊びたのしめ君死なば君がみことはひとぞひかまし

葛生

つのの枕あやの衾は今もあれど君なき床に獨ねましや

采苓

はつわらびをりなつかしき人ごとをたのむな我せ誠なき世ぞ

黃鳥

身にかへてをしむにとまるものならば花は嵐にまかせざらまし

衡門

よはなれて物にきそはぬ我門のいさゝを川に心をぞやる

澤陂

かくれぬに生ふるはちすのかぐはしく淸き光も知る人ぞなき

棠棣

かもをえば酒くみかはし琴ひきてあがもふ君と共に老いなむ

有女同車

朝がほの花のものいふ心地してみやびし妹が聲ぞわすれぬ

野有蔓草

ちぐささく秋野の露の玉さかにあひにあひぬる花の一とき

東方未明

時ならず君しもめせばさ夜中にあけの衣をさかしまにきつ

甫田

田草とるしづも千町のとほつ人おもふおもひのしげきをや知る

陟岵

ちゝ母のたびなる我をおもふらん待つらんさまの面影に見ゆ

伐檀

わけこしはやまとことの葉よをうみの舟路はいかゞさして渡らん

干旄

何にかはことの葉そへんさく花のあかぬことなき國のさかえを

氓

よりきつゝ我に心をひくいとのあはんと思はゞ秋をまて君

竹竿

故郷にいつかも行きてつりのをのむすぼほれたるうさをとかまし

黍離

みがかれし玉のみやゐをけふとへば空のみどりにつゞく麥はた

兎爰

いにしへはうさぎをとりしあみのめにかゝれる雉のほろゝとぞ鳴く

葛藟

つらなれる枝をわかれておち梅のみをあはれともいふ人のなき

女曰雞鳴

今ふらば雨のもるべきこの本を人わらはれにたのみけるかな

靜女

わが思ふ人のてふれし櫻花よにふりにたる色香ならめや

二子乘舟

面影に今もうかびて行く舟のゆきけん君はかへりましきや

牆有茨

言に出でていへばさがなし秋風のすがたはかやのみだれにも知れ

鶉之奔々

我たのむ人こそうけれとりすらもおのがたぐひをことにやはする

蝃蝀

誠なき人のたぐひや中空に絶えてあと見ぬにじのかけ橋

相鼠

あなねずみあなはしたなと思へどもわが垣こゆる人にまされり

汝墳

汀なる柳かりそぎながむれどわがまつ君はいまだかへらず

羔羊

身の程をしれるひつじのかは衣かざるしら糸色もなくして

小星

暮れゆけば西に東に見るほしのおなじからぬぞ身のたぐひなる

栢舟

わが心石ならませばまろばしてすてましものを野にも山にも

綠衣

わが袖はあやな涙のあけ衣むらさきをこそ人はめづなれ

谷風

山櫻咲初めてこそしら雲の花におよばぬ色は見えけれ

旄丘

浪あらきもたひの泊日をふれば舟こぞりてもゑひにけるかな

うづまさにありける頃つれ〴〵なるから座右に
詩經のありけるを見てよみ心みむとてよめる中
に葛覃の章の心を

はふ葛もしげくなりけりかりていざおりたちきせんせこが衣に

巻耳

人をわがおもひの草のまじれゝばつめる若菜も打おかれつゝ

桃夭

さかりぞと折えしからに花の名のもゝよろこびの宿となりぬる

兎罝

うさぎとるますらたけをは弓なれやおきふし君がまもりとぞなる

漢廣

行きていざ君を千里の外に見むわがのるこまにまぐさ取かへ

りてんとていでぬいとほいなければこれより

津の國の難波(なには)のみつのあしをなみことうらかけてからせつるかな

銅駝(どうだ)坊(ばう)のあたりに知る人のもたる家ありいたづらなればとてすりもせずあれたるをさながらかりてすみけるころ人こぬほどは心やりにことかきなでてうたひをるに月のよごろ更行(ふけゆ)くをりをりはかべのあれまよりたぬきはひいでて庭草のしげみに見えかくるゝもあはれにおぼえて獨ごちし

あなさびしたぬつゞみうて琴ひかむわれことひかばたぬ鼓(つゞみ)うて

腹赤をよめる

これにます魚のなしとてすべらぎのみはらあかずと詔(のりごと)やせし

名所の題にて甕泊を

松風の讀經の聲にきこえしはつく〳〵ほうしなけばなりけり

九月十二日うづまさまたら神の祭にうちしぐれたる雲のたえまよりさしいでたる月いとをかし

しぐれゆく雲まの月のまたら神おもしろしとや見そなはすらん

山　雪

とほ山のかぶろなりつるいたゞきに綿きてけりと見ゆるしら雪

ある人の雪の日鱈をおくれるに

わたつ海はかひなくふるとみし雪の魚となりてぞはやされにける

女の見てわらひければ

わたつうみのおきなももとは人なみに磯邊のなまめかりしものなり

むかし洛東にすみ侍りけるころある人のきてあしをみつとこひけるにくまもなくもとめ侍りけれど露あらざりけるけしきを見てほかにてもか

俳諧歌

小松二本ひきてかたはらにおきあがり小法師の
あるゐに
ころ〳〵の里のうなるが初春のはつねにもねしことの見えぬは
定靜が眼のやまひしけるころわかめにそへて
「春霞へだてゝさやに見えざればとほくなるとの
めをからせつる」かへし
やみて君かすむなるとにからせつるわかめにあえて今ぞいえなむ
太秦にすむころ郭公のひねもす鳴くをりから京
よりふみおこせたるかへりごとに
時鳥聲の袋にいれられればけふのつかひのつてにやらまし
心性寺にて

死なしても世にはあらのよくるまふも忘らせよゆきの木のそらにあく

雙六歌

大字一首拾遺集第十九雜戀歌也順集
以右古歌配四行以自詠被造作双六盤面
其形如左但古古歌有小異今依拾遺集
改之習古人跡更以愚詠續之和歌都而
十五首

秋きりへて秋ひふえきあらつはなさき
秋らつくもし秋もれめくこと秋わふ秋きの秋

四隅配四季
折句
旋歌
十二首

南ふとて南うくめらん花さらあまり南うるつらなす花うしへのも南

无さしのゝ无らくさわけて无かしたにみえつへ
无らさきと无つましきそ无つれさあけ无

也まはにひ也つゝきそふ也つふしとも
也きそへて也そまいくあ也こゝしのて也

久しひさ久にうてせ久らきさくらを
久らしも久らさふりて久いめてさき久

志らつゆ志めつにふれ志らさへつまし
志まあきて志のつゆふす志らてあまし志

不しそまゝ不きそまつる不しゝまのゆめ乃
不うらうき不ことまいひそを不うしそおす不

よろしくたやすきしわふ

たてしろいをくゆる

阿くしのほれおりひ岩深くしけるたしのかまつきなきなけ

阿ささはほのうちとさて絶のしおけ不ささろ女くつれ子なきひさ

薬師佛にたてまつるうた

名号を冠折句にして

旋頭歌十六首

短歌十二首

阿字を冠して圓形に

知ぢのあきひとつのつきのゆきかへりかはらじみよをめぐるひかり波
波るばなのさくまでにほ八木々のゆきかれしえだにもみればめかれ壽
乃やまみなあかくはとひこはれしぐれてるひすくなみやまずぞめづる
美だれつゝなにかはうきめむすびぐさもとよにうときのべにおひせば
也へにほひはなのさくらぎあかずとへらうけつもよしぬるもをしけく
多がたにもてにこそなるれおもへひとそれてとしつきへつゝあはぬ末
末れにこばのどかにをあれさくら花みにとてのみやはやかべりゆ久
能ちつひに見んといひなばうらみむやつらきもうきもものならなく二
二しにひのやゝいりなばのふでのあとみずあらましをこぬひとおも爾
具さまくらかたしくまなくおきいでてあかつきごとにつゆわくるみち
天ををれば流いく〳〵のやまひへてみなとかくこえしかつくしつるけさ

づくりのことなど旦暮にせまれるよはひをもて待ちつゝあかしくらすほどにみとせにもなりぬ今はこゝながら世をつくさばやと思ふもさるべき契にやありけむいでやこゝにおはすなる佛たちに歌たてまつり後の世かけてたのみ奉らばやとおもひてまづあみだ佛にたてまつる折句歌三十二首よみときやすきため左にかいなべ侍る

拾遺集歌一首

壽具呂久能以知波爾多天流悲登津末乃安者傳也美奈無毛能二也八阿良怒

壽まのうらはつせのやまもへだてなくはるのかすみはけさやたなび具

具に〳〵になだたるところおほかれどはなはみやこのはるのやまし呂

呂うこくのほどもなくのみもりてよはたまくらのまにあくるなつの以

以ちじるくつゆおきそめてこのあさけくるあきみゆるにはのかよひ知

我をのみうしとおもふなゝがもたる身の藥こそあだとなりけれ

六帖題にてくさのかうを

ちくさのかうつしあはせしたき物はおもひの外の袖にしみぬる

誓興法師眼をやみてかた目盲ひたるにかたく

たまのおちたるめがねを入れたる箱にことそへ

よといふに

いざこども盥干のかためがねてよりからんといひし時はきにけり

しはすばかりに餘齋がもとへ炭をおくるとて折

句に

すきま風身にしむ老の末の山ごす月なみもじはすとぞなる

都炎上のあしたともかうもおもひめぐらさでた

だ雨露をよくばかりなる所をとてよすがもとめ

てうづまさの十輪院にすみそめけるなり都の家

おもふことなすびなければめぐりくる月見ることに驚かれつゝ

邦義がもとよりくるみをおくりて「あしびきの山にすむてふやまがらのこをめぐる身ぞいとかろげなる」と申こし侍りけるは長月ばかりにやこれより

あしびきの山から冬のくるみちは秋さむくなる嵐にを見よ

名所をかくしてよみしとき風宮を

ちればこそさそひもすらめ櫻花おもへば春の風のみやうき

赤坂

秋の月むかしのあかさかはらめやかすむはおいの涙なるべし

雄湊

とにかくにむすぼほれたる麻のをのみなとけていつあはんとすらん

病したる時くすしの餠をすゝめ侍るに

おもひとかめやかきなせるふりわけがみのうひ
のをしへも」といへるかへし
うなゐごがふりわけ髪のすぢあらはなる
ことの葉にみじかき心見えぬらんかも

物名

れむぎやう
雲はれ。ん。き。や。う。ごくとて月のため吹いでむ風を待つゆふべかな
葉月もちの日くれつかたかつらよりとてはたつ
ものにそへて布淑が「てりみたむ月をこよひと
おもひな。す。ひ。との心にいそぐくれかな」といひお
こせるかへし

やつといひて　こゝのつをこそ　かさねつれ　かくはわぶれど
よの中の　たのしき事と　きゝふりし　酒をだにのむ
身なりせば　ゑひの程だに　おほゝしき　こゝろをしやる
をりもあらましを。

旋頭歌

天雲の　よそになるやと　のがれいれども。
身にそへる　うさには山も　かひなかりけり
道遠し　よし野の櫻　まださかぬまに
とくゆきて　ことしは花の　ちるまでも見む
わらはさとしの書をつくりてふりわけ髪と名づ
くこれを見て布淑「ますかゞみ見るよしなくは

六帖詠草　雜下

長歌

入江まさよしがおくれるながうたにこたふ

うつせみの　よのひとごとに　おのがじし　たてたることの
ありなめど　みなおほかたに　しをへつゝ　後はのがれて
きみがごと　花をともにて　日をくらし　月のまへにて
よをあかし　たのしむ見れど　われはその　ひとなみ〳〵の
ざえなしと　さしはなたれて　世をわたる　たつきなぎさの
こせりくひ　あるはいそべに　なづみつゝ　けふを過せる
水とりの　みなれぞなれし　ともゝめも　みなさき立ちて
たゞひとり　あはれ〳〵と　うそぶきて　へにけるとしは

友なれてさかゆる家の名もしるく千尋にちよの影をならべよ

鶴有遐齢

この宿のみぎりの松にすむ鶴のかひこのちよを思ひこそやれ

寄鶴祝

くもりなききみよの千年の行末をあまとぶ鶴の聲にこそ知れ

伊勢の宣長が七十を祝ひて

七十は人かずならぬ我もへぬ君はちとせのよはひかさねよ

かれよりかへし「なゝそぢはかずにもあらず過

しこし君にひかれてわれも千代へむ」

西にいりひがしにいでて天津日のいくやちめぐり世を照すらむ

寄道祝といふことを

すなほなるやまとみことはやがてこの神のみくにの道とこそなれ

寄國祝

蘆原やこの國ぶりのことの葉にさかゆるみよの聲ぞきこゆる

年にそふこがね白かね玉がきのうちつみくにぞとみさかえける

寄松祝

年なみの千重にこすとも梓弓いそべの松の色はかはらじ

落葉契千秋

もみぢ葉のちらずば何に契りおく千年の秋の數をかぞへん

備中の岡武敏が父の八十賀に

よにこえてたかくさかゆる岡の松こやいくちよのねざしなるらん

佐竹紀伊守が父の七十賀竹契遐年といふことを

あかず思ふ心を老のよはひにてつきせぬ春の花を見よ君

馬杉亨安翁の八十賀に寄花祝老

萬歳も老かくるべきかげなれやふりせぬ春の花のかざしは

定靜が六十賀に

思ふことなるとの沖の春のなみかぎりなきよをゆたにかぞへよ

みやづかへしける頃殿にて春祝といふことを春

日法樂に

三笠山ふた葉の松もひとしほのみどりにこもる萬歳の春

祝のこゝろを

八束穗のみつほの國の名もしるくいつも年ある秋をさめかな

おろかにも千よ萬よと祈るかなこゝはとこよのやまとしまねを

ことの葉のしげるにつけて知られけりとよあしはらの國のさかえは

寄日祝

しづかなる山のすみかの子の日にはちとせをまつの外なかりけり

伊豫のもり貫が母の賀に早春霞といふことを

今そはん色ねをこめて花鳥の二名のしまぞ霞みそめぬる

屏風に春の野にをとめの若菜つみにゆくところ

を應舉がかけるに

かぞいろのつむべきちよにくらぶれば野べの若菜はすくなかりけり

禪尼物外なゝそぢの賀に若菜を

うちむれて君が齢をのべにつむわかなも法のためならぬかは

敬儀が母の六十賀に歌すゝめける時初春鶯を

君がへんちとせはけふをはつ春となくはきゝつや園の鶯

淸生が母の賀に花を

春をへて見れどもあかぬ櫻花いかなるいろの年にそふらん

ある人の六十賀におなじ題

王の見たまひたるかけるに

後の世とかけてないひそみな人の心はやがてはりのかゞみを

古寺水

山寺のかけひの水やおのづからたえぬみのりの聲をそふらむ

古寺鐘

けふの日もはかなくくれて山寺の法のむしろにかねひゞくなり

慶賀

讃岐の由作竹翁が百とせの賀に初春見鶴といふ

うべしこそ時をもわかず榮えけれかめのうへなるやまと言の葉

ことをよめる

近江の熊充が母の七十の賀に山居子日といふこ

春のくる朝の空をとぶつるのはるけき千代のゆくへをぞ見る

とを

もす花にむつるゝ聲經よむに似たり

ぼだい樹の花になきよる山蜂はいまも般若をよむかとぞきく

本ぞんに奉るとて

花さかぬ身ぞたぐひなき埋木のみかげもよにはいでけるものを

七月二十四日地藏尊の前にありて思ひしこと

うつせみの世のことのはにまどはずば六のちまたも一すぢの道

一筋のみちしるべせよことの葉は此世ながらの六のちまたを

ねぎごとをあだにくたすな埋木の身の名におふを契にはして

藥師佛にぬかづきて

ことの葉に思ひわづらふ病をもをこたらしませなむやくし佛

維摩居士の像に

水の月鏡のかげぞありてなき心を見するすがたなりける

鏡にをとこ女のあまたあそべるがうつれるを閣

るに色不異空空不異色のこゝろを

はて知らぬ野山の秋のやちくさもおのが色なき露ぞそめける

天　界

今だにも心をのりにそめかへよ天の羽衣色あせぬなり

修　羅

人ごとにあらそふ心かへり見よ此世もすらのちまたやはなき

太秦にて雨いたくふる夜かのもとのすみかのけぶりとなりし頃しも雨さへふりてこゝかしこにたゝずみあかしける事など思ひつゞけて

立ぬれず袖もしぼらで此寺にふるはみのりの雨にやはあらぬ

此ほぞんを埋木の地藏となんいへる庭にたかき菩提樹ありその中よりあらはれ給ふとぞいふその木に花さけりおほくの山蜂むらがりきてひね

生初めしむねの蓮のひらけずばもとのうきにやまたまどはまし
　みよのほとけに
何をかはみよの佛に手向けましもとの心の花にさかずば
　むかしはゝに念佛をすゝめ侍りしにつゆをこた
　らずとなへたまふをきゝて
たらちねのなむあみだぶといふ聲はうれしきものの悲しかりけり
　曉觀念
ながむれば心のあともなかりけり曉月の影しらむそら
　寄風空諦
雲をおこし浪を立てては見すれどももとより風の姿やはある
　十牛の歌をよめる中に入廛垂手の心を
けがれたるあくたにおける露をしも玉になしてぞ月はすみける
　大般若經をさむる箱の底にかくべき歌こはれた

岡崎のまつりに神幸ををがみ奉りて

すさのをの神のみゆきにひらきませ人はまどへるふるの中道

神祇

すさのをの神のみよよりあらがねの土につたへてしげることぐさ

須盞烏

わけまどふ八雲の道のしるべせよいのるも久しすさのをの神

熊野

みくま野の濱の南のうみよりも深きや神のめぐみならまし

社頭榊

廣前にねこじてうゝるまさかきのさかえんよゝは神のまにく

大國主の神のかたに

かしこしな武くまめなる御槌もて打かためます大國のぬし

釋教

いにしへはおほねはじかみにらなすびひるほし瓜も歌にこそよめ
　ことばの道のあらずなるをなげくころ
いこま山たかねを月のいづるより難波入江は氷をぞしく
　この歌をよめるは夫木に長方郷の「伊駒山たかねに月の入るまゝに氷消えゆくこやの池水」とよまれたるを載すこれは地理を知らでよまれたり伊駒は河内大和のさかひにて攝津國のひがしこやは武庫郡にて遙に西なりいこまに月の入るを見んは大和よりのことなりすべて歌のことは花にのみながれて無實浮華になれるよりこのごとき歌とがむる人さへなくなれるをなげくとてひとりごてるなり
ひとふしと思ふややがてすなほなる心のゆがむはじめならまし

ある人のもとあしくよめる詞をよきさまになほ
されはかの苗をぬきあくるにてわがものならず
いかにしてよみならひてんといふに
ひたすらにいひもてゆけば言の葉のよしとあしとはみづからぞわく
歌は見聞覺知よりいづるものなるをひたすらに
外をもとむる人のおほければ
何をかはあぜくらかへしもとむらん見きゝにみてる言の葉のたね
ことわりたゞしければ深遠の意もかくれず
山川の淵のさゞれもかぞふべく見ゆるは水のすめばなりけり
正しからざれば淺近の意もあらはれず
深きにはあらぬ田川も行く水のにごれば底の見えずこそなれ
今のよの歌は言えりのみして常に見きくものも
おほくはよまずなりにたり

この道もすゑの世のすがたに心よする人のみおほければそれをなげきてよめる

やすからんおほぢはゆかで岩ねふみさがしき山にまどふ世の人
岩ねふみからたち分けて行く人はやすきおほぢを過がてにする
いかばかりいひちらすともことの葉の花を思はゞみはなかるべし
ことの葉のしげみこちたみ分かねてまどはゞかへれもときつる道
いにしへにかへらんことはみな人のもとの心の道のひとすぢ
すなほなる心詞ぞ行末にのこらん道のすがたなりける
ことの葉は人の心の聲なればおもひをのぶるほかなかりけり

鳥のなくを

鳥すらも思ふ思のあればこそかたみにねをば鳴きかはしけれ

風ふきて草木のさわぐに

おもふことといはでやまめや心なき草木も風に聲たてつなり

道もと二なし常の心たひらかなれば詞おのづからやすらかなりおもふべしつゝしむべし

すなほなるものと心をしをりにてこと葉の道のおくはたづねよ

ことのはの道はことわざしげき世にすみて心に思ふことをいひいづるならひながら塵をはなれたるものぞかしと思ふ事のありて

世のちりにうづもれながらうづもれぬ大和言葉の道ぞたど〻しき

栩非一室にものならへる輝孝が一室うせにし後きて「今ははや濱のまさごの道たえてよるかたもなきわかの浦波」といへるに此國の人語みな歌なれば道たゆることあるべからずなどおもひてかへし

この國はことばの海のおほやしまいづくによるもわかのうら波

あつめおく跡にぞおもふ行末のよよにもそはん大和ことのは

義篤俄にあづまにくだるべきにことそへよとまうしおこせたりしに[illegible]

いでて君かへりて親につかふるも直き心の道はひとすぢ

何がしの孝子のまづしくて親につかふる事の心にもまかせぬよしなげきたるをなぐさめていひつかはしける

家と見てあかぬことなくつかふともむくひんものか親のめぐみは

人の子をいさめて

生るより千よふる松も天地のめぐみをもれて榮えやはする

矢部正子が宮づかへすとてあづまにくだりざまに來て朝夕の心おきてになるべき歌をとこひけるとき栞（しをり）に書きて遣し侍りし

道成無事中

すなほなる心の道はみな人のかざらぬ常のことの葉に見ゆ

君子行

あつき日も陰にはよらじ白浪のけがしき名をもおふのうらなし

白

ぬば玉のやみもけたれし雪の色をかさねてみがく有明の月

黒

からす羽も墨もいとはぬ色なれどかへまほしきは人の腹ぐろ

くれなゐ

いつくさに見ゆる中にもとりわきてまづぞめにつく紅のいろ

むらさき

紅もなつかしけれどとりわきて心にそむはむらさきの色

多

何わざも同じことなれど筆のあとのわきてつたなきが年頃いとはづかしけれどひとの子へはわれをあざむきて書きてもとらすものから心には汗いづばかりくるし今だにならはゞやの心つくにいはけなきをりたは業にのみこゝろいれて親のいさめきかざりける身のはてこそとかなしくなりて

とる筆になみだぞかゝるたらちねの親のいさめを思ひかへせば

見る〳〵も波にけつべきながあとを猶のこしける浪ちどりかな

殘生隨白鷗

老波をかもめるる江によせしよりみなれし友はうとくなりにき

長作獨遊人

とこしへに空ゆく雲も風ぞそふ獨うかるゝ我やなになり

文詞

身の後はしみとやならん昔文見るとはなしにくたしはてつる

たとへこしあやも錦もぬひものも詞の玉の聲やのこれる

ことのは

はしたなくいひなちらしそことの葉に心の色の見えもこそすれ

心

かゞみにぞ心は似たるしかはあれど鏡は影をとゞめやはする

所爲を見て心を知る

なすわぎにおのが心はかくれぬを人は知らじとおもひけるかな

ちかく火のもゆるを見て

もゆる火のほなかに立ちてやくるとも露たじろかぬ心ともがな

筆寫人心

うづもるゝわが水ぐきの手すさびにゆかぬ心のあとや見ゆらん

人のいくつばかりになりぬるととひごとしたるに

花さかで七十あまりいつとせになりぬといふもはづかしの身や

勝義があづまにくだるに橘の千蔭がりいひやる

立よらば立ちもよらせよ橘のかげふむ人は道まどひせじ

かへしに陰ふむみちはおほけなきものから立よらばなどうけたまはるこそうれしう覚え侍れとかきて「たぐひなきこと葉の花の香をしめて立よる人の袖もなつかし」

陸奥介景柄より「さむき日にやめるときくぞやすからぬさらでもいたく老いにける身の」といひおこせしかへし

殊更にとはれけるこそ嬉しけれやむともよそに聞かるべき身の

この翁をとふに雨ふりいでければ

ことさらにとへる道より雨ふればかさやどりとや人の思はん

ある人の「ながらへて猶も數へよ敷島のよゝの

ふる道君こそは知れ」といひこしたるかへし

年をへてわくとはすれど草しげみ今だにたどる野中古道

越中の自軒が「空かける鳥のごとなるはねもが

な君があたりへやすくかよはん」といひおこせた

るに

雲にとぶ翅なくとも仙人のよはひもたらばともにあひてん

世龍をとひし後にかれより「さゝがにのくもれ

る空もいとはずていとめづらしき君が來ませる」

といへるかへし

さゝがにのいと疎くへしをこたりをいひとかんとて訪ひしなりけり

はおなじ心にこそあめれ我にもをしへよなどいひて

朝がほも露も夕はまたねどもさけばかたみに光をぞそふ

信郷より「心ありてとはぬとを知れ塵の世に名をうづまさの君がかくれ家」と聞えしかへし

とはゞとへ世にありわびてすめる山なのあらばこそうづまさの里

道覺より「うらやまし人め稀なるやどなれば世のうき事やきこえざるらん」とありしかへし

人目こそまれにはありけれこゝも猶なれ行くまゝにうづまさの里

秋成栗田のふもとに住初めける時「山に入る人のためしはならはねどうき世の道にまどひてぞこし」といへるに

我も世にまどひて入りし山住よいざ身のうさをともに語らん

はけしきも同じ心の道なるをやはらぐのみと何思ひけん
　かねのさうしに歌かきてと人のいへりしにいと
　つたなければいなみけれどしひていへりければ
　日頃へてかきてつかはしけるに
それとなき跡をやさしみ濱ちどりおり立ちかねて日頃へにけり
　難波の昌慈より「笛竹のおとせぬうさはわすら
　れてそのおきふしをいかゞとぞ思ふ」といひおこ
　せたりければ世にふればわづらはしき事などさ
　し續きて思の外にとだえけるなどかきて
君にさへきこえぬまでに笛竹のあなう〳〵とよをすごしつゝる
　おなじ人の何くれの事などとひて朝聞道夕死と
　もの心ばへを「おもへきみ暮まちつけぬ朝がほ
　も露の光をまたずやはある」と申こし侍りしにそ

心もて君がまどはぬことの葉の道のしをりは誰ならめやも

かへし

難波のかげのりが住吉奉納のとて歌こへるにい

なびがたくて廿首ばかりつかはしたりしに外の

人のとともにあづさに彫りて藏山しふといふ名

をつけ市にひさぐとき丶つれぱもとめて見るに

いづれも作者のあつらへたるよしを序にかけり

いとおもひの外なればにくくてこと葉のたがひ

たることといひやるふみのおくに

ことの葉はやがて心の道なるをなどかくばかりふみはたがへし

かへし景のり「やはらぐるこ丶ろの道のかぜな

るをなどかはげしく吹きはたが丶へし」歌をやはら

ぐ道とおほえたるもいと思はずなれば又かへし

ふしいとのかなたこなたにまどはれて思ひとかれぬ世の中のうさ

寄情述懐

身のほどを思ひもわかで何とわが心にたえぬねがひなるらん

思ふことといふをかしらにおきてよめる中に

思ふことなりもやすると山しろのこまの瓜生（うりふ）の露にぬれつゝ

流池館にすみ侍りける頃資芳がかしらおろし
て蒿蹊といひて尋ねけるにおどろきて

おもはずもかはる姿を見つる哉そむかば我ぞそむくべき世に

入道かへし「なか〳〵にかはる姿ぞはづかし
きそむきても猶そむかれぬ世に」

あきの國頼惟清が都にきたりとてみちの事など
何くれととひて「ことの葉のしをりとかねてた
のまずばまどはぬ道にけふあはめやも」とよめる

淵にのみしづめる身にはあすか川せにかはるよも知らずぞありける

水に

ながれいづる水のみな上尋ねてぞにごらぬもとの心をも知る

竹に

心だにむなしかりせば呉竹のよのうきふしはよししげくとも

玉に

みがきなばたれか光の見えざらん心のたまは石ならめやは

笛に

うきふしのしげきこのよは笛竹のいきつくほども忘れやはする

弓に

ますらをがたならす弓のおきふしも苦しきまでに身こそ老いぬれ

糸に

ありへてぞ世のうきふしはしけいとの長かれと身をなど思ひけん

風によす

吹たゆむ心の風やおのづからことのは草の色に見ゆらん

住吉法樂千首に露によす

いかでかは色のちくさにわかるべき花にもさかぬことのはの露

郭公によす

時鳥なれだに老をいとへばやかたらふ聲のたえて聞えぬ

道によす

すぐならぬわが心とやまどふらんをしへたどしき言の葉の道

橋によす

思ふこと末もとほらじ橋の名のとだえしまゝにかけもつがずば

沼によす

草がくれ人の見ぬまをたづねずばにごる心の底も知られじ

河によす

色もなきことのは草におろかなる心のねこそかくれざりけれ

背(そむ)くともいまいく程と世のうさにたへてあまたの年もへにけり

身のうさにいとふ心ぞあはれなる又めぐりこんこの世ならぬを

暁述懐

ねざめしてむかへばうすき燈(ともしび)にのこりすくなきわがよをぞ思ふ

夜述懐

あつめねばほたるばかりの光なきわがよの更けぞさらにくやしき

夏述懐

はらはずはこゝろの道もなつ草のしげるさまにや埋(うづ)みはてまし

山家述懐

山にても心のすみかかはらねば世をのがれこしかひもなきかな

寄日述懐

いたづらに送りむかへて天つ日のかげはづかしく身こそふりぬれ

はやくよりかよわき身のをり〳〵は病にさへをかされながら猶ありふるもあやしされば思ひよる事千々のひとつもなさぬに月日のみいとゝく過ぐれば

まてといふに隙行く駒は止まらずいざさばつひの旅よそひせん

いつのとしか喜之が二度いとあつしくわづらひたるをこたりざまに「おもひやれとしにふたゝびしでの山見てかへりにし心ぼそさを」ときこえしさこそあらんずらめいとようをこたりけりこの歌も心よりいでたるなればあざやかにきこえたるもうれしくてかへしに

死での山二度見てもかへりこし君はやちよのさかもこえなん

述懐

なれ〳〵し昔にかへす夢さめてむなしき床にのこる面影

松月が十七回忌といふに

ありしよの人はとし〴〵稀になりて獨ぞしのぶいにしへの友

重愛が身まかりぬときゝて

色そふも今はたのまじ秋の葉の千入(ちしほ)になればあへず散りけり

入江昌熹が身まかりぬときゝて

もろともにやめりし老は先立ちぬさてやいつまで我は殘らん

明くれあはた山を見るにむかしこのわたりにつ

どひてあそびし人の殘るもなかりければかの衆

鳥高飛盡といふ詩の句を思ひいでて

かはらぬもあはれとぞ思ふあはた山人はかひなく消失せし世に

わが後の事あつらへけるたくみの身まかりしに

わが思ふこゝろだくみはかひもなし世にすみ繩の限り(かぎ)ある身は

たのもしな濁りにそまぬ名もしるく花の臺にすまんと思へば
ふしてこひおきてしのべどなき人のためには何をなむあみだ佛
しごろじはぶきやみにて露ねられ侍らぬにあたりの人
はよくねたるにふりにし人を思ひいでて
いもをまたうつゝに見めやぬば玉の夢ぢはゆるせよはのせき守
身まかりし兄の三十三回忌にあたりけるに
みそぢあまり見しよは我もいはけなき別にさへもかなしかりしを
あしをおほくつみかさねたるを見ていとゐたう
まづしかりしことを思ひいでて
たらちねのあらましかばと思ふには寶を見てもねぞなかれける
あひなれける女にな離ける頃雅胤のもとより
「なれにしを思ひかへさばなきとこにさぞありし
よの戀しかるらん」とあれば申しつかはしゝ

んとなみだせきあへず

黑かみのみだれてかゝる面影をながきかたみと見るぞかなしき

賓興身まかりて程なく信里も身まかりける頃

かくしつゝあればあるには似たれどもたゞかげろふの人の世の中

ものへまかる道にえさらぬ所なりければむかしをり〳〵とひしわたりをとほりたるにあらぬさまにかはりはてたるを見て

昔見しいもが住かは田となりて野はたはいまのひとの家々

政教が女不染が初月忌に

ながらへて君をとはんと思ひきやけふをたのまぬ老の命の

むつましきいもせの契見るたびに嬉しかりしぞ今はかなしき

あらき風ふせがんかげのかれぬとや消えも殘らぬなでしこの露

みちひろきちかひとぞ聞くみだ佛わがたのみおく人まどはすな

この人まだいとわかければ病のをこたることもやと頼むかたもありしを今はいかゞはすべきかぎりあれば野べのおくりのまうけなどするに心まどひめもきり何の事もおぼえずなきがらながらある程は猶なきやうにも思はねば今はといへど別れがたきをわが思ふほどは人はいかゞはあるべき夜もいたう更けぬといひそゝのかす僧どもの誦經する聲をきくもすべてあらぬ世に行きたらんこゝちして我にもあらずさはいへどはたとゞむべき道にもあらねばいまひとめ世のなごりにとうち見るにかうやうの人はけはひかはりぬるものとか聞きしをありし俤露たがはずひたひがみのうちかけられたるいつの世にかまた見

づけてたむけ奉る年頃のをこたりをゆるしおはしましてわが露ばかりの心ざしをうけさせ給へかしとてなん

もゝとせのこけの古墳たづね來てむかへば袖に露ぞみだるゝ

いにしへの小澤の水のあせてかくかれ行く末をあはれとを見よ

我だにもなからん後のふるつかを思へばけふにましてかなしき

岐阜の安乘院身まかりける年ごろ詠艸のついでに文はかよひけれどいまだたいめもせざりしいんさき東にくだりし時道までいでられけれどそれもさはりてたいめせざりし事よなどおもひいでて

面影ものこらでいとゞはかなきはまだ見ぬ人のわかれなりけり

としごろあひなれける人の身まかりけるに

空蟬のむなしきからを見る／＼も猶世にありと思ふはかなさ

やまとの宇陀の法正寺へまうでけるとき手向たてまつる歌竝序

おほぢの君の身まかりたまひし頃はかぞの君は二つばかりにやおはしけむ九つときこえし時より家名たえてかなたこなたの國にさすらへたまへるほどに年月をかさねてまうでたまへりしこともなかりけんかしましてその末の子にうまれ待ればこの國とはきゝながらいかなる所何といふ御寺にやと年ごろなつかしみおもひ奉りししるしにや去年さだかにをしふる人のはべりていとうれしく思ひたまふるにこん年はもゝとせにあたり給へりその頃まうでなんとはおもへどいとかよわき身の病さへおほくよわひもはたかたぶきてその期をまちつけ奉らんことのおほつかなければこの春まうで侍るになんもとよりまづしければ佛事供養などやうの事もかたのごともえせでたゞしたひ奉るこゝろざしをおろかなる言葉につ

澄月法師の一周忌に

こぞまでもかたみにとひし古ことを雪のしたにも思ひいづらめ

山かげに一木のこりてふるまつのふゞきにむせぶ聲ぞかなしき

初雪のあしたに喜之がありしよにとひしをおもひいでて

消えかへりおもひぞいづるふるきよの面影うかぶけさのはつ雪

妻の身まかりしころ久しくおとづれぬに難波の昌熹より「かきたえてとりのあとだに見えざるはふみをしとしも思ふなるべし」

これは勅撰名所外集をこひけるにやらでありけるをいへるになん

かへし

ふみをしと思ひもあへず消えにしをなげきてそふるやどの白雪

いかでかいませしといへばたいめせでは心のむすほほれとくべきやうも侍らず心ひとつをしるべにてといふいとくるしげなりかの心えずおもひしこといひとくとぞおもひし雪のしづりの音にめさめたるにともし火かすかに嵐はげしく吹おつなみだ玉をみだすがごとし

思ひつゝぬるともなきをなき人のさだかに見えし夢ぞあやしき

ありしよのうらみも消えて白雪のふりにし人ぞさらに戀しき

さめて後ことかよはさん道をだにとはましものを夢と知りせば

在りし世にあしたのゆきは消えやすし夜の雪にはとひて絲竹のあそびせんといひしを思ひいでて

雪の夜はかならずこんとたのめしを消えにし人や思ひいでけむ

鈴木龍は絲竹の交にて年ごろしたしくからひぬる中なりけるを此夏のころいさゝかこゝろえぬ事のあればいきていひたゞさばやと思ふ折からいと重くわづらふときけど常にかよわき人にもあらねば程なくをこたらむ折にこそと思ひてうち過ぎぬるほどにはかによわくなりて終に身まりぬよはひはことしいそぢとか聞きしよろづたどく〳〵しからず呂律のことなどいとよう心えたる人にてかばかりなるもたづねんにはいとかたかるべしをしみつゝせんすべなくて月日をふるにこよひ雪いとふかうふりてさむければとくふしぬ曉がたの夢にこの人とひくと見て身まかりぬときゝしはそらごとなりけり重くわづらふに

世にもこのたむけたえまじうなどあつらへてこの秋五十回の法事いとなみ侍りて秋懐舊といふことをよませ侍りけるに

遠き世を忍ぶあまりにわかちおく秋のたむけはたえじとぞ思ふ

秋のころ斫水がうまごをうしなひてなげきけるにまたうまごうまれけるに「よをうみのあまのうけ繩うき中にまたよろこびのくるもあやしき」とよみて見せける歌のかたはらにかきてつかはしたりし

人のよも何かはかはるおけばちりちればかつおく秋艸の露

よべの夢に泉下の人をあまた見侍りておきいづるに軒の霜を見て

朝まだき日かげまつまの霜よりも我身よにふる程ぞはかなき

どなくて身まかりしに思ひいでて

朝顔ははかなけれども人の世のあすをも待たぬ身にはまされり

かたらひ侍りける女の身まかりて後其家に住かはりたる人のしたしく侍りければ月あかき夜友にさそはれて行きしに夜更くるまで人はみなおもふことなげにあそべどわれはたゞありしよのおもひいでられて

いく年をへにける宿にあらねどもあらぬよにこそ月もすみけれ

身まかれる姉の三回忌に残菊匂といふことを

ちよませとよそへし秋の花の香は霜にふりせでのこるしら菊

ある人のおやの身まかりての後子うまごなんどうちつゞき家とみさかえて田畠などおほくもたりけるをわかちて僧坊につけ侍りていかならん

めて歌すゝめけるに秋思といふことを

月もいりぬともに見し夜をくり返ししのべば長き秋のおもひに

　喜之が手向には雲をよめり

なき人の雲にやなるとながむればそれもむなしき空に消えつゝ

　方俊が身まかりし手向に風を

とりとめぬ風をいで入るいきのをの絶えずはありとも頼むべき身か

　この人身まかりしのちに惜歸雁といふことを

「見るに猶名殘ぞをしき春の雁遠よるまゝにかすみそふ空」とよめるを見いでてあはれに覺えければそのかたはらに書付け侍りし

かへりくる秋しもあるを春の雁なごりをしみし人はいづらは

　あさがほの花のさかりに難波の昌熹とひきて此花みにならん時かならずたべといひしがいくほ

ける時江上霞を

立かへる物とはなしに霞む江のむかしに似たる春の夕浪

元廣がみまかれるいたみに獨見花といふことを

獨わがなど過ぎがてにうち見ると主なき宿の花や思はん

松齋が身まかりしを悼みて月を題にて

ともに見し人もやどりもなきあとにひとりぞすめる秋の夜の月

かでの小路の家にてともに月見はべりしそのや

どもけぶりとなりてあとかたもなければよめる

になん

信言が身まかりて百日の手向に同じ題を

なき影の雲がくれにし月ならばまたましものをあすの夜とだに

一室身まかりし後手向せんと思ひながら病して

いたう月日も過ぎぬれど昔の友澄月蒿蹊をはじ

色に香にそめし心をいつじかもみのりの花のうへにうつさむ

　風あらましきゆふべ軒の花のふさながらちれり

　　とて見するに

人の世の盛をまたぬことわりもふさながらちる花にこそ知れ

　重愛が身まかりしいたみにわか菜を

ことの葉の手向もけふの法のためつめるわかなの外ならめやは

　法眼元迪身まかりて天龍寺に葬れる後いたみに

　霞を

この春は霞なたちそさがの山入りにし人のあとをだに見ん

　房共がいたみに薄暮霞を

一村の霞となりてあだし野のけぶりの色もわかず暮れゆく

　安藝の頼春水が父の惟清が十三回忌に歌すゝめ

ふることを何としのぶの草の庵世をいとひこし住かならずや

僧正遍昭の九百年忌に古寺懷舊といふことを

ふりせぬは君がこと葉の花の山いませし寺はあらずなれども

こぞの暮女院かくれさせたまひければ例の初春のけしきもなからん雲の上を思ひやり奉るに佛事などもさはる事ありておこなはれぬよしきけば

雲の上はいかゞさびしきくずもめさじさりとて法の聲も聞えじ

いつのとしにかやよひの末つかた風のよきたる一木もやと尋ありき禪林寺にまうでぬれば塵にうづもれし心もすむさまに覺えていとしづかなるにつらくとおもへば

常もなき色香ややがて時わかぬみのりの花のしるべならまし

なか〳〵にしのぶ昔の夢ならばまれに見る夜もあらましものを
人なみに思ふさまなる世をやへしをこにもしのぶ身のむかしかな
住江の松風のみやわがこふるむかしの聲を猶殘すらん
かきつめし古ことの葉のなかりせば何をしをりに昔しのばむ
　こしかたをしたひて
何を身のうきになしてはなげきけん親のいませし古の世に
　賓興が十七年忌に夏懷舊といふことを
うゑしその木立ゆかしみかげとへばこたへがほにもかをる橘
　獨懷舊
こひしさを語りてだにもなぐさめん身のいにしへを知る友もがな
　閑居懷舊
まぎるべき人めはかれていにしへをしのぶ草おふる宿の淋しさ
　草庵懷舊

無常

さとりえて驚かぬにはあらぬ身の世の常なさにならひしもうき

さゞれ石の巖となるもとゞまらで移行く世の姿ならずや

としの始に歯のおちければ

木のめはる春しもおつるこのはにぞ定なき世の風は知らるゝ

幻世去來夢

はかなさはいづれまさらん宵のまに見えける夢とまぼろしの世と

夢

さめぬべきものと知りせば夢のまのうきには誰も惑はざらまし

うつゝには思ひたえぬる昔にもかへるは夢のたゞちなりけり

曉眠易覺

曉の八聲の鳥のいく度か老のねぶりをおどろかすらん

懷舊

老の後西山にかたぶく日を暮ごとに見て

山のはの入日のなごり見る度に遠からぬ身の夕をぞ思ふ

文見るにいと物うく覺えければ

更けぬとてかゝげそへずは殘るよの猶くらからん窓のともし火

おやあるときおもくわづらひけるに

をしからぬ命ながらもたらちねのある世はかくてあるよしもがな

おきふしもいといたうくるしく日々におとろへ

行くをおほえて

心のみむかしのまゝと思ひしがそも物ごとにうちわすれつゝ

いかなるをりにか

花をめで月にうかれていつの春いつの秋をか身にかぎらまし

思ふことありて

人のよの富は草葉におく露の風をまつまの光なりけり

あともなき波の上ながら心あてにゆけばまどはぬ舟ちなりけり

旅泊夢

波の音に打おどろけば見し夢もともに跡なきうきねなりけり

旅人渡橋

くれかゝる遠の野川の一橋心ぼそしやわたるたび人

遙見行客

のこる日のかげをたのみて旅人やなほ行過ぐる遠のひとむら

暮望行客

たび人の行先おほくくれぬとや道いそぐらん野べの遠かた

夏眺望

山陰の青みな月の江の水に釣する小舟すゞしげに見ゆ

海眺望といふことを

追風にみぎはこぎいでしうら舟のはるけき沖の雲に入りぬる

夜旅

やどからん庵かとゝへば深き夜の塚やにのこる火影なりけり

旅宿雨

わけなれし露はものかはかりねして雨きくよはのかたしきの袖

旅宿夢

わけくれてつかれやすむる旅ねにも猶野山こそ夢に見えけれ

羇中橋

打わたし思へば遠き古郷のたよりはいつのまゝの継はし

わたりきてかへりみすればそことなく雲の夕ゐる嶺のかけはし

羇中磯

波風のあらき磯やのかりねには思ひもかけず古郷のゆめ

海路

うみつ路のにはしよければ昨日まで波たかゝりしうさも忘れつ

雁のくる秋をもまたじかへるさの雲ゐはるけき旅にはありとも
佐渡の千鶴が都にありていたうわづらへるを
北の海の千さとの外に親をおきてやみふしぬるかあはれ旅人
かへしにかれ「故郷の親をおもひてやめる身を
あはれぶ君もまたおやのごと」とぞよめる
をはりにくだりし時行かたも見えず霧わたりた
る夕やどるべきさとは猶とほくたどりわびたる
に月やゝさしあがれり
霧わけてわが乗る駒のたつかみに月こそやどれ露やおくらん
羇旅
うらの波嶺のまつ風音かへていくよ旅ねの夢さますらん
行旅
山べゆき野行きさと、行きゆけど猶行末とほきみちのくの旅

君がためきその山道雲わけて又いぬらんかきその山道

旅

やどもなき野原しのはらわけ暮れぬ又やこよひも草枕せん

見るものきくものにつけて泪もろくてやどにく

してあらんよりはとおもひて旅ねしそめし夜

よのうさも紛れやすると山ぶしをならはす袖は猶ぞひがたき

みやづかへしけるとき人やりのみちにてあづま

におもむくべき名残をしまんと賓興がいへにま

ねかれて行路霞といふことを

立わかれとほざかりなばかへりみる都の山も霞みはてまし

おなじとき資芳より旅の調度などおくりて「か

りがねにおくれぬ旅もかへるさは秋よりさきの

ちぎりたがふな」かへし

ゆのめぐみをおもふにはかへる旅路もすゞしか
りなん」とよめるかへし
ことの葉の照る日をさふるものならば君が旅路の陰となりなん
尼智乘が故鄕にかへるに
道すがらあつさしのげとそへてやる扇の風を我と知らなん
紀の國の是正がくにへいくとて「立かへり又も
きなかんほとゝぎす花たちばなはかれずもあら
なん」とありしかへし
ほとゝぎすよそにもきかん橘のかけはなるとも聲たえず鳴け
下野國の蒲生君平は古陵のわきがたくなりゆく
を歎き山陵志つくらんとてみやこへ上(のぼ)りこゝか
しこ行めぐりたるがわが家にもしばしありてま
た國にかへりなんとするわかれに

めるにかへし

たひらかにいませといはん外ぞなき又あふべくも知らぬ別は

備中の夏鼎が此道のこと問ひきかむとて二月はじめより五月になるまでみやこにありしがえさらぬ事ありて國にかへりなんとするわかれに「こん春はこんとおもへど陰たのむ君があたりは猶ぞ立うき」といへるかへし

こん春をまちつけて見ん時にこそけふの別の袖はかはかめ

政子も「こん春を契るもとほきわかれぢにあやめもわかぬ袖の露けさ」とありしかば

こん年をまちもつけずはあやめふく五月のいつか君に語らん

柳齋が播磨にあるほど六月ばかりかの國へ歸る道のほどあつかりなんといへば「ことの葉のつ

身のうさをかたりてだにもなぐさめし君にさへこそ又別れけれ

尾張の家則がとひきてかへるを見おくりて

又こそとことにはいへど老いぬればこれやかぎりと思ふ別路

越後雁島の惟清がきて四日五日ありてかへるに

またともえこじなどいふに

命あらば秋こん雁を聞くたびに鳴きて別れしけふやしのばん

丹波の忠慶あづまにくだるとてあからさまにたちよりて「思ふことといはで別るゝかなしさはあふうれしさにまさりこそすれ」と申したるにかへし

年々にまさる言葉の色を見てわかるゝうさも今ぞなぐさむ

播磨の義罌が國にかへるに「またもこん時をいつかとおもふよりあへず涙の袖にこぼるゝ」とよ

はやくより言葉の道に入たちの山のかひなく分まよひぬる

うきみのうら

ながらへてうきみの浦のかひやなに波のしわのみ立かさねつゝ

人妻里

うしながら門ひきいろゝ小車にまつよ知らるゝ人づまの里

衣浦

ありときく衣のうらの玉やこの浪のしら玉手にもとられず

別

あす知らぬ身をながかれといのる哉行末とほき人の別に

悠々一別已三年

一度のわかれにかけて思ひきやとしのみとせを隔つべしとは

老の後ひとりずみにてあるをあはれがりてこと

とひける人のとほくゆくに

境川

明くるよのさかひの川による浪の色わきそめてなびく浮霧

鼓山

萬代の聲ばかりこそひゞきけれつゞみの山は苔深くして

引島

今もかもあみのうけ繩ひくしまの海人のよび聲遠く聞ゆる

小池

水たまる小池の魚も大海のくぢらのごとや身をおもふらん

可也山

旅人の枕かる夜は心してふきだにたゆめかやのやま風

竈山

さかえ行く民のかまどの山まつやたえぬ烟の色を見すらん

入立山

子を思ふ道にまどひて今ぞ知るちゝぶの山の深きめぐみは

いたじき山

世をいとふすみかは苫をしとねにて山の名にきく板じきもなし

筑摩

世のうきに心つくまのみくり縄ながかれとしも身をばいのらず

白月山

かくるべきくまこそなけれあきらけき御代にあふみのしら月の山

松賀浦島

色かへぬ松がうら島いつ見ても田鶴(たづ)ぞむれゐる松がうら島

蓮浦

人ごとにありとは聞けど花さかぬむねの蓮(はちす)のうらめしの身や

菅山

入りてしもうきよと聞けばすがの山すが〲しくもえこそ遁れね

伊勢野
神風のいせ野の草のなびくにも見よかしみよの民のこゝろは
布引山
見るがうちに高ねしらみて別れゆく雲はさながら布引の山
家田松
とひなれし家田の松をめにかけて駒うちわたすあのの板ばし
二村山
花もみぢ誰うゑなべて春秋のにしきをたゝぬ二むらの山
田籠浦
海かけてふじのねおろし吹あれぬ沖にないでそたごの浦舟
葦河
かりの身はよし沈むともあしかはの濁れる名をば世には流さじ
秩父山

都まで民の家ゐをたてそへて今はやさかの里もわかれず

　　口無山

おもふこといふかひあらん身なりせば口なし山に遁れましやは

　　勾池

月影もすまでいくよぞ島のみやまがりの池は水だにもなし

いかるがの里

み佛の道をひろめしいかるがのさとみゝのみこやこゝにましけん

　　置勿

けふの日もあだに暮すなあすかすぎおきなにいたる人の程なさ

　　大橋

水底にたつもやふすとさにぬりの大橋うつすかたあすは川

　　橋本寺

けふもまたいくその人かわたすらん橋もとでらの鐘ひゞくなり

入日さすうらなつかしみ來て見れば波ぞ錦の名には立ちける

家直朝臣の山莊のよもの山々をわかちてよませ

しにあたご山を

くらべてはひえのためうき高峯とてあたご山とはいふにやあるらん

牛尾山

よの中はうしのを山のしば車くだりやすかる身にこそありけれ

泉杣

かしこきも道あるみよにひかれつゝ今はいづみの杣とこそきけ

鹿背山

今はとてうきよをよそにへだてなば我身をかくす衣かせやま

鞆岡

梓弓いての舍人がともをかのをざさのしのは矢にやはぐらん

八坂里

かはら田もつひにぬたにぞなりぬべきかくのみ常にいしを拾はゞ

かるもかきやく鹽がまの烟にもからき世わたるわざぞ知らるゝ

紅の塵の中にもすみつべし心の風のとはにはらはゞ

夢をのみ海驢(みち)の寢ながれ身のうさも波のまに〱世をつくさばや

名所岡

行かへりあそべあそびの岡のべの松の千年のかぎりこそあれ

名所杜

秋はきり春は霞のうすものを立かへてきるころもでの杜

名所瀧

ぬしなしと誰かいひけんおりたちてきて見る人の布引のたき

名所河

これやこの空にありてふおなじ名にながれてたかき天の川波

名所浦

杣人のひく杉材の綱絶えてもてなやみぬる身にこそありけれ
はて〳〵は手にだにとらぬ梓弓末中ためてならひけん
ほねよりもかへりてほねを折るものはたゝむ扇のをりめなりけり
吹おろすむこ山あらし音はげしにくさびかけよ沖津舟人
明くれにこれるなげきをになへばや翁の腰のかゞみたるらん
愚にてかよわきものの老いたればとりどころなき我身なりけり
底ひなき池の心はさわがねどきしの水なみたゝぬ日もなし
ことの葉をつたへやしつる吹く風の片便こそおぼつかなけれ
何せんに人もすさめぬ言の葉をかひだゆきまでかき集めけん
つく〴〵とひとりし物を思ふにはとはずがたりぞ常にせらるゝ
いたづらに老いはてんとは思ひきや心のしこそたのみがたけれ
世をいとふ人あらせばやのがれては安くへぬるを老づとにして
うれしきもうきも湧出づる水のごとともに流れて止らざりけり

酒

世のうさもわするゝ酒にゑひしれて身の愁そふ人もありけり

政敎よりてうじたる鶴にそへて「老のなみよせてもわかのうらにへんよはひを君にゆづるなりけり」とあるかへしに

今よりの千代をゆづると聞くからに飛立ちぬべき心ちこそすれ

古人のこと葉を題にてよめる中に

吹く風もまたでけぬべき露の身を千年のごとく思ひなれぬる

石ずゑもなくていく世になりぬらんしがの大津のみやのふる跡

めにかゝる人かげもなし明くれにとりのあみはる窓のおきふし

斧とりて丹生の檜山に入る人は心にかなふ宮木こるらし

いにしへの筆のはやしを見わたせば手にとるべくもなき我身かな

とことはに風のなづる露の身の何にかゝりてながらへぬらん

寄車雜

おほつかな何にひかれて小車のうしとおもふにめぐり來ぬらん

太秦に住みける頃みじか夜の明けもはてぬに車のきしる音するは嵯峨よりみやこにかよふなるべしさもやすげなき世ぞかしとおもひめぐらせばたが上もおなじことなり

しかぞいまめぐりくるよのさが車うしとてもはた身をいかにせん

寄舟雜

くちねたゞあしまによせし捨舟の漕出でぬべき身にもあらずば

對鏡知身老

むかし見しかしらの雪は朝かゞみむかふ日毎にふりまさりつゝ

寄帶雜

人言はかしまの帶のうらおもて見わかぬばかりむすぼほれつゝ

宮の御手して夢の字ありて蝶のかた呉春東洋が
かけるに

うつゝなきよは夢ながらすぐしなでなにかは蝶の人となりけん
ふじのこなたのうみより龍ののぼるかた

なみをたて雲をおこしてふじのねもおよばぬ空にのぼるたつ哉
こゝかしこに文書かよはすべきつゝみがみを手
づからつくりて

ふみかよふふるのの澤の中つゝみかみしまもらば道はたえせじ
無絃琴のかたかけるに

ひかぬ音をきゝ知る人もあるやとてわがまつことぞ久しかりける
ゆ　み

ことのはのあらきのまゆみ本末もいつか心のよるにまかせん
もの〻ふの手なからす弓の本末のさもよりやすき老の年かな

など人のいふをきゝて

み佛の心をこゝろに鳴く鳥のすがたは人に見えずともよし

獸

むかしおもふ心の駒にあらそひてけふのひま行く影もとまらず

牛

を田かへす牛のからすきからき世に繫がるゝ身もうしのからすき

猫のよる妻をこふをとほく聞きていとあはれに

おぼえければ

から猫の聲うらがなししきしまのやまとにはあらぬ妻やこふらん

猫の子をかなたこなたにつかはしてたゞひとつ

殘りたるが友こふにやあらんいたく鳴きてねに

けるを

かたへに引わかれつゝねこの子のむれて遊べる夢や見るらん

里ごとに鳥ぞいまなくその鳥にならひて時を知る身ともがな

軒の松に鳥の一聲鳴くほどもなく市人のざゞめ

きゆく音するを

わが松のこずゑのからす音になけば里の市人朝だちすなり

朝にからすの聲を遠く聞きて

もののねは遠きまされり鳥すらはるかに聞けばをかしかりけり

からす

おもふことかくてや終にやまがらすわがかしらのみ白くなれゝば

はこどり

夜をこめて旅立ちぬれどはこどりを二聲きけばはや明けにけり

岩にうのゐるかた

うきしづみみなれそなれてよを過す身をあなうとも鳥はおもはじ

山に慈悲心となく鳥あなるが木がくれて見えず

ある人のもとよりたび〳〵はじかみをおくれる
に
はじかみのかど〳〵しくてからき世に又くちひゝくめを見すな君
　庭の松にねぐらして鳥のをるに
山陰にねぐらさだむる鳥見ればわが友えたるこゝちこそすれ
　鶴
鳴くたづの子を思ふにもおのが身のはぐくまれにし世をやしのばん
わかの浦や月の光もみつしほに汀のたづの聲もをしまず
　夜鶴鳴皐
子をおもふなみだやゆづる澤水の深き夜聲に袖のぬるゝは
　たづもなくなる
住吉と汀のたづも鳴くなるをうらみてのみやよを過すべき
　朝に庭鳥の聲をきゝて

とへかしのしるしの杉はたれまちてこぼるゝ門に猶たてるらん

くぬぎ

老いゆけど猶ことの葉のわかくぬぎ若くはそはむふしもたまし

竹

心だにすなほなりせばくれ竹のよのうきふしは何にしげらむ

窓竹

すぐなれと思へばふるきことの葉をさながらうつす窓のくれ竹

路芝

ひとつ色にしげる野もせの芝生にもさすがに分けし路は残れり

石面苔

ひとかどもあらぬみたにのつぶら石あなおもなとや苔のかくせる

たで

身をつみて思へば誰もやほたでのからき世わたるうさはかはらじ

はたとせに二とせたらぬきみ見れば我もわかえし心ちこそすれ
いま住むやどの軒に松のあなるは昔若狹守宗直
あそが和かの浦よりうつしうゑたるなりこの松
を經亮見て「千よかけて君がすむべき庵とやか
ねて移せしわかのうら松」といへるかへし
うつしけむ人はむかしの宿の松千とせの色を見るもはかなし
松經年
軒のまついくよかへぬるとことはにすみて久しき山風の聲
わかのうらに松あり鶴あまたあそぶ
松の色たづの聲さへわかの浦は見きくたび〳〵のどけかりけり
杉
このもりは神ましけりなおく〳〵深くしげれる杉にしめはへて見ゆ
門杉

うらやましうきよりなりてうき身とも思はず常に忍めるみどり子

松をこのめればをり〳〵によめる

十かへりに咲くはまだ見ずひとしほの春の緑ぞ松の花なる
生ひそめてまだ二葉なる苗なれど千よまつの木と見ればたのもし
春秋の花も紅葉もひとさかり松のときはにしく色ぞなき
いつはとはわかぬ緑も夕づく日さすやをかべの松のむら立

東南にたかき松ありこと木にすぐれていとめでたし中つえより下つかたしらかしのいとしげくしげりていぶせかりければ枝をはらひそぎけるに松のすがたいとよく見えていとど日もかれずなすべきわざもわすれて見る〳〵おもふに詩などには十八公と文字によりていへることもありげにおほゆれば

僧

苔衣うらなる玉にこゝろをやかけていとはぬ野ぶし山ぶし

西行上人の銀の香爐たびたるをもたるかた

家をすて身をすててしも寶をばめかくるものと思ひたるらし

王昭君

面かげをうつしかへずはさすらふるわがうきめには誰かあふべき

妓女

をりかへすをとめの袖にまねかれてあまつ空より雪さへやふる

泉郎

よをわたるうきめかり舟いでもあへず汀のあまは藻鹽をぞ燒く

舟人をよめる

いく槳もとむとはなき船人も海路にとしの老いにける哉

泥孩兒

もみぢ葉を尋ねていれば山本のはやしにひゞく鳥のひと聲

　むかし事にあたりてより閑人となれば殘生をこころのまゝにやしなひ火にあひてはうづまさにのがれて幽閑をたのしび物をえてはこの岡崎に來りて我が好める風景にとめるをおもひて

世中のうきにあはずは心ゆく野べのいほりにすまひせましや

よの中のうきは我身の幸(さち)ぞとも命しなくばいかで知らまし

　青ふし垣のとぢめは杉の板戸なりしが年をへて杜朽ち戸やぶれていとわびしければとりはらひて竹のあみ戸を野邊のへだてばかりにしたる

よをいとふ竹のあみ戸のあらければ猶うきこともりて聞ゆる

　布袋のかたに

天地をふくろにいれてもちたれば世はうつせみの輕(かろ)きものなり

軒におふる松こそいたく老いにけれわが山住や年をへぬらん

山家苔

世にかよふ心の道も絶えぬべし苔にあとなき山陰のいほ

田家を

うきふしはさても山田のさゝのいほ世を遁れこしすみかならねば

世をいとふ人のすみかにまぎるゝは小田もる庵のよそめなりけり

田家夏

時きぬとさなへとりぐ〵いではてて田中の里は夏ぞさびしき

閑中待暮

人とはぬやどぞさびしきくれゆかば月かげをだに友と見ましを

夕幽思

ながめつゝおもへば消えし夕雲の行へぞ袖の露となりぬる

林下幽閑

ひゞきくる松の嵐を待とりて軒ばにさわぐ山のしたしば

山家暁雨

山ふかみかさなる雲に窓とぢてあくるもおそき雨の淋しさ

山家朝

朝まだき立出でて見ればわが庵の軒端の山に雲ぞわかるゝ

山家夕

さびしきは軒ばの松にのこる日もかつかくれゆく山陰の暮

山家水

にごりなきもとの心を知る人やいほしめてくむ山の井の水

よのうきめ見ずはこゝろもすむやとてくみそめぬらし山の井の水

山家木

花とさきもみぢとそめて山里にうつる月日は木々ぞ見せける

山家松

月花のをりはさすがになれしよの友しのばしき山のかくれ家

よのうさの猶きこえ來といとふこそ心の淺き山居なりけれ

よのうさもきこえぬ庵の松風は心の塵をはらへとや吹く

しづかにとすむ山陰をとはれぬぞ愚なる身のかひにはありける

山家夏

時わかずしげるひはらの山住はほとゝぎすにや夏を知るらん

太秦にすむころ

今はよをうづまさ人になりはててみやこは雲のよそにこそ見れ

山館雲

山深くすむともよそに見えぬまで猶立かくせ軒のしら雲

山家雲

山ふかみ人はかよはで白雲のゆききを庭の垣ねにぞ見る

山家嵐

けるかゞみ石といふを見て

みづはぐむかげもはづかしかゞみ石など若ざかり見にこざりけん

城暗雲霧多

雲きりの色もわかれず立わたるくにのみやこの秋やさびしき

こほり

天の下ゆたかなる世に住むたみはいづくもやすの郡とやおもふ

遠村煙

雲ならば時もわかじをゆふべ〳〵たてるや里のけぶりなるらん

寄市雑

市中も何か心のさわぐべきうることなきをうることにせば

何の道もしかまの市女みをかへばうることかたき世をぞ知らまし

山家

世をとほく身はのがれきぬ山の非の淺きこゝろをいかですまさん

河水流清

嵯峨の山川のかた

山河のひとつみなもと清ければ千々のながれの末もにごらず

磯

花もみぢ何かはそへん人めなくしづかなるこそさがの山川

磯巖

よせかへりゆらるゝ磯のさゞれ石もいはほとならば波や砕けん

あら磯にたてるいはほやいつの世の波のよせけるさゞれなるらん

浪聲混雨

よる波のおとにかくれてとまやかだもらずは雨の降るも知られじ

風翻白浪花千片

沖津風吹立つなべによる波はちるを惜まぬ花にぞありける

老の後北山のほとりにいざなはれて遊びありき

「白河のしろきを後とすておかでうかべて見せよ
瀧のことの葉」とく〳〵などあり畫工の丹のかず
つくしていろどるやうの言の葉にあらばこそ白
きを後とものべやらめこれはいさゝかも

おもひよるふしなきまゝにしら河の瀧のいとこそ日頃へにけれ
　かのこへるには
白河の清くきこえし波かずにあらぬもくづとかきおくれつる

　涌蓮上人のかける繪に
山かげや江の水すごくすむ月にたれあこがれて夜舟こぐらん

　山水の繪に
水清く山かげうつるあたりには心の塵もうかばざりけり

　河
ながれてはさらしな川と思はずはよのうきせをばいかで渡らん

瀧水

白雲のたなびく山のたかねより落來るたきや天の河みづ

養老瀧の下に人家ありおきなをむなありてうちおどろきたるさましたりわかき人ひさごに物いれてさしいだしたるかた人のよまするに

大君のみゆきましけるたどの瀧老もわかゆといふ水ぞこれ

わかさのかみ宗直がしら河のほとりに博士たちいざなひてすゞみしをりの歌からうたにおのがをもかきなべてんさる歌ひとつとあれどおなじまとゐのつらにてだにむざえのもののまじれらんはいとかたはらいたきをましておくれてはいかでと思へりしかどよしある翁のせちにいへればすげなうもえいらへで日頃ふるにかれより

寄水雜

雨はるゝあとよりすみて山川のにごるも水の心とは見ず

桂宮といふがうづまさにありそこの清水をいさらゐと名づくこれをくみて茶をにるにいとよし

くみて知れ清くすみぬる月のうちのかつらの宮のいさらゐの水

雨後西南の風に川音のをちこちに聞ゆるに

河音のとほくちかくやきこゆらん桂大井の風のまに〳〵

谷水音幽

ひゞきくる松のあらしにうづもれて絶間がちなる谷の水音

谷のこゝろや

山彦はわがよぶ聲のひゞきにて谷の心や常にむなしき

流水浸雲根

立つ雲のうすきかたより岩がねにながるゝ水の苔あらふ見ゆ

勝義があづまへまかりけるみちの記を見するに
くさ〴〵をかしき事おほかなる中にかすめる富
士のあけぼのの景色いはんかたなくよくかきた
るにかきそへたりし

みずもあらず見もせぬふじの面影をさながらうつす言の葉の色

そま

我のみやなげきこりつむ杣人のまさきの綱もくるしげに見ゆ

野

春秋の色とりかへてめかれぬはまがきの野べのゆふべ明ぼの

野路

旅人や朝立ちくらんすが笠の見えがくれする野ぢの松原

關

のがるべき道やはかたき世の中にとまるこゝろや關となるらん

世のうさよつもらばつもれはて〳〵は蓬が下のちりひぢの身に

かげろふ

あるものと見れば消えぬるかげろふにやがてわが身の行へをぞ思ふ

日

水のおとも松のあらしも月かげもあかつきがたぞすみまさりける

あかつきはといふ句をはじめにすゑて

曉はねざめに知れど老らくの耳にはかねやうときこゆる

夜

身のうさも月をし見ればなぐさみき闇こそ夜はわびしかりけれ

山

はてもなく立かさなりて青海の波のすがたにつゞくやま〳〵

ひんがし山

月も日もいでくる山のふもとにはなか〳〵影ぞおそくさしける

ば

雨やいま降出でぬらん深き夜の軒にしたゝる音きこゆなり

今のいへあまりに雨もりければ政教はからひて

ふきかへたるのち雨だりのおつるに

ふきかへしふるやの軒のしたゝりは猶もるかとぞ驚かれぬる

連日の雨にてみやこのたより絶えたれば

このごろは川橋たえてちかながらみやこは雨の雲のよそなる

橋雨

旅人のかつぐ袂に雨見えて雲たちわたる木曾のかけはし

遠嶂收殘雨

降さして晴行くをちの山のはにのこれる雲やいつのむら雨

ちり

やつの風六のちまたを吹くたびに人のこゝろの塵ぞ立まふ

うづまさにすみし時軒に高き松ありて風の音信をかしきを

此宿の軒ばの松にこととふやいづくの山のあらしなるらん

雲はたゞこのかきねより立のぼるを見て

よそにのみおもひなれにし白雲を今は垣ねのものとこそ見れ

雲有歸山情

我のみやたびにうかれん雲だにも歸る山路におもひたつなり

晴

大空も野山もくものはれつきてみとみる方ぞみなみどりなる

やまもとより雲ののぼるがけぶりにまがひたるに

雨晴るゝ里のゆふげの烟かとおもへば雲ののぼるなりけり

くれつかた月くもりてふしたる夜雨の音のすれ

六帖詠草 雜上

雜歌

天のはら

蘇迷路の山には時のなければやみそらの色の常にかはらぬ

うづきついたち日蝕せりいにしへはこの蝕をさまぐ＼にいひける事ありけなれど天文をもつぱらにかうがへしる世となりて今はいぶかる人もなくなりぬとおもふにつきて

天津日に月のかさなることわりも明らけき世の光にぞ知る

晩風動簾

くる人もおもひかけぬをうたてわが心うごかすをすの夕風

戀川

こひ川に身はしづむとも水の泡のうきたる名をば世には流さじ

さても我戀しき波はなかねどもみまくぞほしき妹が家島

白鳥關

天かけるつばさもがなやしら鳥のせきとめらるゝ中もとふべく

加太浦

あふことのかたのうら浪たかければかへるさごとに袖ぞしをるゝ

飽等濱

うらやましやすくやひろふ人をとくあくらの濱の戀わすれ貝

子難海

君を思ふこゝろの色は紫のこかたの海のあさからめやは

插頭山

咲そめば我ぞかざしの山ざくらよそめに見んと思ひやはせじ

人妻里

我ならぬ名のりをしてや月よよし夜よしととはん人づまの里

恨山

いりたちて何かは人をうらみ山へだつる中はかひもあらじを

會地關

はるけしなとしのみこえて行末のいつあふちとも知らぬ關路は

朽木橋

あひみしはたえなん橋を朽木とも知らでぞよゝをかけて契りし

蓮浦

つみふかみ蓮の浦にしづむとも底のみるめはからんとぞ思ふ

いはみのうみ

角さはふ石見の海の深みるのふかくは思へど見るよしもなし

夢崎川

うつゝには猶ぞつれなきこひしくてわたると見しや夢さきの川

家島

名所によす

とひもこぬ人をいつまでよそにのみきくの濱なるまつことにせん

まれに來てこよひかへるの山ならばいつはた我をとはんとすらん

ふみかよふほどはたのめてけふも猶戀ひわたれとやいなむやの橋

年をへて戀をするがのあなたなるいつといはなん命あるまに

たのめつゝいつかは人をまつ山のかはらぬ陰をくれごとに見む

あひ見ぬはたゞ一夜川年月をわたるばかりに戀しきやなぞ

矢釣山

ものゝふの弓に取そふやつり山いるよりまどふ戀のみちかな

磐手杜

人知れぬ袖の涙やおもふことといはでの杜のつゆとおくらん

粉濱

まつ人のこはまによするかたし貝見せばやあはでくだく思を

よりあはで此世つきなばたく縄の長きうらみや人にのこらん

筏によす

思ふせにいつかよらましあふことのなげきをくみて下すいかだは

かゞりによす

おぼつかな何にかゝりてかゞり火の人のぅ川にもえわたるらん

澪標によす

いざやまた逢瀬もなみのみをつくし戀ふるしるしはたつ名のみして

貝によす

われかひの身はなきものと思へばやくだく思もあはれとは見ぬ

筌筒によす

たのみしもうじやあだなる花がたみめならぶ色にうつる心を

灯によす

さりともとかゝげ盡して待つよはもむなしく明くる閨の燈火

わすれゆく人の心をとる筆にあはれと見えんすみつきもがな

弓によす

そりたかきあら木の眞弓おしかへしおきふしいつか手にならしみん
わが方によりもよらずもしらま弓心ひきみんつかの間がもな

あふぎによす

手になれし扇の風もつたへてよふるさるゝ身の秋のこゝろを

注連によす

今よりはなかへりましそ通路にしりくめ繩を引はへぬなり

車によす

小車のうしやいつまでつれもなき人をおもひの家にすままし

網によす

月日のみつもりの海人の浦におく網の一目も見てややみなん

繩によす

まくらによす

しきたへの枕のちりをはらひつゝねし夜の夢はまたや見ざらん

裳によす

朝露にものすそぬらし妹がつむ野べの若菜にならましものを

衣によす

から衣裾のあはずてねたる夜は身に秋風の寒くこそふけ

あやによす

おりたちてきるとはなしに雲鳥のあやふき戀に身をややつさん

紐によす

下紐のしるしもいかでたのましし人のこゝろのとけぬかぎりは

硯によす

わが中は猶あふことやかたからんすゞりの石の世をつくすとも

筆によす

鹽木によす

うらみても海人のこりつむもしほ木のこりずぞ人を思ひこがるゝ

鳥によす

鳴こふる音にあらはれてむら鳥の立ちにし我が名誰にかこたん

雁によす

うき中は秋霧がくれなく雁の聲のみきえて見るよしもなし

虫によす

あこがるゝ胸のおもひやよひ〳〵に螢ともえて人に見ゆらん

いとはれて絕えぬる中にさゝがにのまたかきつがんたのみだになし

玉によす

わが袖の泪の玉を見ても知れしげき人めにくだくこゝろは

匣によす

明けぬとてなどいそぎけん玉くしげふたゝびとだにあはぬ契を

人は今軒ばにすがくさゝがにのいとたのみなき中の秋風

草によす

露ばかりあはれはかけよ根なし草誰もかりなる世にすまふ身ぞ

萍によす

などやかく深くはおもふ萍のねざしとむべき契ならぬを

木によす

千年ふる松ならばこそあはでのみしげる歎も末をたのまめ

檜によす

つけねどもやくるひはらをあふことの歎のはてとよそにだに見よ

もみぢによす

染めてこそあらはれにけれわが袖よ秋のこの葉の色にならふな

杣木によす

このまゝに朽ちかもはてん引さしてうちおかれぬるみをの杣木は

かりそめのみるめも今は遠干潟かたしや波のよるのちぎりは

岸によす

忘艸生ふてふものを住吉のきしもやすると待つぞはかなき

田によす

うき中は驚かすとも小山田のひたすらにこそわすれゆくらめ

都によす

人を猶思ふ心の長閒やふるきみやことふるさるゝ身に

庵によす

人とはぬ我身をよそになして見ば秋はてがたの小田のかり庵

井によす

山の井の心はかねてくみながら深くたのみしみづからぞうき

簷によす

かずくにたのめて年をふる鄕の軒の板間のあはで朽ちめや

結び置きし契をさへやわすれ水かげだに見えず人のなりゆく

池によす

思へどもあだにいはれの池なれば深き心をえしももらさず

沼によす

とはぬまのうきになれたる艸なればかつみながらも猶ぞ露けき

川によす

人はよし流れてとだにいはずとも山城川のやまじとぞおもふ

わが中はかはるをぞまつ飛鳥川なみだの淵もひとのうきせも

湊によす

つゝめ猶袖の湊による波のたちかへるべきうき名ならぬを

島によす

立寄りていつかたをらんみちのくの籬のしまのなでしこの花

潟によす

煙によす

よそにだになびかざりせば藻鹽火の烟にむねのかくはむせばじ

火によす

ことはにありとは見せぬ石の火を打出でていつか人に知らせん

杣によす

戀に名をくたしやはてん忘らるゝみをの杣木のこりもはてなで

坂によす

わがおもひなるとしきかば爪生坂日にやちたびもおりのぼりなん

はしによす

末終にたえもやすらん岩橋の夜をもとほさぬ中のちぎりは

たえぬべき人の心のうきはしにかけてくやしき世々のかねごと

信濃なるきそ路の橋も何ならずあやふき中にかくるおもひは

木によす

人をわがおもふ心にほだされて忘らるゝをも知らずざりける
まけはせで命やたえんつれなさにすまひて戀ふるちからあはせは
うくつらき妹がかくせる文とりてせめてはいかで脇をかゝせん
あふことのかたかけぶねに乗りつれば打越す波に袖ぬらしつゝ

日によする戀

人をおもふ心は常にくもり日のめに見ぬ影の身にそふもうし

月によす

あふことの泪にくもる秋の月それも見しよのかげはとゞめず

風によす

さむくなるよの秋よりも人心あらしの風ぞ身にはしみける

雲によす

天雲のよそになびくと見てしよりうきて物思ふ身とぞなりぬる
見る〳〵もうすらぐ雲の中ぞらに空しくならん契をぞ思ふ

夏忍戀

うちしのび我ぞねになく時鳥まつをかごとに更くる夜の空

旅戀

思ひやれあまたたびねの夜の袖かさねしをりもかはきやはせし

古人のよみたる詞をよみ入れ侍る戀のうた

ひくしほのなるとの海のあら浪のよるとはすれば遠ざかりつゝ

花見ると人にはいひてたをやめのも引の姿あからめもせず

戀かねてことのなぐさに世の中をうしといふをぞ口なれにける

かみつけのさ野のくゝたち月たちてまつらん妹をいつ行きて見ん

いかさまにことはかりせばつれなくてたえばたえにし人にとはれん

ふゝめりし花のちるまでとはれねば身を鶯の音にぞ鳴かるゝ

かたばかりつれなき人の戀しきは何のいはれと知るよしもがな

よしきえね命の玉のあるかずに人のおもはぬつゆの身なれば

葛の葉のうらみぞたえぬあだ人の心に秋の風たちしより

心中恨戀

つらくともことに出てはいはじたゞ恨みはつべき契ならぬを

披書恨戀

見ればまたうらみを添へて濱千鳥つれなきあとにねこそなかるれ

戀天象

つれなさはいつをはてともしら雲のうはの空なるながめのみして

六帖題にてよみける中に夕づく夜を

わが戀はまつの葉ごしの夕月夜おほつかなくてやみぬべき哉

わがせこ

わがせこが衣やつれぬ七はかりおりてきすべきしら絲もがな

春恨戀

うつり行く人に恨の猶ぞそふはなはことしもおなじ色香に

思

下にのみくゆる思のくるしさを何につけてか人に見えまし

つれなさをかこつ涙の水にしも消えぬぞむねの思なりける

にもなきおもひ

身をこがすたぐひなるべきふじのねも人をおもひの煙とやきく

誰識相念心

もろともに思ふが中はちはやぶるかみならずして誰か知るべき

被忘戀

わするゝかさらばわすれもはてずして何なかくにのこる面影

わすらるゝ身を今更になげくかな逢ふにかふべき命なりしを

恨戀

ことわりとき ゝもなされぬもののゆゑに恨みしさへぞ今はくやしき

うらみ

舊戀

我をのみふるしはつれど石上めづらしげなき人のつれなさ

遠戀

海山のへだてを中のかごとにてかよひし文の道もたえぬる

ふたよへだてたる

時のまもおぼつかなきをもしや君こよひとはずはみよやへだてん

隔海路戀

隔てきてからくも鹽のやしほぢのをちにやつらき人をしのばん

卜戀

あふことのかたきをつくる石神のまさしきうらはとふかひもなし

かたこひ

わが戀はありそによするかたし貝思くだけどあふよしもなし

かた戀はくるしきものと知りぬとも猶うき人は我をおもはじ

聞くもうし今とひくやと待つ暮のおとづれかへてさはる便(たより)は

戀心

しられじと心をためし人めさへ今はいとはぬまでぞ戀しき

戀催意

戀ゆゑは心ぞちゞにくだかるゝとせばかくせば逢ひも見るやと

寒雁添戀

さえとほる霜夜の雁の聲に猶かさねぬ袖の氷をぞ添ふ
はとのなくをきゝて

夕まぐれつまよぶ鳩よつれもなき人のあたりに聲たててなけ

負戀

つれなくはまたじ今はの心にもまけて戀しき夕ぐれの空

久戀

こひ〳〵て心につもるとし月を涙は知りて色にいでぬる

人にしらるゝ

わがおもひつゝめばつゝむけはひよりなか〳〵人に知られそめぬる

おもかげは

おもかげは身にそふかひもなかりけり心のかよふ契ならねば

切戀

消えぬべき露のいのちよまてしばし逢ふにかへんと思ひこし身ぞ

いとふにはゆる

かくばかりいとふにはゆる戀なれば思ふといひてこゝろみよ君

悔戀

悔しくもうらみつる哉なごりなくたえてのうさも思ひかへさで

變戀

今はたゞ袖こす浪をかたみにてたのめし末のまつこともなし

臨期變詞戀

おもはずよさしもたのめし松のかどあけぬ夜ながら歸るべしとは

後朝戀

暮をだにたのめざりせばおきてこし露のいのちは何にかゝらん

後朝切戀

暮れなばと契おきつる朝露のひるまを何にかけてたへまし

逢不遇戀

さりげなくもてはなれぬるつらさ哉見しは夢かとたどるばかりに

歎無名戀

まだきよりたつなに人のことよせていとゞつれなくなり行くぞうき

老ののち人の名たてけるに

ぬれ衣は猶かけそへよそれにだにふりそふ老の涙かくさむ

題 戀

人まだにゆるさぬものをわが袖の涙のなどかよにはもれけん

夢逢戀

つれもなきうつゝにかへすさよ衣かさぬと見しや思ひねの夢

逢増戀

つらしともかこつかたなくうちとけてあひ見し後ぞ戀は添ひぬる

兼惜別戀

わりなしやうきは逢ふ夜も身をさらでまたきに惜むきぬ〴〵の空

曉別戀

ゆふつけのとりとめがたき別かなしらむは月にかこちよせても

悲離戀といふことを

わするなよかけはなるとも山の井の淺からざりし中のちぎりを

とゞまらず

とまらぬもしひてうらみずなごりなく絕えもやせんの心よわさに

從門歸戀

とひこぬをならひになして宵々にさはるかごとも今はきこえず
まちくらすまの
あはでふるとし月よりも契りおきてまちくらすまの久しきやなぞ
空閨殘燭夜
まつよはのむなしき閨の灯をかげとなる身にいつまでか見ん
あふよはこよひ
まちつけし君はかへさじたまさかにあふ夜はこよひ明はてぬとも
ふたりをり
まどろまし日頃のうさを夢に見ばふたりぬる夜のかひやなからん
初逢戀
うつゝとも思ひぞわかぬ夢にさへうかりし人にとけてあふ夜は
忍逢戀
しのぶればふけて逢ふ夜の程なきにいそぐわかれをそへて悲しき

ぐちかたむ

不憑戀

いつはりにきゝなさるとも武隈のまつをも見きと人にかたるな

憑媒戀

たびたびのうき僞にならはずはたのみぞせまし人のことよさ

失媒戀

つれもなき人もあはれときくばかり猶言そへていひなびけてよ

不逢戀

楫をたえ便なぎさの蜑小舟こがれわびぬといかで知らせん

僞戀

さきのよにいかにむすべる契とてかくとけがたき中のした紐

戀

ことよきはまことすくなき心とも思ひかへさでたのみしもうし

などありうちおどろかれて目さめぬればはやう
身まかりにける人になんありける

見るふみにわがをこたりを驚けばあかで別れしいにしへの夢

尋戀

よそながらとふべかりけりうき人のたづぬときかば猶やかくれん

祈戀

逢瀨をや更にいのらん戀せじのみそぎはうけぬかものみづ垣

祈難逢戀

いのりこし神のみしめはくちゆけどとくべくもなき人のつれなさ

契少人戀

いはけなき心にだにも忘るなよおひさき遠く契ることの葉

契待戀

かならずとたのめしけふの暮なれど訪はれぬ程はいかゞとぞ思ふ

不見戀

我ながらあやしやいつの契とてみぬ面影の身にはそふらん

纔見戀

ほの見えし軒のいよすのすきかげの心にかゝるたそがれの宿

白地戀

行ずりの袖の香ばかり身にしみて思ふはいつの契なるらん

通書戀

つらくとも人めを忍ぶ玉章（たまづさ）にくだく心のほどは知らなん

逢ふ事ぞよどみがちなる水ぐきのかよふばかりを身の契にて

失返事戀

ちらさじと忍ぶあまりに見もわかでおきまがへける露の玉づさ

ある夜の夢にかたらひける女のもとより文もて
きたれり見れば久しうおとづれざりけることよ

忍久戀

打出でていつかは見えんさゞれよりなれる巌の中のおもひを

忍涙戀

紅にそめてこそ著め戀衣さらば涙のいろやまがふと

しのびたる中らひにいとつらく見えければ

いとはるゝわが身を知らでつらからぬ人めをのみもかこちける哉

忍絶戀

しのびこしわが中河はたえぬるをなどか涙のしたむせぶらん

聞戀

なぞやかくへだつる人のきぬの音を聞きておもひのつまとなすらん

をりて見んよそにのみやはきゞくの花よしく〵袖は露にぬるとも

聞聲戀

へだつるはうきものごしの聲をしも又もやきくと立ちぞやすらふ

六帖詠草戀

戀歌

こひのこゝろを
物思ふけはひや見えんわが袖にたえぬ涙はよしつゝむとも

初戀
けふよりや人をこひぢにまどふらんあやしく袖のぬれてかはかぬ
まだ知らぬ思ひこそつけこれや身のこがれ行くべきはじめならまし

思不言戀
いひ初めてつれなからばとさりげなくつゝむ思ひぞいとゞ苦しき

しのぶ戀
よのうきにおつる涙といひなしておもひの色は猶ぞつゝまん

日は暮れぬ雪はふりきぬ大くちのまかみが原をいかで過ぎまし

あしたにつま戸軒などに寒雲のたちこみたるを見て

うづまさやこりたる雲のうちになどけふまでわが身消え残りけむ

古人のよめる詞を題にてよめる時の冬のうたに

夜をさむみめのみさめつゝ霜さやぐ竹のまろねぞふしうかりける

霜の上にあられみだれてあられぢのしらあやしける庭かとぞ見る

風そひてほど〳〵にふる雪はさかぬにちれる花かとぞ思ふ

よひのまの雪にをれ木の松たきて冬の夜ふかきさむさしのがむ

けふの日も夕なみちどり音に鳴きてたちもかへらぬ昔をぞ思ふ

行く年を今二日ばかりをしむともかぎりとならば今日にかはらじ

楢小川

きのふこそみそぐとせしか風さゆるならの小川は氷ゐにけり

眞神原

づみ火のすみつきがたきみやこにもおもひをお
こす友はありけり」ときこえしかへし
おもひやるかひもなけれど埋火のすみつきて猶久にませとぞ
しはす十五日ばかり重愛がきて歌よみぐるしと
まうし侍りしかばたゞごとによめといふそれな
ん詠みいでがたきよし語るによみておくらんと
ちぎりしが十七日にや思ひいでしまゝ年の暮な
ればいまいくかばつりかとて
かぞふればことしも今は十日あまり二日ばかりぞくれのこりける
又こむ春はおいのかずそふべくおもひて
むそぢあまり八といふとしに一年をまたやそへまし春のきたらば
のこる日のいやすくなくなれば
暮れのこる日かずすくなくなるまゝに年のをしさはいやまさりけり

草も木もあたゝかげなる雪なれどふりのみまさる身にはさむけし

　布淑が桂にすめるほど雪のうた五十首見せしに

おもしろくおぼえしかば卷のおくにかきたりし

秋にそふかつらの色と思ひしは雪を見ぬまの光なりけり

　心性寺にたてまつる百首のうちに雪を

ゆきに身はうづもれながらつたへこしみのりの跡ぞよゝに殘れる

　興子が詠草に「おく山に朽ちはてむ木もやくす

みとなりての後ぞ里にいでぬる」とあるを見てを

かしさにかきそへし

やく炭となりて都にいでぬればなげきのはてはよろこびぞかし

　炭の烹に喜之がうたこふに

あかねさすひるはみじかしひにつがむ炭ぞみ冬のながき夜の友

　餘齋へ炭をおくれりけるつとめてかれより「う

除夜

ふけにけるわがよをそへて思はずは年をのみこそ惜みあかさめ

年くるゝ夜いときなきむかし春待ちていもねざりし事を思ひいでて

春待つといもねざりつる我もわれ夜もおなじよを惜む年かな

暁鐘を聞きて

聲のうちにをしむことしはつきはてて春にやならんあかつきの鐘

この道にこゝろざしはありながらざえなき身をかこちて冬のころ

難波江や霜にをれふす蘆の葉のみがくれながら朽ちやはてまし

やまひしたる朝に初雪を見て

あし引のやまひしをれば初雪のめづらしきさへ身にぞしみける

くるつあした雪ふかくふりたるに

年欲暮

ほどもなく春にやこえん年波の立ちもかへらぬすゑのまつ山

歳暮雪

春に猶のこれことしの雪の山かひなく暮れしなごりとも見ん

水邊歳暮

行く水のかへらぬとしのなごりには波のしわのみ身にぞよりける

河歳暮

はやくともくれ行くとしの門ならば柵わたしせかましものを

爐邊惜年

埋火は炭さしそへんけふのみの年の光はなにかつがまし

かきおこしおもひかへせばうづみ火の消えしに似たる一年のあと

都鄙歳暮

都にもとまらぬ年はいなしきの伏屋といへどよはにこそ行け

霜雪のふる木も冬をしのぎなん今ひと春の花も見るべく

旅宿待春

つもりそふこしぢの雪の中やどにけぬべき春を待つぞひさしき

としのくれに一室をとひて

暮れのころけふしとはずはもろともに今年のかげを又や見ざらん

七十のとしのくれに

まれなりときくもけふのみあすよりやあやしき年と人にいはれん

うのとしの暮によめる

何事をなすともなくてなゝかへりめぐるうどしも又くれにけり

老送年

老そひぬよもこの春はなつはとて秋過ぎ年もまたくれぬめり

歳暮

わかざかりをしみしことは何ならず老のかずそふ年の別路

る」とありけるかへし

君がえし梅をわかてる心こそ色香の外のいろかなりけれ
　ふゆぞさびしさ

秋くれて冬ぞさびしさわすれけるみ雪ちりぼひ梅かほるころ

冬　興

夜もすがら舟さしくだし月雪のひかりわかるゝさかひをも見ん
　うづまさにて年の暮かたに庭の小篠かりそぐと
て

山里の垣ねのをざさかりそめによをのがるとて年もくれぬる
おりたちてをざさかりそぐ燒鎌のとくこそけふに年は暮れけれ
　おなじころ惟德がとひ來てかへるさに「春は又
　とひて盛の花を見ん老木にしのげ霜雪のころ」と
いへるかへし

うとからぬ友もかくやはむかふべきあたりをさらずなるゝ埋火

佛名夜闌

西になる月にきこえてみほとけのみなの聲こそたかくすみぬれ

宮より題たびたりし年中早梅を

暮れて行くとしの心やいそぐらむ春もまたきに梅にほふなり

柴垣のうめのさけるを見て

おのれのみ冬ごもりせで霜がれの垣しばがくれにほふ梅が香

しはすうめのさけるを見て

待ちつけん春は知らねど梅が枝のはな咲くまではながらへてみつ

梅告春近

春ちかくなるをも知らぬ山ずみをおどろかしつる梅のはつ花

としの暮かた直方より梅にそへて「年の内に咲

きぬと人のおくりたる梅のはつ花わかちてぞや

炭竈

ことさらにけぶりて見ゆる松山やすみやくを野のあたりなるらむ

たえまなき烟にしるし山人ややくとやくらんみねの炭がま

冬の日のかげほどなしといかばかりすみやかるらんを野の山人

埋火

しばしとてむかひしけさの埋火のあたりながらに日をくらしつる

さしそへし炭もいくたび霜の色にさゆる夜しるき閨のうづみ火

爐火

かきおこしほたきりくべよ埋火のあたりもさむき冬の山里

うづみ火のもとみし友をかぞふれば消残れるぞすくなかりける

寒夜いたく更けて爐火を見て

埋火の炭さへも夜の更けぬれば翁がかみの色にこそなれ

向爐火

盛子より「君はさぞ野山の雪を見ても猶こと葉のはなの色やそふらむ」といひおこせしかへし

ふりにける身にはあたらし君にこそ野山の雪は見すべかりけれ

たかがりをよめるうた

かりくらし今はとかへる道のべの鳥立に鷹をまたあはせつる

あすもこんかた野の眞柴しをりせよあかずくれぬるけふのみかりは

くれぬとて眞柴をりしきくむ酒にやどるもさむきみかり野の月

野鷹狩

みかり人今やいる野のしもがれにみだれて見ゆる袖のいろ〳〵

鷹狩欲暮

あかずいまふたよりみより狩行かば鳥立も見えず野べはくれなん

連日鷹狩

をとつ日もきのふも野べに狩くれぬあすは山路のとだちたづねん

そのあと見るけさのしら雪」かへし

ふり〳〵てきえをあらそふ我のみぞ去年(こぞ)にかはれるけさの白雪

　しはすばかり此老僧がりやれる「むかし親しかりし人はみな消うせぬそのよの事をたれにかたらむと又雪に催(もよほ)されて」

ふたもとのすぎしむかしはしら雪のふりて見ゆるも後おひの松

君も我もともにきえなん跡はたがこと葉の花かゆきにさくべき

とひかはす跡もはづかし窓の雪あつめあつめぬけぢめわかれて

　かれよりかへし「ふたもとのすぎなば君やのこるらん我ぞふる河野べのしら雪」「あとはたがことばの道にふる雪もしばしけぬまの花とこそ見れ」「とひかはすまどのみゆきの花ざかり跡のけぢめはさもあらばあれ」

はかたみに老のあとをのみをしむに似たる初雪

のには」とありけるかへし

いにしへをしのぶの草も埋もれて雪のふる葉ぞいとゞいろなき

とひとはれめでこしかたのあとをのみかぞへてぞふるけさの初雪

又のとし雪の日かれより「老のかずつもれつる

外はあともなしことしの雪やこぞのふること」

「こぞをけさ思ひいづれど身の老はわすれてむか

ふ庭の白雪」「見るがごとみやこの四方を君がけ

さわがものがほのにはのしら雪」かへし

これも亦つもれば老のふることにめでじとおもへどけさのしら雪

身につもる老をわすれて見る雪の消えゆくにこそ驚かれぬれ

ことたらぬやどにみてるは山かけてみやこの雪のひかりなりけり

澄月より「いかにふる庭のけしきぞ夢のまにこ

鳥翅拂雪

花と見しふゆの林のゆきちらすとりのはぶきや春の山風

古木の松に雪つもりて葉のところ〴〵見えたるに

かゝればぞ千よをふる木の松の葉の緑の色の雪にきほへる

山河の邊に家あり深く雪のつもれるかたに

今よりは川音をのみ友として雪のしたにぞ春をまたまし

雪のあした布淑がきて「さえとほるよそぢあまりの身をつみて猶老らくの雪をこそとへ」といへるかへし

君も今わがあとふみてなゝそぢのゆきつむ年の寒さをも知れ

澄月のもとより「いにしへにかへる心のはなもけさゆきのふるえにさかせてや見る」とふこと

けさはまだふみわけつべき山里の雪もともまつほどにとはなん

雪の日友子がもとより「かきくらしふりぬる雪

に道たえて淋しささぞな冬の山里」かへし

さびしさもあとこそなけれ道たえて人めも艸もうづまさの雪

雪のあしたに垣ねの野べを見て人のもとへ

見せばやなかたさがりなる山畑のけぢめわかれてつもるしら雪

里雪

はれまなく日をふる雪にくれ竹のふしみの里は道やたえなん

川雪

一すぢのゆく瀬を見せて埋まぬもなか〱雪のあやの川水

見てぞ知るけさのしぐれは川上のゆきつみそへてくだす柴舟

雪上淺深

ふきためし垣ねを見ればしら雪の深さあささは風のまに〱

人をまつあした

降る雪にとへとはいはでまち見ばや人のこゝろの深さ淺さも

雨の夜ふけて寒かりければ

ふくる夜の軒のしづくのたえゆくは雨もや雪にふりかはるらん

雪のうたの中に

沖津風雪吹かくと見るがうちにはれてつもりの松ぞしづけき

この頃はふりかくされてあかはたの山は名のみや雪にのこらん

くろかみのふりてかはらん色ぞとも知らでめでこし年々の雪

うづもれぬ道の光はしら雪のふりても殘る跡にこそ知れ

ふりつもるけさのひかりに月花もおもひけたれてむかふしら雪

朝雪

山かげのねぐらをいづる朝鳥のはぶきにこぼす木々のしら雪

雪朝待友

ふみわけてとひこん人もおもほえずつもらばつもれけさの白雪
雪のふりたるあした山里にて
はならで花なるものは朝日かげにほへる山の木々のしら雪
雪のふりたる夕
降りつもる雪はうすゆき松竹もわかるゝほどの夕ぐれの色
よるかけて雪のふりくる音いとさやかなりふけ
ておとの聞えぬに
さゝの葉にふりしく音の聞えぬはふかくやなりしよはのしら雪
遠山見えてちかき林に雪のいとふりうづもれる
かた
足引の山のたかねのいかならんまぢかきもりは雪のした艸
雪かくとて
ふるき世をおもひ出れど軒の雪かくまでふかき跡もすくなし

とおもひたるに人あまた來てまぎれぬまたの日もいと事しげくて過ぎぬ三日へたるあした

なごりなく雪はきえけりつもりたる言の葉ばかりけさも殘りて

となんいひつかはしけるにかへし澄月「もみぢ葉ものこる梢のはつゆきはふりにし身にも覺えざりけり」「はつ雪は消えものこらぬ朝風に花とちりくる君がことの葉」

初雪のいとふかくふりたるあした

いとどしくふる木の松の枝たれて雪にをぐらき宿のあけぼの

西風に雪ふりて見るが中に若松の色かはるを見てわかかりける人のやゝおとろへゆくをおもふ

にしかぜに雪よこぎりて若松のなかば白くぞはやふりにけるいやしきに降りくるに

ふみわけてとひこん人もおもほえずつもらばつもれけさの白雪

雪のふりたるあした山里にて

はなならで花なるものは朝日かげにほへる山の木々のしら雪

雪のふりたる夕

降りつもる雪はうすゆき松竹もわかるゝほどの夕ぐれの色

よるかけて雪のふりくる音いとさやかなりふけ

ておとの聞えぬに

さゝの葉にふりしく音の聞えぬはふかくやなりしよはのしら雪

遠山見えてちかき林に雪のいとふりうづもれる

かた

足引の山のたかねのいかならんまぢかきもりは雪のした艸

雪かくとて

ふるき世をおもひ出れど軒の雪かくまでふかき跡もすくなし

とおもひたるに人あまた來てまぎれぬまたの日
もいと事しげくて過ぎぬ三日へたるあした
なごりなく雪はきえけりつもりたる言の葉ばかりけさも殘りて
となんいひつかはしけるにかへし澄月　「もみぢ
葉ものこる梢のはつゆきはふりにし身にも覺え
ざりけり」「はつ雪は消えものこらぬ朝風に花と
ちりくる君がことの葉」
初雪のいとふかくふりたるあした
いとどしくふる木の松の枝たれて雪にをぐらき宿のあけぼの
西風に雪ふりて見るが中に若松の色かはるを見
てわかかりける人のやゝおとろへゆくをおもふ
にしかぜに雪よこぎりて若松のなかば白くぞはやふりにける
いやしきに降りくるに

寐覺霰

降ると見しねやのあられは夢なれやさむる枕におとも殘らず

屋上霰

ふり過ぐる板やの軒のくちめにぞしばしあられの玉は殘れる

いたくあられのふる日女どものおほく行くに

わぎも子が赤裳(あかも)裾(すそ)引く道とてや風もあられの玉をしくらん

雪夕殘雁

ふるさとをわかれがたみやおくれけん夕の雪にわたるかりがね

初雪のふりぬるあした

身につもる老はわすれてとし〴〵にめづらしと見る庭のはつ雪

もみぢのまだ殘れるに雪深くふりたるがめづらしければ澄月のがりやらんとて

君は知るやもみぢにふれる初雪のうづむばかりのあとぞおぼえぬ

春のけの土にきざすといふ日より更にはげしき木枯の風

冬夜

さえとほるかねのひゞきに閨のとの霜になる夜の氣色をぞ思ふ

山家冬夜

山里は竹のすのこのしたさえてふしぞかねぬる冬のよな〳〵

冬夜難曙

むらしぐれいく度きかばふゆの夜のつれなき閨のひましらむべき

冬夜長

よひのまのしぐれあられはきのふかとたどるばかりの冬の夜ながさ

寒夜重衾

かさぬれどあさで小ぶすま下さえてしも夜おほゆる麻手小衾

太秦にていと寒き夜狐のなくを

月くらくあられみだれてふる寺の寒き垣ねにきつね鳴くなり

こゆるぎのいそぎて立てどむら千鳥波のあとにぞ聲は聞ゆる

潟千鳥

冬の夜の月かげふけてひくしほの遠つひかたにちどり鳴くなり

水鳥

水とりのつばさの霜をはらふまにうきねの床やかつ凍(こほ)るらん

鴨とりのおのが名におふ河水にすみていくよをなれしうきねぞ

池水鳥

碎(くだ)けちる氷と見えて水とりの羽風にさわぐいけの月かげ

夕網代

川上の山のかげよりくれそめてあじろのきりににほふ篝火(かゞりび)

しも月

霜さえて笛のね高し雲の上の豐(とよ)の明(あかり)やこよひなるらん

冬至によめる

水結氷

冬寒み今はこほらぬ水もなしたぎつひゞきや山風のこゑ

池水氷満

きのふまでとぢ殘したる池水のみ中もけさはこほりはてけり

神無月はじめつかた慈照寺に遊びて月を見て

落葉して月の色のみしろかねのうてなさびたるよるの木枯

冬月

夜をさむみ霜やふるらんてる月のさやけきかげの薄曇りぬる

曉千鳥を

川波の氷にむせぶあかつきにちどりの聲は高く聞ゆる

津千鳥

よる波のしきつのちどりむれたてど猶こりずまにおりゐてぞ鳴く

磯千鳥

あしびきの山さむければ散みだる風のをばなも雪と見ゆらん

寒艸少

かつのこる緑もはかな冬くさのおのが枯葉に霜をへだてて

寒艸藏水

しをれふす蘆のかれ葉にうづもれてすむとも見えぬこやの池水

寒　蘆

おく霜はひと夜ふた夜と見るがうちにのこる色なき蘆の冬枯

寒蘆滿江

なには江はをれふす蘆にうづもれて波もかれ葉の色にこそ立て

湊寒蘆

みなと江にさはれるあしもかれふせばやがて小舟にこぎしかれつゝ

氷始結

夏だにもすゞしかりつる山陰の清水よりこそこほり初めけれ

朝霜

しらみゆく垣ねの野べを見わたせば雪もやふるとまがふ朝しも
朝げたくわらやの軒のけぶりにも猶きえがてに霜ぞ残れる

ある人菊を折りておくりしに

あさ寒き霜をはらひて手折こし菊ぞ心の色は見せける

残菊

かみな月うつろふ菊に月さえてことのねかほる宿の木枯
咲く花におくれて染めし木の葉さへちりしく庭に残る菊哉

冬のはじめいたくうつろへる菊を見て

おく霜にうつろひはてしきく見れば久しかれとも身をば思はず

菊のゆきおもげにいたどけるを見て

紅ににほふがうへのしら雪をのこれる菊のまがきにぞ見る
風いやましにはげしき朝尾花のちるを見て

ほゆれば」とかきて

おく霜はこぞもことしもかはらじをさえとほる身やふりまさるらん

寒きあした雀のかしましく鳴くに

むれきてや朝餌あらそふ霜寒き庭の垣ねにすゞめしばなく

寒苦鳥のこゝろをさへ思ひやる

日にゆるぶ老の眠は霜とくる軒のしづくぞおどろかしつる

霜

ふりそひてのこる色なき黒髪に見しやいづれの秋の初しも

夜を寒みねての朝けにながむればはつ霜しろし水ぐきの岡

しものあした

日かげさすかたへは消えて軒たかき屋かげにのこるしもの寒けさ

霜深きあした

見し秋のちくさを何に思ひけんしもを花なる野べの冬枯

わびしなどは世のつねの事なりかしあつめたる木の葉もけふのたき木には猶あまりたるを見てあすのたき木のあらしをぞまつといひし山住はいとにぎはしきけぶりにこそありけめなどほゝゑまれて京なる人のもとにいひやりし

おもひやれあらしをまたぬ落葉さへけふのたき木にあまるすみかを

十月十日ばかりいたく寒かりければ火爐をひらき四方に帳をたれて居れりひねもす風さえあれて暮つかたしぐれたり

よるかけて雪にやならん夕あらし松吹くしをりしぐれ來にけり

布淑がもとよりたよりに「都だに霜さむくなるこの頃のおきふしさぞなうづまさの里」といひおこせしかへしに「此山住もなれはまさらでことしは寒さもことにお

かみな月木の葉みだれてふるさとはわきて時雨のおとも聞えず

山路落葉

山かげは木々のおち葉にうづもれて雪よりさきに道ぞ絶えぬる

林葉不殘

冬の來て風のはやしとなりしより秋のいろ葉はつゆも殘らず

太秦にすみつきたるはじめずさも二三人侍りけるがいとひろくあれたる寺の秋になりて物淋しく今又冬のはじめなればこゝかしこより吹とほすあらしの聲たえまなくよるは何となき物おとひしひしとしてすごき所なればみなえさらぬ事つくり出でわりなきかごとまうけとさまかうさまにいにはてて今はめひのをむなひとり殘れり水くみ木の葉をあつめてけふのけぶりをたつる

深山葉殘

山かぜのたえずたづぬる秋の葉をひはらがくれに殘してぞ見る

宮のおほせごとにて神無月の題に松なびきて風

はげしくうす紅葉の殘れるかた

吹しをる松風早し染め殘す秋の木の葉もさてや散りなん

落葉

ふきおろす磯山風を追手にていづる千船や木々のもみぢ葉

さもこそはあらしの風のさそふらめしぐれにだにもちる紅葉かな

落葉埋菊

散るまゝに垣ねの花はうづもれてこのはぞ菊の香ににほひぬる

夕落葉

吹さそふもみぢの色はくれはてて軒ばにのこる木がらしの聲

落葉混雨

冬の日のほどなき空にいく度かけふもしぐれてくるゝ山かげ
　しぐるゝ音するに見あぐれば夕日さしたり
しぐれつる雲はのこらで夕日さすまやの軒ばは雫落つなり

閨時雨

さよしぐれ板やののきばふり過ぎぬ又たが夢かおどろかすらん

月前時雨

てる月にさはらでふるは久方のかつらの露や風にしぐるゝ
月やどるかや屋が軒の玉水におとせですぎししぐれをぞ知る

秋時雨

吹さそふ風になびきてゆく雲のうきたの森や今しぐるらん

十月紅葉

かみな月もみづる木々はしぐれにやあつらへつけて秋のいにけん
この秋は見ざりし木々のからにしき冬たちてこそ織(おり)つくしけれ

六帖詠草　冬

冬歌

ふゆたちて風のあらましくふくに

松にふく風もあらしになりにけり北窓ふたけ冬籠せん

日に〳〵さむくなれば

朝ごとにならすすゞりのすみやかに手のうら寒き冬は來にけり

冬のはじめしぐれを

ふゆもきぬさてやことしもはつ時雨あだにふりぬる身にぞおどろく

曉がたしぐれをきゝて

あはれよにふるほどもなき曉の老のねざめをとふ時雨かな

夕時雨

つゆのまも夢やはむすぶ草枕かりねの岡のまつのあき風

衣浦

秋寒き衣が浦に立つ波をいくへか風のたゝみよすらん

味鎌

てる月にあこがれぬらし味鎌の鹽津をさして夜舟こぐ見ゆ

西山にまかりたりしに何とかいひける山川のかなたにかすかなる庵のありし誰とふとしも見えずかきねなどはいとをかしうしつらひて菊なども咲きみだれたるすまゝほしげなれば

うらやまし竹のあみ戸の明くれもよをかりそめに住なせる宿

秋山のうすきもこきもとし〲おなじ色なるをおもひて

萬代をかけて思へば秋ごとの紅葉の色ぞときはなりける

倉登濱

都にて聞きしよりけにかなしきは秋立つころのそとの濱風

戸絶橋

波にしくかげのとだえとなりにけりよわたる月をはしにへだてて

有明浦

なみ遠くかたぶくまゝにしらむよの月影をしき有明の浦

神南備山

ちはやぶる神なび山の榊葉をいかにせんとか打しぐるらん

長田村

行末のながたのいな穗かりつみてゆたかなる世のほどをこそ知れ

長尾村

八束穗のながをの村の秋をさめたのみおほかる御世ぞたのしき

假寐岡

白妙のをばなや川のみなかみに秋のたむくるみてぐらの島

安濃

しほ風のあののみなと田吹くなべにほなみかたよりなびく秋霧

三香野橋

あはれなる老のみか野の橋ばしらたつ月ごとにふりまさりつゝ

桂潟

あま人はをるとも見えずかつらがたかたぶく月の影のみぞすむ

玉川

うづら鳴く野路の秋萩散過ぎてひかりかくるゝ玉川の水

宇良古山

松陰に染むる紅葉はから衣うらごの山の名におひにけり

衣崎

吹まよふ衣が崎のあき風に立ちもつゞかぬ波のうき霧

竹田里

秋の夜のふしみの夢もさむるまで竹田の里にうつ衣かな

栗栖野

草のいとたれくるす野に打はへて秋おく露を玉にぬくらん

藤井原

分わびぬふぢるが原の大みかどふりて幾世の秋のしら露

檜岡

引つれていざまとるせん武士のまゆみの岡べ紅葉しぬべし

高野

秋風に夜や寒からし鹿のねのふけてたか野のかたに聞ゆる

大島峯

立めぐる篋の霧は海に似て大島峯の名こそかくれね

御幣島

花は猶そのよの秋のさがの野に萩あそびせし友ぞ殘らぬ
にひばりのかみ田のわせをおほしたててことしの初穗奉りてん
秋ふかくなりにけるかなせきいれし門田のおくて霜むすぶなり
八束穗のかぶきわたりて畷のをがたのみゆたかに見ゆる秋かな
秋さむみまだきに霜やふる里の初もみぢ葉も色こかりけり
照る月に雲かゝる夜はこひわびぬ花のかたきといひしあらしも
鷺のとぶ麓の霧のひとなびき吹くかた見ゆる遠の川かぜ
稻がらにすだくすゞめは葉がくれて稀に殘れる穗をや爭ふ
たなばたのおくる朝の初あらしさぞきぬ〴〵の身にしみぬらん

嵯峨野

月は今をぐらの山に影おちてさが野の蟲の聲ぞ殘れる

名所岡

波よするなぎさの岡の花すゝきなき名をたてて秋風ぞ吹く

古人のよめる詞を題にてよみける秋の歌の中に

一年にふたゝびゆかぬ久方の天の川路ぞ波たつなゆめ
日くるれば打ちぬる萩をよもすがら露のおきゐて恨むべらなり
やちくさの秋の野分の風のまを命とたのむ露もはかなし
はら〳〵とおつる涙に似たりけり朝風わたるかしは木のつゆ
露しげきよもぎが原をながめつゝ消えなん後の夕をぞ思ふ
そでにこそ涙はおつれ鳴く鳩のこもり聲きく秋の夕暮
をみなへしみなへし折りてもていなん人の見んのもねたくし思へば
月すめば雲間はるかにとぶ雁のよめにもさやに數ぞ見えける
いかでかと思ひし秋の長雨のはれて初よの月をこそ見れ
露さむき草のうへ白く影みちてみかきが原に月ぞかたぶく
ふけぬとも夜越にこえん雲はれて名にあふ月のさやの中山
ひら山の嶺のふし松心あれやるまちの月を立ちながら見つ

小鳥おふなるこの繩に手をかけて竹のは山の夕日をぞ見る

涌蓮上人晝おくて田もる庵あり

もる人の衣手いかにかり殘す山田のおしね霜むすぶなり

有明の月におしねもる庵のなるこを風の吹しき

たるかた

あり明にもるおくて田の露もさぞ霜となるこの風すごき影

信美が上田秋成ともなひ來て初て逢ひたるに經

亮もきあひゐて箏和琴かきあはせたるを聞きて

秋成「山里の松の二木の聲あひて秋のしらべは

聞くべかりけり」とよめるかへし

山陰の二木の松のあきの聲人にきかるゝ時もまちけり

鹿のあとあるに紅葉のちりたるかけるに

この秋も更けてかへらぬ跡見れば我さへ音にぞなきぬべらなる

をあはれとは見よ」といひおこせたるかへし

今よりの秋にあふみのはたなすびなりさかゆべき君にやはあらぬ

夏より久しく日でりつゞきてこのわたりすべて

井の水もかれぬればおのがじし親しきかたにこ

ひもとめて日を送りけるころ

海人のくむもしほにはあらぬ井の水もかれてぞからき世をしらせける

同じ頃萩の盛なるに月のさやかなるゆふべ

まちまちて萩咲く頃の月にだにかへても雨をおもふ秋かな

このわたりのをとこをうなおのがどちつどひて

いかゞせましなどいふを聞けばむねつぶる

つちさけて照る日にぬれし民の袖かはくばかりの雨もふらなん

秋のはてに田夫の鳥おふいとまなしといひたる

をたすくとて

暮秋聞雁

旅にして秋もくれぬと鳴わたるかりのなみだや打しぐるらん

長月廿四日のあしたにし山に雪の見ゆるに

老らくのあたごの高ね雪白し暮れあへぬ秋に冬や立つらむ

秋徐暮

日にそひて近づく秋の別路もよなくほそきつきにこそ知れ

なが月廿九日といふに秋はくれぬもみぢはなかば染のこせり

水鳥のたちのいそぎにたわすれて秋やもみぢをそめさしにけん

九月盡

なが月の名にたつ秋もつきぬるを惜しむ心のなど殘るらん

初秋のころ方俊よりあふみのなすびにそへて

「よの中をまだあきはてず秋なすびすてかねし身

ぐるを見て

栗もゑみ柿も色づきうなゐらがほこらしげなる時もきにけり

穭田を

かれる田におふるひつぢは我なれやほにいづることもなくて枯れぬる

風吹あれていとさむき夕

打つ時雨木の葉みだれてかなしきは冬ちかくなる秋の山ざと

故郷秋闌

きりぎりす鳴よるかべもあれはててたのむかげなき秋のふる里

九月末つかたいと寒かりければ風かくれなどす

とて

吹おろす嵐をさむみまだきより冬がまへするあきの山ざと

秋のくるゝををしみて

くれてゆく秋のかたみは消のこる霜のおきなの身にこそありけれ

松間紅葉

薄けれど松にはあらぬ秋の色を木の間に見せて染むるもみぢ葉

江紅葉

山陰やあるよりもこき江の水に色染めまぜてうつるもみぢ葉

法輪寺にまうでてかへさわたし舟をまつほど

わたし舟しばしとまつの陰にゐて波よる岸の紅葉をぞ見る

立田の山川を人の見るかた

よも山の秋をうつしてからにしきたつたは水の色ものこらず

なが月末つかた時雨ふりくらしたるに

龍田姫秋の別の涙もやしぐれとなりて木々をそむらん

小ぐら山の紅葉を紙におして歌よませたるに

夕月夜小倉の山路くれぬとて袖にこき入れしもみぢ葉やこれ

南の林の中にあまたのうなゐ子どもかしましく

わがためにこの一枝ををりてこし心の色は君ぞ見せける

はじもみぢ

はじもみぢ薄き柞にまじればやわきて立枝の色こかるらん

柞

しぐれてもうすき柞を白露のひとしほそめと思ひけるかな

紅葉霜

おのが色もはては紅葉にそめられて薄紅に匂ふあさしも

霜園紅葉多

古里は園の山がき蔦楓染めものこさぬ霜のひところ

谷川のもみぢの散るかたかける人のよませしに

もみぢ葉を風と水とにまかせおきて見る人ぞなき山陰の秋

紅葉盛

とへかしな染盡しては花よりももろき紅葉の露のさかりを

染めはてぬほどにを見ばやもみぢ葉のちしほをまたば散りもこそすれ

寛政六年の秋にやありけん木の葉のいとこくそめたるを見て

言の葉をそめんきのえのとらなれど口なれぬ身はいふかひもなし

心性寺にまうづるに白川山を見て

秋山の薄霧こもりむら〳〵に染むる紅葉の色わきて見ゆ

南山の秋をのぞみて

夕日さす尾上の松のした紅葉そめずは知らじ遠きよそめに

さが山のもみぢ見にまかりて

もみぢ葉のちしほの上のひとしほをそふるは松のみどりなりけり

人のもみぢを折りてもてきたりけるをむねみつが見て「道とほみこきてもくべきもみぢ葉を君に見せんと枝ながらこそ」とよめるにかへし

宮より御題たまはりたるに菊有新花

園にまだめなれぬ菊のにほへるやこの秋よりのちよのはつ花

月前菊

月清みそらにはまれになる星の光あまたにさけるしら菊

しぐれしあとのよものけしき見んとて庭に出でたるにいろ〳〵の菊の露をおびてさとうち薫るをかへりみたるに目もはなちがたくおもしろかりければよめる

わがやどのよもぎにまじるしら菊をいとおぼよそに思ひけるかな

いづれをかあはれといはん色ごとにおのが光をみする村ぎく

なにごとも人におくれしわが宿は秋のくれにぞ菊も咲きける

紅葉

まづそむる谷の小柴をしをりにて猶山深きもみぢをぞとふ

春たてばまづ咲くうめの花よりも秋の末野ににほふ白菊

何事をなすともなくてことしも長月のけふにな
りぬとしぐ〵にかけて色なきことばのつゆはむ
かふ菊にもおもなけれど又こん秋にあはんもい
とたのまれぬ身なればおもひよるふしをかりそ
めにかいつけてみばやとてあまたよみける中に

長月のけふのためとやきのふよりつくろひたてしきくのきせ綿
水底のいさごにまじるこがねかと岸根の菊のかげをこそ見れ
露のまと思はゞなにのかひの國つるの郡のきくのちとせも

ながつきのこゝぬかといふことを上におきてよめ
りしことを思ひいでてまたよめるうちに

野の宮のふるきいがきににほふ菊あはれいく代の秋をへぬらん
ぬれぬともほさじ袂のきくのつゆかゝればこそは香もうつりけめ

秋夜

月清くあきかぜ寒し今よりはいかでか老のみをやすくねん
秋さむみ床のべさらず虫鳴きてねざめがちにぞ夜はなりにける

暁におく

山とほく夜ぎりのこりてしらむ野のむしのねたかき秋のあけぼの

菊のうたの中に

つみつればくやわかゆとまつほどに老のかずそふけふのしら菊
つむごとにわかゆとも身をおもはねどあかぬはけふの白菊の花
この秋やかぎりとおもへばいとゞしくもてはやさるゝ白菊の花
ながらへてふりゆくそでにおく露やおいの光のしらぎくの花
けふにあふつゆのこの身もいつまでの契かかけししら菊の花
秋をへて老となるまで色もなきことばのつゆを菊にかけつゝ
つゆのまもちとせふるてふけふの菊見つゝぞ我は久にへにける

月向白波沈

山のはをなどかこちけむにしの海やさはりなみにも月は入りけり

かくるべき月ををしとやたちさへていれじとすまふ沖つしらなみ

残月掛岑

やまとほき松にかゝりて残る夜をしばしとてらすみねの月影

擣衣のうたの中に

秋風のしきゝゝふけばしづのめがてもすまにこそ衣打ちけれ

たび人の身にやしむらん秋かぜのさむきゆふべに衣うつ聲

谷ふかみ住む里あれや衣うつ槌のひゞきの峯に聞ゆる

秋來擣衣

秋風のさむく吹きぬる夕よりひと夜もおちず衣うつなり

海邊擣衣

あま人の波かけごろもうつほどやめかり鹽やくいとまなるらん

くむ袖にくだけもはてず月影のあとよりうかぶ玉の井の水

宮のおほせごとにて名所月といふことをよみて
たてまつれる

月夜よし夜よしとこゆる旅人はくらぶの山の名をやたどらむ

この題はあまたよまるべしとてつぎ〳〵おもひ
いづるまゝかいつけたる中に

ぬば玉の黒髪山は秋の夜の月見ぬほどの名にこそありけれ

あふみの海八十の湊も照る月のひとつ光のうちにこそ見れ

照る月の光をちらすよしの川花にもこえし秋のいはなみ

あかざりし春の海べもわすれ草かゝりなく秋の住吉の月

こさふかばふかせてをみよみちのくのえぞもこよひの月はかくさじ

路明残月在

夜をこめてわれよりさきに朝立ちし人のゆくへも見ゆる月影

照る月のあかしのとなみをさまりて夜舟こぎいづるかこの島人
松島の梢を月のいづるよりなみに消えゆくあまのいさり火

古寺月

人すまであれゆく寺の軒ばもる月のひかりや法のともしび

蕭寺月

いらかくちとばりやぶれてみ佛のみかげあらはに月ぞさし入る

里月

里の犬の聲のみ月の空に澄みて人はしづまる宇治の山陰

山家月

松杉の木のまをもりて山まどにかつ〳〵月の影ぞさし入る

やまざとにて月を見て

淋しさにたへではよもとおもへども月すむ頃の秋の山ざと

非月

ちよの影よるもくもらず辛崎の松のかゞみの山のはの月

山月入簾

山はまだいでもはなれぬ月影をすごしにうつす松の村だち

江山夜月明

山かげもくまなくてらす江の月にのこりかねたる水の浮霧

月のうた十首よみ待りける中に河月似氷

初瀬川はやみ早瀬もこほるかとみなそこかけてすゝめる月影

湊月

あこがれてよはにや出でしみなと舟からろの音の月にきこゆる

梓弓いるさの月にまとかたのみなとのすどりたちさわぐ見ゆ

海月

まつらがた山なきにしに行く月をはるかにひたす沖津しら波

島月

布淑がかつらの家にしたしきかぎり月見にまかりける時の歌どもかきなべみするおくに「いかばかりさびしとか思ふみやこ人かへりしあとのよはの月かげ」とかけるを見てむかしおもひ出られてかきそへたりし

都人かへりし後に月ひとりすみしやいつのうづまさの秋

月夜に敬儀が獨居て「こよひ誰おきなとともに山里の松の木かげに月を見るらん」とよめりしにわれも友なしに見ければかの詠草のおくに

友もなきはしるをさむみ火桶のみいだきてぞ見し老のよの月

月出山

山の端をかつ出そめし月影のみやこのよもにはやみちにけり

嶺月照松

藻しほくむ手間打やめてあま人もまづさやかなる月をこそ見れ

老の後世中わづらはしくて山里に在る頃夜更くるまで月を見るに涙落つとも覺えぬに袖もしほるばかりなれば

いにしへもひとりながめし月なれどかくやは袖の露けかりける

翫月

秋の月さてもやかげのさやけきと木の下露にうつしてぞ見る

毎秋翫月

いつの秋もおもひくまなき我身とはなれみし月ぞ空にしるらむ

客依月來

里わかぬ月のたよりといひながらうとかる人のよはにとはめや

月夜逢友

照る月にわれもうかれてうとかりし友にさへこそめぐりあひぬれ

もりかはる月を見よとやさ夜時雨ふるき軒ばに音づれてゆく

遠山曉月

まちどほくむかひし山のかひもなくいづればしらむしのゝめの月

海邊曉月

わたつみのはてなき波も秋の夜の限を見せてしらむ月影

月前眺望

秋の月かげしく海のしまぐ〵は鏡にうかぶちりかとぞ見る

月前遠情

こよひたれ枕もとらでみわが崎さ野のわたりを月にゆくらん

ながむればとほき松島きさかたの月も心のうちにこそすめ

老後見月

むかし見し月やあらぬとかこつかなおいの涙にくもるよのかげ

海人見月

晴のころくまをたづねて木隱の霧ににほへる秋の夜の月

月前燈

そむくべきくまも殘らぬあばらやは月にけちぬる秋のともし火

むら雲のたえまにさやかなる月を見るにほどな

くかげのかくれたる

のどかにも思ひけるかなすみはてぬ雲まの月のほどもなきよを

曉月

さやかなるあかつき月にうかれ鳥つげずばかゝる影を見ましや

霧間曉月

秋霧ににほへるかげのうすらぐはしらみやすらむ有明の月

曉月入窗

有明の月さすかたにまどをあけてねざめうからぬ宿となしつる

しぐれてめざめたるに月さやかなる曉

面の戸をはなちて見れば中空にかゞやき庭の露きら〳〵と見えてよもはものおともせず

よをふかくおきでて見れば庵のとの月こそひとりすみわたりけれ
雲はれつきていとときよくすめる夜

人知れぬ心の塵もはらふめり月すめる夜の松かぜの聲
雲のむら〳〵なる中をもる月のをり〳〵さやけかりければ

大空の水まさ雲をもる月は淵にしづめる玉かとぞ見る
しぐるゝ月を

風はやみしぐれながらにゆく月のそらさだめなき村雲のかげ
狂雲妬佳月

月清し風なたゆみそかゝる夜はかならず雲のねたしとぞたつ
月前霧

ともむれてまどゐする夜の月かげは殊にひかりのそふかとぞ思ふ
をりしもあれ都の人のとひきつる二夜の月のくもるべしやは
かくながらはれずはこよひこの國の光をさへや月にかくさむ
あすの空はよしはれずとも都人とひし今宵は月さやけかれ
松に吹く秋風たえて雨雲のかさなる空に月をこそまて
林間のむしの音ばかりさやかにて雲ゐの月ぞ影おぼろなる
みがきなす玉かときのふ見し月のふるきかどみとくもれるぞうき
かぎりある人のよぞかしまち〳〵しこよひの月のくもらずもがな

秋月入簾

月清みをすのうちとのへだてなくふたへに松のかげぞうつろふ

夜つくるまで前の林中に月さし入りていとあらはなれば

ひるならば弓槻が下はくらからむ木がくれもなきよはの月かな

こよひはと唐人(もろこしびと)もあふぎみむとよ秋つすのながつきのかげ

十三夜くもれり中秋はいとさやけかりけるを思へば

名にたかき二夜ながらに月影のさやけき年ぞすくなかりける

ながつき三日人々とひて先の月もくもりけるにこよひもおなじやうなればわびつゝもかずのうたよむにながつきのとをかあまりみかと上におきて

なすわざもまづうちおきてくれゆかば見るべき月のいそぎをぞする

かはづこそ雨をこひけれ打くもるこよひの月を見せじとや思ふ

つきはいま松の木の間に見えそめぬ日の入るはてはひかりそはまし

きしかたをかぞへて見れば長月のくもれる夜こそすくなかりけれ

のがれきて世にすみわびしやどなれど月は心のまゝにこそ見れ

またでねやにいこはんとて

夕露のおきゐむことのくるしさに月のいづるもまたで入りぬる

うづまさにあるころ十七夜の月東山をいづれば

やがてまつにやどれるいと興ありき

遠山のたかねの月をうづまさの松のしづ枝にやどしてぞ見る

おなじ十九日頃にや木のまに待つけたる月のくもれるを

村松のこのまの月をあやにくに立隔てたるうき雲のそら

九月十三夜月のうたあまたよみ侍る中に

夕まぐれかつ〳〵軒に残る蚊のかず見るばかり月ぞさやけき

心あれや月の行へのうき雲もさはらぬかたにはらふあき風

名に高き望にはくもる年もあれどすめるはみよの長月の影

おなじ心を

名にたてるかげをかくしてうき雲のかゝるよそとや月の見すらむ
庭草の露もかげ見ぬうき雲に風まつむしや月こひてなく
　東の山際に念佛三昧のいとしづかなる寺ありよ
るよる鹿の氣ちかく鳴くと聞きてかれこれいざ
なひて暮ごろより行きて念佛してしたまつに夜
ふくるまできこえねばかたみにおもふことい ひ
しをわすれじとてかいつくる中に
この寺は東の山のかげなればもちの月さへいでがてにする
　居待月
いもとわがならび居待のいにしへをおもひいづれば月も出でけり
　臥待月
月やすむくもりやすると笛竹のふしまつほどもねがたかりけり
わらはやみの後こゝちわづらはしくして月もえ

とてよめりし中に[illegible]

はるかにぞ春はおもひしこの秋の半の月もめぐりきにけり

こゝろなき雲さへ月にはるゝよとたれもこと葉の露そへて見よ

うけれども雲ははれまもありぬべし待つかひなしや月に來ぬ人

たづがねのはるかにきこゆすめる夜の澤べの月や霜と見ゆらん

望のひるよりおびたゞしく雨ふりてくれつかた雨はやみたれどなごりの雲に空はるべくも見えねどさすがにうちもねられずまつほどに軒の松の梢にほのめき出でてよはにはいとよくはれたるに

はるゝ夜をまつの梢に今ぞ見る秋もなかばの中空のつき

またあるとしはくれ頃よりくもりてなぐさむことなきまゝ

あきのつきといふことをおきて
あつめきて秋にやてらす月々のよひあかつきにかけし光を
木々の葉のきばみきばまぬ色々もわきてぞ見ゆる秋の夜の月
後に見む人もあらむをけふの月ひかりをしますてりつくす哉
月ひとりあめにかゝりてあらかねの土もとほれとてる光かな
きしかたも秋はかならずすむ月にかはらぬ天のまことをぞ知る
いつのあきにか
ひととせの月のさかりは秋の空秋はもなかにしく影ぞなき
十五夜翫月
めぐりあふ秋のなかばの空の月てりみつ光いつにくらべむ
よのつねのもちをももちの光にも秋のひと夜の月やまさらん
いつのとしにやはづき十五夜十五首のうたとい
ふ字を上におきてけふはくる人にかへしさせむ

心さへ身さへうつりていにしへにかはりはてたる月を見るかな
ふくろふの聲の外なるおとづれや月にすみぬる軒の松かぜ
照る月のかたぶくまゝににし川の河瀬の音も空にこそすめ
　尾張の宗則がもとより「ま萩さき垣ねの蟲も鳴
　くらめどなぐさめかねん秋の山里」とありしかへ
し
何にかはなぐさめかねむものごとにわれをもてなす秋の山里
　松風明月林間の雲君におくりがたし
十五夜月のはれたるをおもふにわかかりしより
三四夜には過ぎずさるをことし乙巳の秋のなか
ばは空にちりばかりの雲もなくてよもすがらむ
かへどなほあかぬあまりに
ながらへて猶よにしばしすむとてもこよひばかりの月や見ざらん

ゆふべに月を見て

ながめつる野は秋霧にへだたりて軒ばの松に月ぞきらめく

仲秋十日より三日ばかり夜々月明なり京の人は

このほどにとへとおもへど來ずありありてくも

れる夜もや來らむかし二日ばかり例のたゞごと

に

くずかつらくる人なしにけふもまた夕日かくるゝ山陰の庭

入相のかねにきほひて鳴くなるは月まつ蟲の聲にやはあらぬ

夜よしとて人まつべくもあらなくにひとりぞ見つる山かげの月

おもひやる心のこまのくつわ蟲野山の月にわれやいざなふ

うす靈にかけるもじすら老のめに見ゆばかりなる秋の夜の月

うちむかふすゞりの海の月影のさもせはしかるよにもすむかな

あるはきえあるはへだてて白雲のをちにぞすめる月の友垣

みちかけを咲きちるさがにくらべても猶花よりも月ぞのどけき

二日月を見て

にしとほくはれたる庵にすめばこそ二日の月の影をしも見れ

落梧新月

ちり初めし桐の一葉のひま見せて秋をことわる三日月の影

雲まよりみか月のほの見ゆるを

村雲をつなげるいとど見るばかりほそくかゝれるみか月のかげ

四日の夜にや野火の煙の月をへだつるに

月はまだみかづきばかり影ほそし野火の烟よ立ちなへだてそ

夕月の雲にまがへるを

くれぬまはむらちる空のしら雲にまがひて見ゆる夕月の色

夜々月のけしきのまさるを見て

入る山のよひ〳〵とほくなるがうへに光さへそふ夕月のそら

遠山田よそに思ひしひたの音も風に聞ゆる秋の夕ぐれ
立こめてそこともわかぬかねの音の霧よりもるゝ秋の夕ぐれ
山本の賤も衣をうちわびてながめやすらん秋の夕ぐれ
雲ゐとぶかりの涙も詠れば袖にぞおつる秋の夕ぐれ
鳴く鹿はこふるつまだにあるものを老いて友なき秋の夕暮
野べ遠く旅行く人の袖の上も思ひやらるゝあきの夕ぐれ
遠かたの川べに見えししらさぎもねぐらにかへる秋の夕ぐれ
　かきねののべにいでて
淋しさは住むやどからのならひかと立出づる野べも秋の夕ぐれ
　駒迎を
むかふとて關こえくれば望月のこまよりもるゝ影ぞさやけき
立まちの月ににほひて花薄ほさかのみうま引のぼる見ゆ
　月

雨はれたるに風などもたえていとしづかなるほど

けふの雨に萩も尾花もうなだれてうれへがほなる秋の夕ぐれ

松風はふけどふかねど身にぞしむ山のとかげの秋のゆふぐれ

よそにわがきゝしはものかきり〴〵すなく山かげの秋の夕暮

軒はあれて庭は野となる古寺のふりていくよの秋の夕ぐれ

まはぎちり尾花みだれて吹く風のやゝはだ寒き秋の夕ぐれ

夕に飛鳥を見て

とぶ鳥の行かた遠く見おくれば霧にかくるゝ秋の夕ぐれ

又ある夕に

山とほくたなびく雲にうつる日もやゝうすくなる秋の夕ぐれ

ひとりつく〴〵とながむる暮のさびしきまゝ秋の夕ぐれとおきてよめる中に

遠山は入日のなごり猶見えて野は霧わたる秋の夕暮

夕をわびて

なべてよのあはれと人やおもふらんふりまさる身の秋の夕ぐれ

雲のさまぐ\なるを見て

波となり小舟となりて夕暮の雲のすがたぞはては消えゆく

秋夕

尾花のみほのかにみえて霧わたる山田のくろの秋の夕暮

うづまさにてひとりながめて

うしとてもいかゞはすべき心もて入りにし山のあきのゆふぐれ

うづまさの深き林をひゞきくる風のとすごきあきのゆふぐれ

山風はやゝをさまりて立つ霧に林も見えぬあきのゆふぐれ

人とはぬ庭の尾花のほに出でてたれをかまねく秋の夕ぐれ

草のはら消えてふりなん露をさへかけてぞおもふ秋の夕ぐれ

秋はたのみどりの中にまじれるやおくての小田のかりしほの色

霧

夕霧は物思ふ人の何なれやたつより袖のぬれまさるらん

初霧を

初ぎりの立初めしより草も木も色ことになる秋のやま〳〵

霧のいと深き朝もとすみしうづまさをおもひやりて

岡ざきの垣ねも見えず霧たちぬ今朝いかならんうづまさのもり

堤霧

川ぞひのつゝみをこめて立つきりに限りも見えぬ秋の夕浪

遠村霧

衣うつ聲は殘りて夕霧にやゝかくれゆく山もとの里

秋晩

しかの立どの

秋風に木陰の霧も吹はれて鹿の立どの月にかくれぬ

旅泊鹿

秋寒き磯山おろし海ふけば波のうきねにをしかをぞ聞く

山田かりのこしたるに鹿ふたつゐたるかた

かり残す小田の田ぬしの心をやつままつ鹿のうれしみて鳴く

うづら

かりにきて過ぎもやられずうづらなく野べのむかしの妹が垣ねを

秋田

我も世を秋田のそほづ露しもにおのれのみやは立つかるべき

旱したるころ

てりまさる秋田の月に雨たべと言あけしつゝ曉つゞみうつ

かきねより見わたして

今ふかば民の愁となりぬべししなとのみ神風やめてたべ

八朔に

文月くれ月たちかはるけふをしもいつの世よりかことほぎはせし

こたがり

あだしよとおもはゞ誰もうづらふす花野をのみやかりに見るべき

霧中初雁

いくつらぞつばさも見えぬ夕霧にきむかふかりの聲ぞみだるゝ

あしでに

秋風にいなばなみより雁鳴きて木末色づくこのしまの森

夕に雲たな引き雁のとぶを見て

空のうみやたな引雲をすさきにて沖こぐ船と見ゆるかりがね

鹿をよめる

秋風はたえずふけども高砂のをのへの鹿はまれにこそきけ

海邊秋風

立わたるうらわのきりのひま見えてあしの葉なびく秋の汐風

秋風催興

秋風に吹かへされて小山田のほなみをよそに過ぐる村鳥

老後秋風をきゝて

いつまでか草木のうへに聞きつらん我身をしをる秋かぜの聲

うづまさにあるほど夕つかた風ふきあれてたか

き木の枝をれかばらもちりていとすさまじき暮

瓦さへ木のはとちりてぶる寺の野分の風に又やあれなん

野火のけぶりの中ぞらにをれたるを見て

秋風やだかくふくらん立のぼる烟の空に横をれて見ゆ

おなじころ雲のあしとく風ふくべきけしきなる

夕

きりぎりすを

いかにうき秋の夜なればきりぎりすこわだえもせず鳴あかすらん

なにはより昌よしが消息してある方より松蟲を籠に入れておくりけるいとようう鳴き侍るとて人興じけれど翁が耳にはふつときこえざりければ「まつこともなき老が身は松蟲の聲きくほどの耳ももたらず」とよめるといひおこせけるかへりごとに

きかざらば人にきかせてかずをとれ君がちとせを松むしの聲

萩はうつろひはてて尾花はうなだれよものこずゑは色づきわたりてうちしぐれたるいはむかたなく物がなし

しぐれつゝふかくなりゆく山ざとの秋のけしきぞあはれなりける

雨夜のむしのさやかにもあらぬをよめる

月くらき雨夜の窓のきり〴〵すおのがつゞりもさしやわぶらん

閨蟲

きり〴〵すたのむかげとて鳴きよるも同じよもぎが閨のさむしろ

むしのかしましく鳴くに

つねうとき老の耳をもへだてぬは垣ねの野べの蟲のこゑ〴〵

徑蟲

露わけてわれかととへばねを絶えて分來し跡に松むしの鳴く

ものへまかる道のうらがれたる野はらに鈴むし

のなくを

秋寒くなりゆくまゝにひるまのみ聲ふり立つる野べのすゞ蟲

はたおるむしの

女郎花たがかり衣いそげばかはたおるむしのよるかけて鳴く

雨はれて蝶のとぶを見て

雨はるゝ花野のてふのおのがどちむれて遊ぶはいかゞたのしき

くものいに蝶のかゝれるを見て

飛ぶ蝶のかゝればこそはさゝがにのいとはしきよと思ひ知りぬれ

蟲を

秋寒みわがきぬつゞる窓にきていそがしたつる蛬(きりぎりす)かな

月さゆるかべのあれまのきりぎりすうちともわかぬ霜よとぞなく

聞蟲

露やうき思やしげき夕されば草ねの蟲の亂れてぞ鳴く

曉がたむしを聞きて

いつまでかかくても聞かん鳴よはる霜夜の蟲の曉の聲

雨夜蟲

雨はれぬ軒の玉水つぶ〴〵とさゝめくよはのきりぎりすかな

山寺にまうづるみちにて月草のさかりなるを見て

秋の日にうつろひやすし月草の露のさかりの色にほころな

秋花遂夜開

ねぬる夜の人まにさきて朝な〳〵見ぬ色そふる秋草の花

秋花色々

秋草の花をし見れば色々に露も心をうつしてぞおく

法印桒川が豐に秋野のかた

小草咲く秋野を見ればつゆならぬ心もうつる花のいろ〳〵

秋海棠とひとへ菊と垣ねにさきたるかけるに

秋を知る庭の一花二花に色のちくさの野べもおもはず

しら河のながれに色々の花のうつりたるを

色ごとに心ぞうつるもゝ草の花のかげゆくしら河の水

花の色は露のまがきの藤袴にほひのみこそやつれざりけれ

野蘭

來て見ればうす紫の藤袴こき香にいかで野邊をにほはす

槿

あさがほの花をはかなと思ひしや千年の後の松を見ぬほど

槿未開

朝がほの咲くをまつ間の久しさははかなかるべき花としもなし

隣槿

咲きぬやとやどの中がきかいまめばうちそむきたる朝がほの花

秋香

種々(くさぐさ)の中にもわけてふぢばかま菊こそ秋の香はつくしけれ

野花を

みどりなる草のいともてをみなへし花の錦をおらぬ野ぞなき

老いぬればたをらぬのみぞ女郎花何かはよそに思ひすつべき

薄

とはれじの宿になうゑそ花薄ほにいづる秋は人まねきけり

夕月のほのめく野べを見わたせば尾花なびきて秋風ぞふく

誰しかもまねくと見しは山もとの田くろにたてる尾花なりけり

かぐらをかにて

秋風になびく尾花はかぐら岡きねがおきふす袖かとも見ゆ

刈萱

日をへつゝ曉がかるかやつかのまに吹みだしぬる野べの秋風

おきあまる露をおもみやみだるらん風のたえまの野べのかるかや

ふぢばかま

ふぢばかまあやなな咲きそにほふとてきて見る人もあらぬ垣ねに

筐蘭

萩のかつ〳〵のこれるに入日さすを

夕日こそさしてみせけれこがくれてうつろひ残る秋萩の花

女郎花

人ごとのさがのにたてるをみなへしあだなる秋の風になびくな

霧隔女郎花

女郎花色のさかりをねたしとや立かくすらん野べの秋霧

女郎花翫露

女郎花かざしにすとかさゝがにのいともてぬける露のしら玉

澤女郎花

をみなへし露のさかりを澤水にうつしておのがかげたのむらし

香川景樹より女郎花にそへて「老らくの身につきなしとをみなへしすてばすてなんひとめ見てのち」とありしかへし

朝まだきしらみて見ゆる秋はぎは露もや深き花やうつろふ

身のいたうよわくなりける秋はぎのかた枝のこりたる見て

萩の花久しくのこれ來ん秋をまちみるべくもあらぬ我身ぞ

禁中萩

咲きぬればよもぎがかげもまばゆきをさぞむらさきの庭の秋はぎ

名所萩

咲きしよりをばなが袖も紫のむらごに見ゆるま野のうら萩

遠思秋萩

誰わけて袖ぬらすらんふるさとのみかきがはらの秋はぎのつゆ

夕立してはれたるあとのむらはぎ玉をしけるごとなるを見て

たれ見よと雨の名殘の萩の露風にきらめき日にみがくらん

荻驚夢

老いぬれば秋のはつ夜のはつかなる荻の音にも夢ぞさめぬる

月藤荻

風よりも身にしむ色は月かげのほのめきそむる軒の下荻

萩

秋風に鹿のねきこゆたかまとの野べのまはぎの花やちるらん
はぎのさかりなるを見て

風たつな雨もなふりそ山姫の萩のにしきをさらすけふなり
禪林寺の萩見にまかりたりしにたとしへなく靜
にててる日のひかり見るときなしにといひしふ
ることも思ひいでられて

山深み露にうもれて秋萩の花の盛も見る人ぞなき
萩の宴せしに朝萩を

我しなばわがなきたまは来ん秋の野べの尾花や招きてあらん

またの夜舟のかたに火ともせる見て

なきたまをおくるみのりの舟なれば西の方にぞへはむかひける

七月十七日堤の家にあそびて見るにひがしの山に大もじのかたちに火をともせり年ごとに昨日の夕なりしをことの外の雨風にてけふになりけるなるべし文字のかたちこと所にともすよりもいきほひことなりなどとりぐ〵いふ程にかたへより消えゆく諸行無常のことわりにもれぬもいとあはれと見るにみねほのめきて月さしいづ

ともす火は消えてあやなき高ねより光をかへて月ぞいでくる

をぎ

こと草も吹きはすらめど荻ぞまづしらせ初めつる秋の初風

稲妻

遠近（をちこち）の見えさす野田のいなづまはくらきをそふる光なりけり

たまゝつらんとするまへの日ある人の蓮華をおくりたるにこれよりいもをなんやるとて

いたづらに葉のみ茂りて花さかぬ胸のはちすに似たるはたいも

たまゝつりするとて

みそなはゞきませなきたまこの秋も猶ながらへてむかへまつるを

すみかのたび〳〵かはりてけふにあふを思ひて

なきたまのあやしとや見んけふごとにむかふる宿のあまたかはれば

またの日何くれのものをにへにして

おりたちてつくりなしたるはたつものけふのみあへにわがたてまつる

たまゝつる夕おもふことありて

我しなばわがちゝはゝのなきたまをむかへおくりて誰かまつらん

はぐくみてうるふを見ればおく露や秋のこくさのちおもなるらむ

色なしといひなおとしそ草も木もちくさにそむる秋の白露

　苔路露

人とはぬ庭の苔ぢにしく玉は秋くるよひの露にぞありける

　太秦寺にて露のいとふかきを見て

我だにもすまずなりなん秋かけて思ひやらるゝ露の古寺

　露ふかしといふ句をはじめにおきて

露ふかし雨のなごりの野べよりもはらはぬ庭のむぐらよもぎふ

　ある人の悲露といふ心はいかゞよみてんととふ

　に

むすぶよりけやすき草の露の上をおもへば袖ぞまづしをれける

　夕やみにいなづまを見て

夕やみのあやなき小田をもるしづが心なぐさやかよふいなづま

たなばたの手ならす宵の扇より吹きやそむらん秋の初風

星夕燈火

ともし火のかげ更けにけりあすもまた手向けん星の契ならぬに

牛女悦秋來

思ふことなるてふけふの悦にたへずや星の瓜まろびせん

夜更憶牛女

月入りて夜の更けゆけばたなばたの心のやみもさぞなとぞ思ふ

七夕後朝

けさはまた天の羽衣立かへりうらみやすらんうすき契を

露を

かりの世を思ふ涙かかべに生ふるいつまで草に結ぶ白露

とりたてていへば色なき露ながらあやしく花の光をぞそふ

百草の花といふとも秋の露おかずはかゝる光をも見じ

楓

わかれゆく星の涙に染みぬべしまだ色づかぬ秋のかへでも

七夕虫

としごとにまつぞ久しきたなばたのあふはこてふの夢の一夜を

たなばたのあふ夜のてまにかはるとてはたおる虫はあるよなりけり

七夕七首うたあまた見るほどに日くれにければ

例のごと七首もよまで手向とて

七種にねがはゞ星やみまがはんたゞ一ことのはにも知らなん

七夕絲

打みだれむすぼほれたる棚ばたのこゝろの絲や今宵とくらん

七夕衣

かさねても夢とや思ふたなばたのかへし馴れたる天の羽衣

七夕扇

人によませみづからも

梶

思ふことかぢの七葉にかきつけてふたつの星にけふはたむけん

桐

めづらしな軒ばのきりの散そめてかつあらはるゝ星合のそら

桃

さゝがにのいともたのもし思ふことなるてふもゝを星に手向けて

梨

棚機にいざねぎかけて今よりはうきことなしの身ともなりなん

合歡

戀ひ〳〵てあふうれしさにねぶの木のねぶたしとしも星はおもはじ

楸

いく秋ぞ天のかはらの濱（はま）楸（ひさぎ）久しき世よりくちぬちぎりは

七夕にはぎの花尾ばなくず花なでしこの花女郎花又ふぢばかま朝がほの花といふ古歌をおもひいでてやがてこれを題にして人々にもよませみづからもよむとて

たなばたのかざしにをさせ紫の色なつかしき秋はぎの花
いつしかと思ひし秋のはつ尾花ほにいでてほしの枕にやかる
こよひとや花のひもとくくずかつらくる秋ごとの契かはらで
ちりつもるたなばたつめの床夏はうちはらふにも袖やつゆけき
久方の天のかはらのをみなへし人のさがののうさは知らじな
秋ごとに來てもとまらぬたなばたのかたみに匂ふ藤袴かも
たなばたの秋まちえても露のまの契をいはゞ朝がほの花

これよみはてて猶人々あまたくるに草のあれば木もなどかあらざらんとて七木をかきいでて人

濱[illegible]

けふことにふたつの星のならび濱ならべんかけもいく秋の空

七夕に信美がとひ來てかぢの一葉かきたる繪に

うたこふに

この秋はちりくるかぢに七かへり我がことのはをかきてたむけん

七夕に葛花を

一とせのうらみもあらじくず花のひもとく秋にあへる棚機(たなばた)

七夕蓮のちれるを見て

さけばちる蓮の花びら見るまなきたぐひもありと星にたむけん

七夕雁

たなばたはかりをかごとにいひなしてこん春まではきみなかへしそ

七夕鶴

この夕ねを鳴きつるはおのが經(へ)んちよをひとよの星にかすとか

るまゝを

山

よゝかけて絶えぬ契はたなばたのいとかの山のはつ秋のそら

岡

我庵に近きよし田のかぐら岡のぼりてぞ見るほし合の空

野

ねぎかくるふたつの星も一すぢのふる野の道の末てらさなん

里

逢ふことのときはの里の名をきかばともにすまゝく星や思はん

河

こよひあふ星の光もにし川にかたぶくまでもふけぬなるかな

橋

こよひのみわたしやすらんたなばたのたへぬ涙のみなそこのはし

人のよにかけてはいはじながれてもかぎり知られぬ天の川波
夕月はまだきないりそたなばたのあふ夜ふけぬとかこちもぞする
いつも同じねぎごとすとて
たなばたは年なれけらしあまたとし同じことのみいのりきぬれば
待七夕
いつしかと思ひし秋はまちつけつ今いくかあらばほし合の空
七夕月
こよひこそ心のやみもはれぬらめ星のゆふべの月清き空
七夕烟
月かげのにほふもすゞしほし合の空だきもののうすき烟に
七夕山
たなばたのつもるおもひをかさねあげば富士もふもとのちりひぢの山
ことしの手むけは地儀にやせんとておもひ出づ

むかふよりのころあつさもわするゝは泉にのみや秋は來ぬらん

初秋のころ晩立の後いさゝか暑さを忘れたるに

あらましき雨のなごりの夕よりはじめて秋の風は吹きける

風すゞしとて人のよろこべるに

みな人のまちよろこべる秋風のなぞしも老の身にはしむらん

のこりしあつさにはしるして見わたすに野火の

煙のかなたこなたになびくを

一かたに吹きもさだめぬ秋風を野火のけぶりの行方にぞ見る

又いとあつき夕

しばしぞとおもへば堪へてあられけり殘るあつさも老のよはひも

秋のはじめつかたあはたを見て

あはた山ふもとのあはふ色づきて薄霧なびき秋風ぞ吹く

七夕の心を

人々とひ來て殘暑といふことをよめるに

夏よりも猶たへまうき暑さ哉すゞしかるべき秋ぞと思へば

初秋いとあつきに

秋のたつきのふの風は身にしみてけふはあつさに又かへりぬる

文月末つかた猶あつかりければ

朝夕のけしきばかりは秋めきて暑さは夏にかはらざりけり

いとすゞしき夕

夏衣袂(たもと)になれぬ西風の涼しくふきて秋は來にけり

しら雲のたな引たるくれに

きのふまであやしきみねと見し雲も棚引そめて秋風ぞ吹く

西風飄一葉

あへずちる桐の一葉のことわりも身に知る老の秋の初風

秋淺向泉

うづまさにて初秋のころ

おそく消えはやくむすびて山陰は露のひるまぞすくなかりける

曉風告秋

あやにくに身にしむ老のね覺をや尋ねてつぐる秋の初風

曉知早涼

宵のまのあつさはいづらすゞしさにめざめし秋の曉のとこ

初秋露

ふかき夜のねざめのまくら露ぞおく夢のたゞちに秋や來ぬらん

幽栖秋來

この夕秋來にけらし庭もせにつゆの玉しくよもぎふのやど

霧わたる苔路しめりてひやゝかにくる秋しるき庭の木隱

秋のはじめつかた

きり〲す鳴く夕かげの山風によわり初めぬる日ぐらしの聲

六帖詠草　秋

秋歌

ふん月朔日になれるに

おもふことひとつもなさであら玉の年の半もまた過ぎにけり

初秋

誰とてか身にしまざらん野も山も色かはるべき秋のはつ風

夏の末秋立ちてほどもなきつとめて桐よりおつ

るしづく雨のしたゝるがごとし

うけためしきりの廣葉のよるの露をおつるあしたの雫にぞ知る

同じころ夕に

はしゐする袖のにはかにすゞしきはこの夕風に秋や立つらむ

釣の糸のながくし日もあかなくにせのぼるあゆも見えずくれぬる

維濟

めもはるにわたす河はし行かひの絶えず見ゆるやすゞみとる人
房共

月うつる河ぞひをだにかへるさもわすれて猶やさなへとるらん
經亮

河風の吹きのまに〳〵うちなびく柳のかげにあそぶすゞしさ
重愛

はるかなる山はさながら水ぐきのみどりにうつすすがたとぞ見る
喜之

のどけしな生（おひ）そめしよりふしごとに千代をこめたるやどの若竹
宗美

夏やとく流れゆくせの水の面をふきくる風は秋にまがひて
布淑

見やるに山水はるかにはれて西は松尾南は生駒につゞきて見ゆるは大和路の山々なるべし河のをちかたにおりたつは網引釣たれなどすめり橋行かふ人の木の間より見ゆるもから給めきてをかしこゝに來て此頃くしたる心もなごりなくはれぬ京の友にもけさいひやりたればみな來あひてかたみに思ふことといふも心行くわざなればながき日のくるゝもおぼえず久かたの月さへ波にうつるまでぞありけるかくても猶あかぬ心をかしましきまでいひあへる中に宇米都かはのなつといふことを上におきてよめるをのみかいつくるは後にもけふをおもひいでなんとなるべし

うべしこそしのに鳴きけれ神がきの梅もいろづく時の鳥とて

宮どころのふるきほどよりはすこしあらはなりと思ひしも此頃の　に梅やしげりつらんおくまりて見えみ、としろ水ゆたかに絶えぬ恵うけつゝをちこち千まちつくれる田面いとたのもしく今かへすもあり青み渡れる中に白鷺のむれゐるはまた取わけぬ苗代田なるべしこゝら行かふ人に驚かぬもゆたかに見ゆ彼方はおりたちてけふぞ早苗植うめる歌うたふ聲にぎはしくむぎほこなぐるからさをに打そへて聞ゆる里のかたにゆけばむね〳〵しうたてつゞけたる家ゐの中に岡のなにがしが河にのぞみてつくれるいでゐの亭こそいと興ありけれ名を柳陰といふもしるくみなぎしにいと大なる柳二三株たてりかなたこなた

そぐたそがれにけさ見し老女にあひぬ

わがごとや老いてつかれし賤の女がおくれてかへるをのの山みち

かへりつくらんほどを思ふもいとくるしこなた、はぐれ過ぐるほど山ばなにいたり初夜（そや）過ぐる頃京にぞいりし

○

春の梅津と名にたてる花のさかりも流るゝがごとくうつり青葉のみどり深くなりゆく木の下麥のはしり穂のめづらかなりしもいつしか色づきわたり刈りもはてぬにながあめうちつゞきいとゞ心のおほゝしき老の寐覺（ねさめ）もおのが時えてなく鳥の聲になぐさめつゝあかしくらすにからうじてけふは雲間見え朝日うつれば立出でて見わたす

そのの筍ぬきてもてなさるゝもめづらし此寺のうしろに女院の御墓とてありまた南のみちを二丁ばかりのぼりて伊勢兩宮おはしますそのならびに一字ありてとざせり後にきけば女院御てう度どもをほりうづめたるあととぞとかくするほどに日もいたくかたぶけばかへさの道とひて出づえふみ山ときくわたりにて郭公數聲なく

神のますえふみの山のほとゝぎすみそぎやすらんゆふかけて啼く

けさ見し賤の女もやゝかへりけるなるべしこゝかしこの里より夕けのけぶりたちのぼり山路の末はるかに見えて人め絶えたるにうの花のみ河風に打なびきたるいはんかたなくものさびし家づとにと折りつゝゆくまゝにくれそへばうちい

つらひしきみつゝじなどありあないして建禮門
院の御像あはの內侍像ありときけばをがむ繪卷
ありときゝてこひいでて見る後白河法皇御幸の
所を平家物がたりの詞をもてかきぬきたり雅經
卿の筆といへれどおぼつかなし畫は後藤長乘と
かありしあるじの尼まだいとわかくていかでか
かる淋しきすまひに堪ふらんといとあはれにて
所のさまなどとひきくに常はさしも侍らずかん
な月の末懸樋(かけひ)はたえあらしの音のみすさまじう
なる頃は都のそらも戀しうなんとかたるもよの
うきにかへて聞き侍るなどいはんよりはなかな
か心深くおぼえて

かけひだに冬は絕ゆてふやま水にすます心のおくぞゆかしき

こゝにてぞほとゝぎすはさだかに聞きたる

耳うときわがためならし時鳥けぢかく鳴きしいまのひと聲

又にしの野にいでて寂光院を尋行くみちのかたはらにおぼろの清水と石にゑりて水あり此名後拾遺に見えたり數百年をへたる清水さだかにそのあとなりや袖中抄にはえふみ山の東といだせりとおぼゆればうたがひなきにしもあらず

大原やおぼろの清水さだかなるしるしに人をまどはするかな

こゝはくさ生といふ

山かげや軒ばも見えず茂りあひて草生のさとの名こそ隱れね

寂光院は西の山ぎはにあり本尊地藏ぼさちふるきものには三尊のみだと見えたりこゝも再興までにあともなくなりたるべしあかだな清げにし

しきなくて見るにあかず聞くにやさしければ酒
とうであまたたびさかづきめぐらしかたみにお
もふ事いひつゝときうつるまで侍りて

しらぎぬのたゞひとへもて岩がねをつゝむと見ゆる瀧にもあるかな

つたひくるいはほのうへの山水は千すぢみだせる絲かとも見ゆ

をの山の岩ねのたきは白雪のこほすがごとくふるかとも見ゆ

今はとてもとのみちにいでて勝林寺にまゐるこ
こにこそまづ参るべかりけるをとおもへば

瀧見つゝかへるたよりにまうできとたれも佛にさかしらなせそ

このみちに呂川律川とて二筋ながれたり

あみだぶと打となふれば呂律川(りょりつがは)水のしらべも聲あはすなり

この佛を土人證據のみだといふときゝて

魚山の瀧のあたりのあみだぶはのちのよすくふしるしにやます

そこより勝林寺といふしるしあるかたの道を行くにさきだつ人の時鳥はきゝつやといふに鳴きてけりとおもふはうれしきものながら

谷川の音にまぎれてねたくわが聞きもらしつる山ほとゝぎす

なしもとのむかしの御坊のまへをへて來迎院にまうづ本尊藥師佛天仁の頃良忍大德の融通念佛はじめたまふ所とぞ此寺のまへを東に入ること五六丁ばかりのぼりてすこし右の谷にいるむかひにぞ瀧はおちくる七丈に四丈ばかりもあらんとおぼゆる巖(いはほ)のなゝめなるをつたひて東より西におつるたきなり世のつねのたきは山ひゞく聲かしましく瀧つぼなどいひて青みたる淵(ふち)の水まきて見るもおそろしうのみこそあれこはさるけ

さきつゞきたり

ひむろもるをのの山路は雪も猶消えのこるかと見ゆるうの花

木しげき谷風のいと寒く吹のぼれば

雪わけていりけんをりのいかならん夏さへさむきをのの山道

このみちのいたくさがしきに馬に柴おふせみづからもいたゞきて賤の女のあまた都にいづるにあふをこゝかしこによぎつゝからうじて大原の里にいづ此所より谷ひらけてかなたこなたの里見わたされていとをかしき所なりかゝればこそむかし人もおほく住みけれとおもふに老いたる女の何事にかうきよぞかしとかたりあひて行くを聞けば

よそめこそすみよく見ゆれ住なれば又うき事やおほはらの里

むら松しげりたる木のまより社ぞ見ゆる皇御神(すめらおかみ)のあまくだり給ふ所ときけばいとたふとし小野郷大原みかげ山とぞ舊(ふる)きものには見えたる此道川を右になし左に見てゆく山あひなり石たかくて老いぬるにはいとくるしきにさがしき山ひとつこえて八瀬につく猶山路のはるかに見やらるれば

大原の山路の末のとほければやせゆくほどに身ぞつかれぬる

四五丁をへて右にいる山路ありひえのくろ谷にゆく道となんそのちまたにしばしやすむけふはつれなき郭公をこそきくべけれと友のいへば

郭公空にこそきけ音なしのたきみに行くといひてなかせよ

かの見えつる山路はる〴〵と分のぼるにうの花

きずとて山のなかばまで見おくらるゝ情(なさけ)あさか
らず後をちぎりてわかれぬ京にきつきても柴の
いほりながらかの地に似るべくもあらねば猶幽
閑の氣味しのばしくひとり灯(ともし)のもとにおりつる
事どもかいつけ侍りぬ

庵は因性寺　友は　伴　資芳

をの山にあなる音なしの瀧見んとおもふどち卯
月廿日あまり月しらむ頃京をいでて松がさきの
わたり山ばなといふ所にやすらふほど東の山ぎ
はより雲たちのほりあさけのけぶりこゝかしこ
に見ゆ

朝けたく山もと見れば立のほる雲も煙もいろぞわかれぬ

高野村を過行けば右にみかけ山あり山もとに一

もとの道を半かへりて此たびは東の山ぎはにつきてくるに木をこる山あり斧の音谷にひゞきて幽なりいろ〳〵やすげなき世のわざども見聞くもいとあはれにて

杣木こる賤にとはゞやかくてしもうきはへだてぬ山のおくかと

西はやどりつる庵なりけりに名もしろくけざやかに見わたさる

あきらけきのりの光も見えてけさあさ日かゞやく山のふるでらそれより龍がたきといふにいたる此道を三十丁ばかり行きて喜撰がすみける跡ありといふにいとゆかしけれど月も午にちかくけふはきはめてかへるべきなればおもひとゞまりてかの庵にてしばしやすらひてたちいづるにあるじなごりつ

ぞうち川なりける薪柴などのたへず流るゝいかなるにかととへば舟もかよひがたき川上よりながしおとして下にて待つけてとるなりとぞ其濱に柴ゆふ翁のかたるめづらかなる事たぐひなし友なる人のよめる「めなれずよ宇治の川上はやきせの水のまに〳〵くだす山柴」とありけるに

せをはやみ舟もかよはぬ山川もうきよをわたる道たすくなり

川ごしの山の高うさがしきそばづたひに山人の行かふ見ゆよそめもいとあやふしふもとは大なる岩いくへともなくわざとたゝみあげたらんやうにて四五丈ばかりの瀧おちたり繪にかゝまほしきけしきどもなり

おちたぎつ音もきこえず山河の岩瀬をこゆる波のひゞきに

猶ぞうき山ほとゝぎす一聲も待あへず明るみじか夜の空

打わびてしばしまどろむほど日さしあがりぬよべの雨なごりなくはれて見おろす谷の梢よりあさけの煙ほそく立ちていとおもしろしこゝにもゆづけなどたうべていざ此あたり見んとて南に行くにみ山べはまだつゝじのさかりなるを人もなければいと打過ぎがたし

夏山の青葉がくれに咲くつゝじしのびに殘る春の色かも

谷河のながれにつきてわたす岩橋をかなたこなたにつたひて行くにこゝかしこ菊生ひたりこれぞちとせふべき友なめる秋はかならずなど契りても猶いへづとにして母君に見せ奉らばやとぞ思ふ十丁ばかりをへてはまといふ所に出でこゝ

山家夢　愚

かりねする山のいほりのさゝ枕なれぬあらしに夢もむすばず
　かくてふけゆけど猶つれなければ
ふりいでて鳴けとはなしにほとゝぎすまつ夜の雨の聲のさびしさ
といひければあるじ「ふりはへて鳴くほどまではあらずとも一聲もらせ雨のよのそら」また友の人「谷水の音もさびしき柴の戸にあはれをそふるよはのむらさめ」とかくかたらふうち短夜のならひにて山まどのひま見ゆるにおどろきてあるじ「ほとゝぎす初音の後のこよひぞとおもふにたがふあけがたのそら」友の人も「郭公まつかひもなきつれなさをおもふまくらに夢もむすばず」とよめるに

どもいだされたり

山家松　　　　　　　　　　　　　　　　愚詠

かきつめていく世へぬらん山ざとの軒に木だかき松のことの葉

山家水　　　　　　　　　　　　　　　　あるじ

むら雨によしにごるとも明くれにすましてくまん山の井の水

山家橋　　　　　　　　　　　　　　　　友の人

たぎつ瀬のながれにわたす丸木橋このやまざとのありとばかりに

山家路　　　　　　　　　　　　　　　　愚詠

分入るも心ぼそしや山ざとのひとめまれなるみちしばの露

山家烟　　　　　　　　　　　　　　　　友

山ふかみいつかはかゝる宿しめておなじ眞柴のけぶりくらべん

山家苔　　　　　　　　　　　　　　　　あるじ

やまでらの法の戸ぼその明くれはしきみになるゝこけの通路

雨に水雞のおとづれけるを

柴の戸もまださしあへぬ夕暮にたゝく水雞のこゝろみじかさ

友の人「あけくれの戸ざしさだめぬこの庵にな

れてくひなのさぞたゝくらん」あるじ「夜もす

がらねてもきかなん柴の戸の明るも知らずたゝ

く水雞を」樵歌のきこえければ「都人たづねて

きぬと聞きしよりましばの道やいそぐ山がつ」

といへるに

暮ふかき道しるべとやをちこちにうたひかはしてかへるしば人

友の人「山びとのうたひつれたる聲だにもとほ

ざかりゆく夕さびしも」かゝることどもを口ずさ

ぶほどにくれはてぬれどそれかとたどる一聲も

きこえねばつれ〴〵なるまゝに所にあひたる題

物したまひしかなといふにいざなはんと云ひつる人のかへりごとにはみちのあないもとめてこれよりとありむら雨をり〳〵してまつかひあるべき空のけしきに都の友をさへおもひいづ

おのがすむ山ほとゝぎす尋ねきぬまだ世につげぬはつねきかせよ

かの人はいたう打ぬれてまどひきぬめづらかなる道のほどの物がたりなどするに鶯をきゝつとて「散り殘る花もやあらん山深み猶春ながらうぐひすの鳴く」我はきかざりけるもねたくて

わがためはうぐひすだにもつれなきを山ほとゝぎすいかゞあるべき

などたはぶれごとどもいふほどあるじは何くれと谷の底よりもとめ出でてもてなさるゝもいとめづらかに興ありて暮もてゆくまゝしめやかなる

軒ばの山のそばのかけぢげにものならず見るがうちに行過ぎぬこの寺はひがしにむきて旭耀山といふ額あり南は庭より西につゞきて分こし山なりあるじいと情ある人にて前裁にはさゆりなでしこすゝき萩さらぬ草をも見どころおほくうゑわたしてしけりあひたるにまだこぬ秋の面かげも立そひていとをかし東のみね高くそびえてふもとに水の音幽(かすか)に聞ゆ侍者にとへばこれなん・樋川(ひつぎがは)といふなりかの木こりのをしへし川なるべしすべて心もすみわたる所のさまなり

我もよをうぢの山べに家ゐせんつねに心のかくもすむやと

おもふにもまづおもひいづる事ぞおほかるやかく打詠るほどにあるじの聲きこゆいとはやうも

「おもはずよ青葉がくれの山里に都の人のとはん

ものとは」再吟におよぶにもだしがたくて

とひよれば言葉の花の時わかずにほふみ山の木がくれの庵

ほとゝぎすは聞き給ひつやととふによべはおと

づれ侍りきけふもたのもしきそらにこそあめれ

こよひはとゞまりて待ち給ひねかし日もかたぶ

きぬいで其道の行てにとまりつる人をもこゝに

いざなひてん文たまへ人していふともおはさじ

我ゐてこんといはるれど分こしほどを思ふにい

とはるかなる道をといへば京の人はさもおぼす

べかめれど山ぶしの身には何ばかりの事かはと

せちにこはれてそのひとのもとにとて

山ふかく尋ねもすべき時鳥人づてにやはきゝてかへらむ

さきの日宇治の山ざとにたづね入ることとの侍りしが友とする人はみむろとのあなた何とかやいふ里にしぞくありてそこにとゞまりぬそれよりひとり山ふかく道も知らでまどひ行くに鳥の聲松のひゞきいと心ほそし

わけなれぬ山のした道あふ人も夏艸しげみたづねわびぬる

今は二十餘丁も來ぬらんと思ふに里ちかくなりぬるなるべし樵歌の聲ほのかに聞ゆ知る人におひたらん心ちしていとうれしちかづきてとふに今しばし行きて木深くしげりたる谷の水音聞ゆるかたにぞさとはあなりとこたふをしへにたがはず心あての庵にゆきつきぬあるじの大𛀁とこなひのいとまにてのどかにうち物がたらひて

海だにもかはる世ぞかし早苗とるあたりやもとのかつまたの池

布留

ふるの山宮ゐあれぬと神やつこいかにわぶらんさみだれの頃

葛飾

五月雨はくむ人もなしかつしかやにごり初めたるまゝの井の水

名取川霖雨を

はれ間なきさ月の雨の名取河もと見しせどや ふちの 水底

筑摩

さみだれはあやめの葉末なみこえて岸のうはてにつくまえの水

藪浪里

降る雨にかやりの烟うちしめりいぶせく見ゆるやぶなみの里

大葉山

霞たちこのめけづりし程もなく大葉のやまに夏は來にけり

かゝりければ夏の末つかたすだれこもなどにてひさしつくらすとて

我もよを秋田にさせるかりいほのひさしからじのたのみばかりぞ

古人のよめる句を題にてよめる夏の歌の中に

ひとへなるすゞしもあつき夏の日につくしのわたは見るもうるさし

みな月のもちにけぬればその夜又降るをやふじのはつ雪にせん

みな月のあつきさかりは草の葉のゆるぐばかりの風もともしき

あつき日をいのちのうちと知りながら心よわくも秋をまつかな

名所をよめる時布計里を

やどごとに秋や待つらん夕風のふけの里人かどすゞみして

榧小河

風わたるならの小河の夕すゞみみそぎもあへずなつぞながるゝ

勝間田池

たるを見るにともしの松のしらむけしきのをかしきを母のよめとのたまへれば夢中に

山とほき松の木の間に殘る火や夜のともしの名殘なるらん

久しく心地そこなひてうづき十五日といふに病の床をはらひたる時

ながき日を春よりふして夏引の麻のをがらの空しくぞへし

夏の末つかたにやありけんある亭に人をまねきけるに女郎花を折りて花がめにさゝれけりその待ちし人のうちにさはることありてこざりけるもとへまたの日其花をつかはすあるじにかはりてよむ

女郎花色ゆゑ君がとひくやとまちてをりつる一枝ぞかし

軒みじかくてさし入る日のほとほりてたへがた

みなかみもあはれと見ませ老の波立そふ身にもはらふうきせを
　つごもりがたにはらへの日ぞと思ひいでて
けふごとにはらへてすてし年月のいかに殘りて老となりけん
　みな月のはての日かもにまうでて
さても猶うきせはおなじみそぎ川又人なみにはらへをやせん
　うづまさにあるころ難波の昌熹が春はこんとか
ねていひたりしに此里はなにのもてなしもなし
かきねのわらびもえん頃かならずなどいひやり
しが音もせで夏もなかばにかれより「かならず
と契りし春もくれはどりあやめふくなる月もへ
にけり」とありけるかへし
契りつるをりはしばしとまたれしがわらびもわかずしげる夏艸
ある夜の夢に母とともに北の山の木深くしげり

にしきともあやとも夏はすがむしろかけしく月のよるの涼しさ

夏　鐘

なつ來ればよひあかつきの短夜に時つくかねの聲もひまなし

月眞院にて月あかき夜かねをきゝて

月にこそひるのあつさも忘るゝを誰にねよとのかねひゞくらん

夏　虫

夏の野に露をもとめてとぶてふのつばさに見るも暑き日の影

六月祓といふ心を

いたづらに過ぐる月日と身のうさとかたへはをしき夏はらへしつ

荒和祓

みそぎ川なみかずならぬ人かたははらへすつとも猶やしづまん

夏祓を

何事もすつるとならば身につもる老もなごしのはらへならなん

なつの日のあつきさかりは吹く風もうすき袂を猶へだてけり
あつき日は草ばに待ちて見る風も猶袖までは吹きもかよはず

夏夕

松陰のちり打はらへけふの日も夕風たちぬゆふすゞみせん

夏海

夕されば南の風に雲消えてみるめすゞしき沖のいさり火

夏河

水無月の照る日にかれてふみわたるさゞれもあつき夏の山川

夏瀧

涼しさをこゝにせき入れて音羽川たきの外をや夏は行くらん

夏田

はるばると見ゆる水田の若苗の葉なみかたよる風ぞ涼しき

夏筵

廿八日ごろにやいとあつき日

此頃はうつる日影もをしまれずくれ行く空の風をこそまて

瓜

隣の女が門のほしうり取入れよ風ゆふだちて雨こぼれきぬ

ほそぢ

かゝる身のはてをつらく思ふには心ほそぢとまづなりにけり

みな月中ごろきり〴〵すをきゝて

きり〴〵すな鳴きそ我も夏かけて秋をかなしぶやま陰の露

夏艸にまじりて女郎花のさけるを見て

めうつしの花なき頃の女郎花なまめく色のほこらしげなる

すゝきのいたくしげるを

夏ふかくしげるにつけてむらすゝき露にみだれん秋をこそ思へ

夏風

いとあつき日そらのなべてくもれるに南にわづ
かばかり雲間の見えたるに

わづかなる雲間をもりて天津風吹きもやくると待つぞ久しき

雲間やゝひろごりて風吹おつるに

わづかなる雲間そひつゝあまつ風まちし袂に今宵吹くなり

世人はなどやかくたゞごとなるとわらはんかし

涼しげにはれたる夕あはた山の返照をめづるほ
どにかげのうつらざりければ

あはた山たかねの夕日消えにけり入相のかねも今ひゞくめり

六月末つかた友だちのもとにて夜ふくるまで物
がたりして帰るに北風いと涼しく吹きぬこの頃
深更になればかくあるをおぼえて

夏深きよはの寝ざめに吹きそめてをり〳〵ならす袖の秋風

いつしかと思ひし秋は山陰のいづみの水に今もすみけり

泉聲入夜寒

音きくもよるはひやけきまし水をいかで日ぐらし結びなれけん

燭影寫水

わたどののともしの火影またゝきて夕風ながらうつすやり水

扇不離手

たが手より置きかはじめんまとゐして風まつ宵のそでの扇は

扇風秋近

ほどもなく涼しかるべき秋ぞとはならす扇のかぜぞ告げける

六月中ごろ大雨うちつゞき陰雲はれざりける時

土さけて照るみな月も名のみして曇りふたがり日の影もみず

祇園の神輿をあらふ日あめふるに

八雲のや神のみこしを洗ふには天津水さへふりそゝぎけり

納涼

まだ知らぬ人に告げばやおく山の清水がもとぞ秋はすみける

夕納涼

みな月の照る日もさすがかげろふの夕さりくれば風ぞすゞしき

梅津川にのぞみて亭ある所にて夕がたまであそびていとすゞしさに

みなぎしの柳かたよる河風を袖にならしてけふは暮しつ

いとあつければ例のごとねやへもえいらでよめる

くれゆけど猶あつき日は端居して月なきよるも風をこそまて

あつき日松の聲のたえず聞ゆるに

山風を松にやどしてきく宿は吹おちぬ間も涼しかりけり

泉

夕立を見て

雨よりも雲やあしとき夕立のはれもあへぬに日影こそさせ

野夕立

ゆふだちの雨きほふ野のひとつ松たのむかげとやいそぐたび人

遠夕立を

けふもまた夕立すらし山のはのとほき梢の雲がくれゆく

空うちくらがりていま夕立のきほひくるにくる

まをはしらせてゆく音をきゝて

鳴神の聲かときけばむな車ぬれじと雨に急ぐなりけり

夕立のなごりすゞしきに山を見て

夏深き雨のなごりの夕より秋のけしきのうすの霧の山

避暑

水音の涼しき山のまつの陰あつきさかりはこゝに過さん

そのかして左衛門尉光興宮奇など作ひ伏見のみ
すといふところに蓮池あるに舟をうけてあそび
し歌よめといへりしに

かつまたのむかしの蓮も玉だれのみすのを池の花におよばじ

蓮

ありときくむねの蓮も池水のにごりにしめる身にはひらけず

荷露似玉

玉かとてつゝめば消えぬ蓮葉にをく白露は手もふれで見ん

ひむろ

いかでわれもるてふ人に身をかへてひむろの山に夏をすぐさん

夕立をよめる

山陰やめなれぬ瀧を岩がねにのこしてはるゝ夕だちの雲

みるがうちに雨きほひきて夕立の雲にかくるゝ嶺の松原

かやり火の煙にむせぶみどり子が聲もいぶせき宿の夕ぐれ

里蚊遠火

かびたつる賤がけぶりのいぶせさもよそめにしるき里の夕暮

六月いつかといふに鶯の庵のあたりさらで啼くに

鶯よさのみな啼きそなれとても老いぬる聲は誰かすさめん

瀧上蟬

おちたぎつ岩せの音にあらそひて山下とよみ蟬ぞ鳴くなる

五月三十日さながらふりてみな月の初さへはるべくもなければ

名にふりしさ月はさてもいかゞせん晴間だにあれみな月の雨

夕がほのかた大ひさごかたへになれり

はしたなくみのなりぬとや思ふらんつゝましげなる夕がほの花

ある年の六月中の八日などにや筑前介信卿のそ

けちはてぬ思ひの草やくちてしもほたるとなりて身をこがすらん

雨ふるべくくもれりといふに松の木のまのきら

めくは星にやとおもひて

はるゝ夜の星かと見れば松の葉にすがるほたるの光なりけり

橋蛍

とぶ蛍もえこそわたれ川橋のくもでに物や思ひみだるゝ

窓前蛍

八重とづるむぐらの露やもとむらんよなよなすだく窓の蛍は

小扇撲蛍

うなゐらがきそふ扇を打やめてあがるほたるを悔しとぞ見る

蚊遣火をよめる

たきさしてのこる烟もすゞしきは月になる夜の軒のかやり火

さよ更けてもえほたれたるかやり火の薄きけぶりに月ぞにほへる

鹿のたつあら山中のあらをあらがよすがはよるのともしなりけり

鵜川

夕月の入方ちかき山かげはやみもまちあへずう舟さすなり

かゝるみの契もかなしうがひ人なれものちせを思はざらめや

かゞりさす夏みのう舟かずそひて下すよ川は山かげもなし

夜河篝

みじかよのう舟のかゞりもえ盡きば何に後せのやみをてらさん

深夜鵜川を

深きよの川せにのこるかゞり火やおくれて下すう舟なるらん

大る川くだすうぶねのかゞり火のさよ更けぬれや稀になり行く

毎夜鵜川

夕月の入さのおそくなるまゝによなよな更けて下すかゞり火

螢をよめる

なくなりし人みたりばかりもあなり世のはかな
さを思ひて
なでしこもさゆりの花もちりにけりはかなき露のみのみ残して
かのさかりなりしをり
なでしこの露のひるねをうらやみてうなだれけりな姫ゆりの花
またおもひし
我宿に似げなきものぞなでしこに添ひてふしたる姫ゆりの花
照射
風わたる夏野の草の露のまの身を忘れてやともしさすらん
うかるべきむくいにかへてともしさししかまつ業もやすけなの身や
曉照射
曉に夜はなりぬらしさ月山木のまのともしかげしらみぬる
山中照射

露だにもいたくな置きそうれを重みまだかたなりに見ゆるなでしこ

天つ日の色にはさけど草がくれ光すゞしきなでしこの花

瞿麥副牆

咲きにけり殿のみつぼのあやひがきかきねのまゝに植ゑし撫子(なでしこ)

なでしこのさかりなるを見て

花の色はからくれなゐに匂へどもみなしき島の大和なでしこ

かでの小路の家にうつりすむにゆりなでしこの露にしをれて咲きたるをかしう見ゆればさきのあるじにいひやる

種まきし人を戀ひつゝ姫ゆりのそひてやねぬるなでしこの花

この花もほどなくちりてあくたとなりぬたゞ日かずのみうつりにうつりて此すまひもはやみそか過ぎぬるほどにこのとなりむかひなどにはか

ぬ草は拂はせなどするによめる

秋の野につくりし庭もおのづから花さかぬ草のかくやしげりし

またある時

かりはらふ跡よりしげる夏艸にこゝろの道のゆくへをぞ見る

風前夏草

はらはじな庭の夏くさしげればぞ露をたづねて風もとひける

來客夏稀

夏の來て庭草しげくなるまゝにかれこそまされ宿の人めは

夏野

日をさふる陰しなければおのづから野べの往來は夏ぞまれなる

いとあつき日人の野べゆくを見て

みな月のてりはたゝける日ざかりに野べゆく人やあはれ旅人

瞿麥

みな月の頃うづまさにて夜々默軒と月を見たる
にかれ京に行きてやどりけるつとめて「むかひ
るしわがなきほどの夜半の月ひとり心をすまし
てぞ見む」と聞えたるかへし
むねの雲はれねば獨むかふ夜も月にこゝろはすまずぞありける
夏草に朝露おきたるを見て
朝おきの露ぬるばみてふく風を待つこゝろなるころもきにけり
うづまさに住むころ夏になりて庭くさ高くなれ
ば手づからかりそぐにあたりの人來ていつなら
ひてかといふにおもひしこと
あじならぬ庭の小草の夏かりもよのうきにこそならひそめつれ
庭のいといたうしげりけるげにやむづかしげな
る虫などのむくめくもうるさくてもとよりうゐ

さみだれにあぜこす水を田草とるをとこのかへり見たるかた

五月雨にあぜこえぬなりたが田にも今は水口とめよといはまし

さつき七日のつとめて織田君のあづまよりのぼり給ふを粟田山のふもとに待ち奉るに此頃ふりつゞきたる雨をふくめる松風いとさむかりければ

ふらぬまもさつきの雨のけを深み露ちる松のかぜの寒けさ

山家水雞

くひな鳴く木の間に月はかたぶきて人音もせぬ山かげの庵

夏月を

あつさをもわするゝかげのあやにくにたえてみじかき夏の夜の月

ひとへだにいとはしかりし夏衣かさねまほしき月のすゞしさ

[illegible]ければ[illegible]

雲まよひさみだれ初めぬ今よりは都のつても絶えて聞えじ

ながあめ降つゞきていたくもりけるによめる

しばしこそもるとはしつれ五月雨のふるやは瀧をゐながらぞ見る

梅雨久といふことを

降る雨のはれぬ日數もあらはれて軒端の梅の色ぞそひゆく

五月雨久

をやみなきさ月の空のながめかな降出でし月もわするばかりに

さみだれの晴れぬ日數をかぞふればさつきの空も殘すくなし

梅雨送日

雲とぢて日をふる山の淋しさもおもひやらるゝさみだれの頃

深夜五月雨

あめをのみ聞きて更ぬるさつきやみおぼつかなしや鐘も音せず

早苗多

暮るゝまでうたふ田歌に長き日もうゑはつくさぬ早苗をぞ知る

苦雨初入梅

軒くらく木々の雫のをやまぬはうしやけふより五月雨の空

五月雨を

かりてふく軒のあやめの白露の玉ぬきみだし五月雨ぞふる

よのつねは東南に雲のゆけば日をふる雨もはれ

ぬるをいやかさなりてかきくもれば

晴ぬべきけしきをやがて立かへて雲の往來もさみだれの空

默軒がもとより「さみだれはいくへか雲にうづま

さの里は春さへ淋しかりしを」ときこゆるに

雨晴れぬさ月の雲のうづまさはあらぬよにふる心地こそすれ

まれ〳〵はきこえし都のつても此頃は絕えてな

木の葉さへゆるがぬ風に匂ひたつ花立花ぞかごとがましき

早苗

さなへとるたもとはうきによごるれど心は清き賤がなりはひ

みしぶつきうゑし澤田の若なへのしげるに賤がうさや忘れむ

みどりなるひとつ門田の若なへも幾千町にか引わかるらん

山畦早苗

うねごとにまづつかねおく早苗もて山田はけふや植つくすらん

遠村早苗

雨晴れて雲立のぼる山本の里わの小田にさなへとる見ゆ

夕に田うたうたふを聞きて

うづまさの杜にひゞきて聞ゆなり四方の田歌の夕暮の聲

いかなるにかきこえぬ日に

ひゞきくる田歌も今は友となりて希に聞えぬ暮ぞ淋しき

池菖蒲

かゝる跡にさゝ波こえて水廣き池はあやめの香こそみちぬれ

軒菖蒲

更にけふふくとはすれど苔深き軒はあやめもわかれざりけり

袖上のあやめ

色もなき麻の袖にもかけてけふあやめの草の香をぞしめつる

六日にあやめを見て

何事もけふかきのふのあやめ草たゞ露のまのすさびなりけり

又ある年の六日にあやめのしをれたるを

昨日だにひかれざりつるかくれぬのあやめは知らじけふのうきふし

軒のあふちの咲きぬるを見て

ながらへてあふちの花も咲きにけりことしの夏のかげは過ぎんか

風靜盧橘芳

さつきいつか

ともにけふもてはやさるゝ契にてなどかあやめを駒のすさめぬ

年々かぎりとおもふにまたいつかのめぐり來にけるあした庭のあやめを

ながらへてけふもみぎりのあやめ草あやしきものは命なりけり

五月五日におもへること

ことの葉はなにのあやめもわかぬまにさ月のいつか老となりけん

あやめ

すなほなるすがたにいかでならはましあやめにかくる露のことのは

あやしくも心のとまる匂ひかなあやめの草のかりの此世に

さみだれの空だきものは宿ごとにしめりてかをるあやめなりけり

尋ねてあやめをひく

人知らぬねざしやあると山陰のみくまのあやめ尋ねてぞひく

ほとゝぎすいま一聲ははなれその波のまぎれに遠ざかりぬる

山家郭公

昔わが初音尋ねしほとゝぎす今は軒ばのやまにこそ聞け

羇中郭公

郭公おのがさ月も旅人のやどりせんのはこゝろして鳴け

郭公數聲

ほとゝぎす聲のたえまも夏引の手引の絲の亂れてぞなく

短夜にたびく〵ね覺めてよめる

郭公なく一聲にあくる夜も老はいくたびねざめしつらん

郭公幽

靜なるねざめならずはほとゝぎす聞きもさだめじ遠の一聲

五月

ますらをは駒くらべせりをとめらもけふのあやめのねを合せ見ん

郭公留客

時鳥なかなく聲に山がつのかきねも人の過ぎがてにする

曉郭公

横雲のわかるゝみねのほとゝぎすたがきぬ〴〵の涙そふらん

深夜郭公

郭公しのぶこゝろやゆるぶらん人しづまれるよはに鳴くなり

郭公驚夢

待たゆむ夢のまくらのほとゝぎすさむれば聲の遠ざかりぬる

杜郭公

さよ中に誰をとふとか津の國のいくたの杜に鳴くほとゝぎす

野郭公

里ごとに待つなるものを郭公なぞしもひなのあら野には鳴く

磯郭公

我宿にやどりてをなけ郭公ぬれし雨夜の袖くらべせん
　むら雨の空に郭公鳴くかた
やよしばしかさやどりせよ時鳥一むらさめにふりいづる聲
　なくほとゝぎす
舟とめていづくときけば磯山の松の梢に鳴くほとゝぎす
　三月にうるふありけるとしのうづきにほとゝぎ
　すあまた聞きて
ほとゝぎすやよひくはゝる年なれば卯月もおのがさつきとや鳴く
　五月までほとゝぎすをきかざりし年に
つらからばたが名かたらん今よりはまたじさつきの山郭公
　うづまさにて此鳥の鳴くをりしもはとのかしま
　しくないとにくくて
ことゝりも聲やめてきけ郭公さ月過ぎなばいつか來鳴かん

ほとゝぎすおのがさ月の山にてもなほつれなくはいづち尋ねん

待郭公

夢にだにきくよはぞなき時鳥やすいもねずに待ちしあかせば
つれなきもえこそうらみね時鳥ながたのめたる夕ならねば

始聞郭公

郭公しひてまたずは人傳にあすこそきかめよはの初こゑ

郭公語少

宵の間にほのかたらひし郭公またゝになかであけぬ此夜は

友だちのとひきて歌よみけるに時鳥を

思ふどちかたらふ宵のほとゝぎす心とけてや聲もをしまぬ

一字百首よめるうちに鵑を

人なみにまつとも我をとひはこじ尋ねてきかむ山ほとゝぎす

雨のうちにほとゝぎすをきゝて

またの年の卯月六日の夜曉がた時鳥をきゝて

ねてやきく覺めてや聞きし夏の夜の夢のさかひの山ほとゝぎす

こぞもこよひの聞きつることをおもひいでて

明けばまづ人にかたらんね覺して山ほとゝぎすこよひ聞きつと

いつの頃にか月にやなく雨にやなく朝にや夕に

やなどおもひて日ごとにまてどなかぬに廿一日

といふ朝あまた聲きゝて

郭公う月といふもはつかあまりひと日の數をねにや鳴くらん

ある家にて時鳥を

散りのこる花をたづねて郭公靑葉がくれのはつ音をぞきく

さ月八日といふにいまだきかねば清閑寺わたり

は鳴きなんとてかれこれ行きて郭公を尋ぬとい

ふ心を

にて郭公の鳴きけるをめづらしがらせ給ひて貫之に歌奉らせ給ひしに「ことなつはいかゞなきけん時鳥こよひばかりはあらじとぞきく」とつかうまつりけるよしかの家集に見えたるなどいひて折にあへばたれ〳〵もあはれがりてよみけるついでに

今もそのをりをわすれずきなけども山郭公きく人ぞなきかへし　涌蓮法師

いにしへのはつねもけふのほとゝぎすをりをわすれずきく人もあり

これもおなじころにや夜ふくるまでありてほとゝぎすを聞きて

まどろまぬよはの枕のほとゝぎす物思ふ身はまたでこそ聞け

へるかへし

をる袖はさぞなわがとるたもとさへ花にたまれる雨にぬれつれ

卯花似月

うの花のさけるあたりはこゝろせよ月夜よしとて人もとひけり

いにし春の末より時ならずさむしかくては郭公いかゞとおもへるとき

けふよりは花ををしみし心をや山ほとゝぎすまつにかへなん

みかのあした

うづき來て二日へぬれど郭公まだ一聲もきかずぞありける

いつの年にか卯月六日人々來あひて拾遺集の歌をとかくいふにくれて雨ふりいでいとしめやかに更行く頃郭公の音信けるにむかしこよひ貫之主承香殿にて歌をえらびける時仁壽殿の櫻の木

なる池にのぞめり其池のめぐり松かへでいとおほくて水にうつる歌よめとありけるによみてたてまつる

水青きみ池にたゝむ木々の色をうつすばかりのことの葉もがな

初夏のころ麥はしげり大根花ざかりなるを

白たへの大ねの花は雪に似てもゆる草葉と見ゆるむぎはた

うつぎ

ほとゝぎす今かきなかん山がつのかきねの卯木(うつぎ)花さきにけり

卯花

しげりゆく楓(かへで)かしはのこぐれよりしろく見ゆるやさけるうの花

浪の色をうばひてなどか玉川のひかりをそへし岸のうのはな

雨ふれる日布淑がうの花をたづさへきて「雨の中にたをれる袖はうの花の雪のしづくにぬれしばかりぞ」とい

みどりなる廣葉がくれの花ちりてすゞしくかをるきりの下かぜ

新樹の風になびくを

きのふまで花にいとひし心さへ青葉にかはる風のいろかな

新樹露

朝な〳〵ぬれて色そふ若かへでみどりをさへや露はそむらん

新樹妨月

ほのみゆるかげも青みて若葉さすかへでの梢月ぞをぐらき

夏山のいと深くしげれるを見て

比頃にいづくのやまもつくば山深くぞ夏のかげはなりぬる

うづきのころ禪師のみこよりめすことありてま

ゐりしに御前栽の藤杜若さかりなれば

此殿はときはに春の色見えて花かきつばた猶さかりなり

積翠亭といふあなり東より北にめぐりておほき

見る時の心によれる花なればいづれまさるといかゞさだめむ
はつ櫻たまひし日よりむそ日あまり世にめづらしき花を見しかな
花ざかりほしにいのりしいにしへもかくまで久に見しとやはきく
外のちる後のさくらを見つるかな高きみ山のかげにかくれて
ことにとくことにおくれし花見るも君がみかげによればなりけり
はつざくら見しは生れしこゝちにておくれし花は命(いのち)とぞ思ふ

残花少

きのふまで残ると見しもちりそひて青葉の底の花ぞまれなる

花落枝緑といふことを

昨日見し花はいづれの梢ぞと青葉にたどるあさ戸出の庭
いとながき日のつれづれなるにおぼえずうちね
ぶるほどかをる香におどろきたれば桐の花なり
けり

神代にはありもやしけんといひしふることはかかるにやとおもひあはする事も侍らざりしがそもなべての春のおくれたる年にこそありけめことしは二月のなかばより咲初めたれば春のおくれたるにはあらでのどけき御代にあえけるにぞあらんといと〳〵めづらしきあまりかしこさもわすれて思へるまゝを例のたゞごとにとひこたへなどしてながき日の御わらひをすゝめ奉らむとて

夏やとき春やおくれしうの花に咲あはせたる遅櫻かな

一とせをまちつけて見し初花とおそき櫻といづれまさらん

待ち〳〵て見初し春の初花におくれぞせまし遅きさくらは

後にまた咲つぐべくもあらぬまでおくれし花ぞあはれなりける

花もけふまではいかゞあらんなどおもひしかど
なほにほひやかにとくさきしはをり〳〵ちるが
かへりて見所ある心地す

君まちて夏ぞさかりに匂ひけるしげきよもぎがやぶかげの花
いにしやよひの立夏の日

夏のくるやよひの山のほとゝぎすいづくにけふの初音つぐらん

更衣

なつにけさかへしはうとき心地してきならし衣猶ぞ戀しき

夏のきてかふるとならば花衣そめし心のこらずもがな

更衣惜春

昨日にもかへましものをはなごろもかさねてをしむ春の別路
四月十七日ばかりにや宮より花をたまひて御言
のはをさへたびけるかしこまりに

六帖詠草　夏

夏歌

やよひに立夏のせちありてのう月朔日によめる

春かけて夏はきぬれどみな人の花の衣はけふぞかへける

首夏

神まつるうづき來ぬらし山もとのもりの榊にしめはへてけり

首夏藤

けさよりの夏をせにとや咲かけし春はきのふの藤浪の花

やむごとなき御方の春の末つかたおはしまさん

ときこえしにうづきたつ日におはしましければ

などかわれきのふの春を惜みけん夏とともにぞ君がきませる

しばしだに影はづかしき老の波何かなにはのみつにとゞめむ
むかへにとてみやこよりくだる人ものりあひて
舟の中物がたりがちなる日暮れて何のはえなき
よるの波にさかふおとのみ聞ゆ明はなるゝ頃ふ
しみにつく經亮元廣などよべよりやどりてまつ
經亮「のぼり舟まつほどもなしかねてより君が
心のときにまかせて」かへし
わが舟のおそくもあらねどかねてとくやどりてまつにいかで及ばん
いとにぎはしくてかへりぬゆくさまにかへり見
られし軒の花のかつ〳〵のこれるを見て
なにはにていかでとおもひし古郷の垣ねの花は猶のこりけり

住よしの鹽干のなごりいつかはとかへり見らるゝあとのうら波
　くれはててもけしきいはんかたなし日臆秋もか
　ならずなどいひて「春霞立わかれなばすみよし
　の菊咲く秋をまつと知らなん」かへし
立かへる春のうらかは住のえの秋の月見ん時ぞわすれん
　くるつあしたは入江昌熹が亭にまねかれてきの
　ふの物がたりあるはふるごとどもかたりあひて
　歌よむべうもあらず夜ふけぬ
廿七日にか夕つかた舟にのらんとするにかなた
　こなたより人々來て別をしみ秋をちぎりなどす
　さわがしければもらしつ日とう「うら風はけふ
　はな咲きそなにはえに老の浪よるかげをとゞめ
　ん」かへし

ふ廣前にぬかづき

今はよにまつこともなく老いぬれど猶いのらるゝことのはの道

ふりぬとて松やはかはることのはも昔にかへせ住よしの神

松のすがたのさま〴〵なるを見て

ことのはもかゝれとぞ思ふおのがじしすがたかはれる浦の松原

こゝにきあひて僧日臘がいへる「古里の松も忘れてすみよしの春のうみべをあはれとも見よ」こ

のかへし

古鄕の松もけふこそわすれぐさ生ふてふ春の海べとひきて

濱べをかなたこなた見めぐるにげにかへるやう

もおぼえず時うつりけるなるべし遙に見えしひ

がたもみつ汐になれゝば舟にのりなんとす猶あ

かずおぼえて

しと聞きて以直といふ人舟にて迎に來たゞこの近きほりえに舟よすとしらせたればいとうれしうて行きてのりぬ何くれのほりえを過ぎて小川を南にくだすこれより住吉にゆく舟路とぞいふなるつのぐむあしはさはるべくもあらずながれにまかせこゝろゆく川舟なりつゝみのふりたる松のかたえは枯れながらさりげなく春めく色を見て

鹽風にかた枝かれぬる老松も猶一しほの春に逢ひぬる

松原のほとりよりおりてかちよりまうづむかしいはけなき頃はゝうへ姉君などともにまうで奉りしことも今のやうにおもひいづとしごとに詣拜し歌奉れどいと遠ければえしもまうでぬをけ

しよりたえたる橋もあまたある中にこのはしこそわきて名高かりけれとおもふに

聞わたるながらの橋の名ばかりも殘るはかたき世にこそありけれ

申さがりてなにはにつくむかしのずさの今はここにすむがまちつけてかたみに悦ぶ契れるやどりにてこしかたの事こたびの事などかたらふことおほくて夜更けぬればあすとく來とてかへしつ今はねなんとてぬるにねられねば

なにはの江のあしの一よとおもへども旅はふしうき物にぞありける

とくおきて心ざす御寺にまうで誦經などはてて御墓をがみす

なき人のいそぢのあとをとふまでも猶なもいでぬ身をやもどかん

きのふ佛事はてつればけふは住よしにまうづべ

て巳ばかりになりぬさてこぎいだす遠ざかるま
ま川邊にたちて見おくる人のいとちいさく見え
てはてはうせぬかくて八幡山ざきのあひだをく
だる

明くれに遙に見つる山々のふもとをけふは下る川舟

こゝかしこ花の盛なるもありちりたるもあり京
なる人に見せまほし水つねよりもおほくてとく
下るにかへりみればはるかにきぬれば

かへりみる都の山もかすむまでとほざかりぬる淀の川ふね

いとひろき川づらにこゝかしこにかもめのうち
むれてあそぶ心ゆくさまに見ゆ

鳥すらもおのがむれ〳〵あそべるを獨うかるゝ我や何なり
今はながらわたりにもなりぬつく〴〵おもふにむ

がためぬさとなりてや風にちるらん」
此度のぬさとちりなば櫻花かへりくまではのこりしもせじ
あす立たんとするこのくれに澄月より「しばし
だに別るゝはをし老樂はあすの夢路もはかりが
たきに」わかれをしむとて人のたちこみけるほど
にてかへしもせで夜ふけぬ曉いでたつとていひ
つかはしける
しばしなる別とおもへどおいらくはこれもや終の旅路ならまし
廿日のあかつきなりければかすめる月のやゝう
すらぐまゝやま〴〵の花の色わき初たるけしき
いはんかたなし
月はのこり花さく山に雉なきてあかぬことなき春の明ぼの
辰の刻ばかりふしみにつく舟のこと何くれとし

おいの後岡崎にあるほどやよひの末つかたなに
はにゆかんとするに經亮燧袋などたづさへきて
「おもひいでばうちつけに見よかり初の別をだ
にもをしむ心を」とありしかへし

うちいでてみねどもしるし石かねをいれし袋の中のおもひは

こたびのわかれに布淑がよめる「すみよしの春
に心はとまるとも都の人のまつを忘るな」京にか
へりきてかへしはつかはしける

都にてまつらんとだにおもはずは立かへらめや住よしの里

重愛がいへる「野山なる盛の花をめにかけてこ
がれぞゆかんよどの川舟」これも京にかへりて

舟下すかはべ山べの花盛ともに見ざりしことぞくやしき

花のちるを見て敬儀「さかりなる花も旅ゆく君

からもよみける春の歌の中に

殘りたる雪にまじりて山里の垣ねはだらに生ふる若草

子日(ねのひ)とてかずまへられればあづさ弓おしてもとはめけふのまどゐに

とくるかと見るほどもなくこほりけりまだ春あさき池の水なみ

梅がはら鳴くうぐひすにすかされて花もやさくと尋ね來にけり

明そむるみねの霞のひとなびき春のけしきは花ばかりかは

こよひ誰やすいもねずにみよし野の花ちる山を月に分くらん

とき駒に猶むちをこそそへてけれ花もやちると心はやりて

ちりがたのみねの櫻に風ふけばをしむ心のそらにこそなれ

ながからぬこのよなるまは春の日のゆほびかにてぞ經(へ)ぬべかりける

をとめらが袖ふる山のすそべらの赤く見ゆるは岩つゝじかも

なはしろのあづくる賤(しづ)もちる花のせきとめがたき春やをしまん

すきかへす春のあら田をたつ雲雀(ひばり)いづくに草の枕かふらん

るを見て

朝な〳〵かれ行く水や草川のをちこち分る苗代の頃

室山

室山の老木ももとは若櫻世にめでられし花にやはあらぬ

蘆屋里

あま人のわがすむかたもたどるらし霞むタのあしのやの里

千葉野

おもふことちば野の春にもえ出るこのでがしはのいつかひらけん

鹽竈浦霞を

しほがまの烟もかぎりあるものをうらの名だてに立つ霞かな

末松山花

松かげに咲ける櫻は末の山したより浪のこすかとぞ見る

古人のよめる詞を題にして人みなによませみづ

わかえつる君にあゆやとたまへりし藥のみつゝいかむとぞ思ふ
新宝のもよほしをきゝて
とくたてよさらばみやこに住みぬべき心おちるん君がにひむろ
心ちそこなひてこもりゐけるほどまれに見いだ
すに口のうら〳〵とてるを
いたづらにねてもふるかな花みてもをしかりぬべき春の永日を
風のこゝちにてわづらはぬ人なかりける春みづ
からもやみて
みな人の身にしむ風は春ごとの花にいとひしむくいなるらん
櫻のちるしたにこねこのざれたるかた源氏物語
の心と見ゆ
思ひ入る身こそ及ばねこの人よなどすのうちの花にむつれぬ
朝ごとにこのあたりありくに草川の水のあせた

初春の頃上田餘齋がとひし後これよりいひやる

「いと〳〵うとく經し我をとひ給へりし御心ざしのうれしさ言にもつきぬを筆にはいかでと思ひながら禮(ゐや)をだにとてなん去年(こぞ)見參りしよりはゐたちおももちいといたうわかやぎたまへるなん道のためにもいとゞたのもしうこそおぼえ侍れ寒さもいましばしならんいとようしのぎたまへ初春のつどひおぼしいでて梅何くれと心よせたまへりしに老たる馬の重荷(おもに)おふに小付(こづけ)とやらん病にさへなやまされ寒きにうてではこたへせで過ぎつるつみさりどころなくなむ」

言そへてたまへる梅ぞはつ春の草のむしろのみやびなりつれ

　槩たまへるうれしさに

醫師にちぎりしことあれば藥をうく日をへて快(こゝろよ)けれど老病つかれすみやかにいえがたしなす事もすべてやめて此うちの所爲にはおもふことあれば人してかい付さすあけぼのに

とことはにあかぬの山のいつにかはおもひくらべん春の明ぼの

夜のあくるを待わびて

やみぬれば夢ばかりなる春の夜も明るまつまぞ久しかりける

よもすがら雨ふるこゝかしこもる音をやみなくいもねられぬまゝによめる

もる音にいのねられぬは春雨のふるやにたへてすめばなりけり

むかしの住家も漏りて床かへてねたる夜のことなどおもひいでて

雨もりてねざりし夜はおもふにも身にはふるやぞ契ありける

あら玉の年の四とせをふる寺の別は春も袖ぞ露けき

こぞより心ちそこなへれどおどろ〳〵しくもあらねば寒さにたへて此頃まではかくあれどこの後をり〳〵あしくてふしおきしつゝあるに二月十五日夕よりことの外心ちあしくいにし年のわらはやみのことあつしくなりて何事もおぼえずあかつきがたすこしさめたるに人々あまたたすけなどするを見てよべのことをとひ聞きて知りぬこれよりあつしさはさしもあらでうちふしてあるに三月朔日(ついたち)頃すこしくふ物の味などいできたる三日に又ありしごとあつしくなりぬ四日より又すこしをこたり侍り瘧(わらはやみ)にあらず瘦(えやみ)にあらでいとあやしければこたびは中にし何がしといふ

りすむ此寺十とせばかりすむ人なしひろき寺の
いたうあれたる所なりうつりける夜ことのほか
さむくよもすがらいもねず

荒れにけるはちをか寺の旅ねには春さへ寒し身をさすがごと

よあけて見れば軒に梅ありいとよくさけり都は
一木ものこらずうせたるをも知らぬさまなる色
香なるもあはれにて

よはなれて人もすさめぬ梅なれや思ひの外の春にあふらん

これも都にさきてましかばいかでかこたびの烟
にもれましとぞおほゆる

わらはやみしてをこたりぬれどいとたうよわ
くなれゝば今は京にかへりてをといふにまかせ
て住なれしうづまさ寺をいでくとて

春光只是在明朝

春はたゞ明けんあしたを限ぞと思ふこよひのいやはねらるゝ

三十日に

きのふまで猶けふありとたのみしをそもかたぶきぬ春の日の影

三月盡

暮れぬるか春はこてふの夢のまになれ見し花を俤にして

三月盡夜

まどろまで猶ぞをしまむ花鳥の春も一夜の夢とこそなれ

天明八年の正月はての日かも河の東なる小家より火あやまちたるが風あらましく吹きて時のまにひろごり内裏よりはじめみやこの家ゐのこりなくやけたりしかばおのれもすむべきところなくて二月十三日のゆふべより太秦十輪院にうつ

山ざとの垣ねのわらびをりに見し人めも絶えて春ぞくれ行く

旅宿暮春

雁もいぬ春もかへりぬくさ枕たびにやひとりわがのこらまし

此十日あまりまでに花はちりはてたればやよひの末つかたはたゞ青葉のみしげりて夏にもかはらざりければよめる

花もなき春の日なみの末の山夏にこゆとも色はかはらじ

春の別

うつりゆく春を惜しむもあす知らぬ身を歎くとや人の思はん

殘春

花鳥におくれて又や此春ものこる日數をひとり惜しまむ

殘春二日

けふくればあすもくれなんあすくればことしの春は殘らざるべし

春夕

そことなく花の香かをり櫻色になべてかすめる春の夕暮

春獸

春とてもとまらぬひまの駒なるをのどけきかげとなどかたのみし

春のとく過るを惜しみて

梅ちりて柳さくらとうつるより見る〳〵花の春ぞたけ行く

暮春月

をしと思ふ春の日數はくれそひてよな〳〵おそき有明の月

暮春花

さきちるは程なき花のさかりをもまたでや春の暮れて行くらん

江上暮春

けふの日も入江かすみて行く舟の跡なき波に春ぞくれぬる

山家暮春

慈照寺にあそびけるに池の藤はいまだしくてそ
れかあらぬかなどいひてかへりざまに

咲くもまだおぼつかなきを立かへり又こそとはめ藤波の花

折藤

をりて見む夏をかけては匂ふともかへらぬ春の藤波の花

池藤

いつしかとふぢ咲く池の水かゞみうつりにけりな春の日數は

松間藤

松の色の又一しほのふぢかづらかゝれとてしも花はさかじを

雨中藤花

そぼちつゝ折りけんふぢのふることもかくこそ雨のけふのぬれ色

春煙

春寒き松がうら島かすませて心あるあまや烟立つらん

かきつばたを折りて人におくらんとて手づから
　もてまうで行きけるに
杜若しほれやすると道すがら袖に日かげをへだててぞこし
　夕山吹
暮行くをおのが色とや夕露に咲きものこらぬ山吹の花
おもふこといはでやけふも山吹のくるゝまがきを人もとひこず
　里山吹
山吹のさかりとなればやへ〳〵の人もとひけり玉川のさと
光あるさとは玉川やまぶきのさかりは人のむれてこそとへ
　筥山吹
しめゆひしまがきも見えず山吹のやへにかさなる花の盛は
　かつらよりあゆに山吹をかざしておくれるに
いはぬ色はいづことさしてわかあゆのかざしにくめば玉川のつと

菜花のさかりなるころ山吹もさけりければ

山吹も菜もうき花の色ぞかしさけば近づく春の別路

菫

あかずしてくるゝ春野の露ながらつめるすみれに月ぞうつろふ

紫のすみれの花のにほへばやなべて春野のあかず見ゆらん

古砌菫

あれはてて野となる庭のすみれ草爰ぞ昔の垣ねとやさく

つゝじ

旅人のいほる山べにたく火かとこぐれにみえて咲くつゝじかな

樵路躑躅

白妙のつゝじ花咲く柴人のかへるさ遲き頃もきにけり

杜若

水かれてふるき澤べのかきつばた咲けるわたりや八橋のあと

苗代

種蒔きていくかへぬらんみごもりに薄もえぎなる小田の苗代

河苗代

こむ秋のたのみもさぞな河ぞひの苗代水はゆたかにぞひく
いたくかすめるにかへるのなくをつらねうた

霞そひくもれる春の夕暮に池のかはづの雨こひてなく
ほどもなくくふりいづ

こひてなくかはづの聲やきこえけん天津空より雨くだるなり

雨くだる夕の空をながめつゝ入相のかねの聲をこそきけ

夕蛙

春深きゐでのわたりの夕まぐれ霞む汀にかはづ鳴くなり
大根の花麥の中にまじれり

白妙の大根の花は雪に似てもゆる草葉と見ゆる麥畑

木ちりおくれたるがことさらにめでたくおぼえければ

吹のこす嵐の山のさくら花盛をのみやあはれとは見む

殘花誰家

たれか住む庵のかきねの花一木よそには見えぬ春を殘して

深山殘花

おそく咲く花なりけらし山寒きをきその奥に見ゆる白雲

ひゝなの讃をこひけるに

ひとかたにうきをはらはゞ咲く花のもゝよろこびのみの日なるべし

彌生(やよひ)三月いといたうさむかりけるに彌淸がかつらにかへるにつけて布淑がもとに文(ふみ)つかはすかへりがきに

まち〳〵し春の寒さはさくもゝの三千とせをふる心地こそすれ

木の下を猶にほはせてさくら花散りても人をおこがらせつる

夕落花

よしやふけ暮れなばなげの櫻花ちるをだに見ん春の夕風

月前落花

面かげを後もしのべとやよひ山有明の月に花のちるらん

夜思落花

をしみつる人はかへりて櫻ばなひとりやちらん夜の山かげ

河落花

よしの川ちりかひくもる水の上の嵐を見する花のしら波

海邊落花

櫻ちる春のみなとの追風に花つみそへていづる百舟（もゝふね）

さが山の花見にまかれりけるにはやう散過ぎて

はべりければかひなくて山ふかく尋ね侍るに一

惜花馬蹄遅

乗る駒もふまじとや思ふちる花の陰ゆく道は過がてにする

花のころはと思ひしにもとはざりける人をおもひて

こぬ人をいつとかまたむあら玉の年に稀なる花も散りけり

落花

をしむとてとまるべきにはあらねども散る花ごとにあたらとぞ思ふ

ちるがうへに散行く見れば櫻花をしむ身のみや又のこらまし

纔見落花

この春のうきはまだ見ぬ木の本の花はいづれの枝よりかちる

落花を見て

さくら花今はとさそふ山風に心あはせて散行くもうし

花落樹猶香

一乘法師が殘花を折りて「心ある人に見せずば山ざくらあだに散るとや花のなげかん」とよめるかへし

手折りきて君し見せずば花ははや散過ぎにきと我やなげかん

禪林寺に花見にまかりしに誦經の聲の聞えてあらしに花のちりみだれけるを

うべしこそ世は常なしととく法の聲のうちにも花ぞ散行く

志賀山越

こえなづむ妹が袂に咲きかけて花をかさぬるしがの山風

東山にあそび侍りけるにあらしの山にちりのこりたる花のみえしが夕かけていとさだかならねば

それとなくかすみはてても見し花の俤のこすゆふぐれの山

櫻花香ごめにぬさと散りしより塵にや神のまじり初めけん

花與春匂

誰か知るさけばかたみに匂ひそふ花と春との深き契は

老木櫻の𛀁を

我も老さくらも古木ふりせぬはあかぬ心と花の色香と

八重櫻の𛀁に信美が歌こふに

深くなる春の行へも一枝に思ひやらるゝ八重ざくらかな

春ぞすくなきといふ句を

かげなれん春ぞすくなき老が身はよしや日ごとに花を見るとも

長門介彦明が白詩選新刻なりぬとておくれりふ

せる枕上におきてをり〳〵見などすそがうちの

五言律を見て花下歎白髮を

しらかみにまがふ櫻をうつら〳〵見れどもいはん言のはぞなき

磯花

春深き沖つしほ風吹くたびに花の波こす磯の松原

花林朧月

おぼろよの月もかげをやわきつらん花のはやしはさしもかすまず

雲花無定樹

咲くころと思ふ心に松杉もわかでやかゝる花のしら雲

古寺花

色に香にめでずは花のさがの山めぐりもあはじ法の輪の寺

山家花

いかなれやよをもいとひし山里の花の色香にそむる心は

閑居心

人とはぬ宿とて風のふかざらば猶靜にぞ花を見てまし

花䖝

花自有情

外のちる頃しも咲きて山ざくら心ふかさを見するひともと

依花忘行

妹がりといそぐ心をわすれめや道の行ての花しさかずば

山花

一むらの雲こそかゝれ山のはの遠き梢の花や咲くらん

山鳥のをのへの櫻咲きにけり長き日さらず雲のかゝれる

嶺花

ちらぬまも心づくしを風越(かざこし)の峯にしもなど花の咲くらん

暖雨晴開一經花

春山の雨あたゝけきあと見えてかけぢに咲ける一本のはな

關花

あしがらの八重山ざくら咲きにけり春の嵐のせき守もがな

舟もがな波路さしはへかの見ゆる磯山ざくらたをりてもこん

翫花

かぎりある花の日數をぬば玉のよのま見ざらんことのくやしさ

花未飽

わけのこす野山を多み櫻花心ゆくまで見し春ぞなき

依花待人

とはれぬはたがためかうき蓬生の花よ人めを待つけて見よ

花下送日

おもほえず立つにとやすき日數哉なれてもあかぬ花の下かげ

花下逢友

咲きしよりあひ見ぬ友の戀しくは花の陰をぞとふべかりける

花時無外人

咲きしより日ごとにとひて山守も木こりも花の友となりぬる

盛ぞときけばなつかし陰しめてよとせはなれし太秦の花

寒暖ほどよくなりてこゝかしこの花の所もおも

ひやられつゝ

山櫻咲きそめしよりわたつみのおきな心も花になりぬる

曙花

花はたゞ霞み渡れる絶間よりしらみそめたる明ぼのの色

見花

春ごとに見るとはすれど櫻花あかで數多の年もへにけり

年々見花

見る友はとしぐかはる花の下になれぬとおもふ身はふりにけり

心靜見花

物ごとに心ちらねば名にたちてあだなる花ものどかにぞ見る

隔路見花

ば御詞はなくて「あかざりしこその遊びを思ひいでて又もとひよるまつのした庵」「しら雲をしるべにこそはとひきつる庵のとぼその花はちりしか」見もあへずいらせ給ひ暮ごろまでおはしますに御かへしたてまつる

塵をだにはらひもあへず松かげの苔をおましになすがかしこさ

御かへさもよほさるゝ頃野べに鶯の鳴きければ

うつりゆく花の夕のみくるまをしばしとぞなく野べのうぐひす

くるつあした雪のごとちるを見て

かきくづしけさよりちるは君がこん昨日を待ちし花にやありけん

昇道がさがの山櫻見しかへさにうづまさの花を見て「古郷となりにし宿のさくら花なつかしきかに心とまりぬ」とあるにかきそへし

くれはとりあやにめづらし二月の望も待あへず咲けるさくらは

爛漫と咲きぬる見てぞ霜にまたしぼめる老も春を知りぬれ

おくに

かくなんときこえあげてよかはづなくゐでの山吹をりもよからば

あるふるみやの花さかりなるいけべにてそこに

ある人らと物がたりする程水面に文見えて雨ふ

り出で山陰の池邊雨中の樹色のえもいはずおも

しろければ夕のかね聞ゆる頃までありてかへる

かぐらをかの東の路より晝見し山をのぞめば松

の色のけぶりたる中よりこゝかしこの花のくれ

のこる色のしづかなるけしきいはんかたなし

松の色は雨にくれそふ木の間より猶ほのみゆる山櫻かな

例のおほん方より御使とて御文ありひらき見れ

をたづさへ來りて「わきてとく咲きぬる花の心にもまつらん人に見えんとやおもふ」と聞えしかへし

をとゝしもこぞもことしも手折りきて君ぞみせける初櫻花

あるとしの二月十日ばかり宮より初花たまへるに

この春はたまはん花を見んとてやけふまで老のながらへにけん

きのふのかしこまりにたへてはつ櫻をいたゞき

かはづふしにふしみみずがきにかきてけふこと

あけし奉る

はげみつゝ花も咲きけりよにひゞく君がことばの玉の光に

つまづかず咲きぬる花か人はまだ寒きひま行く駒にならはで

さす竹の君がみはしの初花はよにまれらなる種ぞあるらん

うにぞきこえしけにも君が光にはひまの駒もつながるべくぞおぼゆるけふゐたちけいめいするうちさくら花をおきて思へることをよめる

さかりをやいそぎたるらんきのふまでふゝめる花もけふは咲きぬる

くちをしと何かこちけん櫻花色そふけふもありけるものを

蘭省の花の程とて大君のとひますけふぞいろかのこすな

春をへて知られぬ花も今よりはとはれぞせましよもぎふのかげ

永きよのおもておこしをいのちにてふるきの花も久ににほはん

宮のたまへる御うた「春あきのながめつきせで朝なゆふな老をやしなふ松の下庵」御かへし

常に我みなみの山のことぶきを君がみあへにけふ奉る

都にかへりすめどいたくおとろへていでたゝんも物うくておもひやりつゝのみあるに布淑が花

こしまだしくやと思ひしかどさかりみちて折にあひたりいらせ給ひて御湯たてまつり御くだものまゐる夕かけておほみき奉り御おろしあまたたび給はりゑひさまたれておのがよろほひわたるうしろでをも忘れてふたへにかゞまれる腰をしひてのばしてあなたふとけふのなどうたひ舞ふさまはえびのおよぐに似たりとをかしがらせ給ふべしかうかしこみ嬉しみ思ふはもとのあるじのたまも我にとりつきてよろこびをそふるにぞあらんかし宮も興にいらせ給ひて欲倩遊絲繋夕陽の御句玉聲ひゞけり慈延御次にはひわたりめでまとひて御和を奉る「君がためつなぎとめなん絲遊のながきにあかぬけふの夕陽を」などや

しき花のちぎりにぞ侍るなど聞えあげしを例の
すたれたるをおこさまほしうおぼす御心にやあ
らんそれみそなはさんさかりつげよとのたまふ
にうちおどろきあしく申てけりとわきをかきて
いかでかさることと侍らん入れ奉るべきおまし所
も侍らずいとかたじけなくとわぶれど花あれば
すなはち入るとこそいへ何かはくるしからんた
だそのいなしきのまゝにてとのたまふにいかゞ
はせんむぐら蓬のふる葉かきはらひふりたる松
かげにくさのおまし所まうけて待ち奉るはみち
とせになるてふ桃をもてはやせしきのふのなご
りなほのどかなるけふの空のいたくかすみて雨
にやならんとあやぶみしもいとよくはれ花もす

をも聞しめすついでにけふの御題つかふまつれとて給はせけるを開き見れば春夕花とありけるをやがてよみて奉れりき

立ならぶ松のみどりもわかぬまでくるゝ色見ぬ山陰の花

此宮のみこゝろばへのかたじけなさにこれよりぞまうのぼることにはなりける

あらし山の花見にまかりて京の友にあひて

さけばちるさが山ざくら露のまの色にめでつと人にかたるな

宮のおまへにめしいでられていとのどやかなる夕(ゆふべ)こゝかしこの花のみものがたりの序(ついで)に翁が庵の一樹はむかし紀宗直が南殿の種をうつしうゑたるが年ごとににほへどいまはさるよし知る人もなくて蓬(よもぎ)がかげに春を忘れず咲けるはくちを

まどろみもあへず目覺て蝶のとぶを見て

をしみかねまどろむ夢のたましひや花の跡とふこてふとはなる

太秦にあるほど花盛なるころゆふさりつかたつれ〲とながめゐたるに道覺つと入來ていへらく今朝より嵯峨山の花もてあそばせ給ふと宮のおはしましたりけるがいかなるみこゝろにかおほんかへさ急がせ給ひつるが道の空にてろあんがかくれたる蜂岡寺にあないせよと仰す今いらせ給ふべしと〲かどむかへをとおどろかすにゆくりなければ塵うちはらふひまもあらでずさなどがうかゞひ奉らんも畏く障子おしたてなどして門邊に出づればはや御輿かきいれぬおましたつかたにさうじ奉れば何くれのうたろんぎ

おもへど太秦にけふをすぐすまじきことのあれ
　ばしひてかへるに
陰なれし昔の花をよそに見て我がすむ山に急ぐ春哉
　廣前の花のもとを法師の過ぎがてに行くを
あだしよに心をとめぬ法師も猶かへりみる山ざくら哉
　きのふひねもす風ふきあれこの曉雨おびたゞし
　く降るによもの梢を思ひやりて
散りかたの昨日の嵐けふの雨いかでか花のたへてのこらん
　花散りしより心ちも例ならず立ゐもことにくる
　しう覺えければ
ちりしより立ゐくるしき老波は花によりてやしばし忘れし
　ちりのこる花を尋ねわびて
花はみなちりはてにけり今よりは何にまぎれて春をくらさん

信言がもとより「おもふどちむれつゝとはんさくら咲く君があたりの春をつげこせ」といひおこせたるに

しづかにと住む山里の花ざかりむれつゝとはゞなしとこたへん
またさがの花の頃をとひたりしに

春寒きことしのさがの花なればやよひの末や盛ならまし
やゝちりぬべくきゝて行きて見るくるゝまでありてかへりがてにおぼえければ

又こそと思ひし花のさかりだにかへさはかげの立ゝかりしを
禪林寺あたりにえさらぬことあり行きて一夜あかしてつとめてかへるさにこのわたりの花年年見にこし事をおもひ出でて東北をかへり見るに如意寺の一木の花さかりなる行きて見ばやと

いかばかりしづけからまし山ざくらをり〳〵風のさそはざりせば

山ざくらちるこのもとは谷川の音も嵐に聞きなされつゝ

かゝることどもいひて木のもとにしばしまどろみ侍りて

咲く花の木かげならずは物すごき山の岩ねに旅ねせましや

やめる身はいとどあはれにおぼえて

こん春はいかでか見んと思ふ身に猶をしめとや花の散るらむ

あるとしの春さが山の花見にまかりけるに月くれければ大井の里にやどりて

大ゐ川かは音たかくなりにけり嵐の花に風すさぶらし

うづまさ寺にうつりすむ春さがの近ければまだしき程より花のつて聞くにおぼつかなからず

この春はさが山近く家ゐして花の便を聞かぬ日もなし

山ざくら咲きそめしより九重の都の春ぞいとゞゆかしき」といへりけるかへし

花といへばひなも都も常なきを何かはこふる九重の春

梅見にまかりありきけるころ東山にいとおほきなるさくらのあるを見て花の頃は又もとひこんなどいひたるを此頃思ひいでてひとり二人いざなひて尋行くに心あての花咲きぬと見えて山の半にし雲のおりゐたらんやうなり分のぼりて見るに半ちり過ぎたり盛をこそとはめと思ひしをいとくちをしこゝを如意寺といふときゝて

我が思ふ心のごとき寺ならば風には花をまかせざらまし

雪とふるころしもとひて山ざくら心あささを花にみえぬる

吹のぼる谷のあらしにさそはれて空にぞ花の雪はちりゆく

あるとしの二月末つかた人々あまたさが山の花見にまかれりをりよくさかりにて花のもとにまどゐつゝ往事をおもふに年々この花になれぬれどこの二とせ三とせやまひにをかされてえとはずいたく老いぬればこむとしの春ともたのまれねば

櫻花見ざらん後の春かけて思へばいとゞかげぞ立ちうき

其折しもある人のもとより「ときぎぬの春とも知らぬ身にしあれば花の錦にたちもまじらず」といへるはいたくよにわびてけふのいでたちなども心にまかせぬとなるべしいとあはれにて

ときぎぬのおもひみだると聞くからに花を見るにも袖ぞ露けき

默軒がたちまにあるほど花の頃かれより「山

又ある時周尹のとひきてあらしの花見んとある
に打つれてゆく雨いたうふりいづ道もあしかり
なんとていへにかへりしが夕つけてはれげに見
えける時かの人のいへる
「春雨の雲もはれゆくあらし山日はたけぬとも
おもひたゝばや」かへし
よしさらばこよひは花の陰にねて嵐の櫻ちるをだに見む
二尊院に行きて何くれとうちかたらふにあらし
の花も盛過ぎぬときゝて
春雨にふりはへとひしさがの山されば よ花のうつろひにけり
この近きわたりに涌蓮道人すみ侍りけるそのも
とへとていひやる
草の庵にすます心のいかならん花のためうき雨風の空

いつのとしにや彌生十日ばかりさが山の花見んとて伴資芳よぎぬみちなれば立よられぬ此ころは日ませに雨ふりてけふもいかゞなどおもひしによくはれたり朝戸出の寒きはれいの風などにをかされけるにやあらん

さくら花まちどほなりし年なれば盛もいまだ朝寒き空

かくて打つれてならびの岡御室など過ぎ大井の川邊におりゐてはかなきこといひかはし遊べば心ちの物むづかしかりしもなぎぬ春の日もやゝくれて花の色のほのかなるころ涌蓮法師も來あひてきよゝうにいりぬ月かすみながらさしていはんかたなくしづけし

大ゐ川月と花とのおぼろ夜にひとりかすまぬ浪の音かな

春駒

のるこまのうらやましとやいばゆらんとりもつながぬ春の野飼を

花の歌

一年の花てふ花をつくしてもさくらにたぐふ色やなからん

長閑なる頃しもさきてとくちるぞ花のめでたきいはれなりける

あだなりと花やかへりて思ふらん常なき色にそむる心を

みやづかへせし時殿にて常にある所の軒端の花のさかりなるに人々の大なる枝どもおろしてとりどりあかれゆくにおもひしこと

をらでたゞかくながらみよ庭ざくら風のさそふも惜くやはあらぬ

こゝかしこ花咲きたりときく頃雨風のはげしきに

咲初めてさかりまたきに雨かぜのあわたゞしかる花の春かな

春曙雁

行くかりも別れがたみやねに鳴きてかへりみすらん春の曙

夜歸雁

春の夜の夢のまくらをとひすてて闇のうつゝに歸るかりがね

いとあたゝかなる日かげにありて打ねぶるにけぢかくきじの鳴くを聞きて

人めなき垣ねのきゞすねになきて春の眠をおどろかしつる

よぶこどり

いづこぞやよぶこの山のよぶこ鳥霞がくれの夕ぐれの聲

ひばりを

霞わけ今かおつらし夕ひばりはるかに聞きし聲の近づく

雲雀落

野べ近き垣ねに床やしめつらんかすめる軒にひばり落つなり

梅かをり柳けぶりて糸雨のつれ〴〵とふる春の日長さ

朝に庭の面しめりて雨ふりしけしきを見て

ふるとしも知らでねし夜の春の雨をあけて見るこそのどけかりけれ

小雨ふる夕暮からすのなくを聞きて

小雨ふる春の夕の山がらすぬれてねにゆく聲ぞ淋しき

雨の音のすれば櫻の梢いかならんとて

春雨の音きく度に窓あけて軒の櫻のこのめをぞ見る

遊絲

春の日のゆた野のはらに遊ぶ絲のいつくるべくも見えぬ空かな

春曙

露の身を常にもがなと思ふまで心ぞとまる春の明ぼの

歸雁知春

一年はわすれて立ちもおくれなんかすめばかへる春のかりがね

桂より布淑が「かつら鮎とると出立つ道のべのわらびをさへにけふ奉る」とて二くさおこせたるかへし、

かつら鮎かはべのわらびとり〴〵にをりを過さぬ春の音づれ

春月

暮ふかく霞こめたる花の色もほの〴〵見えてにほふ月影

去年(こぞ)よりもかすみそひつゝ春ごとにわがよのふけをみする月かげ

中空に見るかげよりも春の月いづさいるさは猶ぞかすめる

江春月

そことなく夕しほみちてかすむ江の春のみるめは月にこそあれ

春雨

春雨のあやおる池は時わかぬ水のみどりもそふかとぞ見る

梅柳のさかりに雨のふる日

あら玉の春のやなぎの淺みどりいとくりかへし幾よへぬらん

柳の繪に

淺みどりよりて見ぬまに青柳のいと深くこそ春もなりぬれ

早蕨

都人とはずは春もつれ〴〵とひとりやをらん嶺のさわらび

うづまさにて庭のわらびもえいでぬる頃

足曳の山の櫻は咲きぬやと垣ねのわらびをり〳〵ぞ見る

やよひ初つかた仁和寺わたりの花見てならびの

岡にやすらひたるに雨降出づべくおぼえければ

立かへるに母のすきたまへればわらびをとりて

かへりつさきのさがのかへさにもたづさへかへ

りしなどおもひ出でて

西山の花見てかへるをり〳〵のつともかはらぬ嶺のさわらび

紅（くれなゐ）は人のめにつく色ぞかしあまりこたれてあだにならるな

柳

青柳のいとへだてても見つるかなよりきては猶まさるみどりを

門柳

春くればさせることなき賤がやの門の柳のいともめづらし

春くれば人ぞとひけるかくれがの門の柳のいとはしきまで

隣柳

青柳のいとをとなりに見る宿は思ひかけずぞ人にとはるゝ

門柳

かけひたす門べの柳風ふけば水のみどりの色ぞわかるゝ

岸柳

川風になびく霞の絶間よりかつ見えそむる岸の青柳

柳絲綠新

梅薫袖

見ぬ人のためとてをれる梅なれど花のにほひは袖にこそしめ

梅香留袖

梅が香は人をもわかず日を重ね立よる袖ぞふかくしみける

風搖白梅朶

さえかへる風の立枝の友ずりに花ぶさながら梅やちらまし

伏見山の梅さく頃はかならずとひてんとちぎり

侍りけれど久しくかぜのこゝちにわづらひ侍る

ほどに頃も過ぎぬなりときゝて荷田何がしがり

いひ遣しける

さく花のあたりをいとふかぜのまに契りし梅の折も過ぎぬる

紅梅の木たれたる繪をもて來て讃をこふに見れ

ばその枝に短尺を付けたりそれに

でて

うゐしよりいつしか見むと思ふまに年も立枝の梅咲きにけり

雪中梅

ねたしとて花をば雪のかこふともいかゞはすべきにほふうめが香

梅度年花

梅ならで何の草木か玉くしげ二とせかけて咲にほふべき

座主宮より春風先發苑中梅といふ題にして歌めされけるに

こと木には吹くともわかぬ春風をけさぞみそのの梅の初花

野梅

さしてゆくかたもなけれど香にめでて梅さくのべは遠く來にけり

閑庭梅

咲きぬやと人もこそとへ梅が香を垣ねの外に風な誘ひそ

日のめぐる南の枝の霜どけにぬれてほゝゑむ梅の初花

見し夢はあとなき花の下ぶしに梅が香深きかたしきの袖

太秦にてむ月六七日の頃軒の梅こゝかしこ咲きたるを

かりそめに香をとめてこし花のもとになれてみとせの春もへにけり

梅にそへて布淑が「鶯のねながらとまで君がため思ひをりける梅の枝ぞこれ」といへるかへし

うぐひすのあかで別れし花のえをとひかも來べく匂ふ梅が香

夕梅といふことを

花の色はたそがれ時の垣ねみち行過ぎがてに匂ふ梅が香

闇夜梅の繪に

にほふより木立ながらに思ひやる心のうめは闇もかくさず

ある人の讃をもとめし梅の為を打おきしに見出

春寒み猶きさらぎのあつぶすまかさねてよもの嵐をぞきく

二月餘寒

ともすれは花にまがひてちる雪に梅が香寒き二月(きさらぎ)の空

餘寒月

更(ふけ)行(ゆ)けば猶かげ寒し春の月かすむと見しや雪げなりけん

のどかなる日松風をきゝて

松にふく春風ぬるくなりにけりいづくの山も雪はのこらじ

春草

いづれをか哀とは見む朽のこる霜のふるはもこぞの若草

雪はまだきえもはてぬを野べははや薄緑なる春の若草

春草短

おひまじる苔のみどりもわかぬまでまだはつかなる春のわか草

梅

わかなつむ人につかはしける

たのむなよ若なといふはなき名にて年つむごとに身こそ老いぬれ

春の野に出でてといふ句を

年ごとの春の野に出でて摘みつれば若なや老の數を知るらん

古今集のことばをいれて春の歌よむとて

春日野のとぶひの野守老いぬらし幾よの春の若菜摘みつゝ

雪中若菜

つむことのかたみの若菜それをさへをしとや雪の降りかくすらん

むつき末つかた雪のふる日いかにふるやとかみ

さうじあくれば軒あさきいほにて爐邊にもさな

がらつもるべくおぼえければ

風さえて猶うづみ火のあたりまで春としもなく雪ぞ吹入る

いたく寒き夜

春寒きくらまの山のうぐひすはたどる〳〵や雪になくらん

あるゆふぐれに

鶯はそこともいはず花にねて古巣の春や忘れはつらむ

鶯聲和琴

雪寒き梅が枝うたふ琴の音にきるる鶯聲あはすなり

うづまさ寺にて鶯のなくをきゝてむかしかでの

小路の家の松に朝ごと時もたがへず鳴きける事

などおもひいでて

鶯のなくこゑきけばいそのかみふりし都の春ぞ戀しき

鶯語漸々稀

鳴とめぬ花の梢はうぐひすのまれになりゆく聲にこそ知れ

野若菜

末遠き春野のわかなかぞふれば摘むべき千世ぞ限知られぬ

時わかぬ松の煙もかげろふのもゆる春日ぞ立まさりける

鶯

花になく心の色もおのづから音にあらはるゝ春のうぐひす

何事のはらだたしかる折にしもきけばゑまるゝ鶯のこゑ

初鶯

やがて此垣根や古巣けさよりの春つげそむる宿の鶯

早鶯猶若

心とく春告げ初むるうぐひすもまだ舌だみて聲の聞ゆる

朝ごとになくを

朝ごとにきなくうぐひすきなけ猶春知らぬ身も春と知るべく

山家鶯

山かげや柴のあみ戸をあけさして初鶯の聲をこそきけ

名所鶯

廣崎の心あてなるひともとの松もほのかに霞むうら〳〵

海霞

かぎりなき青海原に立わたる春の霞や天のうき橋

霞春衣

花鳥をあやにおもはへ春のきる霞の衣いくへたつらん

立そめし春の霞のうすごろもひをかさねてやそふ色も見む

谿中霞

春ふかみ分けこし嶺の朝な〳〵霞にきゆる跡のとほ山

定靜が阿波の國よりのほりて都に十五年の春を

迎ふるよしいひて「淺緑かすみの衣たちかさね

猶こゝのへの春にあひぬる」とよめるかへしに

十年あまりいつなれぬとも思はぬに霞の衣さや重ねつる

いたくかすめる日松のむらだちたるを見て

あさがすみたてるを見ればいつしかとおぼつかなみし春はきにけり

山霞を

あさみどりかすみそめてぞあし引の山のかひある色はみせける

朝なゆなれても見ずば俤のかすみやはてん春の遠やま

野山のかすみをめでて

霞たつ野山を見ればひととせのくはゝる老も打わすれぬる

杜　霞

梢よりかつあらはれて朝がすみやゝはれそむる山もとのもり

河上霞

水無瀬川霞のみをのあらはれて一筋深き遠の山もと

水郷霞

一筋のかすみのうちや久世かつら梅津大ゐのあたりなるらん

湖上霞

冬かけて吹きそめしかどうめの花春の色香はことにぞありける

　春日望山といふことを甲斐權守季鷹がよませしに

春くればいづくの山もひとへ山かさなる嶺もわかずかすみて

　子日の心を

春日野にいざといはましを山陰のけふの子日はまつ人もこず

　はつ子におもふこと侍りて

子日にも引く人なくてふりにける身をあはれとや松も思はむ

霞

日にそひてさぞなこのめも春霞深くなりゆく三吉野の山

　おなじ題を白川心性寺百首卷頭に

久にへんわがまつ山に萬代の春をこめてぞかすみたな引く

　あさがすみ

かねをのべたらんやうに春日にかゞやくを見て

はるゝ日は雲ゐに見えて白雪の高ねまがはぬひらの遠山

春日

何となくのどけきものは初はるのみどりの空ににほふ日の影

初春祝道

ゆくすゑののどかに見えて天のみちも正しきみよに春はきにけり

法眼純方より宮の御當座十首の巻頭とて初春霞をやがて詠進すべきよしいひ來れば則ちよみて

春る

淺みどり霞にもるゝ色もなし春立くらしよものやまやま

初春雪

霞あへず猶ふる雪もけふよりの人の心の春はうづまず

早春梅

初夜過るころ人々かへりたるに山野を見れば雲晴れて月さやかなるにねられねば布淑はいづく
わたりまでかゆきつらんなどおもひやりて

あともなきすざく大路のふるきよを思ひいでつゝ雪や分くらん

今はかつらにこそいなめとおもふに銀橋を月に
わたせるけしきならんかしと思ひて

雪つもるよるのかつらの河はしは月にわたせるみちかとぞ見む

亥のときも過ぎ侍りければ

かつら人いまかかへらんかゝるもかきふするの時もはや過ぎにけり

日のかげすこし暖かなるあしたいほのとに出で
たるにしらがの風になびくを雪かと見まがひて

春の日に雪かもちると見えつるはきえぬしらがの光なりけり

よも山のゆきはむら消えたるにひらの高ねは白

れてあかきかゆくふ日になりて雪いとしろうふ
れるになけどもいまだとぞつぶやかるとしごと
にけふはしたしきかぎりつどひ梅をかざしうた
げしうちあけあそぶ日なりさればおもへること
をのこさでかたみにいひて心をやるとてあろじ
のおきなあやしき聲してまづうたふになよそぢ
あまりなよとせのはつはるのまどゐといふを句
のはじめにおけるそが中に

ながらへて見るかひあるは梓弓はるたつ山の霞なりけり
まつ高き風のしらべにのこりける千年のあとの古きよの聲
りう俗の色かならぬを梅の花など塵の世に咲きはそめけん
のきちかく咲きぬる梅のこのまより遠山はたにわかなつむ見ゆ
はつ〳〵のわかなやもゆとあさるらん人め見えそむる霜のふる畑

老の盛の花か柳か」「消えのこる雪よりゆきのはじめまであらばや又もふることは見ん」「又や見んことしはいたくとばかりの老もわするゝ春のことの葉」これのかへし

君も我もおいの盛にほこりなん柳さくらはもとよりの春

もろともにけぬべき春にありふるもさだめなきよは雪も又見ん

やそぢあまりみとせの春をまちつけし初ことのはの花を見しかな

鳥がなくあづまの空のしらむより神代もかくやと天地のけしきもやはらぎ松ふく風もことの外にのどかにて千代よばふ心ちのせらるれば霜雪のふりとふりにし老もさらにわかなうぐひすと見きくものごとにこぞのさまはみなあら玉のはるめきたりされど隙のこまはとゞまらずあけく

春生人意中

春きぬとおもふ心にみよし野の山のかすみはおくれてぞ立つ
待つけし人の心の春はまだ花鶯も知らずぞあらまし

春到氷解

山陰もこほりとくらしなつみ河川おとゆるき水のはる風

初春雨のいとのどかなる日

おい木さへめぐみにもれぬ春雨のふる野の若菜いかにおふらん

澄月法師より七十あまりみつのあしたのことほぎとて「春たてばまづものまうす我よりもそのそこいかに長閑かるらむ」と聞えしかへしに

春さればまづ咲く花もいたゞきの雪にまがひてのどけくもなし
又あるとしのむつき六日といふに此老僧よりせうそこして「うらゝなる春に越えけり君も我も

立春

朝日さすみねのまさかき霞むなり春立ちくらし天のかく山

とし立かへる

いにし春見しものぞともおぼえぬは年立かへる霞なりけり

春從東來

此國も猶ひがしよりくる春をもろこし人はまつや久しき

雪消氷亦釋

けさははや外山（とやま）の雪ま見えそめてかけひのなるひ雫おつなり

太秦（うづまさ）にすめる時とし明くる曉のかねにつゞきて

つゞみうち讀經の聲きこゆ

しらみゆくおまへのほかげ法（のり）のこゑ心すみぬるけさの初春

高き梢に朝日のうつるを見て

朝日さす梢のみゆき解けそめて春まちえたる蜂岡の松

明けそむる野山のけしきうら〳〵とこゝに三度の春をむかへつ

ふるとしより鶯のなくをついたちにもきゝて

ふるとしにきゝし鶯それながらあらたまりぬる初春の聲

としあくるあした雨ふりていとのどかなりける

に

いとはやもふるとし遠き心ちして雨にかすめるけさの初春

岡崎の近きわたりなる寺々へ百首歌奉らんとて

人にもよますする時善正寺に奉る立春のうた

けさははや春立ちくらしかぐら岡松風ゆるく霞わたれり

おなじ題を滿願寺へ奉るには

から衣うらめづらしくたつ春をいのりかさぬる法のこゝろ〳〵

元日立春

あら玉のとしとのみこそおもひしかおくれずたてる春霞かな

此月のそはずはむつき常よりもおくれてきぬる春ぞといはまし

ついたちのあした手あらふとてよめる

てにむすぶ水もぬるめりいづくにもけさは春風氷とくらん

とし明けなんとする曉からすの鳴きたれば

くる春をまつのとほその明くれにとほ山がらす一聲のそら

試筆とてよめる年々の歌の中に

けさよりはよし野の山の春霞たが心にもかゝりそむらん

人ならばなしといはましを蓬生のけがしき宿に春はきにけり

今ぞ知る老もわかゆといふなるは春たつけふのこゝろなりけり

岩戸いでし光もかくやあら玉の春にあけゆくしのゝめの空

除夜に雪ふりてのついたちのあした

ふりにけるよのまの雪はあら玉のとし立かへるけさのはつはな

岡崎のいほりにすみて三年といふ春にあひて

六帖詠草　春

春歌

ふるとしに春たつ日梅を見て

年のうちにはるきぬめりと梅やさくうめさけりとて春やきぬらん
　かすみを

年のうちに日かずをこめてあら玉の春の霞はたな引にけり
　年内立春

かぞふればとしの日數はつきなくに花まちつべき春は來にけり
さらでだにとまらぬ年を急がせて殘るひかずも春になしつる
　うるふ月ありけるしはすのなかばに春の立ちけるを

も、なさまるみよのたまものとおもはざらめや、いはざらめやと、平ののぶ愚筆をとりてかくしるすは、文化とあらたまれるとしのかみな月にてぞありける。

四方の海浪をさまり、なゝつの道往かひやすらなる、みよのいつくしみをかうぶりて、文のをしへいたらぬくまもなくなりにたれば、大みくにぶりに心をよせぬ人やはある。それが中にも、小澤のおきな蘆庵といへるなん、わかきより此道にふかく入りたち、おいにいたるまで詠める歌の、いともおほかめるを、かいつめたる巻々も、おほかたの人には見せずして、はこのうちにひめおけるを、おのれこのまなびするとて、たいめせしついでに、としごろのしふをと、せちにもとめしに、翁いへらく、なべてはいとあまたにて、いたづらなめれば、みつがひとつばかりかゝせて見せまゐらせなんとて、此六帖の詠草を贈られき。さるをこたび梓に刊せて、おなじ流くむともがらの、筆の勞たすけてよといふ人のあなるにまかせ、校し合することを、小川布淑前波默軒などにあとらへて、板にはつけさせぬ。もとよりまたき物にしあらねば、もれたるにもよかなるが猶あべけれど、わが見ぬをばさておければ、つぎておぎなふ人もありなん。おのれもののふの道を、もはらにすめる家にうまれて、かうやうのみやびわざにたづさはる

賀茂翁家集　卷之二（歌之部）終

旋頭歌

この冬はいとさむからねば梅のとくさきてはやく散るもあり、後の十二月十五日に春の立ちけるを、廿一日の朝雪いとふかくふりたりければ、

梅のはな　ちりしく庭に　雪はふりにけり
春の來て　消えなんのちも　きえずやあらまし

く、詞のおちたる所もありて、よみがたければのぞけり、重ねて善本を得たらん時に、補ひ載すべし

反歌

駒のつめつがるのをちのえぞがしまそをさへなつく君がのりかも

津輕舟北ふく風にこゝろせよえぞが浦和はなみたゝずとも

いざ子どもこゝろあらなんみちのくの千島のえぞもやさしとぞきく

うま酒の歌

うまら(美)に　をやらふる(飲喫)かね(哉)や　ひとつき(一杯)ふたつき(二杯)　ゑら〳〵(楽)に(悦)たなそこ(掌底)うちあぐる(拍擧)かねや　みつき(三杯)よつき(四杯)　こと(言)なほし(直)こゝ(心)ろなほし(直)もよ　いつつき(五杯)むつき(六杯)　あま(天)たらし(足)くに(國)たらす(足)もよなゝつき(七杯)やつき(八杯)

ありければ　つがるにむかふ　わたのそこ（海底）　いくりにおふる
松前の　浦かたつきて　かきかぞふ　いつゝのたねを（五穀）
おほすべき（令生）　つちのかぎりは（地）　つかさまけ（司設）　もりべおかせば（守部置）
えみしはし　おのがさちなる（幸）　けものとり　魚とりをして（食）
このしまの　北にさかれる（離）　まかちぐに（靺鞨國）　そがあはひなる（間）
ことさやぐ　からふとじまに　けものもち　魚もて行けば
わたどなる（海隣）　まかちの人は　青玉も　きぬももて來て
あひかへて　かよふとすれど　まかち人　えぞへしもこず
えぞ人も　まかちはゆかず　あるこそは　よろしかりけれ
しかれども　まかちの人も　えみしらが　なつくをみては
かくばかり　かしこきくにと　日の本の　やまとのくにを
あふがざらめや

この長歌四首なるが、末の二首は、寫しあやまり多

もの丶ふの　ちゞのたけ(猛)を(夫)の　駒のつめ　つがるをぐにに
せ(逼)まれゝば　まつろはましを　心おぞ(鈍)き　えみしがと(繁)もは
う(海)なのへ(上)の　は(離)なれ小島に　舟のまに　こ(漕)ぎかく(隠)れし
そこもへば　むかしへえぞと　聞えしは　つがるぞとほき
き(極)はみにて　今いふえぞは　その世には　む(空)なし島にも
ありやしつらむ

○

すめらぎの　神のみくには　船かぢの　いかよふかぎり
こまのつめ　つがるのうらの　えびすめの　ひ(昆)ろめ(布)のなびく
いやひろに　百年あまり　うちなびき　お(大)ほま(政)つりごと
あづまにて　まをしたまへば　な(波)みのむ(共)た　よらぬものな(無)み
そのえぞが　今すむしまも　ひろめな(如)す　廣しといへど
雲のゐる　山のみ高く　浪の振る　いそこそあらく

詠蝦夷島歌四首竝短歌

やすみしゝ　我大君の　神のまに　しきますくにの
鳥がなく　あづまのくにの　みちのくに　すめるえみし（蝦夷）は
むかしへの　ふみにしるして　みくさある　それがなかにも
にぎたへの　にきえぞとふは　いで（出）は（羽）なる　あいた（秋田）をぐに（小國）に
すまひつゝ　まつろ（服）ひ（従）たるぞ　ふぢ衣　あらえぞとふは
ぬしろ（沼代）より　やゝ道さかり（離）　うとかりし　えぞなりけらし
とほえぞと　いふははるけき　都賀留（つがる）ちふ　をぐににありて
しらじもの　木のねにふ（臥）せり　つち蜘（ぐも）の　あな（穴）にも居つゝ
ちはやぶる　ことをしなせば　そこば（許多）くの　御軍（みいくさ）たゝし
こゝば（許多）くの　もり（守）べ（部）をお（置）かし　多賀の城（き）や　かみの城（き）こえて
あらえぞが　ひらほこ山に　御軍は　いば（滿）み（雄）たけ（誥）べど
遠えぞの　かぎりをしらに　みちをはり　岩ねさぐくみ

あしがらの　秋なの山に　道をは(墾)り　關をもすゑて
君が代を　まもらひこしを　するがなる　ふじの高ねの
かぐつちの　神のみごころ　あらびたる　ことしありければ
八百によし　たひらの宮の　あたら世の　始の時ゆ
玉くしげ　開きそめつる　はこねぢの　みちのをちこち
ちはやぶる　人をな(和)ごすと　いやひろに　くにををさむと
むさし野の　野のへ(上)さ(狭)きまで　我君の　ふとしきませば
都人　ひなびとさ(多)はに　ゆきかひて　し(楚)もとお(押)しな(驛)み
い(岩)はむ(群)らを　ふ(踏)みな(平)らしつゝ　時となく　雨はふりつゝ
と(非)きじ(時)くに　雪のふるとふ　あら山も　やすくしこゆる
とほの都路

反歌

君が代のまもりなれ(としイ)とて神の世にはこねの山はつくりけらしも

月讀の　水かたゝふる　天の　河　ながれかかよふ
久かたの　あめ尾張の　みことかも　せ(塞)きたゝへけん
神代より　かれせぬ(不渇)海に　わたつみの　宮べにありとふ
ゆつかつら(五百桂)　それならなくに　ちひろ杉　生たちながら
みなそこに　うづ(埋)もれにつゝ　八百世にも　千世にもうせず
くちもせず　今のを(現)づつに　見るがあやしさ

○

鳥が鳴く　東の國の　道のはてに　な(並)みた(立)つ山は
と(外)つく(國)にの　國のさかひと　みすゞかる　しなのゆかひゆ
とほ長く　伊豆のさ(岬)きまで　なみたてる　百の高ねは
を(食)すぐ(國)にの　中のへだてと　八千矛の　神のみことの
つ(造)くらしゝ　山にぞありける　日のよこ(緯)の　これの百山
日のたて(經)に　ゆきかふ人の　おほけれど　岩きりとほし

あらかねの　つちをかわかつ　手向する　みさかの上に
のぼりたち　にしにむかへば　ゆふけしも　朝けのごとく
鳥がなく　あづまを見れば　朝けすら　夕けとぞもふ
ゆふべなす　雲霧がくり　はかりなき　ちひろの谷に
くだりたち　かへり見すれば　ふるさとは　空だにみえず
大君の　ふとしきませる　くぬちとも　おもひわすれて
あし引の　山のしづくに　そぼちつゝ　東にくだる
みやこがた人

反歌

やほによしたひらの宮のあたら代に開きし道のなれずもあるかも

○

東路の　はこねの山の　やまのへに　たゞふる海は
くろき海に　白き波たち　青雲の　ゐる空ちかみ

詠筥根山歌四首並短歌

あしがりの　はこねの山は　大名持（おほなもち）　その大神の
やさかにを（八尺瓊）　をさめたまふと（藏）　やまとなす（日本作）　少彦名（すくなひこな）の
御神やも　つくりたまひし　ちはやぶる　かみのみさかの
しらくもを　わけてのぼれば　くものへに（上）　ひでたるねこと（秀嶺）
玉くしげ　はこがたなせれ（筥形）　立ならぶ　ふたつのみねは（二）
ふたとすら（蓋）　かけごとすらも（懸子）　とりよろひ　開きしたちなみ（立並）
よろづ代に　名にしおひくる　はこね山　ふたごの山ぞ
神さびにける

反歌

久かたの天つ御寶をさむとかはこねの山はつくりけらしも（つくらせりけんイ）

○

神さぶる　はこねの山は　わたる日の　天をやへだつ

小野古道が妻の身まかりてあくるとしの秋、かなしみの歌よめとこひけるによめる

うつしみの　ことをもとはず　うらぶれて　いにしなにも（汝妹）が
さねどこは　こともなありそ　たゝみはも　ゆめよあやまち
なくもがと　いはひまもらひ（齋護）　天行かば　天路やすけく
下行かば　下べことなく　八十（やそ）の隈（くま）　もゝのくまぢを
いゆき（往）へて　かへらむものと　春べまち　夏をもすごし
もみぢばの　過ぎにし秋の　立かへる　ときになりぬと
眞袖もて　ちりうちはらひ　そむきぬる　枕とれども
朝床に　妹は起きるず　ゆふ庭に　妻は來まさず
い（夫）にしより　かへらぬ道を　今しはも　おもひ知りつゝ
こい（臥）まろび（展轉）　ひづち（沾濕）なく（泣）らん　君がかなしさ

夜をさむみつゞりさせてふ蟋蟀（きりぎりす）すいたづらに鳴く秋にもあるかな

うらぶれて　野べにいにきと　聞きしより　口にけにまてど
うつたへに　こともきこえず　ちゝならぬ　われとやとはぬ
はゝならぬ　身とてやうとき　こひしきものを
初風の　吹きうらがへす　秋の野の　葛のうら葉の
うらぶれて　いにしその子は　はぎ見ると　行きやはしつる（しにけんイ）
霧わくと　まどひやはせし（いにイ）　うつし身は　かなしきかもよ
かへりこぬ　道に過ぎぬと　家人の　告げつるものを
おいらくは　おぼしきことを　ひたぶるに　おもふがまゝに
わするべき　わざならぬをも　たつきりの　まどひけらしな
まどひつゝ　あらばあらまし　なにすとか　まさかをしりて
さら〳〵に　にひものごとも　なげきしぬらむ

萩が花見ればかなしないにし人かへらぬ野べに匂ふと思へば

あらきするにひもの秋はたつ霧の思ひまどひて過しだにせじ

あふ人に　こととひぬれば　ちゝの實の　父はいまさず
はゝそばの　母もいまさず　しかはあれど　吾妹(いも)なねの
かしらには　しらがみおひて　かな戸より　いづるを見れば
母とじは　いましにけりと　立(走)はしり　い(入)りてし見れば
おもて(面)には　しわ(皺)かきたりて　よろほへる　われをしも見て
妹なねは　父來ましぬと　いぶかしみ(許)　おもひたりけり
かたみに(互)　ことをもとはず　しら玉の　なみだかきたり
むかひるて　むかしべしぬぶ　ことぞさね(實)おほき(多)

倭文子をかなしめる歌

ちゝのみの　父にもあらず　はゝそばの　母ならなくに
なく子なす　われをしたひて　いつくしみ　おもひつる兒は
初秋の　露に匂へる　眞萩原　ころもするとや
まねくなる　尾花とふとや　鹿子じもの　ひとりいでたち

名ぐはしき　三河のくにの　にひばり（新墾）の　にひ御世すらを
そこにしも　ひらきたまひし　大君の　恵のひろに
大御名を　高すのはまの　にひじりに　つくるあをなは
ひさかたの　あめはさゆれど　あらかねの　つちはこほれど
いや生ひに　おひしみ（茂）にけり　大君の　おなじみすゑ（御胤）の
吾君の　みけ（御食）につみ（摘）來て　冬ごもる　時には（しイ）あれど
御こゝろを　はるのみまけと　みさかえも　千世のわかなと
けふたてまつる

反歌

天きらしみ雪ふれども三河なるしかすがにこそなは榮えけれ

岡部の家にてよめる　寶暦十三年の六月なり

とし〴〵（月イ）に　しぬび（慕）まつ（奉）れば　ふるさとに　いますがごとく
常はしも　おもひてしものを　なにしかも　もとな（無由）かへりて

かき(掻)な(撫)でて　を琴をあそび　うた(歌)によ(吟)ひ　わら(童)はそ(遊)びすも
ぬばたまの　かぐろき髪の　を(垂)はな(髫)りに　なりてしもがも
あ(自)えなもあえなも

權禰宜度會大夫二大御神の御池のぬなはに歌そへて遠くおくられたり、八月十五夜しみ來りければこたふ

高(たか)知(しる)や　天のみ影　天(あま)知(しる)や　日の御影の
水に生ふる　ぬ(蓴)なはをくりて　ぬば玉の　よるのを(食)すぐ(圖)に
しきませる　月よみのみかげ　滿ふなる　八月の今夜
かきむ(向)くる　ことのよろしさ　日のみかげ　月のみ影を
かくしつゝ　み(汝)ましもわ(吾)れも　ぬなはなす　な(長)がくあ(仰)ふがな
ながくあふがな

百ちひろ千ひろのぬなはは結びあげて神の御池の心をぞ知る

獻三河國高次新墾之蕪時歌一首竝短歌

高きやに　つどひてうたふ　ふる人のとも

浦人のたひつりかへる伊豆手ぶねはやく涼しき夏にもあるかな

七日の夜縣居の翁が戲歌

七月(ふみづき)の　なぬかのよらは　七とりの　つくゑをたて
なゝくさ(七種)の　ものたてまつり　つくばねの　にひぐは(新桑)まゆの
はつ(初)引を　ちはり(針)ぬき(貫)たれ(垂)　あめにます　たなばたつめ(織女)の
五百機(いほはた)たて　そのせ(夫)の君が　七重かり　八重かるきぬを
おり(織)もあへ(堪)　ぬひ(縫)もあへ(堪)なも　おるわざに　あえ(肖)てもがも
ぬふ手に　あえ(肖)てもがもと　春日なる　高圓(たかまど)野べに
にほふちふ　七くさの花の　花かづら　今するこらの
みめづ(愛)兒の　しかぞまけ(設)する　みめづ兒の　かくぞこと(言)あげ(擧)する
うむかし(感欣)み　われもおもひて　眞白なる　七つかひげ(束鬚)を

不士のねのふもとをいでて行く雲は足柄山の峯にかゝれり

橘永世が屋を高くつくりてその見ゆるさまをよみてよとこひけるに

東なる　とほのみかどに　百千里　いへはあれども
とりよろふ　山は見ゆれど　天の原　不盡の高ねを
やどながら　朝ゆふ見つゝ　もゝちたる　心は知りぬ
とりよろふ　いへにもあるか　百千々の　時はゆけども
常夏に　めづらしきかも　ふじの白雪

みな月の末つころ高き屋にのぼりてよめる

おいが身は　人こそいとへ　ふる人は　世にこそすつれ
わたつみや　いとはざるらん　山つみは　すてやたまはぬ
見わたせば　波をきよらせ　ひもとけば　風をかよはし
世のひとの　いとふてふなる　夏の日の　てる日も知らず

よの中に　こともたえつゝ　ゆく牛の　おそき翁が
うつゆふの　さかりしこゝろ　くいもくいたる
　もろこしの人に見せばやみよし野のよし野の山の山さくら花
　　夏日東海道中望富士山作歌一首並短歌
いそまより　そがひに見ゆる　駿河の海　沖つなみぢは
せばきかも　ふりさけみれば　さがみねの　八重山みねは
ひくきかも　天の原なる　ふじのねの　ふもとをいでて
風のまに　横ほる雲に　するがの海　おきもかくろひ
さがみねの　みねも雨ふり　時のまに　神もなりゆけど
水無月の　照る日のそらに　あらはれて　くもるともなく
とこ夏に　雪ぞふりける　富士の高ねは
　　返歌
　するがなる富士の高ねはいかづちの音する雲の上にこそ見れ

たり（足）御世を　いまもみるかも　日高みのくに

大（民）だから吾こゝろさへゆたけしも大和國原はるみてしより

よし野山の花を見てよめる

ことさへぐ　人のくににも　聞え來ず　吾みかどにも
たぐひなき　よしの高根の　さくら花　咲きのさかりは
馬なべて　とほくもみさけ（放）　杖つきて　みねにものぼり
見る人の　かたり（語）にすれば　きく人の　いひ（言）もつがひ（繼）て
天雲の　むか伏すきはみ　谷ぐくの　さわたるかぎり
めでぬひと　こひぬ人しも　なかりけり　しかはあれども
世の中に　さかしらをすと　ほこらへる（誇）　翁がともは
八百萬（もゝ萬イ）　よろづの事ら　きゝしより　見のおとるぞと（みるはおとるとイ）
いひつらひ　ありなみするを　みね見れば　八重白雲か
谷みれば　大雪降ると　天地に　こゝろおどろき

ときはなす　御法の花の　すゑぐ＼も　たえぬかをりを
つゝみもて　霞の袖の　たちかへり　はやおほはなん
世の人のため

東より春にともなふ行へこそ法の花さくみやこなりけれ

大和のくにをおもひてよめる

神ろぎの　神の御代より　天つ嗣　日つぎしらしゝ
御まのみこと(孫尊)・吾大王の　とつことは(外)　をゝしくたけく(雄猛)
うちちをば(内)　なほくたひらに(直平)　みし給ひ　聞したまへば
八十國も　いよゝ眞廣く　百のたみも(臣)　いやさかはえき(榮)
空みつ　やまとのくには　白雲の　とにたちわたり(外)
山見れば　山いや高し　里みれば　さとたひらけし(平)
春花の　うちぐはしくにぞ　ことをしも　うべ敷きましき
八十くには　うべもさかえつ　いにしへの　そのいづみ代の(稜威)

御世の名の　ゆたにのぶてふ　新しき　はじめの年を
去年(こぞ)といひて　今年のはる(しイ)は　いづこにも　杖つきまゐり
あしびきの　山にもあそぶ　手束杖(たつかづゑ)　斧の柄すらは
くちぬとも　くちせぬものと　松の花　さかんごも見む
このぬしは　山人のごと　山松のごと

反歌

山人の千世の始の春とてや松のみどりもことに見ゆらん

僧祐達綸旨まうしにみやこにのぼるをおくる時は

正月十一日なり　この日春たちぬ

東より　春こそたてれ　都べに　花こそさけれ
その春に　君さそはれて　その花の　みやこに行くや
おのづから　みのりの花の　開くべき　春なりけらし
春の日も　かぎりこそあれ　咲く花も　うつろふものを

あたら世を　ことほぎまゐる　みことをし　もちて行く君
ひきゐます　八十とものを（ますらたけをがイ）　こまのつめ　岩ねふみさくみ
すゞがねは　山ゆきとほし　たひらげく　やすけくこえん
おきそ山　みぬの山（いはむらもイ）
大きそやをきその山の岩がねもなびきよるべきたびにやはあらぬ

右は寶曆十二年九月、皇女御位を嗣ぎませる御よろこびを、あづまよりまうしたまふに、橫瀨侍從の此御使にさゝれて、信濃路よりのぼらるゝを、したしき人々に歌もとめらるればよみつ、京のことなどは人々皆つくせれば、かくのみいへり

詠松有榮色賀大木老人八十算歌一首並短歌（老人善圍碁）

松陰に　山人あそび　ときはなる　齡はしるし

さつ弓の(幸)　さち(幸)ある(有)山ぞ　ときはなす　よはひもがもと
たらちね(母)を　よろづ代までに　百づたふ　いそぢ(五十)の冬に
ことほぎ(言賀)し　酒ほぎなして　いはゝせる　ことぞよろしき
今よりは　新田の山の　にひ(新)ざち(幸)も　いよゝかさねん
この家の　はゝのみことの　ちとせもる山

反歌

たらちねをとはにもる山しめおきていはふよはひはかぎりしられず

侍従貞隆朝臣の京に御使し給ふをおくる長歌短歌

みぬの山　おきその山は　なびか(靡)へと　つけ(衝)どなびか(不靡)ず
かくよ(依)れと　ふめ(踏)どもよらず　よしゑやし　なびかずありとも
よしゑやし　よらずとふとも　かけまくも　いともかしこき

長歌

殿の御賀に御杖たてまつる歌

かづらきや　ひと言ぬしの　神のます　もりのさか木を
うじものゝ　うなねつきぬき　しづはたの　ぬさとりむけて
わが君の　御つゑにとりき　今日の日の　みほぎの庭の
にはすゞめ　うすゞまりゐで　百ちゞの　こともなにせん
萬代に　いませ吾君と　ひとことまをさも　ひとことまをさも

よきことを一言ぬしの大神のさちはひまさなん杖たてまつる

奉賀新田家大夫人歌一首竝短歌

上つけや　にひたの山は　いでたちの　よろしきま山
いりたちの　くはしきねかも　いでたてば　君をもる山
いりたてば　家をもる山　このいへの　世々につたへて

二段

ひくしもやすければまるるこそやすけれいももる神もはれそのやすみあへ

同

いにしへゆめでてしもののみめづらしものとさかぶくをばなはれそのかりみ御庵ほを

二段

まくさしふいたればみた竹けもてつくれば神こそめでめこのなか中島じまは黒木の代りに竹を柱とし尾花をふきたり

とりものの歌　ほこ

八千矛の神のゆづりし大君の御代の守りのほこぞこのほこ

(二)　同

西じろのはつみとしえりみとしもはもつんづなもつんづなもつんづおほにへまうさんみべまうせおほにへまうさんみべまうせ

紀のくに

このしまはとこよのしまぞまどこよのしまによすがらあそぶはれなぞもといへや

二　段

ふえしもふいたればみことしもあへたればとこよのとりのはれその鳥となふ

同

むさしのやとしまのはたにまどしまのはたにいも引おきなはれそのいもたばれ

影は

いり江どの大門の入洲のあしはらも君ししむればみやことな
りぬ　よろづ代までに　　イのやまかけつゝ

酒飲

神のかうみきたべゑうてようべもすんがらまふよびぞとりは
なくともまふよひぞながなきどりやとこ世どり

同

あはれたふとさあなたふとけふのなが月にあふ人よ神のまつ
りにあふ人よとるみてぐらはたふときろ

老鼠

このをかの老ざかか木わかざかか木ちんよつんづとしつんづとし
つんづく(公家)うけにまうさんけにまうせくうげのお(御聞)ほためけのま
うけ　同

よろづ代のなが月にさく菊のはなかみのみまへにかざしつる
（一本下句かざしにしつゝあそぶなるかも）
かも　神あそびして　神のみまへに
しら菊の花をかざしにさしつれば袖はかへせどちらじとぞお
もふ　秋てふごとに
（このそのにイ）
御園生にいはひてまきし山あゐを今日のたもとにすりあへに
けり　いろもしみゝに
うらやすのたやすの秋の初穂もてあなうらやすの今日のみに
へや　平らかにして
さいたまの里のとねらが造るゆふ神のみてぐらをゆひてける
かも　きよきしらゆふ
この岡の松の木のまゆ見わたせばうみもせきまでうくたから
かも　ともへならべて
しながどりあはにつぎたるすゑの山するもさやけしけふの日

たはむれにつくりて奉られしにやとおぼゆ、その
ことわりもありつらんを、うせにしかばおしはか
りに書いつくるになん

玉籬をつけとてしもやむかしよりかみさびけらしをかのまつが枝　枝もしみゝに

むかしべのためしにならふみづ垣はつくる日よりぞ神さびにける　むかしおぼえて

すめぐにの上代のことはうらやすしならひてあれな安きためしに　末の世までも

しめはふる岡のつかさの清ければいもひもやすしぬさもやすけし　神のまに〳〵

きみが代のながづきこそはうれしけれ今日皇神をまつりはじめて　たえじと思へば

大君の守りとなれる君なればまよはひは神ぞまもらん

枝直が七十の賀の屛風に、三月櫻のもとに弓いるかた

葛城の襲彦まゆみ引きつゝもますらをのともの花を見るかも

擬神樂催馬樂歌

寶曆のはじめつころにや、翁のかきつめられしものゝ中に、神樂さいばらになぞらへてつくられたるあるを見いでたればこゝにのせぬ、おもふにこはやんごとなき殿のをかのかたちつくれる所に、もがさのうれへをまもらひます神をいはひたまへりし事ありて、その神のまつりせさせ給ふとき、

の海に入る、その海のながれ遠江の天の中川にお
つとなんいふ

鶴千年友といふ事を人にかはりて

みしま江の玉江に千世をしめしよりあしべの鶴ぞ君が友なる

藤原常香のすゝめけるある女房の五十の賀に松
樹契久といふことを

たをやめの同じ操をちぎり來てへぬべき千世も松ぞしるらん

わかゆべき契かまつの花かづらいく千世かけてをとめさびせん

牧野駿河守のもとにて寄名所祝といふ事を（此守越後國長岡の城をしるゆゑにこのところをいふ）

霞みつゝ彌彦山にふる雨のいやます〱にいへぞさかえむ

寶暦四年殿のよそぢの御賀の宴に侍りてよみて
奉りける

つと白猪のぬしのせちにいふに、かよること世に多きを、うとき人のはかたくいなびのがるよを、この人のまれにもとむるにはいがよはせんとてとりあへず

豊國の鏡の山の松にかけて髮のみどりも千世にこそ見め

阿波守國滿おほやけにまうす事ありてわが家にある比、人々とひ來て歌よみけるに、寄神祝といふ事を

君が世に神の惠の露そへて御謝山もとのうみぞたえせぬ

この國滿は遠江濱松の諏方社の大祝なり、さて信濃の國なる此大神の社わたりに、月池星池あり、御謝山のふもとなり、その池のほとりに天つ露日ごとにふれば、此池の水たえずながれうるびてすは

松がえも竹もけぢめのさま〴〵に千世をこめたる宿の雪かな

　人の賀の屛風に、十二月松に雪つもれるかたを

雪つもるいつはの松のいつも〳〵かはらぬとしはくれぬともよし

　永正がもとにて枝直周武など歌よみけるに、此ちかきほどあるじの母の賀しける名殘にとて、猶祝のこゝろをそへてみゆるものを題にて、はやく咲きたる梅を瓶にさせるを

萬代の春まつやどの梅なればいとはやかめのうへに咲きけりまきを

おく山のおく霜やたびかさぬとも眞木のみどりは千世にかはらじ

　永世が六十の齡を其子千國がいはふ時よめる

みはかしを玉まき田るの五百しろに千五百の秋の初風ぞ吹く

　とよくにの小笠原氏の家人の六十の賀に、歌ひと

ば大かたにやはとて、竹の枝につけてつかはしける

いはふなるこゝろへだてぬ中垣はこなたの竹の千世もゆづらん

ある人の七十の賀のむしろにて月前竹といふ事を

よろづ世にすむべき庭の月なれば竹をうゑてやかげ宿すらん

義陳が母の六十の賀の屏風に、十二月竹おほきやどに雪ふるかたを

わが宿の竹のは山にふる雪はしらねなればや消ゆる世もなき（こしのしられかイ）

武算が母の五十の賀の月次の屏風に、八月十五夜のかたかけるところに

長きよの秋のなかばにいとゞしく暮るればいづる月ぞたのしき（よもながきイ）

また十二月松竹ある庭に雪ふれる所

しはすのはじめ秋田泰林の六十の齡をその子泰因がいはふに、竹不改色といふ事よめとあれば

くれ竹の雪かきわけてちぎるには千世の色こそことに見えけれ

年さむきあらしにかれぬ宿の竹はいでそよ千世の友にぞありける

わが友を竹のともともいはひおきて風に雪にもかれじとぞ思ふ

こゝのそぢまり八なる人をいはふむしろに竹をよめとあるに

くれ竹の世の長人のすまふなる千ひろある陰に我は來にけり

平春道が父の賀に竹によせてほぎ歌よめともとめければ

人の子の千代もといはふまことには竹の心ぞさぞなびくらん

まき田永正はゝの六十の賀しけり歌よみてよとあるに、さることとなりむつましきちかどなりなれ

十かへりをまつほど遠くわかえつゝいくらの春か花かづらせん

源の敏樹が母の七十の齢を芝といふ所の海のつらの家にてことほぎすめるに歌よめとあれば

わたつみの常世の波をよるべにて祝ふよはひは數も知られず

遠江の山のおくなる浦川といふ所を廣くしめてすまふ雛島まさちかといふ翁、今年七十なるを、我も遠きゆかりあれば、ことぶきてよと遠々にいひおこせしかばよみておくる

まさか山おくやまつみをいはひつゝ榮えむ世々はかぎり知られず

人の賀に杖をおくるとて

やま人の桃のしもとの手つか杖君こそつかめもゝといふ世も

人の七十の賀に橘によせて

橘の陰に道ふみうらとへば千世ゆく末はまさしかりけり

けより御寺つくらしめ給ふ、僧正七十にしもおはするを、さぶらふ人のことほがひするに歌よめとすゝむれば

とぶさたていはひてつくる此寺の佛のよはひ君もへぬべし

奥山のよ川の杉にしるし得て世をいのる君は千世もへぬべし

　くすし津輕季詮が父の五十の賀に

龜山のいく藥ある宿にしもいはふよはひぞかぎり知られぬ

　ある人の賀に松延齡友といふことを

世の中の友にはあゆるならひあれば松をしたしむ齡しるしも

　みちのくになる人の五十の賀に松延齡友といふ

　ことを人にかはりて

ちぎりては籬が島の松が枝もおもひへだてぬ千世をこそへめ

　ある女の五十の賀に春祝といふことを

見ゆ、足はさぎあしにて、あしゆひの紅の組あげまきゆひてたれたり、裏はごふんみがき、上によきすなごかんする石などをおきつ

松平備後守の七十の賀に菊によせてほぎ歌よめとあるに、かづけわたにそへてまゐらす

萬代を君ともなふときくなれば花のまゆしもひらく秋かな

あるやんごとなきわたりの賀に、菊をもてよめとあるに

むさし野の一本菊を生(おほ)したててかぎりなき秋の露をまて君

松平遠江守の六十の賀に、鶴千年友といふことを

此ぬし津のくに尼崎の城をしれり

この殿になにはのことの千世はあれど契(ちぎり)しるきはなるゝあしたづ

意成院權僧正おこなひのしるかれば、今年おほや

り、採桑老の樂の杖のさまにならへり、むかしのさまなればなり、中ごろの世よりは、古今集に白がねにて竹の杖をつくりたるよしあるにのみよりて、竹の形に銀にて同じ葉をつくり、又鳩をばよこ木のかはりにやがてそれをにぎりてつくやうにつくるめれど、古今集なるはめづらしく歌にもかなへんとてのわざにして、させるのりあるにはあらざなり、賀には靈壽杖こそからにもやまとにもあとある事なれ、又袋の形も今の世にすなるはいかにぞや、寶劍の袋のかたこそかゝるもののふくろの古きかたなれ、さればそれにならへり、すはまは菊小松さゝなどを作れり、あかゞねの板を鏡にとがせて、下水のながれをなせり、花の影おもしろく

君が身にこもれる千世はあるものを松のみとしも思ひけるかな

よし田の家の母とじの賀に秋の祝といふことを

よめとあるに

ことぶきをよし田の里にかゝる稲のちゞの年ある人ぞたのしき

おなじ賀をみほ子のするに、すはま杖などてうじ

てよといひおこせつれば、てうじてつかはしける、

其杖の歌もとむれば、ふるき例によりて靈壽杖を

つくれる、其袋にぬひつけたる歌

玉ちはふいのちありてふ此杖は君こそつかめよろづ代までに

杖の長さ三尺六寸五分、よこのはしともとゝを銀(しろかね)

してさいはひびしにつくりてはる、同じ菱(ひし)の紋を

ゑりつけたり、又鳩はよこの上のかたへにつく、か

しら背尾などうす青に黄をまじへ、むね鳩の色な

歌もちひさくて波のかたにかきつ、其歌

大ぞらにはねをならべて飛ぶつるの千年の影はけふよりぞ見む

とぞ、いと興ぜさせ給ひて、こがねなどたうびつ

長門どののおほば芳林院尼君の七十の賀に、養壽尼が檜破子調じて、ふたとみに鶴と龜とを數おほく書きたるをまゐるに、歌よめと殿のおまへのおほせごとありければ

天つちに千とせのためしおほかるは君いはふけふのしるしなるらん

とて青きうすやうをいとちひさく切りて、松のつくり枝につけてそへたり、此わりごなどは、殿のおまへにきこしめして、てうぜさせて養壽にたまへるをおくりたり、またわりごに松の實いるべきにて

いでゐをいにしへざまにつくりけるに、九月二十六日人々つどひてほぎ歌よみけるによめる　實

曆五年の秋なり

飛彈たくみほめてつくれる眞木柱たてし心はうごかざらまし

これはけふつどへるはわが古の書の學びの道つたふる人々なればかくいへり

十一月十九日殿の大ひめ君へみちのくの守どのよりむすびの物まゐらせらるゝに、おのれも御ふみ御手ならひの事つかうまつれば、大かたなるべからねば、洲濱たてまつれり、そのさまかきの貝ながらなるを島にて、つくれる松をたてて、笹など本にあり、又鏡二つをねのかたにして、そのかゞみにしろいものして鶴のならびてとぶかたをかけり、

はりまがたいかで都のつとにせんゑじまの波よかくよしもがな

　羇中時雨

都いでて露をいかにとおもひしに時雨ふるなりみやぎ野のはら

物名

　しもつふさ

神代より弓矢は手にぞならしもつふさはしからぬ人やなからん

　茂樹が家にて歌よみけるに　あらぞめを

えぞの海やちしまのあらそめを多みあらはれぬべきわが思かな

賀歌

ある人七月七日にまで來て、こたび難波にいきて

來む年の秋なんかへり來ぬべきといふに

たなばたにいかにならへる君なれば久しき程をまてといふらん

大神垣守が土佐の國にかへるにわかるとて

むさし野の夏野のしげくおもふ事いふべき人にけふやわかれむ

信益が美濃へかへらんとする別に（信益は松平能登守の家臣にて美濃の國岩村の城をまもれり）

天飛ぶやつるの郡をいく千世のゆきかひぢとか君ならすらん

旅歌とて

あしがらの關の山ぢを北ゆけば空もをぐらきこゝちこそすれ

羇中關

みやこべのたよりなりけり白川の關行くほどの秋のはつかぜ

羇中海

わかれ行きて又初雁とともに來むめづらしと思ふ人もありやと

　よの子が信濃路をへて紀のくにへゆくに、立ちに

　　し後おもひやりてよめる

けふもかも分け行くらし（ぞゆくらんイ）も大きそやをきその山の峯のしら雲

紅のひきもの神もまもらなん旅ゆきしらぬ君がゆくへを

　　なにはへゆく人をおくる

百（もも）づたふ五十（いそ）のうまやになる鈴のおとづれをだにたえずせよ君

　　旅行く人をおくりて

よく行きてよくかへり來てたらちねのかはらぬみまへはや拜（をが）みませ

　　紀量が豐後の國にかへるを、ぬさしろとおぼしく

　ていろ〳〵に染めたる紙をおくる、つゝみし紙に

　　書きつけける

たらちねのいはひてまたん木綿（ゆふ）の山こえん日までの手向（たむけ）にはせよ

頃には遠江の岡部の郷をたまはれる綸旨などもありけり、その後ふたらの宮の大神濱松にましゝころ、御軍にいそしとておほん太刀をしもたまはせしを、其後はさるさまのこともあらざりしに、おのれおほえず御紋の御衣をたまはれるかたじけなさいはんかたなし。

羇旅歌

ふるさとにあからさまにかへらんとするを、終にはいかにさだめんとするぞといふ人に

ふる郷にとまりもはてず天雲のゆきかひてのみ世をばへぬべし

ふるさとへかへらんとする時、人にわかるとて

朝日影にほへる山にむらさきの雲立ちわたる（ぞ立つなるイ）春ちかみかも

枝直の二郎のうまれてはじめて神まうでせさせけるによみける

とこ世もの世にかをるべき種なれば梅の宮ゐの神ぞ知るらん

やんごとなき御まへにまうす

みたみわれいけるかひありて刺竹（さすたけ）の君がみことをけふきけるかも

寶暦四年霜月、殿の四十の御賀の宴に侍りけるに、夜ふけていらせ給ふをり、御ぞぬがせ給ひて、眞淵にとてたまはせるは、いと多かる人々の中にていとおもだたしく侍るもおもほえずかたじけなきに、こといみをしもえしあへぬまゝに

あふひてふあやのみぞをも氏人のかづかんものと神やしりけむ

おのが遠つおやは山城の賀茂よりいでて、文永の

によめる、其石は大なる椎のもとにたてりけり
岩がねの椎が下かぜ吹き傳へいくよろづ世かおとにきこえん
稲垣求己齋冬の歌ども書きて筆くはへてよとて
おこせたるを、物のうへにおきつるに、よさり雨の
もりてしみづきたりければ、たはむれによみてか
たへに書きつけてかへしける
もる山のしづえをのみとおもひしに人のことばも雨はそめけり
茂樹が天の橋立を見て、松の枝を折りてもてかへ
りつる、それが歌よめといひければ
わたつみの浪もてゆへるはし立の松をかざしに手をりつるかな
十二月のはじめつかた傳通院の室にまうでたる
に、おけんとしは増上寺へうつりて大僧正と聞え
んまうけうちくありときゝて

よしの山入りにし人は音せねど夕のかねにありかをぞ知る
よそに聞きておもひ入るこそあはれなれみ山の寺の夕暮の鐘

釋教

ながれ來てあづまにふかき法の水この行末はいづちなるらん

述懐

たまたまに人とある世をうき時はそむかまほしく思ふはかなさ

獨述懐

おもふ友あらばうれしき身ならましありのすさみはある世ながらに

寄風無常

花もみぢさそふ色香を惜しむまに身の春秋も終の夕かぜ

神山元廣が年ごろ吹きたりしひちりきのしたの、いと多かるを、牛が島の長命寺のうちにうづみて、その上にしるしの石たてて、人々に歌よませける

四方もみなかべたちのぼるやしろ山大國玉やつくりましけん

鹽屋烟遠

鹽やだにまれなる浦のよそめには烟のすゑもさびしかりけり

海眺望

はりまがたせと(迫門)の入日の末晴れて空よりかへる沖のつりぶね

山館雨

しがらきの外山のよるの雨のおとを都の人にきかせてしがな

田家鳥

なるこ引く門田の稻のほどもなくたちてはかへるむら雀かな

松平備後守の秋葉社に奉るとてすゝめらるゝに

社頭杉といふことを

いく代經ぬいのるしるしもいちはやき國つ社にたてる神杉

古寺鐘

白雲の中にながるゝ天の河うききにのれるけふにやはあらぬ

魚彦がもとにつどひてその所の歌とてよめる

かとりがた千重の潮瀨をせきあげて浪穗にたてる神のみとかも

紅子が久しうわづらひたるを、おやのかなしうおもひて、宮づかへはかたへの人くるしければとて、御いとまをしひて申し請ひてければ、御氣色あしうて御いとまたびつるを、ひとりなげきて秋のころ、「やつれゆくたもとの露のうへまでもおもふくまなき月はとひけり」といへるをきゝて

行きめぐりなぐさむ時もあるものをおもひぐまなく月な眺めそ

岩水寺　此寺の洞につらゝ石といふあり

岩水のしづくの洞のつらゝ石いくつらくの世をか經ぬらん

屋代山

今はかくて海山をへだててあれど、いかでかわすれん、さるをいにし年其國わたりすぎつれど、いそぐことありてえ訪はざりしこそ口をしけれ、今はかたみにしらぬ翁となりにてあるらめど、心をしるべとして今一度むかしのことあひ聞えむとて、

猶思ひわたる

雲のゐるとほつあふみのあははやま故郷人にあはでやまめや

飛彈人といふ事を

墨繩のまさしきすぢをつたへなばあらぬたくみをなすなひだ人

こくすゐのえにのかたを

いはばしる水の玉うきよどをなみ心おそさの見えにけるかな

枝直の家にて紙繪の屏風に雪のふりたるに人々舟にのりて見るかたかけるを

東路(あづまぢ)のふじの高ねの高しらす君が世あふぐみつのから人

　御嶽まうでせるこゝろを

世の中になにをむさぼることもなし金のみたけの神ぞしるらん

　よのなかはと有るにもかゝるにもなづまずばな
にか經がたからんなどいひあへりけるときよめ
る

かた山のやまべうつゆふうらせばく誰かこの世を行きそむくらん

　題しらず

眞柴たくはしばの里のうす瓦おもひくだくる世にもあるかな（こそありけれイ）

　伊久米の君へあかき木のみを奉るにつけて

千はやぶるあけの玉がきそをだにも越えてぞとりし君がみために

　山本のをぢはあが母のすみける岡部の宿の前わ
たりするごとに、かならずとひたうびたる人なり、

歌

そのかみはいつぬき河としらねども流れて絶えぬ歌にぞありける（歌は絶えずぞありけるイ）

書

見わたせばしもつ此世（千里イ）のくまもなし古りぬる書や高ねなるらん

倭文

いにしへのしづはた衣きし世こそおりたちてのみ忍ばれにけれ

まことが家に布引の瀧のいはほのくだけをする

おきたるを見て

布引の瀧のたぎつ瀬おとに聞く山の岩ほを今日見つるかも

磯巖といふことを

沖つ舟手向すらしも岩波のたてるありそにかゝるしらゆふ

四月枝直が家にて韓使といふことを　これは五月韓人の來べきにて此題をいだしつ昔は

かく東まで來たる事なきに近き御世にはめづらかなればなん

いにしへの奈良の御世よりふみわけし木曾の坂路のなれずもあるかも（かけそめしきそのかけぢのあれずもあるかなイ）

磯

百くまのあらきはこね路越え來ればこよろぎの磯に浪のよる見ゆ

船

おきつかぜ吹きにけらしなむさしの海みともせきまでいづ手舟よる（大江の水門にイ）

釣舟

大魚つるさがみの海の夕なぎにみだれていづる海士小舟かも

琴

あふさかやあづまてふ名のつまごとは清水にこゝろの通ふなりけり

笛

うら安のくにぶりしるく萬代にくだてふふえは音をたえにけり

鼓

うた舞のいつゝのふしもつゞみてふものの音なくばうちもわかれじ

賀茂翁家集 巻之二

雑歌

嵐

しなのなるすがのあら野をとぶ鷲のつばさもたわにふく嵐かな

山

下野や神のしづめしふたら山ふたゝびとだに御世はうごかじ

瀧

あめなるやおとたなばたのおるはたの手玉みだるゝ山の瀧つ瀬

杣

陰高き高根の檜原そまたててとるや雲居の宮木なるらん

道

て名をもあらはしてよなど、美樹にいひおきしとぞ、此歌は憶良の大夫の、「ますらをやむなしかるべきよろづ世にかたりつぐべき名はたゝずして」といふをおもへるなるべし、いとあはれにこそ、ま

た菊の花をおくるとて

白菊は冬だにかくてあるものをまだき消えにし露のかなしさ
ほかながらほかならずしも悲しきにうちのうちこそ思ひやらるれ

常ならぬ嵐をいたみうつせみのからの木の實も散りにけるかな

に、ちひさき紙に書きおしたる歌

河津長夫はすめら御國の書の學びをわがみちび

きつるに、もとよりからの書をもよくよみつれば

いと才ことにして、いにしへにかへるこゝろざし

ふかゝりつるを、わづらひて十月十七日に身まか

りぬといひおこせたるを聞くにいとくちをし、そ

の後とむらひいひつかはすついでに、美樹がもと

へ

わが道もさそはん人をぬば玉のよみにおくりてまどふこころかな

となん、又長夫が今はの時、「ますらをはむなしく

なりてちゝ母のなげきをのみや世にのこさまし」

といひて、またわれはこゝろざしとげざるを、つぎ

秋くれて野風たつなり白露の玉のありかもあすやたどらん

ある人のいたみに、夕落葉を人にかはりて

何となく人のこゝろもみだるゝはもろき木の葉の終のゆふ風

望月三英の父草庵が一周忌に、題をわかちて歌もとめけるに、われもいとしたしき友なりければ、寒草霜といふ事をよめとあるに

かぎりあれば終に枯野のおきな草いたゞく霜の末ぞかなしき

神無月の比井上河内守の母君みまかりたまへり、守はみちのくの岩城におはすほどなり、たよりあればみけしきとむらひまゐらすついでに、檜わりご一かさねつゐがさねにおきて、内に一つには五菓、一つにはつばいもちひ入れてつかはしける、それが中に松子は韓のなればわりごのふたのうら

るを、さるわざもなし

先だちし人のたもとか花ずすき今はそれだに見えずなりにき

横瀬侍従のめぐみの身まかり給ひしをりによみ
てまゐらせける

をしか鳴くをかべの萩にうらぶれていにけん人をいつとかまたん

かぎりありてふかくはそめぬあらたへの袂の露やちゞにおくらん
（まそでをくたす露やしげけんィ）

ある人の十七年の忌に、かのよみたる歌を句の上
に分ち置きて、三十一人に歌もとめけるに、てをか
みにてかなしみのこゝろしらひして遠擣衣とい
ふ事よめとあるに

照る月にころもうつなる里遠み天がけるらんこゝろかとぞ聞く

ある人の妻うせて後題を分ちてかなしみの歌こ
ひけるに九月盡を

しをかひなくかなしき世にもありけるかな、今は
　いかにせん
かりがねのよりあふことをたのみしも空しかりけりみ吉野の里
今はとも人を見はてぬくやしさは我身のつひの世にもわすれじ
　妻の身まかりけるに
我のちをたのみし人はさきだちてふりにける身をいかにしてまし
　あるゆふべ
色かはる萩の下葉をながめつゝ獨ある身となりにけるかも
　夜をふかして
から衣たちぬふ人もあらなくに秋は夜寒になりまさりけり
　こゝかしこありきつゝ家にかへりて
妹が門いでいるごとにはや行きてはやかへりこといひし人はも
　八月十五夜には尾花などかめにさして月めでつ

浪の上をこぎ行く舟の跡もなき人を見ぬめのうらぞ悲しき

茂松庵といふ寺のもりの陰におくつきあり

しげりあふ松かげに君をおきしより風の音こそかなしかりけれ

ふるさとにまうで來て、又ほどなくあづまに歸らんとするを、母はらからめこは更なり、たれかれ別をしみ泪おとすを見きくに、いばんかたなうかなしくて

わかれをしむその人々の袖の露をあつめてしぼるわが涙かな

母君むなしくなり給ひぬときくに、なゝとせこなた夢にのみ見ならひつるまゝに、うつゝとしもおぼえねど、しらするものは涙にぞありける、いかで今しばしすぎば、こゝにもかしこにもゆきかひて、ともに住みてんとのみ、老のたのみをかけわたたり

よみしゆゑに、それになぞらへたるなり

荷田在満にはかに身まかりける後、横瀬侍従隆貞のもとよりふぢばかまにさして、「世の中はあだなるものと知りつゝもかゝらんとしもおもひきや君」「あたらしや露にしをれしふぢばかまかぐはしき名は世にのこれども」「秋風に荒れにし宿の女郎花こ萩がうへもいかゞとぞ思ふ」答とりあへず書きて、萩につけてやがてその使にやる

みよし野のかりの命はさだめねどおのが後こそたのむべきもの
風をあらみにはかにちりしふぢ袴香だにや多く殘らざるらん
今よりはいかにこ萩が花づまのをしかなき野にちりまどひなん
宮城野の露にしをるゝ秋萩は君がみかさのかけたのむなり

父のおもひにてありけるころ

身まかりにける、今はみなぬかばかりにやなりぬらんといふを聞くに、心しれる友なりければ、かへすがへすも悲しく思へどかひなし、年比好みつることにて今はのきはにも歌よみつるなどかたるを聞きて、いとあはれのすゞむに、くちずさめるかぎり書きて友古のもとまでおくりつ、露の手向草にもとなり

大かたもおどろかれぬる秋風につねなきこゝろのそふぞかなしき

なき人はいく七日にかなりぬらん彦星ならばまたも見ましを

きくからにくやしき事のくやしきはあはで經るまの別なりけり

今はよになしと聞くこそかなしけれあるにも逢はで年はへぬれど

秋風の空に今はと行く螢見るくきゆる世にもあるかな

これはかの終の日に螢の曉に影消ゆるよしな

藤衣ふかくそむてふすみの色の夕ぐれに問ふほとゝぎすかな

あるものゝ師の忌とて名所懐舊といふ事を人のもとめけるに、四月の末なりければ

ほとゝぎす今きの岡にこゑきけばたゞなき人のたよりなりけり

五月のころいときなき子をうしなひける人のもとへ

さみだれのふるにますらん泪川せくべきよしもあらじとぞおもふ

六月十四日はこぞ暉昌が身まかりし日なれば、としごろのむつびわすれがたきに、たよりにつけていひつかはしける

天の原ふじの高嶺の白雪のきえぬる時と聞くぞかなしき

利秋としごろわづらひて久しくあはざりけるに、七月七日に友古がまで來て、いにしみな月になん

おきてわかれし
今はたゞ袖の氷となりにけりおきてわかれしをふのした露
春のくれに人をおもふ
今もかもこじまがさきににほふらん君に似るてふ山吹のはな

哀傷歌

卯月のはじめつかた茂子のせの身まかりつと聞
きて花などおくりけるにさしたる歌
世のなかのはかなき時はほとゝぎすなくねも殊にうらぶれにけり
美樹がちゝのみまかりたるのちひとぐ\ 夕郭公
といふ題をかの家によむとて、その歌見せたるつ
いでによみておくる

逢戀

かりそめのたのめと人やおもふらんなきてわたりしみよし野の里

思高戀

わが戀は雲ゐに高きあし引の山のしづくを袖にかけつゝ

知身戀

これぞこのうき身しらるゝつまなるをつらしと人を思ひけるかな

つらき身にあるべきかはとおもひしるおなじ心のいかでこふらん

待空戀

殘る夜も鳥より後にまちえたるならひなければなく〳〵ぞぬる

寄瀧戀

いはばしる瀧つ山川とこなめに絶ゆることなくあふよしもがな

寄霞戀

はる來べき方こそなけれねぬるよの夢より霞む春のあけぼの

戀歌

はじめてあへる

初尾花むすびそめける夕露に秋てふ風はふかずもあらなん

（そむなるイ）

あひおもふ

思はぬを思ひしほどにくらぶれば思ふを思ふことぞすくなき

わすらる

風のこゑむしの音をだにきかじやはなどみし秋をわすれはてぬる

しらぬ人

おもひつゝぬればあやしなそれとだにしらぬ人をも夢に見てけり

舊戀

かれしそのむかしばかりはしたはぬや我さへうとく今はなりけむ

春をまち年を惜みていづかたにふるとしもなくよぞふけにける
　しはすに閏ありけるとしのくれに
くはゝれる冬をもたゞに過し來ておろかなる身を今年こそ知れ
都のかたへにすまへど、人なみ〳〵なる身にしもあらねば、春をむかふる業とてなにごとをも設けず、さるは門さしてなどもあらねば、のどやかにのみもあらず、木にもあらぬ吳竹のよの中には法師ばらといひけんもおぼえて、われだにいひしらずなん、人々のまで來てかたらへる歌を聞けば、とりどりにをかしかれど、もとよりおのが心をやるわざなれば、人にならふべきにもあらず、よしとてうらやむべきことわりもなし、たゞ心やりに、
年くれて松をもたてぬすみかにはおのづからなる春やむかへむ

年のくれに友をとふ

年たゞば春野のわかなまづつまんかねごとしにぞけふは來にける

年のくれに祓するかたを

もろともにつもり來にける天つ罪雪より先にまづやきゆらん

歲暮雪

野も山もみゆきふれどもゆづる葉の春の設はをりもまどはず

年のとく暮るゝ心をみつねが冬の長歌によりて

今朝よりはしぐると見えし冬の日の傾くまゝに年ぞくれ行く

としのくれに

くれてゆく年のはや瀨の氷上は白き筋こそ落ちまさりけれ

これはくしけづりければしらがのまじりてけづられけるにおどろきてよめるなり

年ふりてもとの身ならぬこゝろには春もむかしの春をやはまつ

おどろけどかひなきものを今よりは月日もよまじ年もかぞへじ

おなじ時贈答の歌人々もよみけるに、神樂の夜人にといふ事を　枝直

宮人の弓といへばとうたふ夜もひかれぬ身こそしななかりけれ

返し

四方山のまもりなりてふ梓弓ひきみひかずみうらみやはする

遠江のくに磐田のやしろの神主菅原信幸が母の八十の賀の屛風の歌、十二月神樂する所

とのもりの白くたくなる大御火のよにおもしろき神あそびかも

新嘗會

たふときやすべらみことは神ながら神をまつらすけふのにひなべ

まだきにさける梅

大かたは春だに花のまたるゝをとしの内にもにほふ梅かな

雪ふれば咲くや梅津の山里ににほはぬ花は人もとひこず

雪中遊興

野も山も冬はさびしと思ひけり雪にこゝろのうかるゝものを

雪中眺望

雪はるゝあさけに見れば不二のねのふもとなりけり武藏野の原

雪のあした

初みゆきはれたる朝に見渡せば里のけぶりもめづらしきかな

おきいでて曉ふかく見し雪の今朝まで月にまがふ庭かな

冬遠情

立かへり今も見てしが遠つあふみ濱名の橋にふれる白雪

うちきらしみ雪降るなりよしの山人りにし人やいかにすむらん

家に歌よみけるに、冬眺望を

ふる雪のしらふの鷹を手にすゑて武藏野の原に出でにけるかな

ばかり雪のふりければ

しめおきしまがきになびくくれ竹のよに珍しく見ゆる雪かな

かくれ家に雪のふりたる心を

わが庵の庭には跡もなかりけり落葉がうへにふれるしら雪

題しらず

おもふ人こてふに似たる夕かな初雪なびくしののをずすき

屏風に、雪のふりたるに人々舟にのりて見るかた

花ならばこぎよせてこそたをらまし入江の松にかゝるしら雪

杜　雪

身のよそにいつまでか見む東路のおいそのもりにふれる白雪

閑居雪

冬ごもる（冬ふかき）庵の（柴のイ）とぼそをまれにあけて竹にかゝれる雪を見るかな

山館見雪

物をこそこたへずあらめふりはへて今朝はこゝろの雪とやは見ぬ

同じ日正房がもとより、「あとをしもいとはぬ君が宿ならばとはましものを今朝のしら雪」とあるに、たはぶれてこたふ

むかしたれ雪には跡をいとひそめて君がかごととけふなりにけん

詠雪

はしたての（ぬばたまのイ）くらはし山に雲きらひ（合ひてイ）高市國原雪ふりにけり

雪の朝遠き里を望むといふ心を

今朝見れば（朝ばらけイ）ふもとの里はわかねども烟ぞ雪の上（山イ）にたなびく

すゝきにかゝれる雪のをかしかりければ、友のもとへ

おもひやれ枯生のすゝきうちなびき友まちがほの雪の垣ねを

ことしふせやをしめて竹などうゑけるに、しはす

おもひねの夢にまさらぬ初雪をよはにふりぬと誰かいふらん

またある日よべより雪のふりけるに、枝直のこなたよりも消息せざるをにくむなるべし、詞はなくて、「白雪のふりとふるともこゝろなき人をばまたじとはんともせじ」とある返し

しら雪のふりとふりなば心なき人もやとふとまちにしものを

また枝直「ふる雪のおもはんことをおもはずば人をもまたじ人もまたじを」

返し

人や來む我やとはんとおもふまにわくる心は雪ぞしるらん

また枝直「とひとはず君が心をいかにぞとゝへども雪はこたへざりけり」

返し

楫取魚彦がもとにつどひて、その所の歌とて

ゆふされはうなかみがたのおきつかぜ雲ゐに吹きて千鳥なくなり

霰

ありま山うき立つ雲に風そひてあられたばしるいなみ野の原

雪のふりけるあした、枝直のもとより人おこせたるに、何ごとをもいはでかへりにけるはこゝろもえず、此人は朝しもををかしきものにいひければ、朝ごとの霜をあはれといふ君はけふの雪をばいかゞ見るらむといひやりつれば、例の朝いをおどろかしつるなりけり、それが返しに、曉のほどこそをかしかりけれ、けさふるものとやおほすらむ、「あさいして霜をだに見ぬ君はしもよるの雪をばいかでしるべき」とあればまた

日をさへし大河のべのくぬぎはら冬は風だにたまらざりけり

冬がれに里のわらやのあらはれてむら鳥すだく梢さびしも

夜落葉

山風のふく夜の月におとはして曇るともなくちる木の葉かな

名所落葉

佐保過ぎてたがとるぬさとみだるらん奈良の手向の風の紅葉

冬月

さよ中と夜はふけぬらし我宿の庭に霜おきてさゆる月影

湖上冬月

すはの海や雪げのそらの雲間より氷をてらす月のさやけさ

ふゞきせしいぶきおろしのさえくれて月にしづまるよごのうら浪

千鳥を

かまくらのよるの山おろしさむければみなのせ川に千鳥なくなり

時雨陰晴といふことを

かみな月今日もしぐれの晴れにけり曇りにけりといひてくらしつ

朝時雨

けふもまたかくていく度しぐれましみねの朝日に雲かゝるなり

かみな月軒端の露のおきいでてけふもしぐるといはぬ日ぞなき

寒蘆をよめる

つのくにの難波のあしの枯れぬればこと浦よりもさびしかりけり

寒草

かれにける草はなか〳〵やすけなり残るをざさの霜さやぐころ

世の中はゆふ霜さやぐおきな草枯れてもやすき時なかりけり

枯野

つくばねの緑ばかりをむさし野の草のはつかにのこす冬かな

寒樹

伊久米の君のもとにて十月更衣を

かふれどもいとゞあやなき衣手にもみぢだにちれ翁さびせん

かみな月の紅葉をよめる

かみな月かた山あらしのどかにて紅葉みるべきけふにもあるかも

ちよの木のちよぶの山の薄もみぢうすきながらにちれる冬かな

十月ばかり人に山づとをおくるといふ事を、茂樹が家にて人々とともに

冬立つやあらしの落す椎がもと山にも身こそやどしわびぬれ

十月ばかり山里にやどるといふ心を

くれ行けばまがきに鹿ぞそよぐなるたゞかくながら秋やなきけん

時雨をよめる

高鴨ははやくしぐれぞふりにけるかづらき山のみねのうき雲

神無月たちにし日より雲のゐるあふりの山ぞまづしぐれける

（さがみなるイ）（はれくもりするイ）

詠菊

あたら代のたひらの宮にめでそめて菊は千ぐさになりにけるかも

菊の花を折りて人のおこせたりければ

よはひをものぶべき君が宿の花かざすに老ぞまづかくれける

惜秋

おのづからもろき木の葉の秋なればくるゝを何にかこちだにせん

秋のはて

さをしかのたち野の原に秋くれて今いく夜とかつまを戀ふらん

冬歌

神無月の一日に衣ばこのふたをひらきて

かみなづき又も（今しも春もイ）春としいふめれば櫻いろなるそでやかさねむ

にほどりの葛飾早稲のにひしぼりくみつゝをれば月かたぶきぬ

九月十三夜知陳が家に月見ける時、洲濱に紙もて

鶴のかたをつくり、松の葉をしきてかひこを多く

おきたり、いはふ心をよめとすゝむれば

鶴の子のよを長月の影なれば見るかひもある宿の秋かな

新むろにて

眞木杜ほめてつくれる高きやに千秋の月を見そめつるかな

野分せしあしたに

野分してあがたの宿はあれにけり月見に來よと誰につげまし

九月ばかり犬上衛が家にて初紅葉を

心とく來ても見しかな山しなの石田の森のもみぢそめしを

紅葉

よのつねの色ならめやはさがの山もみづる秋のいでましどころ

秋水郷

あしがちる難波(なには)の里の夕ぐれはいづくもおなじ秋風ぞふく

秋神祇

秋風の立田の使たちしより世はゆたかなる穂なみこそよれ

雁を

見わたせばほのへきりあふさくら田へ雁鳴きわたる秋のゆふぐれ

田づらのいほりにて

露さむき門田(かどた)のをしね月照りて雁なきわたる秋のよな〳〵

九月十三夜縣居(あがたゐ)にて

秋の夜のほがら〳〵と天の原てる月影にかりなきわたる

こほろぎの鳴くやあがたのわが宿に月かげ清しとふ人もがも

あがたゐのちふの露原かきわけて月見に來つる都人かも

こほろぎのまちよろこべる長月のきよき月夜はふけずもあらなん

山家月

秋のよの月清ければなほもあらずいでてこそ見れ杉たてる門(かど)

夕月

萩原や庭のゆふ露うつろひてくれあへぬ影は(くれぬひかりはイ)月にぞありける

枝直が家にて松間月といふことを

都にもまつの木のまの月見ればみやまの秋のこゝちこそすれ

水上月

たつしぎの影ばかりをやくまと見ん野澤の水のふかきよの月

明石浦秋

明石(あかし)がた有明の月をしたふまにあはれをそふる波のあさ霧

八月廣澤池眺望といふことを

都人見ぬ海山のおもかげも月にうかべるひろさはのいけ

月見ればみやこのうちも海山のありけるものをひろ澤の池

すみの江のうらわにたちて月みればなにはの方にたづぞなくなる
さゝなみのひらの大和田秋たけてよどめるよどに月ぞすみける
はりま路やゆふ霧はれて久方の月おしてれりいなみ野のはら
大船に小舟引きそへますかゞみすみだがはらに月を見るかな
十五夜くもりけるに
天の原八重棚雲をふきわくるいぶきもがもな月のかげ見む
八月十六日永昌がなり所に人々集りて、屏風に川邊なる家に月見るにまらうどの來るかたあるを、所につけたる繪なればこの心よまんとて、ともによみける、あるじの所に
さゝらなみよるしもかくてとはるゝは月こそ宿のあるじなりけれ
まらう人のところに
淸らなる秋の川べにすむやどの君こそ月のあるじなりけれ

荻

百草のおほかる中にわきてなどうたて吹くらむをぎの上風

荻漸盛

鹿もやゝ戀のさかりとなりぬらし野べのこはぎの色まさり行く

萩

をじかふす野べの秋風吹きそめてほころびにけりはぎが花妻

萩に對ふといふこゝろを

萩が花かきねもたわに咲く時は野べもおもはぬものにぞありける

旅人鹿の音聞くかたを

さをしかのつまとふよひの岡のべに眞萩かたしきひとりかもねん

旅衣わがつまならぬ萩原にしかの音聞きてひとりかもねん

月の歌とて

遠つあふみ濱名の橋の秋風に月すむうらをむかし見しかな

賜りたる扇に書きける、ふんづきばかり

紀の海はすゞしかりけりあしべより波うちはふる秋のはつ風

とほつあふみの佐益の中山のにしにつゞきて、今

はあはがだけとて高き山あり、延喜の式に安波々

神社とあるこれなり、そのかたゐにかきたるに、そ

のふもとに旅人あり、それがこゝろをよみつ、時は

秋のはじめつかたなり

東路は衣手さむししら雲のあはゝがたけの秋のはつ風

人の柿本社に奉るとてもとめけるに、初秋風とい

ふことを

風のおとのいく代雲ゐに聞えあけて高つの山に秋は來ぬらむ

秋　風

松のひゞき荻のさやぎのさまぐ\に聞えて絕えぬよはの秋風

七月七日家に人々來てまつりのかたするにおの
　おのよむ

たなばたの天つぃもせのことをだにこちたく誰かいひつたへけん

　七日の夜の歌

天の原とほき川とのゆふなみに今やこぐらんともしきをぶね
たなばたのあふ夜の秋の初風にをとこをみなの花も咲くらし
あまのがは見つゝしをれば白たへの吾衣手(わがころもで)に露ぞおきにける

　七日の夜雨のふりければ

夕月夜(ゆふづくよ)空もあやなく降る雨にこぎなまどひそ天の川をさ

　枝直の子生れける比(ころ)文月十三夜に人々集りてよ
　ろこびいふに、月のおもしろかりければ

この宿にさゝらえをとこ生(おひ)さきの光こもれる千代のはつ秋
　わかの浦の蘂してつくれりとて、人の御もとより

とすゞしかりければ

からろとる大河のべのすゞしさは初かりがねも聞くばかりなる

秋の歌とて

秋風はたちにけらしなさらしなやをばすて山のゆふ月の空

大作のみつの浦なみ吹寄せてまつばらこゆるあきのゆふ風

源之眞おもきやまひおこたりて後、つかへをかへしけるころ、主のめぐみふかきことなどこまやかにいひおこせて、さて七夕の歌ども見せけるを、その歌返しやるとて、傍に書きてつかはしける

天の川かいのしづくを身にうけてこよひやいかに涼しかるらん

七月なぬかの夜

たなばたのあふ夜となれば世の中のひとのこゝろもなまめきにけり

こよひまで今宵をまちてこよひあけば又の今宵をまたんとすらん

おなじむしろに夏日といふことを
わたの原とよさかのぼる朝日子のみかげかしこき六月（みなづき）のそら

秋歌

山べの庵に秋の來たる心を
今朝はしもたけのはやしぞそよぐなる世は秋風の立ちやしぬらん

早秋
うきものとおもひもいれで秋風をうらめづらしみすぐすころ哉

殘暑
宮城野や秋なほあつき木のもとの露なき草に風をまつかな

秋も猶あつきゆふべ、人々とともにすみだ川の下つかたの大川てふあたり舟こぎわたりけるに、い

むぐらはふわがやどをしもたゝくなる水雞やよはのなさけしるらん

なつと秋との

よしの川みそぎにながす麻の葉や夏と秋との中におつらん

みちのくの岩城の君の許にて物がたり聞えける

時、夜ふけぬべしまかでなんといふを、こよひは六月つごもりなり、秋のおそき年のみなづきばらへのこゝろをよまんとて、あるじもよみ給ふに、おのれも筆をはしらしめて

くにつ罪はらふこゝろのすゞしきはあめに知られぬ秋にぞありける

夏ばらへするかたかける繪を

よろづ代とひがしも西もとなふなりはらへのこせる罪やなからん

枝直が家にて六月祓を

天つ罪はらふゆふべは雲ゐ吹く風もすゞしくなりにけるかな

にて歌よまんとてその別當のもとめけるにとも
だちかいつらねてふねよりぞ行く、對陰避暑とい
ふ事をかねてよみていだしける

風やどる夕のもりの下すゞみ秋の葉そよぐこゝちこそすれ

水邊納涼

立ちよれば山陰すゞし夏み川夏てふことやなみのぬれぎぬ

高殿にすゞめるかた

たかきやは涼しかりけりあらがねの土てふものし夏にやあるらん

家に歌よみけるに晩夏といふ事を

空高く螢をさそふ夕風の身にしむまでになれる夏かな

おなじむしろに大井川の夏を

大る川わか葉すゞしき山陰のみどりをわくる水のしらなみ

わがやどをしも

紀伊宰相の君のもとめたまふによみてまゐらせける三首の歌　樹陰納涼

すゞしさの大路の柳陰ごとに馬もくるまもいこはぬぞなき

里蚊遣火

ゆふされはかやり火たかぬ宿もなしこのさと人は月や見ざらん

晩夏

行く雲もほたるの影もかろげなり來む秋ちかき夕風のそら

夕立をよめる

にひた山うき雲さわぐ夕だちにとねの川水うはにごりせり

おほひえやをひえの雲のめぐり來て夕立すなり粟津野の原

夏風を

吹く風のこゝろは常にあらめども夏こそ人にしたしまれけれ

みな月初の六日にかつしかの西にある秋葉の社

家に歌よみけるに山家五月雨といふことを

五月雨はをやむもわかず谷の庵に雲よりおつる眞木の下露

そのむしろに夏鳥を

みじか夜のはかなさつげて鳴くそらのをりあはれなる朝烏かな

又夏祝を

ふる雨に早苗をうゑて國の名のみづほの秋をまつぞ樂しき

五月宴菅原氏家時作歌

橘のもとに道ふみ行きかへりもとつひとにもあひにけるかも

あし引のいはねすがはらいくつ夏しげり行くらん岩根すが原

夏　虫

庭のおもにそこはかとなき虫のねもをりあはれなる夏の夕ぐれ

故郷螢

ふるさとのみかきがはらの夏草によるはもえつゝとぶ螢かな

君ましゝむかしの花のふぢ原をほとゝぎすこそ今もとひけれ
　京にて物ならひし比したしかりける人のいまは
　いせの國にあるがもとに文のはしに
鈴鹿川はやく聞きつるほとゝぎすいせまで今もおもひやるかな
　山ざとへほとゝぎす聞きにまかりて
うの花を手ごとにをりてかへらまし山郭公聞きししるしに
　五月家に歌よみけるに船の中なる人郭公きくか
　たを人々とともに
郭公おのがさ月の山川をこゑにのりてもさしくだすかな
　名所郭公
つくば山花たちばなの咲きしより鳴くこゑしげき郭公かな
　郭公頻
このさとはさらにしたひもあへぬまで過ぐれば來鳴く郭公かな

きのふけふ時來にけりと時鳥とばだのおもに早苗とるなり

郭公まつこゝろを

初こゑをみやこにいそげ郭公山がつならぬひとこそはまて

題しらず

なかざらむ物とはなしにほとゝぎすつらき時こそ猶またれけれ

郭公の歌あまたよみける中に

たちばなのかをれる宿の夕ぐれに二こゑなきてゆくほとゝぎす

市郭公

しのび音をあらぬ名のりにまがへとや市路に鳴きて行くほとゝぎす

故鄕郭公

橘の島の宮居のあととめてなくはむかしのほとゝぎすかも

夏の比人々とともにふりにし世をしのぶ歌よみ

けるにほとゝぎすを

陰ふかむ青葉のさくらわか楓夏によりてもあかぬ庭かな

春道がなり所に友だちかいつらねいきて

苦丹咲くそのふの木々の若みどり夏このましき宿にもあるかな

あかなくにあすもさね來むにほどりのかつしか小田の苗もみがてら

賀茂祭

年ごとにけふの葵をかけまくもかたじけなしや賀茂の氏人

かみゑにさなへうゝるかたかけるを

いそぎてぞ早苗はうゑんあし引の山時鳥なきにしものを

屏風に雨ふるに人多く早苗とる所

大御田のみなわもひぢもかきたれてとるや早苗は我君のため

さみだれふるに山下の田うゝるかた

さなへ草うゝる時とてさみだれの空も山田におりたちにけり

採早苗

夏歌

山家首夏

庵ながら昨日の春の花も見つさてこそきかめやまほとゝぎす

山ざとは夏のはじめぞたゞならぬ花の人めもすぎぬと思へば

思餘花といふ事を

いかならん熊野のおくを尋ねてか夏にものこる花にあはまし

おそざくらを

おくれては物すさまじく見ゆる世に今も櫻のめづらしきかな

あしがらの關の山路をこえ來れば夏ぞさくらはさかりなりける

新樹

夏の來て昔にかへる玉がしはとるともつきじにひかゞみ葉は

枝直が家にて庭樹結葉といふことを

河山吹を人にかはりて

山吹は下ゆく水も花なるを心してさせ春のかはふね

山吹咲きたり見る人あり

故郷は春のくれこそあはれなれ妹に似るてふ山ぶきのはな

春のくれに春道がなり所をとひて唐棣花を

この園はまたも來て見む宮人の袂おぼえてはねず咲くころ

殘春

花のみなちりての後は春さへにのこる日なくもおもほゆるかな

春のはて

ひたちには田をこそつくれしめはへて（行春をしめひきはへてイ）けふ行く春を誰か止むる

霞立つながき春日にながめして花にも物をおもふたびかな

さくらの花のちりたるを

菅の根の永き春日に袖たれて見むとおもひし花ちりにけり

上野にて

ちる花の都のふじやいかならん東のひえは雪とこそふれ

すみれを

故郷(ふるさと)の野べ見にくればむかしわが妹とすみれの花咲きにけり

雲雀

霞たつ春野の雲雀(ひばり)なにしかもおもひあがりてねをば鳴くらん

國原

雲雀あがる春の朝けに見わたせばをちの國原霞たなびく

苗代

苗代(なはしろ)の水口(みなぐち)まつりしめはへて賤が業こそむかしおほゆれ

ひけるに、歌よめとありければよみける

あか駒を引馬の坂のもと櫻もとの心をわすれでぞさく

わらはあそびに竹の葉もてつくれる舟に櫻の花をつみてながしたるを見てたはぶれに人々とともに

すくな神つくれる舟に木の花の咲や姫こそのりていづらめ

ふる郷に櫻のちるを見るといふこゝろを

みよしのをわが見に來れば落瀧つ瀧のみやこに花ちりみだる

志賀山越

花をふくあらしの空は雪ながら袂ぞかをる志賀の山越

春山の旅のこゝろを

しなのぢのおきその山の山ざくら又も來て見むものならなくに

三月枝直が家にて歌よみけるに羇中花を

おもひきやうき世の人にさそはれて塵のほかなる花を見んとは

伊久米の君のもとより櫻の枝にそへて「よしや花ちるともいかでをしむべき色香をさそへ庭の春風」とある返し

君がけふをしへしものを今よりは花さそふとも風はうらみじ

山里へ花見にまかりたるこゝろを人々とともに

山里は岩ほのなかと聞きつるを花にこもれる所なりけり

遠つあふみの引馬の古城は、むかしふたらの大神のふとしきましゝ城なり、そのかたへにさかあり、ひくま野へのぼるところなり、そのさかのうへにいまはさかもとのぬしすみ給ふ、垣のうちにむかしの大神のめで給へるさくらの、今もひこばえさはにしみさびてあるを、ことしことのついでにと

山櫻ちれば咲きつぐ陰とめて大かた春は花にくらせり

谷中の柿本社にて歌よみけるに社頭花といふことを

ことのはの色香にあける神ながら猶みづがきの花やめづらん

上野の花ざかりに

かげろふのもゆる春日の山櫻あるかなきかの風にかをれり

長門守の東のひえの花見に福聚院に遊び給ひける日題をさぐりて風靜花芳といふことを よべ雨ふりて今朝はれたり

よるの雨の露だにちらず櫻花にほふばかりのけふの春風

あるひとにさそはれてやまざとにいたれりけるに柴の戸の花ざかりいと心のとまりて覺えければ

雲とのみまがふ櫻のさかりには心もそらになりにけるかな
山櫻咲くと見しより吉野川ながるゝ花もかつぞたえせぬ
大路ゆく人の袂も櫻色に染むるぞ花のさかりなりける
うら〳〵とのどけき春の心よりにほひいでたる山ざくら花
　花のもとに弓いるかた
さくら花花見がてらに弓いればとものひゞきに花ぞちりける
　關路花
山ふかみおもひのほかに花を見て心ぞとまるあしがらの關
　關花を人にかはりて
吹く風をなこその關の山櫻心づからぞちらばちらまし
　不破關花といふことを
さくら咲くふはの山路は關守のすまずなりても人をとめけり
花下送日といふことを

田にもあらぬ千町の家をやきすてゝつくれる罪の程ぞ知られぬ

春の山ぶみ

山越えて霞む梢を見わたせば繪によく似たる物にぞありける

春三河のざう(掾)をおくるといふ事を

宮道(みやぢ)山(やま)春行く袖の深みどり秋はあけにも染めざらめやは

遲日

菅の根の長見の濱の春の日にむれたつたづのゆたに見えけり

桃

賤のをが園生の桃の花ざかりやぶしもわかぬ春の色かな

よし野の山の花ざかりを見やりて

世の中によし野の山の花ばかり聞きしにまさるものはありけり

花の歌とて

咲きちるはかはらぬ花の春をへてあはれと思ふことぞそひゆく

どもは心にもいれず、たゞくらの戸ぐちにひぢりこぬりまかなはせて立いでぬ、ほどなくみな烟にこもりにければ、源の簡(えらぶ)がもとへ行きて夜をあかしぬ、なにばかりの家ならねば、なごりもさしもあらねど、また草の庵結ばむまでは人によりてあらんもくるしかるべし

春の野のやけ野の雲雀(ひばり)床をなみ烟のよそにまよひてぞなく

おのがあたりより火いよゝさかりになりて、明日のひるまでもつぎ〳〵やけ行きにけり、いく千よろづの家々か烟となりけん、人なども死にけりといふなり、またことしは所々に火あるは、ぬすびとのわざも多しとて、からめてかうがへらるなどもいふ

すゞなの花のさかりに咲きたりければよみていだしける

春さればすゞな花咲くあがた見に君來まさんとおもひかけきや

二月晦日（つごもり）（延享三年）本所といふ所に火おこりて、家ども多くやけにけり、その夕つかた、風もあらく、そらのけしきあかくちりだちて、こゝにしも火あるかと覺えたるを、その夜亥の初ばかり、十町ばかりみなみよりまた火いできて、ほどなくおのが家もやけぬ、むかしよりこゝろつくして考へつゝ、物おほく書そへたる書（ふみ）どものあれば、これをばくらにもいれじ、いかで便（たより）よからん所へわたしやりてむ、今はとてのがれいでなん時、從者（ずさ）の手ごとにもたせむとかまへて、先その事をとりしたゝむる程に、調度（てうど）

いざけふはをぎのやけ原かき分けて手折りても來む春の早蕨

題しらず

すがのねの長き春日になりぬればこゝろずさみぞ暇なかりける

家に歌よみけるに二月餘寒を

二月やまだ雪さゆるいこまやま花の林はそらめのみして

同じ題を在滿が家にて

きさらぎの空さえかへる山風は冬にまさるゝこゝちこそすれ

また森鶯を

春ふかき老そのもりの鶯は人もすさめぬ音をや鳴くらん

二月梅

色も香もとりならべたる梅の花咲くこそ春のもなかなりけれ

きさらぎの末つかた櫻の花もやゝ盛なるころ、伊久米の君のおはしたるに、庭をはたに作れりしが、

むかし君み袖ふれけん梅がえのいまもかをるかあはれそのはな

庭落梅

とふ人の笛もきこえて垣の内に梅ちる風のおもしろきかな

水郷柳

六田川風ものどかに行く水のみどりによどむ柳かげかな

柳ある家に人來れるかたを

春風のあわをによれる柳もてとひ來る人をとめんとぞ思ふ

む月の末、津輕爲春のもとにはじめて行きけるに、酒さかなとりまかなひ物語しけるついでに、冬がれの垣ねもけふこそ初花のかをり覺ゆれなど歌よみていだしけるに

初花のをりから君をとひつるは我こそ春にあへるなりけれ

早蕨

のこりの雪

めづらしと見初(みそめ)しほどになりにけり遠山のまにのこる白雪

かけまくもかしこき、下つけの國ふたら山にいはゝれます大神の、むかし遠つあふみのくに曳馬(ひくま)の城をしきましゝ御時、御狩のをり〳〵、竹山が家の梅こそおもしろけれとて、其庭に御馬よせさせ給ひ、かをりさかえたる枝に御鷹をすゑおかせたまひて、御酒(みき)きこしをしめでましゝを、今は百(もゝ)よりおほくの年を經ぬれど、その梅のみづ枝さしつぎて春ごとににほひをまし、此家もたぐひひろくさかゆることを、おのれしも母とじのゆかりありてかたじけなく御ゆゑよしをつたへ承はりよろこぼひて、ふるきしらべをうたふ

正月家に歌よみけるに春神祇を

大王の園のまつりにとる弓のはる日たのしき神あそびかな

そのむしろに贈答の歌よまんとて縣召の比人に

といふ事を

高きにもうつるためしをよそに見て谷の古集の鶯ぞなく　枝直

返し

日の光いたらぬ谷もあらなくになに鶯のいでがてにする　枝直

踏歌の夜人にといふ事を

來ぬ人をはしのつめにもまちて見むあられはしりの夜は更けぬとも

返し

あやなしや竹川うたふ歌垣に君もこもらば手もとらましを

賭弓

わしといひ鷹とわかれてわたるかなけふのいく羽の雲の上人

みちのくのちかの鹽がま春來れば烟よりこそかすみそめけれ

春　水

春風に氷ながるゝみぎはには水のこゝろのゆくも見えけり

天中川

すはの海や氷とくらし遠つあふみ天の中川みぎはまされり

春風春水一時來

つくば山しづくのつらゝ今日とけて枯生のすゝき春風ぞふく

春色浮水

こほりゐし志賀の浦波たちかへり白ゆふ花に春は來にけり

うぐひすを

うちわたす竹田の原の雪のうちに鶯なきぬ春のはつこゑ

春鶯呼客といふことを

花のもとにさそはれ來てぞしられける人をはからぬ鶯の音を

てまゐらせける

三冬つき春立ちけらし久方の日高見の國に霞たなびく

正月十四日に春の立ちける日よめる

東路にありてふ關のなこそともとゞめぬ春のなどおくれけむ

家に歌よみけるに春日望山といふ事を

見わたせば天の香具山うねび山あらそひたてる春霞かな

其むしろに名所若菜を

春日野の雪間のわかなつむ時はみどりの袖もよしぞありける

朝霞

山高みいづる日影をまちとりて四方ににほへる朝がすみかな

霞を

むらさきのめもはる〴〵といづる日に霞いろこき武藏野の原

海邊早春

武蔵野を霞みそめたる今朝みれば昨日ぞ去年の限りなりける

今日しこそ睦月も春も立にけれあめにかなへる御世のしるしに

　年のはじめによめる　春は去年はやく立ちぬ

春はとく來ぬとはいへど大君の年たちてこそのどかなりけれ

　春たちける日　去年唐人のみつぎの舟つきたりといふ

東路に春立にけりからふねのつしまの波ものどけかるらし

　春のはじめに　大御日嗣しろしめしゝあくる年の春なり

あたらしき御世の始に年たちて影のどかなる春日なるかも

　ふるさとへ文のはしに

みよし野のかりのすみかに春たちぬいつ故郷へわれもゆかまし

　春たちける日遠江なる人々をおもひて

越えゆかばわれことなしとかひがねのあなたにつげよ春の初風

　正月三日陸奥の殿の姫君歌をとのたまふによみ

賀茂翁家集　巻之一

春歌

春の始の歌

をつくばもとほつ足尾も霞むなり嶺こし山こし春や來ぬらん

のどかなる春は來にけり玉くしげふたらの山のあくる光に

ことに今朝めづらしきかな春の來る方にむかふる春と思へば

年月のくれぬをなにかをしみけん春にしなれば春ぞたのしき

年たてばのべのあそびのゆかしきをけふ來む友に先やちぎらん

梅が枝の花のゐまひを朝ほらけ年の始のさかえにぞ見る

世の人の花鳥にしもならひせば昔にかへるときもあらまし

元日に春たちけるに

めのわざにて、こゝろもせで筆にまかせられしものなめれば、ことさらに傳ふべきわざならねど、猶すてがたくてなん。

一やむごとなきおほせごとをうけたまはり、あるは人のうたがはしき事ども問へるふしなどに、考へてこたへられたる類をば、對問といひ、いさゝかづつかうがへおかれたるものゝはしぐなるをば、雜考とてあげたり。すべて十巻、名づけて賀茂翁の家集となむいふ。

寛政三とせのしもつき

平春海記

一おなじ歌にて、かれとこれと詞のことなるあるはうたがはしきを、みだりにさだむべきならねば、一本とてかたへにしるせり。

一長歌は、おほくは眞名もてかゝれたるあり。されど今は皆平假名にあらためつ。眞名は後の人のよみあやまるべきものなればなり。さて題を眞名にかゝれたるをばあらためず。

一文もかきつめおかれたるがうせつるを、今は得るにまかせたれば、もれたるもおほかりなん。さて文にはやき時つくられしと、後にしるされしとあれば、その論じいはれたることの、かれとこれとあひそむけるたぐひもあり。見ん人うたがふことなかれ。

一祝詞碑文のたぐひは、眞名にてしるされたれど、みむ人のよみやすからんために、皆平假名に改めたり。

一書札はいとおほかりつらんを、今は往きかひせし人も多くうせにしかば、もとむべきよしなし。さればわづかにのこれるをあげつるなり。これはかりそ

賀茂翁家集のおほよそ

一此翁の歌、はやき時にかきつめおかれたるがありしは、まだしきほどのわざなりとて、後にみづからやかれにけり。其中頃よりこなたのは、さらにしるしおかれにたるを、翁なくなりたまひて後、其家かぐつちのあらびにあへりし時にうせにければ、今はつたはらずなん。こゝに今書きつどへたるは、翁にもの學びたる人の、これかれしるしおけると、又あひしれりける人の家に、かずがずちり殘れるをもとめ得たるなり。さるはもれたるも多かるべし。又このかきつめたる中には、かのみづからやかれにけむ歌もありぬべけれど、今はた選みすつべきならねば、得るにまかせて載せつ。

一今かきつめたるには、はやき時の歌を後にのせ、又後なるがまへにいでたるもありぬべし。さるはちりぢりなるをひろひつるが、くはしく序(ついで)のしりがたければ、題の序(ついで)にのみしたがへり。

たれば、こゝにははぶけり。眞淵といへるみ名は、敷智の郡の名より思ひよりてつきたまへりとぞ。あがたるとは、庭を田ゐのさまに作りて、賀茂氏のかばねにもよしあればとて、みづから家の名におほせられたるなりけり。今よりをち、古への學び世にひろごりなば、よゝ此うしをたふとみ、かつこの書をたゝへなむものぞとて、其ことわりをのぶるになむありける。

享和元年十月廿日　　橘　千蔭

いたく思ひあがりて、まうけずかざらず、たれも心のおよびがたきふしをのみ作られき。其はじめのほどなるも、あるよりもあをしとか、すくねよりも立ちまさりてぞきこえし。をりにふれては、古事記のいとあがれる世のさまなる、またいにしへののりとごとになぞらへたる、あるは中つ世のさいばらのうたひ物をまねびたる、あるはものがたりぶみによりたるなどは、其世々の人のいひいだせるにことなることなくなん有りける。さるを一とせ火のわざはひにあひて、おほくうせぬることそかなしむべき事のかぎりなりけれ。こゝに平の春海のをぢ、わらはより大人にしたがへりしによりて、うしのみまかられし後、家の集ども將くさ〴〵のちりぼへるふみらを、このをぢが家にをさめおけるをかきつめて、板にゑりなむとせしに、さはらふ事有りて、とし月經にけるを、更に思ひおこして、歌にふみに、くさ〴〵のとひこたへをさへにとりとゝのへて、十巻とはなしぬ。うしの遠つおやよりして、現身の世にませしほどの事は、江戸のみなみ荏原の郡品川の東海寺なる少林院のおくつきのかたはらの石碑にしるし

きさまにおもはれしかど、たまさかにいひいで給へることに、しきしまの大和(やまと)心(こゝろ)をあらはし、ひと言としてみやびならざる事なかりき。筆とりてもの書きたまふを見るに、五百(いほ)とせも經(へ)にけむ筆のあとの如くなむ有りける。こはあまたとし、よるひるとなく古ことをのみこゝろにしめて、いへるより調度(てうど)にいたるまで、いにしへによりて、いさゝめにも後の世のことを耳にふれ、心にとめ給はざりしかば、おのづから古しへびとのこゝろに成りもてゆきて、其心よりいひ出でもし、物かきもし給ひしによりてこそ、しか有りけるならめ。かくいにしへにつとめたまひし中にも、歌をばことに心高くもてつけてものせられたれば、歌ひとつよみ出で給へるにも、深くかうがへ、あまたたびあぢはへて、によび出でられしなり。うたのさまは、はじめと中ごろとすゑと、三つのきざみありき。はじめのほどは、物學び給へる荷田(かだ)の東滿(あづままろ)宿禰(すくね)の歌のさまにかよひて、はなやぎたよわきざまなりしを、中ごろよりみづからの一つの姿と成りて、みやびにしてしらべ高く、しかも雄々(をゝ)しきすぢをよみいだされ、よはひの末にいたりては、

賀茂翁家集乃序

いそのかみふりにし世のことは、くもり夜のたときもしられざりしを、いなのめのあけゆくごとくなれるは、わづかに百とせあまりになむ有りける。しかはあれどなほもののけぢめおほつかなかりしを、朝日子のとよさかのぼりて、八十の隈路のくまもおちず、明らかにしも成りにたるは、吾縣居の大人をはじめとすべし。その中にも、ならの葉の名におふ宮の古言やゝわきまへしらるゝことなりても、其心を得、そのことのはをひろひて、歌にも文にもまねびもちふることはあらざりしを、わがうし、ふることをやがて我物になして、よきをとりあしきをすてゝ、歌にも文にも作られしより、千歳のむかしのことぐさを今の世にまねび得るたぐひもいできにけり。千蔭いと若かりしより、うしにしたがひて、常のみありさまのたまへりしことを、したしく見もし聞きもしつるに、うしは今の世の人とはことにして、うち見にはさかしきかたはおくれて、心おそ

桂園一枝

目録

賀茂翁家集

卷之一

卷之二

六帖詠草

以てせば、徳川時代に於ける一流歌人の述作は、ほゞ之を知悉せりといふに庶幾からん。

大正四年二月　　校訂者　塚本哲三

鳥取の人、始め歌を清水貞固に學びしが、後京に出でて香川景柄の門に入り、遂に其養子となりて香川の姓を冒したり。されど後に至りて歌學上の意見養父と相合はざるものあり、分れて別に一家を立てぬ。「我が家の庭の敎はそむきても向ふ誠の敷島の道」とは、實に其當時の咏懷也、亦以て彼が所信の存する所を窺ふべし。彼は天才的歌人にして、その所懷を披瀝するや些の遲疑する所なく、苟も自己の見る所に反するものは、其先輩たると名家たるとに論なく、直ちに之を痛罵惡評して止まざりしかば、敵を作ること甚だ多かりしが、京都に於ける彼の勢力は又決して侮るべからざるものあり、一時門弟三千人の多きに及べりといふ。その歌亦天才的にして、語格の過誤、歌調の不整等間々これあるを免れずと雖も、自ら一種清新の氣に富みて生意潑剌たるもの尠なからず、殊に古來歌道の內に因習し來たれる固陋の見を排除し、斷々乎として別に一派を樹立したるの功に至りては、我歌學史の上に特筆大書すべきものと稱すべからん。

以上三種を收めて本文庫の一編となす。之に參看するに、「琴後集、うけらが花」の一編を

論じて餘蘊なきを以て、今敢て贅せず。

六帖詠草七卷は京都の歌人小澤蘆庵の歌集にして、其板本として世に出でたるは文化元年の事に屬し、門人小川萍流、前波默軒の周旋に成るといふ。別に萍流の編輯に係れる六帖詠草拾遺一卷あり、嘉永の始め上梓せりと雖も、今之に及ばず。蘆庵はもと尾張の國老竹腰氏に仕へて足輕たりしが、性甚だ豪放不羈、到底藩閥の下に其驥足を展す能はざるを觀じ、飄然去つて京に出で、歌を冷泉爲村に學びて遂に一家を爲せり。其歌調多く古今集に類し、其壘を磨する名作尠なからず。又、日夕紀氏の古今六帖を愛誦して措かざりきといふ。六帖詠草の名蓋し之に基づくか。當時澄月、慈延、蒿蹊と共に平安地下の四天王と稱せられ、而も其唱首に居り、本居宣長をして「京都に歌人蘆庵あり東に文人春海あり」と推賞せしむるに至れり。以て其名聲の當時に籍甚たるものありしを知るべし。

○桂園一枝三卷は香川景樹の家集にして、その卷頭に載せたる門人平凊樹の序文によりて、よく其集の由來を知るべし。別に桂園一枝拾遺二卷あり、今之に及ばず。景樹はもと因州

緒　言

賀茂翁家集は賀茂眞淵の歌文集にして、その歿後二十二年、卽ち寛政三年十一月門人平春海の編輯する所に係る。其例言には「すべて十巻」とあれども、今傳ふる所は五冊に過ぎず。第一第二の兩巻は歌集にして、第三第四第五の三巻は文集也。今本文庫に收むる所はその歌集の部のみにして、頁數の制限上遂に文集の部に及ぶ能はざりしは寔に遺憾とする所也。從つて原本所載の序文及び例言をそのまゝ覆刻し、名亦原本のまゝに「賀茂翁家集」と稱するの、甚だ當を失するものあるを見ざるにあらざれども、一はその歌集の部を原本のまゝに採錄して、一點一字の增減をも施さゞりしと、一は讀者をして出來得る限り原本の面影を偲ばしめんとの老婆心と、この二個の理由によりて姑く此失當を敢てせり。切に讀者の寬恕を仰ぐ所也。但、其五巻の大部分を占めたる紀行文「東歸」「西歸」の二篇は、之を別に本文庫「日記紀行集」中に收めたれば、それによりて讀者はよく眞淵の散文の妙諦を窺ひ知るを得ん。眞淵の歌につきては世に既に定評の存する所、又家集巻頭の千蔭の序文

賀茂翁家集　全

六帖詠草　全

桂園一枝　全